

上敷免遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター 調査報告書第159集



山形県埋蔵文化財センター 調査報告書第159集

上敷免遺跡発掘調査報告書

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
2007



じょう しき めん

上敷免遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第159集

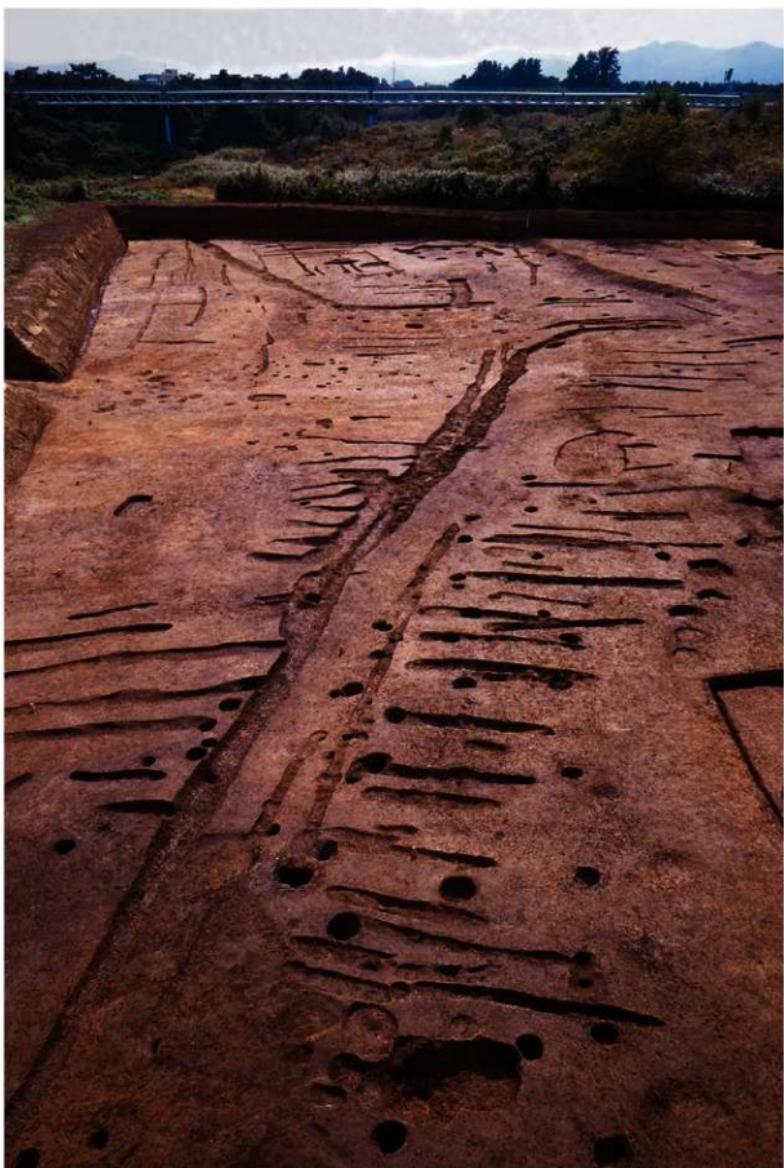
平成19年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

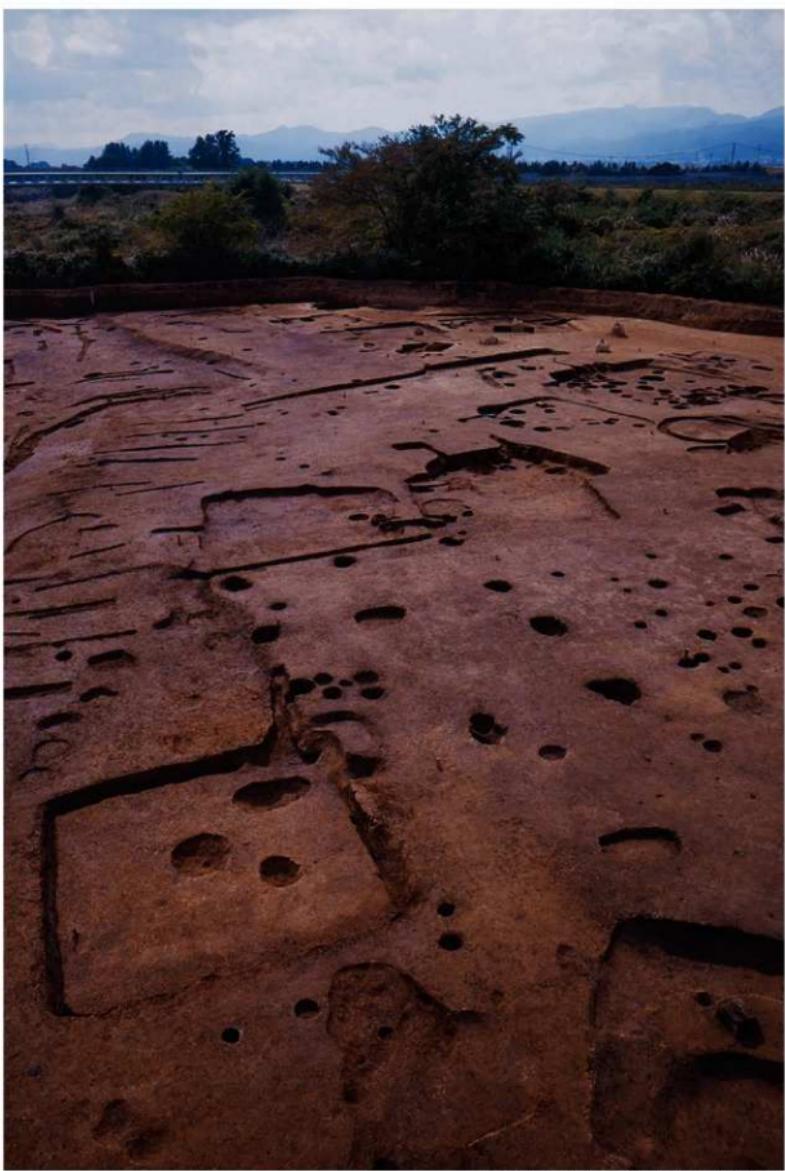




遺跡遠景 手前左から伸びる舌状の張り出し部が上敷免遺跡、対岸は調査中の川前2遺跡（北から）



調査区東半溝跡 実掘状況（北から）



調査区中央部竪穴住居跡 実掘状況（北から）



S Q106カマド状遺構 完掘状況（北から）



S T 3 壁穴住居跡出土 柄香炉形土器

序

本書は財團法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した上敷免遺跡の調査成果をまとめたものです。

上敷免遺跡は、山形市の北西部成安地区に位置します。成安地区は、須川と白川に挟まれ、これら河川がもたらした肥沃な土壤を利用して、果樹栽培や稲作が盛んに行われている地域です。

本遺跡の周辺には、奈良・平安時代の集落跡であった達磨寺遺跡、海獸葡萄鏡が出土した川前2遺跡などがあり、最上川や須川などの内陸河川を拠り所として営まれた集落遺跡の分布でも注目されます。

このたび、須川河川改修事業（下流部）に伴い、工事に先立って上敷免遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代前期の竪穴住居跡、溝跡、畝状遺構をはじめ、平安時代末期の掘立柱建物跡、土坑墓、カマド状遺構など多数の遺構と遺物が検出されました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえるものです。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査において御協力いただいた関係各位に対し心よりお礼を申し上げます。

平成19年3月

財團法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口 常夫

本書は、須川河川改修（下流部）に係る「上敷免遺跡」の発掘調査報告書である。既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書を持って本報告とする。

調査は、国土交通省の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物、調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	上敷免遺跡
遺跡番号	平成16年度登録
所在地	山形市大字成安字上敷免
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成17年4月1日～平成18年3月31日
現地調査	平成17年5月9日～平成17年10月7日
調査担当者	調査研究部長（兼）調査第二課長 佐藤 庄一 主任調査研究員 伊藤 邦弘 主任調査研究員 黒沼 昭夫（調査主任） 主任調査研究員 鈴木 広伸 調査員 長瀬えみ子 主任調査研究員 犬飼 透 整理期間
	平成18年4月1日～平成19年3月31日
整理担当者	調査研究部長（兼）調査第二課長 尾形 輿典 主任調査研究員 伊藤 邦弘 調査員 長瀬えみ子（整理主任）
調査指導	山形県教育庁社会教育課文化財保護室
調査協力	山形県教育庁村山教育事務所 山形市教育委員会 中山町教育委員会

凡　　例

1 本書の作成・執筆は、黒沼昭夫・鈴木広偉・長瀬えみ子（I～III、IV～Iの遺構に関する記述）、長瀬えみ子（IV～Iの遺物に関する記述、IV～2・3、V）が担当した。

2 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S A…柱列跡
S K…土坑	S P…ビット	S D…溝跡
S E…井戸跡	S Q…カマド状遺構	S H…土坑墓
S X…性格不明遺構	R P…登録土器・陶磁器	R Q…登録石器・石製品
R M…登録金属製品		

3 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。

4 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高です。また、方位は座標北を表す。

5 遺構実測図は、各々スケールを付した。

6 本文中の遺物番号は、遺物実測図、遺物図版、遺物観察表とも共通のものとした。

7 遺物実測図・拓本は、各図版にスケールを付した。

遺構平面実測図中の網点は焼土、断面実測図中の網点は遺物を表す。

8 遺物観察表において、括弧内の数値は図上復元による推定値、残存値を示している。

9 遺物実測図で、須恵器は断面黒ベタ、それ以外は白ヌキで表している。土師器の黒色処理面には網点を付した。油煙は網点を個別に表記して凡例を付した。

10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1999年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準上色帖」に掲った。

11 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。(順不同、敬称略)
阿子島 功（山形大学）、糸川道行（財團法人千葉県教育振興財團）、北野博司（東北芸術工科大学）、
小林信一（財團法人千葉県教育振興財團）、佐々木浩一（八戸市教育委員会）、杉野森敦子（青森県埋蔵文化財調査センター）、三上喜孝（山形大学）、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、八重樋忠郎（平泉町教育委員会）、吉田博行（会津坂下町教育委員会）

12 石材の同定は主任調査研究員伊藤成賢が行った。

13 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務	株式会社菅野測量設計事務所
遺構実測業務	株式会社セビアス
図面編集業務	株式会社セビアス
自然科学分析業務	パリノ・サーヴェイ株式会社
保存処理業務	財團法人山梨文化財研究所

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
3 調査区の概要	2
II 遺跡の立地と環境	
1 立地と地理的環境	4
2 歴史的環境	6
III 遺跡の概要	
1 基本順序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 遺構と遺物	
1 遺構	
(1) 積穴住居跡	16
(2) 掘立柱建物跡	30
(3) 柱列跡	33
(4) 土坑	34
(5) 井戸跡	37
(6) 土坑墓	37
(7) カマド状遺構	38
(8) 溝跡	39
(9) 突状遺構	40
(10) 性格不明遺構	41
2 遺物	
(1) 古墳時代の遺物	42
(2) 奈良・平安時代前期の遺物	42
(3) 平安時代末期の遺物	52
(4) 遺構外の遺物	52
3 遺構の変遷	54
V まとめ	70
報告書抄録	卷末

付編

「上敷免遺跡の自然科学分析」パリノサーヴェイ株式会社
「山形市上敷免遺跡出土の墨書き土器」山形大学 三上喜孝

表

表1 土器・陶磁器觀察表(1).....	157	表6 土器・陶磁器觀察表(6).....	162
表2 土器・陶磁器觀察表(2).....	158	表7 土器・陶磁器觀察表(7).....	163
表3 土器・陶磁器觀察表(3).....	159	表8 石製品觀察表.....	164
表4 土器・陶磁器觀察表(4).....	160	表9 玉製品觀察表.....	164
表5 土器・陶磁器觀察表(5).....	161	表10 金屬製品觀察表.....	164

図版

第1図 調査概要図	3	第29図 壊穴住居跡出土土器集成図(6)	65
第2図 地形分類図	4	第30図 壊穴住居跡出土土器集成図(7)	66
第3図 遺跡位置図	5	第31図 壊穴住居跡出土土器集成図(8)	67
第4図 遺跡全体図	6	第32図 壊穴住居跡出土土器集成図(9)	68
第5図 基本層序	7	第33図 壊穴住居跡出土土器集成図(10)	69
第6図 遺構全体図(平安時代前期)	8	第34図 S T 1・2壊穴住居跡	72
第7図 遺構全体図(平安時代末期)	9	第35図 S T 3壊穴住居跡(1)	73
第8図 遺構平面図(分割1)	10	第36図 S T 3壊穴住居跡(2)	74
第9図 遺構平面図(分割2)	11	第37図 S T 7壊穴住居跡	75
第10図 遺構平面図(分割3)	12	第38図 S T 13壊穴住居跡	76
第11図 遺構平面図(分割4)	13	第39図 S T 23壊穴住居跡(1)	77
第12図 遺構平面図(分割5)	14	第40図 S T 23壊穴住居跡(2)	78
第13図 遺構平面図(分割6)	15	第41図 S T 25・44壊穴住居跡	79
第14図 壊穴住居跡集成図	18	第42図 S T 26壊穴住居跡(1)	80
第15図 カマ下跡集成図	19	第43図 S T 26壊穴住居跡(2)	81
第16図 遺物分類図(1)	43	第44図 S T 27壊穴住居跡(1)	82
第17図 遺物分類図(2)	45	第45図 S T 27壊穴住居跡(2)	83
第18図 遺物分類図(3)	47	第46図 S T 28壊穴住居跡	84
第19図 遺物分類図(4)	48	第47図 S T 34壊穴住居跡	85
第20図 遺物分類図(5)	49	第48図 S T 35壊穴住居跡	86
第21図 遺物分類図(6)	51	第49図 S T 36壊穴住居跡	87
第22図 遺物分類図(7)	53	第50図 S T 37壊穴住居跡	88
第23図 遺構変遷図	57	第51図 S T 38遺構実測図	89
第24図 壊穴住居跡出土土器集成図(1)	60	第52図 S T 39・40壊穴住居跡	90
第25図 壊穴住居跡出土土器集成図(2)	61	第53図 S T 43壊穴住居跡(1)	91
第26図 壊穴住居跡出土土器集成図(3)	62	第54図 S T 43壊穴住居跡(2)	92
第27図 壊穴住居跡出土土器集成図(4)	63	第55図 S T 46壊穴住居跡	93
第28図 壊穴住居跡出土土器集成図(5)	64	第56図 S T 50壊穴住居跡	94

第 57 図	S T54豎穴住居跡	95	第 86 図	S T25・26豎穴住居跡出土遺物	125
第 58 図	S T643・662豎穴住居跡	96	第 87 図	S T26豎穴住居跡出土遺物（1）	126
第 59 図	S T662豎穴住居跡	97	第 88 図	S T26豎穴住居跡出土遺物（2）	127
第 60 図	S T638豎穴住居跡	98	第 89 図	S T27豎穴住居跡出土遺物（1）	128
第 61 図	S T660豎穴住居跡	99	第 90 図	S T27豎穴住居跡出土遺物（2）	129
第 62 図	S T674豎穴住居跡	100	第 91 図	S T27・28豎穴住居跡出土遺物	130
第 63 図	S B112・416掘立柱建物跡	101	第 92 図	S T28・34豎穴住居跡出土遺物	131
第 64 図	S B204掘立柱建物跡	102	第 93 図	S T34・35豎穴住居跡出土遺物	132
第 65 図	S B417・418掘立柱建物跡	103	第 94 図	S T35・36豎穴住居跡出土遺物	133
第 66 図	S B545・551掘立柱建物跡	104	第 95 図	S T36・37豎穴住居跡出土遺物	134
第 67 図	S B597掘立柱建物跡	105	第 96 図	S T38・39豎穴住居跡出土遺物	135
第 68 図	S B641・788掘立柱建物跡	106	第 97 図	S T39・40豎穴住居跡出土遺物	135
第 69 図	S A862・863・864・865柱列跡	107	第 98 図	S T40・43豎穴住居跡出土遺物	137
第 70 図	S P167・279・645・132・530ピット		第 99 図	S T43豎穴住居跡出土遺物（1）	138
	S K56・63・91・702土坑	108	第 100 国	S T43豎穴住居跡出土遺物（2）	139
第 71 国	S K41・788・787・62・133土坑	109	第 101 国	S T43・44豎穴住居跡出土遺物	140
第 72 国	S K51・53・60・81土坑	110	第 102 国	S T44・46豎穴住居跡出土遺物	141
第 73 国	S K71・61・86・87土坑	111	第 103 国	S T46・50豎穴住居跡出土遺物	142
第 74 国	S E79井戸跡、S H80・103土坑墓		第 104 国	S T54・643豎穴住居跡出土遺物	143
	S X710性格不明構	112	第 105 国	S T658豎穴住居跡出土遺物	144
第 75 国	S Q106カマド状構	113	第 106 国	S T658・660豎穴住居跡出土遺物	145
第 76 国	S D604・635溝跡	114	第 107 国	S T660・662豎穴住居跡出土遺物	146
第 77 国	S D691・692・698・699溝跡	115	第 108 国	S T662豎穴住居跡出土遺物（1）	147
第 78 国	S D642・703溝跡		第 109 国	S T662豎穴住居跡出土遺物（2）	148
	S X701・83性格不明構	117	第 110 国	S T674豎穴住居跡出土遺物	149
第 79 国	S T1豎穴住居跡出土遺物	118	第 111 国	S B112掘立柱建物跡他出土遺物	150
第 80 国	S T1・2豎穴住居跡出土遺物	119	第 112 国	S K41土坑出土遺物	151
第 81 国	S T 3・4豎穴住居跡出土遺物	120	第 113 国	S K53土坑他出土遺物	152
第 82 国	S T 3・7豎穴住居跡出土遺物	121	第 114 国	S K87土坑他出土遺物	153
第 83 国	S T 7・13・23豎穴住居跡出土遺物	122	第 115 国	S P638ピット他出土遺物	154
第 84 国	S T23豎穴住居跡出土遺物	123	第 116 国	S D642溝跡他出土遺物	155
第 85 国	S T23・25豎穴住居跡出土遺物	124	第 117 国	遺構外出土遺物	156

写真図版

卷頭写真1 遺跡遠景

卷頭写真2 調査区東半溝跡

卷頭写真3 調査区中央部堅穴住居跡

卷頭写真4 S Q106カマド状遺構

S T 3 堅穴住居跡出土 柄香炉形土器

写真図版1 調査区南半堅穴住居跡、S T 35

写真図版2 S T 37・38

写真図版3 S T 39・38

写真図版4 S T 36

写真図版5 S T 34

写真図版6 S T 658・40

写真図版7 S T 662

写真図版8 S T 50

写真図版9 S T 1・2

写真図版10 調査区中央部堅穴住居跡、S T 3

写真図版11 S T 3

写真図版12 S T 7

写真図版13 S T 23

写真図版14 S T 13・674

写真図版15 S T 26・43

写真図版16 S T 27(1)

写真図版17 S T 27(2)

写真図版18 S T 28・25

写真図版19 調査区中央部堅穴住居跡

写真図版20 S T 46

写真図版21 S T 44・54

写真図版22 S T 660

写真図版23 S T 643、SB597

写真図版24 S B 545・551

写真図版25 S B 416・417・418

写真図版26 S B 204・641

写真図版27 S A 862・863・864・865

写真図版28 調査区東半掘立柱建物跡

写真図版29 S K 86・87、S E 79、調査区東半溝跡

写真図版30 S K 41・62・71、S H 103、S Q 106

写真図版31 S D 642・691・692・703、歯状遺構

写真図版32 出土遺物(1)

写真図版33 出土遺物(2)

写真図版34 出土遺物(3)

写真図版35 出土遺物(4)

写真図版36 出土遺物(5)

写真図版37 出土遺物(6)

写真図版38 出土遺物(7)

写真図版39 出土遺物(8)

写真図版40 出土遺物(9)

写真図版41 出土遺物(10)

写真図版42 出土遺物(11)

写真図版43 出土遺物(12)

写真図版44 出土遺物(13)

写真図版45 出土遺物(14)

写真図版46 出土遺物(15)

写真図版47 出土遺物(16)

写真図版48 出土遺物(17)

写真図版49 出土遺物(18)

写真図版50 出土遺物(19)

写真図版51 出土遺物(20)

写真図版52 出土遺物(21)

写真図版53 出土遺物(22)

写真図版54 出土遺物(23)

写真図版55 出土遺物(24)

写真図版56 出土遺物(25)

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

この度の記録保存に係る緊急発掘調査は、平成13年度に国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所によって計画された、須川河川改修事業（下流部）を契機としている。改修事業の内容は、堤防本体の拡幅と嵩上げ、河川敷内の土取りのための掘削などであり、蛇行によって狭く浅くなっている河道を、掘削することによって広く直線的に導き、流下能力を向上させることを目的としている。本遺跡は、当該改修事業計画に伴って、山形県教育庁社会教育課文化財保護室により遺跡の分布調査が行われ、遺跡の存在が確認されたことによって平成16年に新規登録されたものである。

発掘調査に先立って、平成16年10月、山形県教育庁社会教育課文化財保護室により、試掘調査が行われた。試掘は、現堤体内に計画された河道掘削予定範囲を対象として、6本のトレンチ（計90平方メートル）が設定され、重機を用いて表土を除去した後、人力で面整理・面精査がなされた。その結果、堅穴住居跡、焼上遺構、柱穴、土坑などの遺構が確認され、須恵器、赤焼土器などの平安時代を中心とする遺物が検出された。

こうした結果をもとに山形県教育委員会は、国土交通省と現状保存を前提とした事前の協議を行ったが、設計の変更は困難であるとのことから、遺跡に係る施工範囲の3,000平方メートルについて、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなり、記録保存部分については、財團法人山形県埋蔵文化財センターが、国土交通省東北地方整備局山形工事事務所から委託を受けて発掘調査を実施することになった。

平成17年1月26日付、国東整山二調第79号「埋蔵文化財緊急発掘調査及び発掘調査経費の積算について（依頼）」の文書を承けて、緊急発掘調査に係る事務を開始した。

2 調査の方法と経過

現地調査は、平成17年5月9日から同年10月7日まで実施した。

5月9日、関係者出席のもと、鍵入れ式を執り行い、調査を開始した。

まず、文化財保護室の試掘調査データをもとに、耕作土及び無遺物層を重機により除去して遺構検出を行った。

重機稼働の後、遺跡・遺構の明確な位置を記録するために、業者委託により、調査区を覆う5メートル四方の方眼地割りを設定し、記録の基本座標とした。

方眼地割りは、座標北を基準とし、東西方をX軸、南北方向をY軸とした。X軸は、西から東に0から22まで、Y軸は南から北に0から26までそれぞれ算用数字を以て付番した。座標は「Y-X」の順に呼称し、各グリッドの南西隅の杭を当該グリッドの名称とした。

遺構の調査にあたっては、面整理、遺構検出、マーキング、遺構登録、遺構精査を行った。調査の進捗に伴って、写真撮影や遺構平面図・断面図・土層注記等の記録の作成、遺物の登録・

取り上げなどを繰り返しながら調査を進めた。また、各遺構の調査が完了した時点で、遺構毎に写真測量を行い、後に全体をまとめた遺構実測図を作成するという方法をとった。

2時期の遺構面　調査を進める中で、本遺跡は2時期の遺構面が存在することが判明した。8-10区と19-17区を結ぶラインより東側がそれである。出土遺物等から、調査区東側の上層面は平安時代末期、その下層の面から調査区西側にかけて広がる面は、奈良～平安時代前期の遺構面と考えられた。

この結果をもとに、県教育厅社会教育課文化財保護室同席のもと国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所と協議を行い、調査区東側の上層遺構面は、当該地区的調査終了後に掘削を行って、引き続き下層遺構面の調査を行うこととし、現地調査を同年度内に終了することで合意を見た。これに伴って重複部分の1,200平方メートルを新たに掘削して調査を行うため、調査期間を2ヶ月程度延長することとした。

上層面の調査が終了した後9月15日には、重機を稼働して上層面の掘削を行い、下層面の調査に掛かった。また、9月22日には、遺構面に擾乱が見られた調査区の北壁から、さらに北方に平安末期の遺構面を確認するため、3本の遺構確認のためのトレンチ（TT1～TT3）を設定した。その結果、TT1は、南側で平安時代末期の土坑が数基確認されたが、北側は現代のゴミ投棄等による擾乱を受けていることが判った。TT2は、ほとんどがゴミ投棄等による擾乱を受けているが、一部に氾濫等による河川堆積土が認められた。遺構面はまったく認められなかった。TT3は、トレンチ全域がゴミ投棄等による擾乱を受けている。試掘の結果、土坑が検出されたTT1の南側以外は、調査からほとんど除外せざるを得なかった。

調査期間を延長して、2つの遺構面を調査するという、当初計画にはない変更があったものの、調査は順調に推移し、予定した期間を以て終了することができた。

なお、通常は調査終了日近くに行う調査説明会を、調査区東側上層面（平安時代末期）の精査が完了した時点で行うこととし、調査区西側の奈良～平安時代前期の遺構面と併せて、7月30日（土）に現地での調査説明会を開催し、約80名の参加を得た。

10月7日（金）には調査完了後の調査区全景撮影を行い、全ての調査工程を終了して撤収を行った。

3 調査区の概要

調査区は須川の往時の自然堤防上に位置し、西側を現河道が蛇行しながら北流している。調査前は一見して起伏の少ない平坦な地形と観えたが、それは昭和50年前後までの長芋類の耕作に起因するものであることが判った。この耕作による擾乱は、調査区のいたるところで見られ、かなりの部分で遺構を壊している状況が確認された。

調査区の地形は、概ね次のようになっている。南北方向に走る自然堤防と、その東側の裾部へと続く斜面が遺構分布域である。そのため、南北方向ではほぼ同標高で推移し、西から東にかけて低くなっている。調査区東側では、奈良～平安時代前期の遺構面を、河川の氾濫等によると思われる堆積土が覆っており、その上面に平安末期の遺構が分布している。

自然堤防の頂部にあたる、標高のもっと高いところが堅穴住居跡の分布域となっており、上層面（平安時代末期）を掘削する前の時点で、調査区南東部の最も低いところとの高低差は

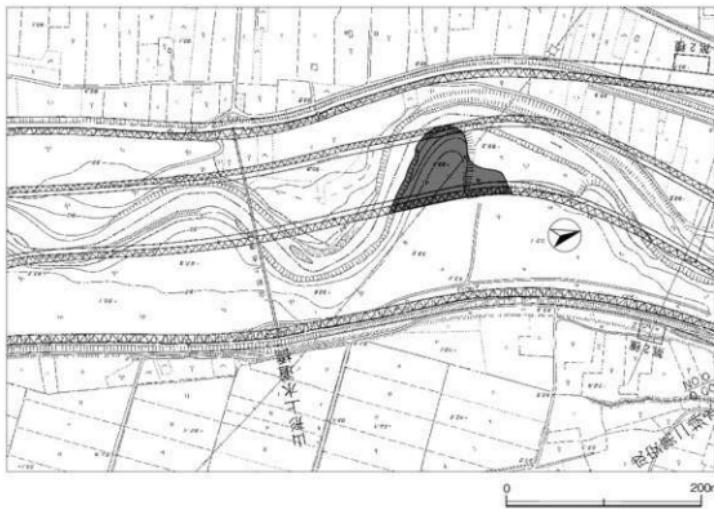
約60センチメートル程度である。上層面を掘削して下層面を検出した状態では、比高差はさらに大きくなり、最大150センチメートル程度となっている。これは調査範囲が自然堤防の微高地から低地に係る範囲に跨っているためである。

遺構の分布は、概ね次のようになる。調査区西端部は、氾濫や河川の浸食等によって遺構面が削られ、遺構が損なわれていた。試掘溝を設定して状況を観察したところ、やはり遺構面は認められなかったため、任意の面で平坦にし、以後、調査から除外した。調査区東側の上層面（平安時代末期）からは、二面に庇をもつ掘立柱建物跡や土坑墓、カマド状遺構、井戸跡などが検出された。調査区中央部（奈良～平安時代前期）からは、自然堤防の頂部にあたる標高の高いところに20棟を超える堅穴住居跡が検出された。同じく自然堤防の、低地に係る斜面部分（下層面・平安時代前期）には溝跡や畝状遺構などが検出された。

上記の遺構分布状況から、調査区は、4つのブロックに分けて考えることができるようである。1は河川の氾濫等で遺構が失われてしまった西側ブロック、2は奈良～平安前期の自然堤防頂部に位置する中央ブロック、3は同じく平安時代前期の、自然堤防から低地へと続く斜面に位置する東側ブロック、そして4は東側ブロックを覆う堆積土の上に営まれた平安時代末期の上層ブロックである。

中央ブロックは、既述したように堅穴住居跡や堀立柱建物跡が集中し、居住域として用いられていたと考えられる。また、東側ブロックには、畑の耕作痕と考えられる畝状遺構や溝跡などが検出され、生産域と考えられるようなエリアを構成している。

上層ブロックでは、掘立柱建物跡や土坑墓、カマド状遺構、井戸跡などが検出されており、平安時代の前期から末期に至る間に、生活の様相が変化していることが窺える。



第1図 調査概要図

II 遺跡の立地と環境

1 立地と地理的環境

上敷免遺跡は、山形県山形市大字成安字上敷免（北緯38度19分30秒、東経140度18分15秒）に位置する。本遺跡が立地する成安地区は、山形県のほぼ中央部にあたり、山形盆地の中央よりやや西側に位置している。東には奥羽山脈を、西には山形西部丘陵を望む。成安地区は、山形市の北西部にあり、馬見ヶ崎川や立谷川によって形成された大扇状地の前縁部に位置し、周辺には、田園地帯が広がり穀倉地帯を形成している。

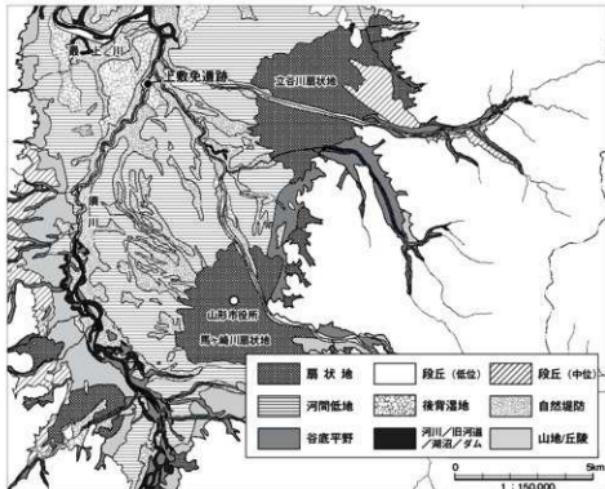
自然 堤 防

本遺跡は、蔵王山系に源を発する須川右岸の自然堤防上の微高地に立地し、標高約94mを測る。本遺跡西側を北流する須川は、最上川上流部の支川の中でも最大の流域面積を有する河川となっている。須川は本遺跡より約600m下流で白川（馬見ヶ崎川下流）に、さらに400m下流で立谷川に合流した後、北流する最上川と合流している。

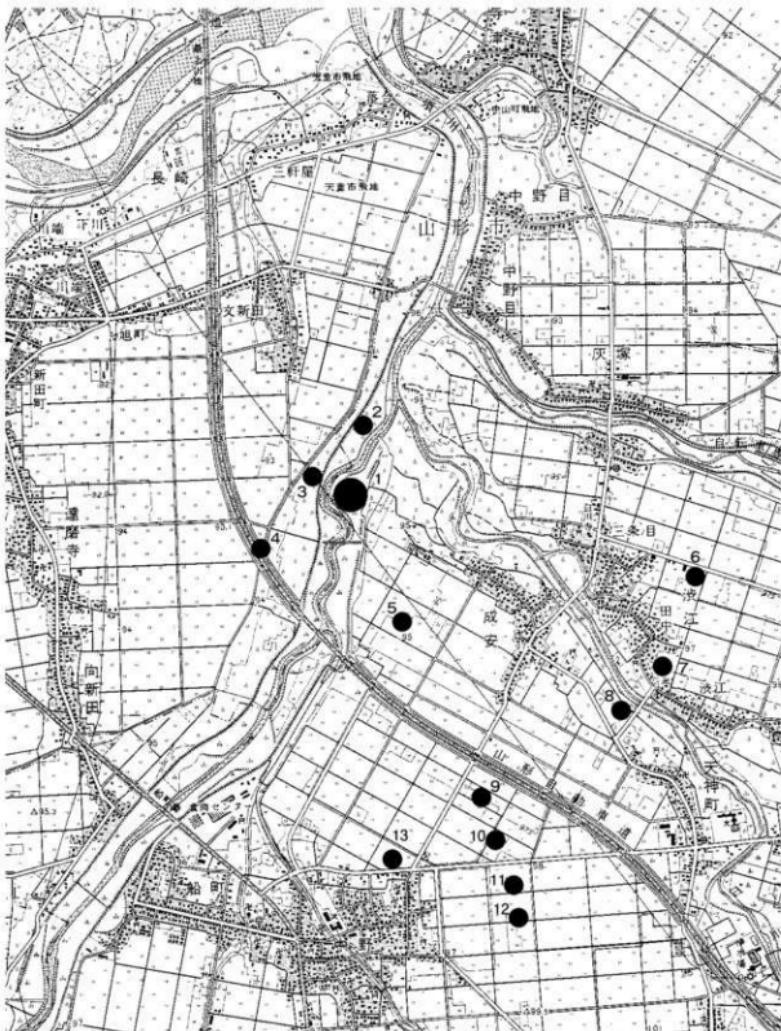
今回調査を実施した場所は、須川が大きく蛇行する部分にあたり、調査区が舌状に張り出すような形状を呈する。調査前は、平坦な畑地として利用されていた。近年の畑作により調査区の広い範囲に擾乱を受けている。

交 通 の 要 術

遺跡周辺は、古くから陸路、水路とも交通の要衝となっていた。最上川との合流地点には河岸がおかれ、最上川舟運の集積地として、にぎわいを見せていた。本遺跡の2km上流には船町という地名があり、舟運当時の名残を留めている。



第2図 地形分類図



- | | | | |
|-------------------|------------------|--------------------|------------------|
| 1 上敷免道路 奈良・平安 | 2 川前2道跡 吉備・奈良・平安 | 3 川前道路 平安 | 4 速磨時道路 平安・中世 |
| 5 八幡道路 奈良・平安 | 6 三条ノ目道路 古墳 | 7 浩江道路 古墳・中世 | 8 向河原道路 弥生・奈良・平安 |
| 9 馬洗塙B道路 古墳・奈良・平安 | 10 馬洗塙A道路 奈良・平安 | 11 藤治屋敷道路 古墳・奈良・平安 | 12 服部道路 吉備・奈良・平安 |
| 13 中野道路 中世 | | | |

第3図 遺跡位置図（国土地理院発行1：50,000地形図「山形北部」を使用）

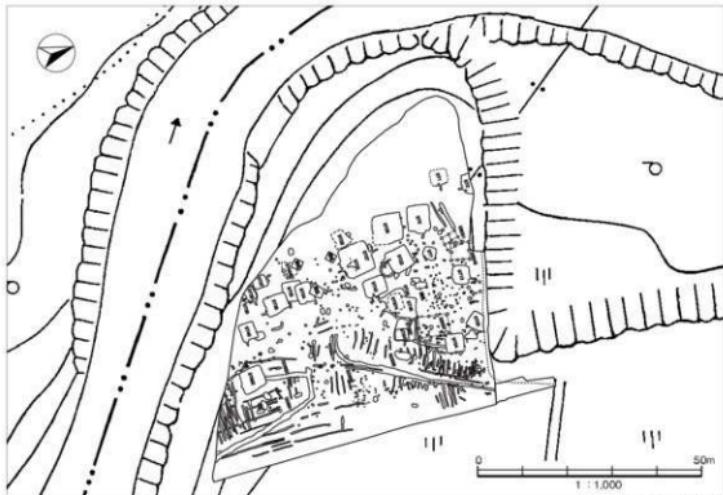
2 歴史的環境

上敷免遺跡は須川の自然堤防上に立地し、周辺には古墳時代から奈良・平安時代を中心とする遺跡が数多く分布している。本遺跡対岸には、古墳～奈良・平安時代の集落跡である川前2遺跡がある。川前2遺跡は、当センターが平成14年度から15年度まで2次にわたる調査を実施した。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡が140棟以上検出され、多くの遺物が出土している。中でも、竪穴住居跡内から奈良時代の小型海獣葡萄鏡が出土している。これは、日本最北限の出土例である。また下層には、古墳時代前期と考えられる遺構面が確認されており、長く集落が営まれたことから本遺跡周辺は、當時集落を形成するのに適した安定した土地であったことがうかがえる。

本遺跡約500m上流には、平安時代から鎌倉時代の遺跡である達磨寺遺跡がある。平成14年度の調査で鎌倉時代の竪穴建物跡、道路跡、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、掘方径が5mに及ぶ井戸跡等多数の遺構が検出されている。これら3遺跡は何れも須川の旧河川が形成した自然堤防上に立地し、時期的には前後するものの、集落が連続的に機能していたと考えられる。

本遺跡下流で合流する白川を遡ると、左岸に向河原遺跡、右岸には渋江遺跡が立地している。向河原遺跡は弥生から中世にかけての集落跡で、6次にわたる調査の結果、100棟を超える竪穴住居跡、井戸跡等が検出されている。古墳時代から中世にかけての集落跡である渋江遺跡では、4次の調査の結果、竪穴住居跡、祭祀遺構等多くの遺構が確認されている。

さらに周間に目を向けると、須川や白川などの河川が形成した自然堤防上の微高地に、多くの集落が形成されており、生産や生活に適した土地であったことがうかがえる。

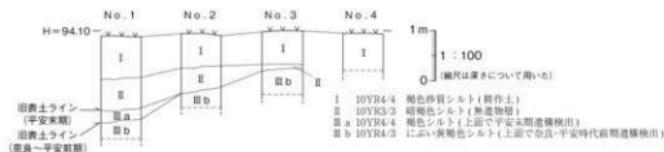


第4図 遺跡全体図

III 遺跡の概要

1 基本層序

前述したように、調査区は須川に舌状に張り出すような形状をしている。調査前の状況は、この張り出した西側に向けて緩やかに高く傾斜するもののおおむね平坦で、大部分が畠地として利用していたものと思われる。層序はおおむね3層からなり、Ⅲa層が平安時代末期の遺構確認面、Ⅲb層が奈良～平安時代前期の遺構確認面である。地山面は安定した層であるが、西から東に向けて徐々に低くなる。調査区の東半は奈良～平安時代前期の遺構面に約30°程の堆積が見られ、この層の上に平安末期の遺構が分布している。西側の高地では、標高約93.4mを測る。調査区東端では、平安前期の遺構確認面で標高約92.4m、平安時代末期の遺構確認面で標高約92.7mを測る。調査区南西部分は近年の畠作の影響が大きく、幅30cmで平行に掘り込まれた溝跡が広い範囲で確認でき、多くの遺構が搅乱を受けている。トレンチ調査の結果、調査区西側は、河川により削平されている。川床に向かって傾斜する砂の層が確認できる。



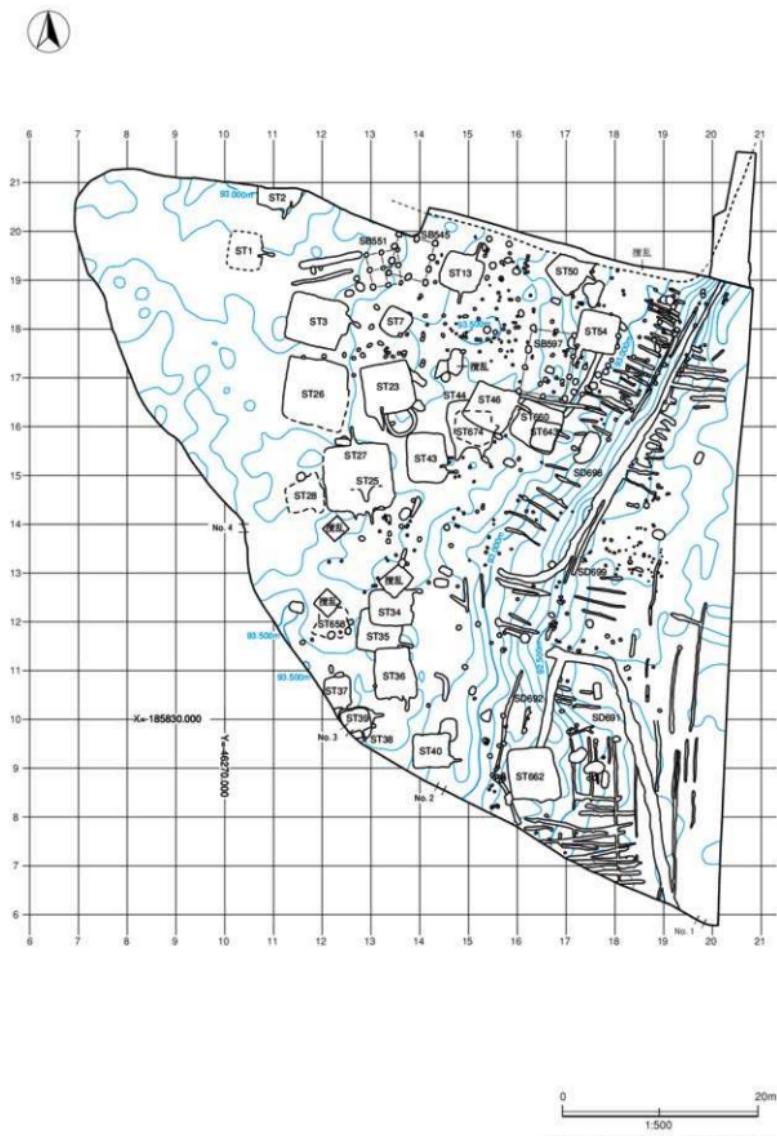
第5図 基本層序

2 遺構と遺物の分布

奈良時代の遺構としては堅穴住居跡、平安時代前期の遺構としては、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴造構、溝跡などがあげられる。これらの遺構は前述したような地形的特徴に応じて分布している。堅穴住居跡は、調査区内の微高地に帯状に分布し、多くの住居跡が重複して検出されている。一方標高が低い後背湿地と思われる調査区東半には、東西方向の細い竪穴の遺構と、南北方向の広い溝跡が検出され、地形を意識した土地利用がなされていたことがわかる。平安時代前期の遺物は、堅穴住居跡を中心に土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品、石製品等が出土している。中でも、S T 3 堅穴住居跡からは、金属製品を模したと考えられる柄香炉形土器が出土している。

平安時代末期の遺構としては、掘立柱建物遺跡や土坑がある。土坑の中には頭骨と共に副葬品と考えられる刀子が出土しているものもあり、土坑墓と考えられる。その他にもカマド状遺構等、多くの遺構が検出されている。平安末期の遺物は、須恵器系陶器、輸入陶磁器、かわらけ、金属製品、土製品、石製品が土坑を中心に出土している。

III 遺跡の概要



第6図 遺構全体図 (平安時代前期)

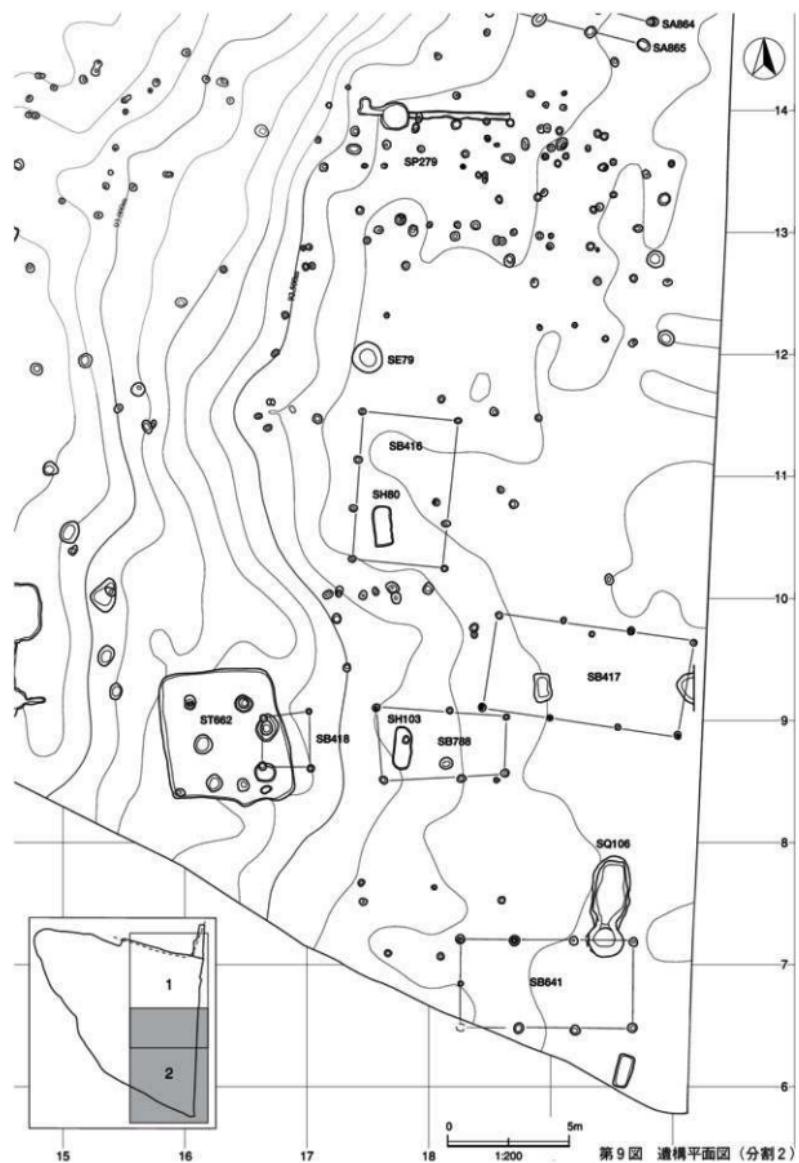


第7図 遺構全体図（平安時代末期）

III 道路の概要



第8図 遺構平面図(分割1)



第9図 遺構平面図（分割2）

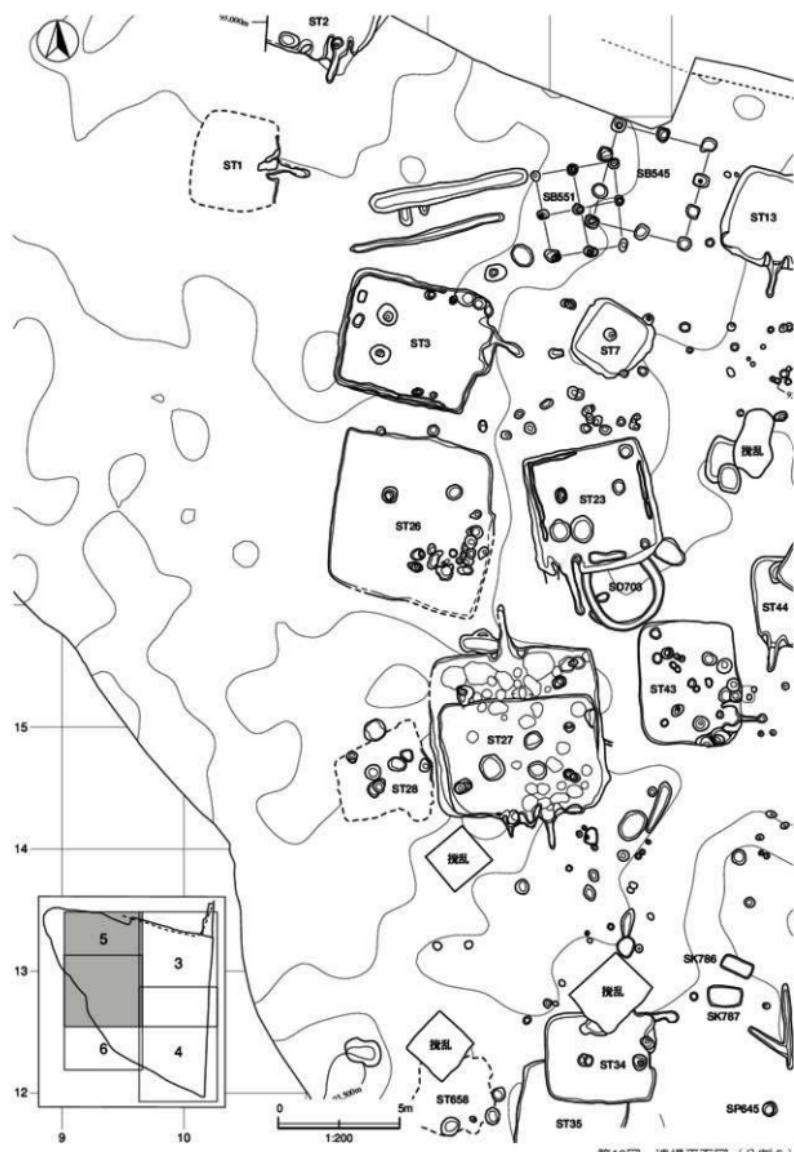
■ 遺跡の概要



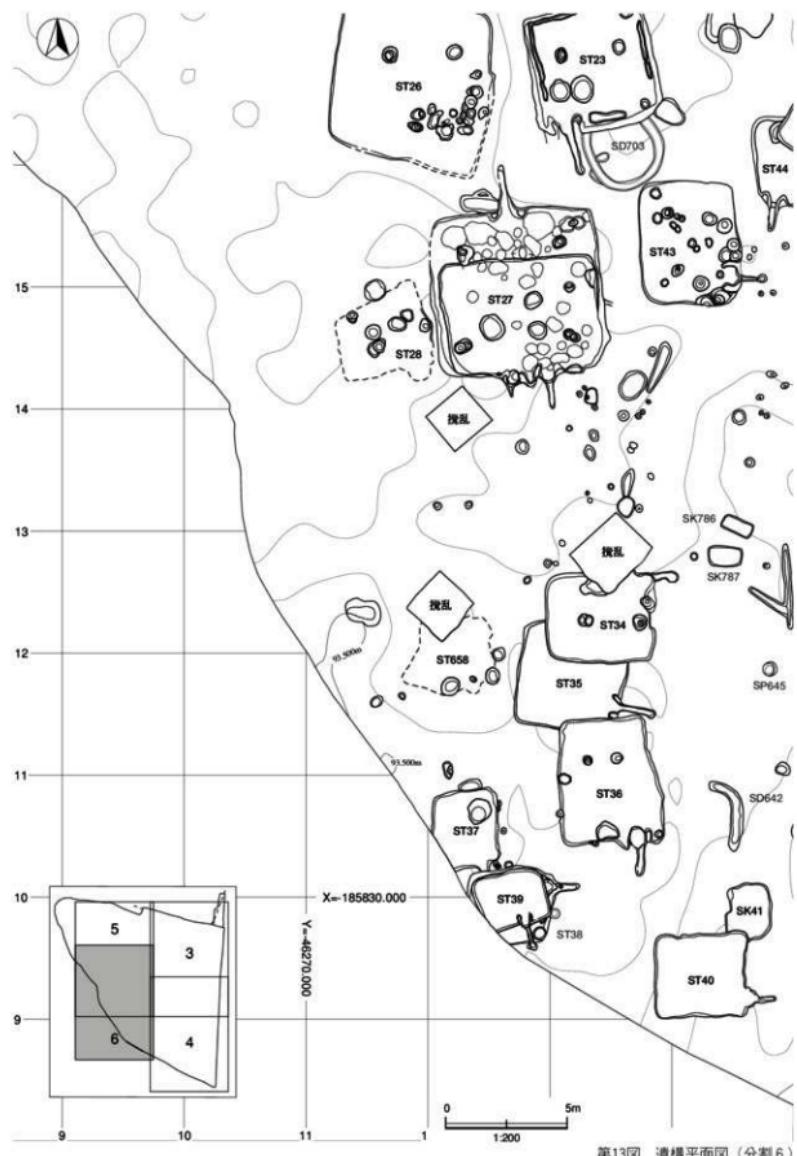


第11図 遺構平面図（分割4）

III 道路の概要



第12図 遺構平面図（分割5）



第13図 遺構平面図（分割6）

IV 遺構と遺物

1 遺構

本遺跡から検出された遺構は、奈良時代の堅穴住居跡、平安時代前期の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、竪状遺構、溝跡等のほか、平安時代末期の掘立柱建物跡、土坑墓、土坑、井戸跡、及びカマド状遺構等がある。以下に、各遺構の概要を述べていく。

(1) 堅穴住居跡

堅穴住居跡は、調査区の自然堤防の微高地上に27棟が検出されている。遺跡の層序で述べたとおり、遺構確認面の大半が近年の畑作や河川堆積によって擾乱を受けている。そのため、調査区西端で検出された住居跡の中には、全体のプランが確認できないもの、床面だけの検出に留まったものなどが数棟存在する。主軸は南北、東西に沿っているものに分けられる。カマドは東、南壁に設けられたものが多い傾向にある。建物間で重複するものは、10棟である。規模は大別して、面積が10坪以上の大型のもの、4坪以上10坪未満の中型のもの、4坪未満の小型のものがみられる。小型のものには、カマドをもたないものもある。主柱穴は、2基、4基のものがわずかにみられる他は、明確に主柱穴をもたないものが多くを占める。以下、検出状況と出土遺物について詳述する。

S T 1 堅穴住居跡（図版34 写真図版9）

19-10グリッドに位置し、東壁にカマドを有する。カマド燃焼部より西側が調査区西側を北流する須川に削平され全体のプランは不明である。カマド部分の遺存状況は良好で、煙道部が完全な形で検出されている。確認面からの深さは約30cmを測る。断面図中9・10層が河川堆積土である。カマドの主軸方向はN-82°-Wである。カマド部分から推定される壁の傾きは緩やかであったと想定できる。

検出されたカマド部分を中心に須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器甕、土師器壺、土師器甕、赤焼土器甕が出土している。須恵器高台壺（1）は台部が欠損している。須恵器壺（2・3）、須恵器甕（4）は体部破片である。土師器壺（5）は内面に黒色処理が施されている。土師器甕（6）は外表面ハケメ調整が施されている。赤焼土器甕（7）は、体部外面は高い位置からケズリ調整、内面はヘラナデ調整が施されている。口縁部は外反し端部が丸みをもつ赤焼土器甕（8・9）は外表面ロクロナデ調整、体部外面上半からケズリ調整が認められる。赤焼土器甕（10）は小形の甕で内外面ロクロ調整が施されている。（8～10）は口縁端部が直立気味に引き上げられている。一部古相（1）が見られるが、土師器壺の特徴などから、9世紀後半の時期と捉えられる。

S T 2 堅穴住居跡（図版34 写真図版16・17）

20-10～11グリッドに位置する。北部分は調査区外のため未検出である。西側の一部をS T

1と同様に河川により削平され、全体のプランは不明である。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは約30cmを測る。南壁にカマドを有する。覆土は自然堆積である。カマドの主軸方向はN-13°-Eである。カマド燃焼部中央から須恵器壺が逆位で出土しており、カマドの廃棄時に祭祀儀礼が行われたことも考えられる。

祭 祀 儀 礼

遺物は須恵器壺、須恵器鉢、刀子状石製品が出土している。須恵器壺(11)は体部が内擣し、口縁部の開きが大きく身も深い。底部の調整は回転糸切りである。須恵器鉢(12)には内外面ロクロナデ調整、外面はケズリ調整が施されている。刀子状石製品(13)は、多面に磨り面が認められ、刀子状に作り出されている。細い先端部には使用痕の磨り痕が認められる。用途は不明である。須恵器壺(11)の形態から9世紀後半の時期が考えられる。

S T 3 穫穴住居跡（図版35・36 写真図版10・11）

17~19~11~12グリッドに位置し、平面プランは長軸5.8m、短軸5.1mを測り、面積は約29m²である。主軸方向はN-74°-Wで、やや東西に長い方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは約30cmを測る。カマドは東壁に位置するが、住居跡のプランより外側に張り出すように作られている。特に右側の張り出し部分が大きく、中段にテラス状に平坦な部分が認められる。両袖部には自然石を配置し、カマドの構築材として使用していたことが確認できる。覆土は自然堆積である。床面は比較的硬化し、約5cmの貼床が認められる。主柱穴は西側に2基確認できる。掘方径は約80~90cmのほぼ円形で、深さ約30~35cmの掘り鉢状を呈する。また、両柱穴とも壁面に薄い炭化物の層が認められる。東壁を除き、壁際に幅15cm、深さ10cmの周溝が巡る。本住居跡は遺跡内でも大型の部類に属し、他の同規模の住居跡もこの近隣で多く検出されている。

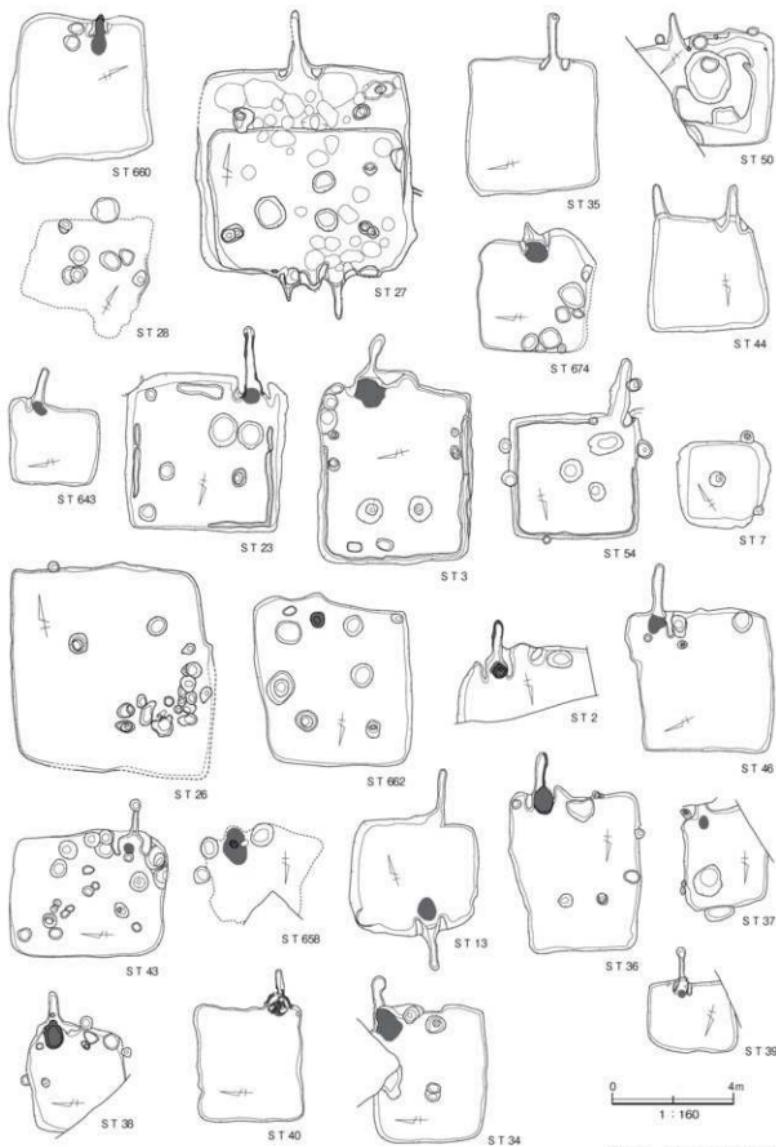
カマドの構築材

遺物は須恵器高台壺、須恵器壺、赤焼土器壺、土師器皿、土師器柄香炉形土器、土師器台付甕、赤焼土器甕、赤焼土器壺がある。須恵器高台壺(14)は体部が内擣して立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。須恵器壺(15~16)は底部切り離しがヘラ切りである。赤焼土器壺(17)の体部は直線的で、口縁部の開きが小さく身が深い。土師器皿(18)は施釉陶器の形態を模倣するものである。内面黒色処理され、底部に墨書き「盃」の文字が認められる。土師器柄香炉形土器(19)は口縁部上面に1条の稜を巡らすもので、金属器を模倣していると考えられる。仏具の可能性も想定される。内外面に、入念なミガキ調整の後、黒色処理を施している。

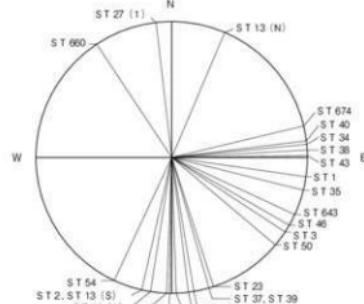
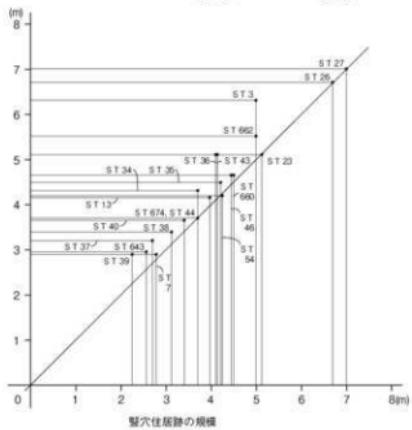
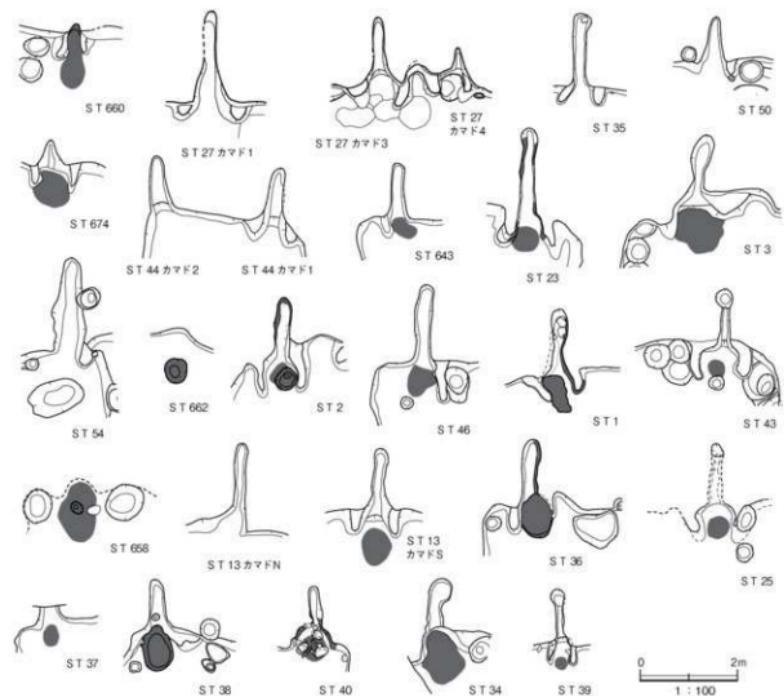
金 属 器 模 做

体部の穿孔部は厚く作り出され、柄の付く形態であったと考えられる。土師器台付甕(20)は、体部下半と、台部のみの遺存である。ヘラケズリされ、ヘラナデで調整された薄手のつくりは、関東地方のいわゆる「武藏甕」の系譜を引くものと考えられる。関東地方のものと比較して、微妙な調整や胎土の混入物の相違が窺えることから、搬入品ではなく在地の土を使用して製作したものと考えられる。赤焼土器甕(21)は外面をタタキ、ロクロ、ケズリの順で成形・調整し、内面にカキメ調整を施している。赤焼土器甕(22)は外面をロクロナデ・ケズリ、内面にロクロナデ・ヘラナデ調整が施される。カマド脇の住居内北東隅に、底部が10cm程埋設された状態で出土している。理化学分析の結果、土器内の土から炭化米が検出されている（付録）。赤焼土器甕(24~26)は小形のもので内外面ロクロナデが施される。(24)の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を上方に細くつまみあげたものである。体部下半にヘラ記号「メ」が刻まれている。赤焼土器壺(27)は把手が欠損している。外面にロクロナデ・斜め方向のケズリ、内

「武藏甕」の系譜



第14図 積穴住居跡集成図



第15図 カマド跡集成図

面にはロクロナデ・ヘラナデ調整が施されている。S T 3 出土の赤焼土器（壺・壠）の口縁端部はいずれも上方につまみだされる特徴をもつ。土師器柄香炉形土器（19）、土師器台壠（20）などの出土からは、本堅穴住居が集落内において他の堅穴住居とは異なる位置付けにあったことが想定される。一部古相（15）がみられるが、供膳形態（14・18）などから9世紀前半の時期が考えられる。

S T 7 堅穴住居跡（図版37 写真図版12）

調査区17~18~13グリッドで検出された堅穴状遺構である。平面プランは長軸2.9m、短軸2.8mを測り、面積は約8m²である。主軸方向はN-52°-Wで、隅丸方形を呈する。壁は急に立ち上がり、確認面からの深さは約60cmを測る。カマドはみられない。覆土は自然堆積である。貼床は確認できなかった。床面から5cm上層に、厚さ2cmの炭化層が堆積している。床面中央に径50cm、深さ25cmの柱穴が認められる。断面形はV字形を呈する。炭化層は柱穴内にも遺存している。本遺構は他の遺構と較べ小規模のものである。カマドなどの施設も持たないことからも、「室」や倉庫などの機能を担っていたことも考えられる。

遺物は、須恵器壺、土師器壺、赤焼土器壺がある。須恵器壺（28）は底部切り離しが回転ヘラ切り、体部は丸みを帯び、口縁部は開き気味に立ち上がる。須恵器壺（29）は底部調整が回転糸切りの破片資料である。底部に墨書「万」が認められる。須恵器壺（30）は底部調整がヘラ切りである。土師器（31）は最大径を上半部にもつ。口縁部は外反し、端部がわずかに上方につまみだされる。内外面ハケメで調整される。赤焼土器壺（32）は口縁部が外反し、口縁端部を上下にわずかに引き出している。須恵器壺などから、9世紀前半の時期と考えられる。

S T 13 堅穴住居跡（図版38 写真図版14）

調査区18~19~14~15グリッドで検出された堅穴住居跡で、平面プランは長軸4.2m、短軸3.8mを測り、面積は約16m²である。主軸方向はN-71°-Wで方形を呈する。確認面からの深さは22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。カマドは南北両壁に位置するように見えるが、燃焼部があるのは南壁に位置する方のみである。北壁のものは煙道部や焚き口部分には被熱面・カマド袖などは確認できなかった。南壁のカマドは中央よりやや東寄りに位置し、カマド前面に炭化物・焼土の分布が認められた。貼床や柱穴は認められない。

遺物は、須恵器壺、須恵器長頸壺、土師器高台壺、赤焼土器皿、土師器壺がある。須恵器壺（33）は回転糸切り無調整で、体部は内側気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。須恵器壺（34）は体部が内擣して立ち上がり、口縁端部は外反する。須恵器長頸壺（36）の口縁部は外反し、端部には凸帯がつまみ出される。土師器高台壺（37）は体部が内擣して立ち上がり、身が深い。口縁部は外反する。内面はミガキ、黒色処理が施されている。赤焼土器皿（38）は内外面摩滅しており、歪みが認められる。土師器壺（39）は最大径を体部の上半にもつ。口縁部は屈曲し、端部は丸みをもつ。外面は摩滅しており、内面はハケメ調整が施される。供膳形態の壺（33・37）などから、9世紀後半の時期と考えられる。

S T 23 堅穴住居跡（図版39・40 写真図版13）

16~17~12~13グリッドに位置し、平面プランは1辺5.1mの方形を呈し、面積は26m²である。主軸方向はN-10°-Wである。カマドは南壁に位置する。カマド部分は、近年の畑作の擾乱を多く受けているため、床面近くでようやく全体のプランが確認できた。確認面からの深さ

は約40 を測り、壁は比較的緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積である。床面は比較的硬化が認められるが、貼床は認められない。床面中央やや西側に、柱穴が2 基確認できた。前述したS T 3 竪穴住居跡と類似した構造が覗えた。また、南壁を除く壁際で周溝が認められた。規模は、幅15~30 、深さ10 を測る。遺物はカマド周囲を中心に出土している。土師器甕もカマドからまとめて出土しており、カマドの芯材の可能性が窺える。S D703溝跡を切る。

カマドの芯材

遺物は、須恵器蓋、須恵器高台坏、須恵器坏、土師器甕、赤焼土器甕、赤焼土器壠がある。須恵器蓋(41)はつまみが欠損する。口縁端部は直立する。須恵器高台坏(42)は体部が丸みをもって立ち上がる。台部は「ハ」の字状に貼り付けられている。須恵器坏(43)は底部の破片資料である。底部切り離しはヘラ切りである。土師器甕(44~46)は体部が最大径を上部にもち、底部にかけてすぼまる。口縁部は強く外反し、端部は丸みをもつ。外面ハケメ調整が施され、底部には木葉痕が認められる。赤焼土器甕(47)は、体部が丸みをもつ。頸部は強く外反し、口縁部をわずかにつまみあげる。底部に板状圧痕が認められる。赤焼土器壠(49)は、外面をタタキ、ロクロ、ケズリの順で成形、調整し、内面はカキメ・ハケメ調整が施されている。須恵器坏などの形態から、9世紀前半の時期と考えられる。

S T 25 竪穴住居跡（図版41 写真図版18）

14~12グリッドに位置し、南壁にカマドを有する。カマド燃焼部より北側は、近年の畑作の搅乱を多く受け、全体のプランは不明である。主軸方向はN-10° - Wである。カマド部分の遺存状況は良好で、煙道部が完全な形で検出されている。確認面からの深さは約20cm を測る。覆土は自然堆積である。

遺物は、土師器坏、赤焼土器坏、土師器甕、赤焼土器甕、赤焼土器壠が出土地して。土師器坏(50)は、ミガキ・内面黒色処理が施されている。体部は内骨氣味に立ち上がり、口縁部は外反する。赤焼土器坏(51)は内外面ロクロナデ調整が施される。身が深い。赤焼土器坏(52)は体部が厚手の作りで口縁部が肥厚する。土師器甕(53)は内外面ハケメ調整、底部には落痕が残る。土師器甕(54)は内外面ハケメ調整が施される。口縁部は「く」字状に屈曲する。赤焼土器甕(55)はロクロナデ・ケズリ調整が施されている。口縁端部をわずかに上方につまみ出している。カマドの芯材として、左袖に逆位で設置されていたものである。赤焼土器甕(56)は、内外面ロクロナデ調整が施されたもので、口縁端部に面を作り出す。赤焼土器壠(57~58)は外面がロクロナデ・ケズリ、内面カキメ調整が施されている。供膳形態などから9世紀後半の時期と考えられる。

S T 26 竪穴住居跡（図版42~43 写真図版15）

16~17~11~12グリッドに位置し、平面プランは長軸6.8m、短軸6.4mのやや南北に長い方形を呈し、面積は約43m²である。主軸方向はN-6° - Eである。確認面からの深さは約30 を測る。覆土は自然堆積である。住居跡全体が近年の畑作により搅乱を受け、断面の観察からは覆土の堆積状況が不明瞭で、埋没の状況は不明である。南東隅に焼土ブロックの広がりが確認でき、カマドが設置されていたものと考えられる。煙道及び袖部分は搅乱を受けているため、規模及びプランは不明である。

遺物は須恵器坏、須恵器皿、須恵器壺、須恵器甕、土師器高台坏、赤焼土器高台坏、土師器甕、赤焼土器甕、鐵製鍊車、砥石が出土している。すべて床面と思われる面からの出土であ

るが、前述のとおり搅乱を受けているために、出土遺物が原位置を保っているとは断定できない面もある。須恵器壺（59～66）は底部から内縫気味に立ち上がり口縁部に至るものと、口縁部が外反するものがある。底部切り離しはすべて回転糸切りである。（61）は墨書「〔淨〕万下西寺」が認められる。須恵器皿（67・68）は底部が回転糸切りで、切り離し後は無調整である。須恵器壺（69）は広口のもので、口縁端部が下方につまみ出される。型はなで肩で内外面にはロクロナデ調整が見られる。須恵器壺は体部資料である。（70）は外面に格子状のタタキ、内面には同心円文のアテ痕が認められる。（71）は外面に横方向の平行タタキ、内面には斜め方向の平行アテの痕跡が認められる。土師器高台壺（72）は底部に円形に沈線を巡らして疑似高台を作り出したものである。内面は横方向に細かなミガキ、黒色処理が施されている。赤焼土器高台壺（73）は体部が内縫しながら立ち上がり、口縁部にかけて外反する。身が深く、台部が欠損している。土師器壺（74）は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。土師器壺（75・76）は口縁部が「く」の字状に短く外反する。土師器壺（77）は器高が低く口縁部が短く外反する。外面は「火はね」による器面の荒れがひどく、調整は不明である。赤焼土器壺（78）の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を上方につまみあげたものである。赤焼土器壺（79）は口縁部が内縫し、端部を内側につまみあげたものである。鉄製鍛錘車（80）は軸輪と軸が遺存している。須恵器、赤焼土器の供膳形態などから9世紀後半の時期と考えられる。

S T27堅穴住居跡（図版44・45 写真図版16・17）

14～15～12～13グリッドに位置する。遺構全体が近年の畑作により搅乱を受けている。平面プランは長軸7.0m、短軸6.5mの方形を呈し、面積は約45m²である。主軸方向はN-3°-Wである。確認面からの深さは約40cmを測る。覆土は自然堆積である。S T25に切られる。カマドは北壁にカマド1、南壁にカマド3・4が設置されている。カマド1は長い煙道をもち、煙道内部及び燃焼部は赤色硬化し、使用頻度の高さがうかがえた。東壁のカマド2は煙道の一部が検出されているが、搅乱のため袖、燃焼部など、全体の検出はできなかった。カマド3・4は土層の観察、遺物の出土状況などから、同時に機能していたことが確認できた。床面は北壁・西壁・東壁にテラス状の段差が作り出されている。床面には焼土・炭化物を覆土とする多くの掘り込みが検出された。とくに、カマド1の周辺は床面に焼土の分布が多く前述の掘り込みも多く見受けられた。図版では掘り込み部を上端線だけの細線で示してある。床面の段差、カマドの数の多さから、2棟の切り合いも視野に入れて調査を行った。調査では、搅乱層を取り除き、残された覆土から切り合いの有無の検証に努めたが、2棟以上の重複がうかがえる痕跡は認められなかった。主柱穴はE P 1～4の4本検出され、断面からは柱頭、掘方の底面からはアタリが確認できた。

遺物は須恵器蓋、須恵器高台壺、須恵器盤、須恵器双耳环、須恵器壺、土師器壺、赤焼土器壺、赤焼土器壺、刀子、鉄斧、石製鍛錘車、砥石がある。須恵器蓋（82～84）は、口縁端部が欠損している。擬宝珠のつまみがつけられる（82）、形態化した擬宝珠形で、中央部が小さく突出する（83・84）がある。須恵器高台壺（85・86）は口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。底部は底部切り離しはヘラ切りが施される。体部は開きが小さく直線的な（85）、口縁部にかけて外反する（86）がある。須恵器盤（87）は底部資料である。底部切り離しはヘラ切りである。須恵器双耳环（88）は耳部は欠損し、体部のやや上部に貼り付けた痕跡が認められる。

須恵器壺（89～99）は高台壺と同様に、口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。底部切り離しはヘラ切りである。土師器壺（100）はヘラナデ調整が施されている。赤焼土器壺（101）は、最大径は体部上半にあり口縁部は外反し端部を丸くおさめる。丸底の底部は粘土板を使った閉塞成形によるものと考えられる。体部上半はロクロナデ調整、下半は、ヘラケズリ調整が施され、わずかにロクロ調整前のタタキ痕を残している。内面はロクロナデ、ハケメ調整が施される。赤焼土器壺（102）は体部上半はロクロナデ、下半はケズリ調整が施されたものである。頸部は外傾し、口縁端部に面を作り出す。丸底窓の底部をもつものである。赤焼土器壺（103）は口縁端部をわずかにつまみあげるものである。赤焼土器壺（104）は外面はカキメ、ケズリ、内面はカキメ調整が施されている。口縁部は外反し端部に面を作り出している。赤焼土器壺（105）は内外面の体部にカキメ調整が施される。外面にタタキの痕跡を留める。内面はカキメ、ハケメの調整が認められる。その他、刀子（106）、鉄斧（107）、石製紡錘車（108）、砥石（109・110）がある。出土はカマド3・4の周間に多く出土している。須恵器壺の形態などから8世紀後半の時期が考えられる。

S T28堅穴住居跡（図版46 写真図版18）

14-11グリッドに位置する。造構全体が搅乱を受けている。住居跡の北側も削平されており全体の平面プランや規模は不明である。主軸方向はN-19° - Wである。地山との土色変化、及び炭化物、焼土などの分布が見られる範囲は長軸4.1m、短軸2.9mである。平面プラン及び規模は不明であるが、かろうじて壁面が確認できる北東隅が遺存していること、及び隣接するS T27堅穴住居跡との重複がないことから考えて、1辺が4m程度の方形を呈していたものと考えられる。北東隅の床面には、カマドの燃焼部と考えられる被熱面が認められ、カマドがあつたものと考えられる。しかし、煙道や袖は検出することができず、詳細は不明である。

遺物は、須恵器蓋、須恵器高台壺、須恵器壺、土師器壺、土師器鉢、土師器壺、赤焼土器壺がある。床面と考えられる面で検出された柱穴、及び土坑等から多く出土している。須恵器蓋（111）はリング状つまみをもち、天井部はヘラケズリが施される。口縁部は屈曲せず、端部は小さく直立する。須恵器高台壺（112）は台部が欠損している。直線的な体部は口縁部まで至る。須恵器壺（113）は口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。体部は開きが小さく直線的である。底部切り離しはヘラ切りである。須恵器鉢（114・115）は底部資料である。底部切り離しはヘラ切りである。土師器（116）は内面ミガキ、黒色処理が施されている。土師器鉢（117）は外面に縱方向のケズリが施されている。土師器壺（118・119）は口縁部は外反し、頸部に弱い段が認められる。土師器壺（121）は小形の壺で、口縁部が肥厚し、直立気味に立ち上がる。口縁部でわずかに外反する。赤焼土器壺（122）は外面ロクロナデ、内面カキメが施される。須恵器壺の形態などから8世紀後半の時期が考えられる。

S T34堅穴住居跡（図版47 写真図版5）

12-13グリッドに位置する。平面プランは長軸4.3m、短軸3.9mの東西にやや長い方形を呈し、面積は約16m²である。主軸方向はN-89° - Wである。確認面からの深さは約14cmを測る。覆土は自然堆積である。壁は緩やかに立ち上がる。北壁中央部が鉄塔敷設の際の搅乱を受けている。カマドは東側に位置するが、袖は検出されていない。床面は比較的硬化しているが、貼床は認められない。柱穴は確認できない。

遺物は、須恵器壺、土師器高台壺、赤焼土器高台壺、赤焼土器壺、土師器壺、赤焼土器壺が出土している。須恵器壺（123）は底部資料である。土師器高台壺（124）は体部が内彎して、口縁が外反するものである。赤焼土器壺（127・128）は、底径が小さく、器高が高い。やや歪みが認められる。土師器壺（129～135）は外面ハケメ調整が施される。底部は磨痕が認められる。赤焼土器壺（136）は口縁部が短く外反する。土師器高台壺、赤焼土器壺の形態などから10世紀前半の時期が考えられる。S T 35堅穴住居跡を切る。

S T 35堅穴住居跡（図版48 写真図版1）

11～12・12～13グリッドに主体が位置する。平面プランは長軸4.4m、短軸4.2mの南北にやや長い方形を呈し、面積は約18m²である。主軸方向はN-73°-Wである。確認面からの深さは28 を測る。覆土は自然堆積である。壁は急に立ち上がり、床面の硬化が認められるが、貼床は認められない。カマドは東壁に位置するが、袖は遺存していない。

遺物は、須恵器蓋、須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器盤、土師器壺、土師器壺、赤焼土器壺が出土している。S T 34堅穴住居跡及びS T 36堅穴住居跡に切られる。須恵器蓋（137）は天井部に回転ヘラケズリが施される。口縁端部は直立する。須恵器蓋（138）は擬宝珠状のつまみをもつ。須恵器高台壺（139・140）は口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。底部はヘラ切りが施される。体部は開きが小さく直線的に立ち上がる。須恵器壺（143）は須恵器高台壺と同じく法量の大きいものである。須恵器壺（144）は体部破片資料である。外面平行タタキ、内面同心円アテの痕跡が認められる。土師器壺（145）は内外面が磨滅している。内面に黒色処理の痕跡が残る。土師器壺（146）は須恵器壺模倣形態を呈し、外面にわずかに後をもつ。土師器壺（147）は底部にハケメ調整、土師器壺（148・149）は木葉痕が認められる。土師器壺（152）は口縁部が大きく外反する。体部外面は縦方向にヘラケズリ、内面はハケメ調整が施される。輪積痕が残る。赤焼土器壺（153）は肩部が張るプロポーションである。外面はカキメ、ヘラケズリ、内面は上半はカキメ、下半は縦方向のハケメ調整が施される。須恵器壺の形態などから8世紀後半の時期が考えられる。

S T 36堅穴住居跡（図版49 写真図版4）

10～11・13グリッドに位置する。平面プランは長軸5.0m、短軸4.3mで南北に長い方形を呈し、面積は約21m²である。主軸方向はN-6°-Wである。確認面からの深さは約20 を測る。覆土は自然堆積である。壁は緩やかに立ち上がる。床面の硬化は認められない。カマドは南壁に位置し、左袖の痕跡がからうじて認められる。中央や北側に柱穴が2基確認できる。掘方径40～50 、深さ35～50 を測る。

遺物は、須恵器蓋、須恵器壺、赤焼土器壺、土師器壺、赤焼土器壺、赤焼土器壺がある。須恵器蓋（155）は破片資料で、端部は欠損している。天井部は回転ヘラケズリが施される。須恵器壺（156）は体部破片で、外面平行タタキ、内面平行アテが施される。赤焼土器壺は体部が内彎して、口縁部が外反する（160・161）、体部が直線的に立ち上がり口縁部に至るもの（157）がある。赤焼土器壺（159）は底径が小さく体部が内彎し、身が深いものである。土師器壺（163・164）は内外面ハケメ調整が施される。赤焼土器壺は全形を窺えるものはないが、口縁部が内彎気味のもの（167・168）、口縁部が外反し、中程から内傾し、口縁内面に段を形成するもの（169）がある。赤焼土器壺（170）は外面ロクロナデ、ケズリ調整、内面ロクロナデ、

が施されている。赤焼土器壺の形態などから9世紀後半の時期が考えられる。S T35堅穴住居跡を切る。

S T37堅穴住居跡（図版50 写真図版2）

10~12グリッドに位置する。平面プランは長軸32m、短軸27mで南北に長い方形を呈し、面積は約8 である。主軸方向はN-4° - Wである。確認面からの深さは約30 を測る。覆土は自然堆積である。南西隅部分は調査区外に掛かり未検出である。方位は南北軸でN-4° - Wである。

遺物は土師器高台壺、赤焼土器高台壺、赤焼土器壺、土師器壺がある。土師器高台壺(171)は体部が内彫り、口縁部がわずかに外反する。赤焼土器高台壺(172・173)は身が深く、口縁部にかけて大きく開く。土師器壺(175)は内外面ハケメ調整が施される。口縁部は短く外反し、端部を丸くおさめる。土師器高台壺、赤焼土器高台壺の形態などから9世紀後半の時期が考えられる。

S T38堅穴住居跡（図版51 写真図版2・3）

9~10~12~13グリッドに位置する。平面プランは長軸32m、短軸29mで南北に長い方形を呈し、面積は約9 である。南西隅部分は調査区外のため未検出である。主軸方向はN-85° - Eである。確認面からの深さは約50 を測る。覆土は自然堆積である。壁は急に立ち上がる。床面の明らかな硬化面は認められなかったが、床面と考えられる土色変化を基に補足調査を行うことで、約4 程の貼床と思われる層を確認した。カマドは南壁に位置するが袖の痕跡は認められない。煙道先端部をS T38堅穴住居跡に切られているため、全体のおよそ約1/3 の検出に留まる。

遺物は、須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器壺、須恵器壺、赤焼土器皿、土師器壺がある。カマドの周辺より多く出土している。須恵器高台壺(176)は底部資料で、底部切り離しは回転糸切である。須恵器壺(177~179)は底径が小さく、体部は内彫り、口縁部がわずかに外反する。須恵器壺(180)は外面に縱・斜め方向のケズリ、内面に縱方向のハケメ調整が施されている。須恵器壺(181)は体部片で、外面は平行タタキ、内面は青海波、格子目タタキが施されている。赤焼土器皿(182)は底部切り離しが回転糸切であり、歪みが認められる。土師器壺(183)は最大径を体部上半にもつ。外面ハケメ、内面ヘラナデ調整が施されている。須恵器壺の形態などから9世紀後半の時期が考えられる。

S T39堅穴住居跡（図版52 写真図版3）

9~10~12~13グリッドに主体が位置する。平面プランは南西隅が調査区外のため未検出であるが、長軸28m、短軸24mと東西にやや長い方形を呈し、面積は約6 m² である。主軸方向はN-75° - Eである。確認面からの深さは28 を測る。覆土は自然堆積である。カマドは南壁に位置し、左右の袖の痕跡がわずかに認められる。カマド燃焼部に板状の自然石が2枚重なって埋設されており、支脚として使用したことが考えられる。壁は急に立ち上がる。

カマドの支脚

遺物は、赤焼土器高台壺、赤焼土器壺、赤焼土器壺が出土している。赤焼土器高台壺(184~186)は底径が小さく、体部が口縁部にかけて大きく開き、身が深い。底部は菊花ナデが施されている。赤焼土器高台壺(187)は体部が内彫り、口縁部にかけてわずかに外反する。赤焼土器壺(190・191)は、底部切り離しが回転糸切である。赤焼土器壺(192)は体部最大径を中程に

もち、口縁部が内彎しながら立ち上がる。外面はロクロナデ、ケズリ、内面はヘラナデが施される。赤焼土器壺(193)は体部から口縁部が屈曲し、端部が内傾する。S T 38豎穴住居跡を切る。赤焼土器壺類の形態などから9世紀後半～10世紀初頭の時期が考えられる。

S T 40豎穴住居跡（図版52 写真図版6）

カマドの構築材 9-14グリッドに位置し、平面プランが長軸3.7m、短軸3.4mの東西に長い方形を呈し、面積は約12m²である。主軸方向はN-84°-Eである。確認面からの深さは16cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは南東隅に位置し、燃焼部が住居跡のプランの外に張り出す形状をしている。この張り出し部左側には、自然石が並べられており、カマドの構築材として使用されていたことが窺える。また、燃焼部周囲に多量の自然石が散在しており、これらも同様の使われ方をしていたと考えられる。燃焼部中央奥には自然石の上に土師器壺の底部が伏せられており、この状態で支脚として使用されていたと考えられる。床面は、明確な貼床の痕跡は認められないものの、硬化していることが確認できた。

遺物は、土師器高台壺、赤焼土器高台壺、赤焼土器皿、赤焼土器壺、土師器壺、赤焼土器壺、四石がある。カマド周辺を中心に多く出土している。土師器高台壺(194)は底部が小さく、体部が内彎して口縁部が大きく開く。内面には、黒色処理が施される。赤焼土器皿(197)は歪みが認められる。赤焼土器壺は体部が外反し、口縁部に至る(198・199)、歪みが目立つ(200)、ロクロ目が目立つ(201)がある。底部切り離しはすべて回転糸切りである。土師器壺は内外面ハケメ調整で口縁端部に面をもつ(202)、最大径を体部上半にもち、口縁部が外反する(204)、口縁部がわずかに立ち上がり、面をもつ(207)がある。(203・205)の底部は磨痕が認められる。(206)は外面ハケメの痕跡が残る。赤焼土器壺(209)は内彎する体部から口縁部が屈曲し、端部が直立するものである。供膳形態から、9世紀後半の時期が考えられる。S K 41土坑を切る。

S T 43豎穴住居跡（図版53・54 写真図版15）

焼失家屋 14-15-13-14グリッドに位置する。平面プランは長軸5.1m、短軸4.1m南北に長い方形を呈し、面積は約20m²である。北東隅部分は後世の擾乱により削平され壁が失われている。確認できた床面の範囲を住居の規模とした。主軸方向はN-3°-Wである。検出面からの深さは32cmである。覆土は自然堆積である。床面上に、焼土ブロックを混在する炭化物層の広がりが認められることから、焼失家屋の可能性が考えられる。検出時において北部分の炭化層は認められなかった。柱穴は小規模なもの(E P 1~4・6)で、直径40~66cmの円形、深さは16~48cmを測る。掘方の浅いものが多く、主柱穴とは考えにくい。E P 5はカマド右袖脇に位置し、貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁の南角寄に位置している。

遺物は須恵器蓋、須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器壺、須恵器壺、赤焼土器高台壺、赤焼土器壺、土師器壺、土師器壺、赤焼土器壺、砾石である。須恵器蓋(211)はつまみ部が欠損し、縁端部は面をもつ。須恵器高台壺(212)は身は浅く、体部が直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。底部調整は小片のため不明である。須恵器壺(218)は体部上半に最大径を有し、卵形を呈する。外面は平行タキ、内面は同心円アテ痕が残る。口縁部は欠損している。土師器壺(222)は底部切り離しが回転糸切りのもので、体部が内湾気味に立ち上がる。(223)は法量の大きいものである。土師器壺は内外面ハケメ調整が施されている。口縁部が長く外反し、

頭部の内外面の後が不明瞭なもの（227）、短く外反するもの（228）、口縁部が「く」字状に屈曲するもの（231・232）がある。赤焼土器壺は、僅かに受け口状を呈する（233・234）、口縁端部をつまみだす（235）が認められる。時期的には、一部古相の須恵器高台壺（212）がみられるが、赤焼土器や土師器の供焼具の形態から9世紀後葉の所産と考えられる。

S T 44 竪穴住居跡（図版41 写真図版21）

調査区15～16～14～15グリッドで検出された竪穴住居跡で、長軸3.9m、短軸3.8mの方形を呈し、面積は約14m²である。主軸方向はN-3°-Eである。確認面からの深さは40cmである。覆土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦で硬く締まりを見せる。貼床、柱穴は認められない。カマドは南壁に2基認められる。カマド1は南面の東寄りに、カマド2は南面の西寄りに位置する。カマド2は袖と考えられる粘土がわずかに遺存する。カマド2が使用されなくなった後に、カマド1が作られたと考えられる。遺物は、カマド1の前面から多く出土している。S T 674竪穴住居跡を切り、S T 46竪穴住居跡に切られる。

遺物は、須恵器壺、土師器壺、赤焼土器壺、赤焼土器壺、鉄製品、鎌、石製紡錘車、砥石がある。須恵器壺（237）は底部切り離しがヘラ切りである。土師器壺（238）は破片資料のため全形は不明である。内外面ヘラナデ調整が施される。口縁端部は面をもつ。土師器壺（239）は頭部に明瞭な段をもつ。内外面ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壺（243）は外面ケズリ、内面ハケメ調整が施される。土師器壺（240）は口縁部が外反し、端部に面をもつ。内外面ロクロナデ調整が施されている。赤焼土器壺（242）は口縁部は外反し、端部をつまみあげる。土師器壺（241）は外面にケズリ、内面ヘラナデ調整が施され、輪積痕が残る。底部は突出している。赤焼土器壺（244）は把手部のみの資料である。時期的には須恵器壺の形態から9世紀前半と考えられる。

S T 46 竪穴住居跡（図版55 写真図版20）

16～15グリッドで検出された竪穴住居跡で、長軸4.6m、短軸4.4mの方形を呈し、面積は約20m²である。主軸方向はN-67°-Wである。確認面からの深さは20cmである。S T 674・S T 44・S T 660・S D 604を切る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。カマドの前面、その周辺の広範囲に炭化物、焼土の分布が認められた。土坑やピットは4基確認されたが位置などから主柱穴とは考えられない。貼床は認められない。カマドは東壁の北側に位置する。煙道部がS T 660を切っている。

遺物は須恵器高台壺、須恵器壺、土師器壺、土師器壺、赤焼土器壺、赤焼土器壺がある。須恵器高台壺（249・250）は体部が内彎して立ち上がり、口縁部が外反するものである。両者は身の深さに違いが見られる。須恵器壺（251）、土師器壺（253）は底部資料で切り離しは回転糸切りである。赤焼土器壺（257）は口縁部は外反し、端部が下方につまみ出される。外面ロクロナデ、ケズリ、内面ハケメ、ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壺（255）は口縁部は外反し、端部が上につまみだされる。外面ロクロナデ、ケズリ、内面ロクロナデ、ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壺（258）は底部が剥離している。外面ケズリ、内面ロクロナデ、ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壺（256）は内彎する体部から口縁部が屈曲し、端部が内傾するものである。内外面ロクロナデ調整が施される。赤焼土器壺（259）は口縁部が外反し、端部が面をもつ。外面ロクロナデ、カキメ、ケズリ、内面ロクロナデ、カキメ調整が施される。一部古相（249・252）

頭部に段

が含まれる。土師器壺（254）はST44出土（239）と同一個体の可能性がある。本遺構はS T44と切り合っているため、調査時において混在した可能性が考えられる。時期的には須恵器高台壺の形態から、9世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

S T50堅穴住居跡（図版46 写真図版8）

18～19～16～17グリッドで検出された堅穴住居跡で、平面プランは長軸4.6m、短軸4.4mの方形を呈し、面積は約20m²である。主軸方向はN-45° - Wである。確認面からの深さは25cmである。覆土は自然堆積である。カマドは東壁の北寄りに位置する。

遺物は、須恵器壺、赤焼土器壺、赤焼土器壠がある。須恵器壺（260・261）は口径・底径が大きく、身は深い箱形を呈する。（260）は底部切り離しがヘラ切り後、回転ヘラケズリ調整、（261）はヘラ切り後、手持ちヘラケズリ調整が施されている。赤焼土器壺（262）は口縁部は外反し、端部に面をもつ。外面はロクロナデ、ケズリ、内面はカキメ調整が施されている。赤焼土器壺（263）は、外面ケズリ、内面ハケメ、ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壠（264）は口縁部が外反する。内外面カキメ調整が施される。時期的には須恵器壺の形態から、8世紀後半と考えられる。

S T54堅穴住居跡（図版57 写真図版21）

調査区17～18～17グリッドで検出された堅穴住居跡で、平面プランは長軸4.2m、短軸4.1mの方形を呈し、面積は約17m²である。主軸方向はN-12° - Eである。確認面からの深さは42cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。床面は平坦で硬く締まるが、貼床は認められない。柱穴は床面中央に2基認められる。カマドは南面の西寄りに位置する。右袖の構築材と考えられる粘土がわずかに遺存する。カマドの前面に炭化物のまとまった分布が認められた。カマド周囲を除く壁際には幅8～12cm、深さ約10cmの周溝が検出されている。S B 597掘立柱建物跡に切られる。

遺物は須恵器蓋、須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器壺、土師器壺、赤焼土器壺がある。須恵器高台壺（266）、須恵器壺（267）は底部切り離しはヘラ切りである。須恵器壺（268）は体部片で、外面平行タタキ、内面同心円文アテ痕が認められる。土師器壺（269）は内外面が摩滅している。赤焼土器壺（273）は小さな平底の底部をもつ。外面はロクロ、ケズリ、体部の底部際にタタキが施される。内面はカキメ調整が施される。口縁部は外反し、端部に面をつくる。赤焼土器壺（274）は口縁部が外反し、端部を内側につまみ出す。遺物はカマド前面の床面から多く出土している。時期としては、須恵器壺などから、9世紀前半と考えられる。

S T643堅穴住居跡（図版58 写真図版23）

調査区15～16グリッドで検出された堅穴住居跡で、平面プランは長軸3.5m、短軸2.9mの方形を呈し、面積は約10m²である。主軸方向はN-20° - Eである。確認面からの深さは25cmである。S T660の覆土を掘り込んで作られる。カマドは東壁の北寄りに位置する。カマドの左袖部分がわずかに残る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。貼床や柱穴は認められない。堅穴住居跡としては、本遺跡の中では最小の規模である。

遺物は底部切り離しがヘラ切りの須恵器壺（276・277）がある。時期としては、9世紀前半と考えられる。

S T658堅穴住居跡（図版60 写真図版6）

11~12-12グリッドに位置する。造構全体が搅乱と削平を受け、全体のプランは不明である。そのため焼土粒、炭化物の範囲のみを造構の範囲として図化している。ほぼ床面付近での検出であるため、覆土の堆積状況は不明である。カマドは、南端に強く熱を受けた土色変化が確認できたこと、及び右袖と考えられる部分にカマドの構築材と考えられる自然石があることなどから考えて、住居の南壁に位置していたと考えられる。

遺物は須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器甕、土師器高台壺、赤焼土器高台壺、赤焼土器壺、土師器甕、赤焼土器甕、鉄製鍤錘車がある。須恵器壺（279）は底部切り離しが回転糸切りで、やや丸みを帯びた体部に、外反する口縁部をもつ。須恵器甕（280）は口縁部の資料である。頸部外面にアテ具痕がわずかに残る。土師器高台壺（281）は、底部が小さく、体部が内厚して口縁部が大きく開く。内面にミガキ、黒色處理が施される。赤焼土器高台壺・壺は、体部がやや内厚し、口縁部でわずかに外反するもの（282~285）、小型で碗形のもの（286）、身が深くクロ口目の目立つもの（287）が認められる。土師器甕（288~292）は口縁部が「く」字状に外反する。内外面ハケメ調整が施される。（288）は席痕が認められる。赤焼土器甕（293・294）は、同一個体の可能性が考えられる。外面ロクロナデ、ケズリ、内面はロクロナデ、ヘラナデ調整が施される。（294）は、底部切り離しが回転糸切りで押圧痕が認められる。供膳形態として、赤焼土器壺が主体を占めている。鉄製鍤錘車（295）は鍤輪のみの出土である。時期としては、9世紀後半と考えられる。

S T 660豎穴住居跡（図版61 写真図版22）

調査区15~16-16グリッドで検出された豎穴住居跡で、長軸4.8m、短軸4.5mの方形を呈し、面積は約21m²である。主軸方向はN-64°-Wである。確認面からの深さは20cmである。S T 643とS T 46に切られる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積である。貼床や柱穴は認められない。カマドは西壁の北寄に位置する。煙道部はS T 46に切られ、付け根部分しか確認できなかった。焚き口の両側に袖と見られる粘土が認められた。

遺物は、土師器壺、土師器甕、石製模造品（粗製円板）がある。土師器壺（296）は口縁部の破片である。体部は内厚し、短い口縁部が直立する形態である。土師器甕（297）は碗形を呈し、内外面にヘラナデ調整が認められる。底部外面中央にヘラ記号「×」がある。これらの土師器甕は、その形態的特徴が関東地方の真間式に類似し、関東地方に系譜が求められることから、「関東系土師器」と称されるものである。土師器甕（299）は内外面ハケメ調整が施される。体部最大径を中程より下にもつ。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。土師器甕（298・300）は外面ハケメ、内面ヘラナデ調整が施される。土師器甕（301）は突出した底部をもつ。石製模造品（429）は床面の焼土と炭化物層中から出土している。時期としては、8世紀前半と考えられる。

S T 662豎穴住居跡（図版58・59 写真図版7）

8~10-16グリッドに位置する。平面プランは長軸5.7m、短軸5.0mの南北に長い方形を呈し、面積は約28m²である。主軸方向はN-10°-Wである。確認面からの深さは約20cmを測る。覆土は自然堆積である。壁は緩やかに立ち上がる。カマドは南壁に位置する。煙道は削平されている。

遺物は須恵器高台壺、須恵器壺、須恵器甕、土師器高台壺、赤焼土器壺、土師器甕、赤焼土

「関東系土師器」

器壺、磨製石斧、砥石がある。須恵器高台坏（302・303）は、体部が内擣して立ち上がり、口縁部が外反するものである。（303）は体部側面に墨書「春」の文字が認められる。須恵器坏（304～309）は体部が内擣し、口縁部が外反する。ロクロナデによる凹凸が顕著に見られる。（308）は底部に墨書「万」、（309）は墨書「田々」の文字が認められる。須恵器壺（310）はなで肩の短頸壺と考えられる。頸部は直立し、上端は欠損する。内外面ロクロナデが施される。土師器高台坏（311）、赤焼土器坏（312・313）は底部資料である。底部切り離しは回転糸切りである。土師器壺（314～318）は口縁部が外反する。端部を丸くおさめる（314・315）、面をもつ（316・318）がある。（317・319）は底部に薙痕が認められる。赤焼土器壺（320）は外面ロクロナデ、ケズリ、内面ロクロナデが施される。赤焼土器壺（321）は外面ロクロナデ、ケズリ、内面はハケメ調整が施されている。（321・322）は口縁が外反し、端部を下方につまみだし、面をつくる。

時期的には須恵器供膳形態から、9世紀後半と考えられる。

S T 674堅穴住居跡（図版62 写真図版14）

調査区15～16・14～15グリッドで検出された堅穴住居跡で、長軸4.0m、短軸3.6mの方形を呈し、面積は約14m²である。主軸方向はN-89°-Wである。確認面からの深さは32cmである。覆土は自然堆積である。遺構の大部分をS T 44に、煙道部付近をS T 46に切られる。壁はほぼ垂直に立ちあがる。西壁はS T 44によって切られている。床面は平坦で硬く締まりを見せるが、貼床は認められない。土坑・ピットが8基確認されたが、位置などから主柱穴とは考えられない。カマドは東壁の中央に位置し、煙道部の先端はS T 46に切られている。

遺物は、須恵器壺、須恵器高台坏、須恵器鉢、須恵器長頸壺、土師器壺、赤焼土器壺、刀子、砥石がある。須恵器壺（327）は、つまみは中央部がわずかに突起するが形骸化している。口縁端部は直立する。須恵器高台坏（329）は、底部切り離しはヘラ切りである。須恵器鉢（330）は、口縁部が受け口状を呈する。外面ロクロナデ、内面カキメが施される。須恵器長頸壺（331）は、口頸部の接合には粘土円盤を貼り付けることによる円盤閉塞法で成形される。外面ロクロナデ、縱・横方向のケズリ、内面ロクロナデが施される。土師器壺（332）は内外面ハケメ、底部には木葉痕が認められる。土師器壺（333）は、頸部に明瞭な段を見せるものである。内外面ヘラナデ調整が施される。赤焼土器壺（334）は口縁部が外反し、端部をわずかにつまみあげる。外面はロクロナデ、カキメ、ケズリ、内面はロクロナデが施される。時期的には須恵器供膳形態から、9世紀前半と考えられる。

（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、平安時代前期と同末期のものが確認されている。平安時代前期の掘立柱建物跡は、調査区北東側の微高地上に分布し、3棟を数える。建物全てが南北棟である。建物の構造は側柱建物2棟、純柱建物1棟が検出されている。建物を構成する柱穴は総じて大きく、隅丸方形を呈するものと、円形あるいは楕円形を呈するものに大別できる。柱痕跡が明瞭に確認できる。平安時代末期の掘立柱建物跡は、調査区の東半に分布し、7棟を数える。建物は南北棟のものと、東西棟のものに大別される。建物の構造は、二面に庇をもつ建物が1棟検出された他は、すべて側柱建物である。建物を構成する柱穴は総じて小さく、円形あるいは楕円形

を呈する。柱痕跡が明瞭に確認できる。以下、検出状況と出土遺物について詳述する。

S B112掘立柱建物跡（図版63）

15~18グリッドに位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟の側柱建物である。主軸方向は 側柱建物 N-20° - Eを測る。規模は南側梁行1.7m、北側梁行1.6m、東側桁行・西側桁行は4.5mを測る。面積は約7 となる。柱間は東側桁行・西側桁行で2.2m、南側梁行・北側梁行で1.7mを測る。柱穴の掘方の径は35~50 の円形で、確認面からの深さは、20~50 を測る。北側梁行の柱穴掘方の径が他より大きいのが特徴である。主軸方位が隣接する S A862・863柱列跡と近似しており、同時期に存在した可能性が考えられる。このように考えると、同じく隣接する S A864・865柱列跡と南梁が同一軸線上に重なってしまうため、S A864・865柱列跡とは同時期に存在し得ないことになる。またその結果、S A862・863柱列跡と S A864・865柱列跡は別のものと考えなければならない。

遺物は、覆土中からの出土である須恵器壺（337）がある。造構の位置及び他造構との関係から、平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B204掘立柱建物跡（図版64 写真図版26）

17~18~18~20グリッドに位置する。東側が調査区外のため全体のプランは不明であるが、確認できた範囲では身舎が梁行2間、桁行5間で西と北に庇を有する東西棟の建物跡である。主軸方向は、N-75° - Wを測る。規模は身舎の西側梁行で3.9m、南側桁行（10.7）m、北側桁行で（8.7）mを測る。庇部分の柱間は西側梁行で1.2~2.1m、北側桁行で1.2~1.8mを測り、身舎との柱間は西側梁行で1.2~1.4m、北側桁行で1.2~1.3mを測り、北側の庇部分が西側と比べて狭くなっている。柱穴の掘方の径は22~90cm、確認面からの深さは10~40 を測る。總じて底部の柱穴は、身舎部分を構成する柱穴より幾分小さい。他の建物はいずれも梁行1間の建物であるが、S B204掘立柱建物跡は規模も大きく、当該時期の中軸的な建物であることがうかがえる。また、S B112掘立柱建物跡や S A862・863、S A864・865柱列跡等と軸線が近似することから、これら複数の建物が同時期に機能していたことがうかがえる。

中枢的な建物

遺物は、柱穴覆土中から須恵器壺（338）の出土がある。立地する位置などから考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B416掘立柱建物跡（図版63 写真図版25）

10~11~17グリッドに位置する。梁行1間、桁行3間の南北棟の側柱建物である。主軸方向は N-4° - Eである。規模は東側桁行・西側桁行とも6.0mを測り、南側梁行3.8m、北側梁行は4.0mを測る、ややゆがんだ矩形を呈する。面積は約23m² となる。柱間は西側桁行で平均1.9~2 mと不揃いである。東側桁行は柱穴が未検出のため、全体は不明であるが、遺存部分では1.8mである。柱穴の掘方は径35 ほどの円形で、確認面からの深さは約10~35 と幅が認められ、北西隅の柱穴が他と比較して極端に浅いのが特徴である。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡が明瞭に確認できた。

時期を特定できる遺物の出土は無かったが、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B417掘立柱建物跡（図版65 写真図版25）

9~18~19グリッドに位置する。梁行1間、桁行3間の東西棟の側柱建物である。主軸方向

はN-82° - Wである。東側梁行・西側梁行は3.8m、南側桁行7.7m、北側桁行8.1mを測り、ややゆがんだ矩形を呈する。また北側桁中央部の2本の柱穴が、外側にずれている様子が見て取れる。面積は約30m²となる。柱間は東西桁行とも3.8m、柱穴の掘方は約30~40 の円形で、確認面からの深さは約10~40 を測る。西側梁行の柱穴が浅くなっている。これは、調査区が西から東に向かって傾斜していることに起因すると思われる。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡が明瞭に確認できた。時期を特定できる遺物の出土は無かったが、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B418掘立柱建物跡（図版65 写真図版25）

8~9~15~16グリッドに位置する。建物の構造は、東西1間、南北1間である。主軸方向は、N-3° - Wを測る。規模は東西1.9~2.0m、南北2.0~2.3mを測り、面積は約4 m²である。柱穴の掘方は径22~38 の円形で検出面からの深さは10~20 を測る。

時期を特定できる遺物の出土は無かったが、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B545掘立柱建物跡（図版66 写真図版24）

18~19~13~14グリッドに位置する。梁行2間、桁行3間の隅柱建物である。主軸方向は、N-15° - Eである。規模は南北3.9m、東西4.2 を測る。面積は約16 となる。柱間は、東側桁行・西側桁行とも1.4m、南側梁行・北側梁行は約1.8mである。柱穴の掘方は径55~70 の隅丸方形で、検出面からの深さは30~40 を測る。柱穴の断面からは、柱痕跡が明瞭に認められる。隣接して検出されたS B551掘立柱建物跡との柱穴の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

遺物は、柱穴覆土から赤焼土器坏（339）がある。柱穴の形状、立地位置等から9世紀代の建物跡と考えられる。

S B551掘立柱建物跡（図版66 写真図版24）

総柱建物 18~19~12~13グリッドに位置する。東西2間、南北2間の総柱建物である。主軸方向は、N-12° - Wである。規模は東西3.3m、南北3.5mを測り、面積は約11 である。柱間は、東西1.4 m~1.7m、南北1.7~1.8mである。柱穴の掘方は径16~64 程の円形もしくは梢円形で、検出面からの深さは26~60 を測る。柱穴の断面からは、柱痕跡が明瞭に認められる。隣接して検出されたS B545掘立柱建物跡とは柱穴の切り合いがないため、新旧関係は不明である。

遺物は、須恵器高台坏（340）、須恵器坏（341）がある。須恵器坏は口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。体部は開きが小さく直線的である。底部切り離しはヘラ切りである。出土遺物や柱穴の形状、立地位置等から8世紀後半~9世紀初頭にかけての建物跡と考えられる。

S B597掘立柱建物跡（図版67 写真図版23）

16~17~16グリッドに位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟の隅柱建物である。主軸方向はN-12° - Eである。規模は東側桁行・西側桁行とも6.7m、南側梁行4.8m、北側梁行4.4mを測る面積は約32 となる。ややゆがんだ矩形を呈する。柱間は東側桁行では2.2mで均等であるが、西側桁行では2.1~2.4mと不揃いである。南側梁行の柱間は2.4mで均等であるが、北側梁行の柱間は、2.0~2.4mと不揃いである。柱穴の掘方は径50~80 の梢円形で、確認面からの

深さは40~65 を測る。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡が明瞭に確認できた。柱穴底面において、上屋の重量による柱根の落ち込みが認められる。

遺物は須恵器蓋、須恵器壺がある。須恵器蓋(342)は天井部にヘラケズリが入れられる。つまみはわずかに突起するが形骸化している。端部は直立する。須恵器壺(344)は口径・底径が大きく、身は深い箱形を呈する。体部は直線的に開く。底部切り離しはヘラ切りが施される。S T 54 竪穴住居跡を切る。時期的には、8世紀後半と考えられる。

S B 641 挖立柱建物跡 (図版68 写真図版26)

6~7~18~19グリッドに位置する。梁行1間、桁行3間の東西棟の側柱建物である。南東の隅柱は調査区外のため未検出である。主軸方向はN-89° - Wである。規模は東側梁行3.5m、西側梁行(3.5)m、南側桁行(7.1)m、北側桁行7.1mを測る。面積は約(24)m²となる。柱間は東側桁行は3.5m、西側桁行1.8m、南側梁行・北側梁行は2.4mを測る。柱穴の掘方は径40

の円形で、確認面からの深さは約30 を測る。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡が明瞭に確認できた。S Q 106カマド状遺構の燃焼部中央に北側の桁が重なるが、カマド状遺構とは同時期に存在したとは考えにくい。時期を特定できる遺物の出土は無かったが、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S B 788 挖立柱建物跡 (図版68)

8~9~18グリッドに位置する。梁行1間、桁行2間の東西棟の側柱建物である。主軸方向は、N-88° - Wを測る。規模は東側梁行2.3m、西側梁行3.0m、南側桁行5.0m、北側桁行5.3mを測る。面積は約13 である。柱間は、東側梁行2.3m、西側梁行3.0m、南側桁行1.8~3.2m、北側桁行2.3~3.0mである。柱穴の掘方は径22~40 の円形もしくは楕円形で、検出面からの深さは10~20 を測る。

時期を特定できる遺物の出土は無かったが、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

(3) 柱列跡

2列1組の柱列跡が2基検出された。横列あるいは堀跡等の機能を考えられるが、ここでは柱列跡と表記するに留める。規模や配置などから平安末期の建物跡に関わる施設と考えられる。

SA862・863柱列跡 (図版69)

14~18~18~19グリッドに位置する。当初、東側に身舎が位置する掘立柱建物跡の庇と考えていた。しかし、この2列の柱列は柱間及び規模もほぼ同じであるが、東西方向に梁を通すときにこれら柱穴と対応する位置に柱穴が確認できないため、掘立柱建物跡としては構造上無理があると考え、柱列跡とした。主軸方向はN-18° - Eを測り、隣接する S B 204 挖立柱建物跡の南北軸の方位と非常に近似する値を示す。柱穴の掘方径は36~56 を測り、確認面からの深さは20~60 を測る。隣接する S A 864・865柱列跡の柱と共有すればT字形を示すことになるが、断定するには至っていない。

遺物は、覆土中からの出土に土師器壺(345)がある。平面プラン及び立地する場所等から考

えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

S A 864・865柱列跡（図版69 写真図版27）

14~15~18~19グリッドに位置する。当初、北側1列の柱列跡と考えていたが、前述したような事から考えて、S A 862・863柱列跡と同様に2列の柱列跡と考えたい。主軸方向はN-74°-Wを測り、隣接するS A 862・863柱列跡と直交し、さらにS B 204掘立柱建物跡の主軸方位と非常に近似する値となっている。柱穴の掘方径は22~60 を測り、S A 862・863柱列跡の柱穴掘方よりも小型である。確認面からの深さは10~40 を測る。

遺物は覆土中からの出土に須恵器壺（346）がある。平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期の建物跡と考えられる。

（4）土坑

調査区全域に認められる。出土遺物がなく、所属時期の判断の困難のものも少なくない。

S K 41土坑（図版71 写真図版30）

9~14グリッドに位置する。平面プランは長軸2.4m、短軸1.9mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは20 を測る。覆土は自然堆積である。底面はほぼ平坦で、南壁は緩やかに立ち上がるが、他の壁は比較的急に立ち上がる。S T 40堅穴住居跡に切られる。

遺物は土師器蓋、土師器高台坏、赤焼土器高台坏、赤焼土器坏、土師器壺、赤焼土器壺がある。これらは、一括して廃棄されたものと考えられる。土師器蓋（347）は両面黒色処理されたもので、天井部に一条の突帯が巡るものである。つまみはリング状で、端部は欠損している。内外面にミガキが施されている。金属器の模倣と考えられる。土師器高台坏（348~359）は体部が内彎し、口縁部が外反するものが主体を占める。ミガキ調整、内面黒色処理されるもの（348~355・357）、ミガキ調整、両面黒色処理されるもの（356・358）がある。（358）は法量の大きいものである。供膳形態の底部切り離しは回転糸切りが主体であるが、菊花ナデが施されるもの（356）が1点含まれる。赤焼土器高台坏（359）は底部資料で、底部切り離しは回転糸切りである。赤焼土器坏（360・361）は底部切り離しは回転糸切りで、体部が直線的に立ち上がるものの（360）、体部が内彎し、口縁部が外反するもの（361）が認められる。土師器壺（362・363）は口縁部が緩やかに外反している。（362）は内外面ハケメ調整が施され、底部には蘆痕が認められる。時期的には供膳形態から、9世紀後半~10世紀初頭が考えられる。

S K 51土坑（図版72）

18~17グリッドに位置する。平面プランは長軸1.7m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは35 を測り、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物は土師器坏・土師器壺が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。時期的には、平安時代前期と考えられる。

S K 53土坑（図版72）

18~17~18グリッドに位置する。平面プランは長軸1.8m、短軸1.0mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは25 を測り、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物は、須恵器壺（367）がある。時期的には、平安時代前期と考えられる。

S K 56土坑（図版70）

18-18グリッドに位置する。平面プランは長軸2.4m、短軸1.8mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは20 を測り、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物は土師器壺・土師器甕が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。時期的には、平安時代前期と考えられる。

S K 60土坑（図版72）

18-19グリッドに位置する。平面プランは長軸2.7m、短軸1.0mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは10 を測り、底面はほぼ平坦である。覆土は2層からなる。

遺物は、覆土中から須恵器壺・土師器壺・土師器甕が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。時期的には平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期と考えられる。

S K 61土坑（図版73）

17-19グリッドに位置する。平面プランは長軸1.6m、短軸1.0mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは43 を測り、底面はほぼ平坦である。

遺物は、ロクロ成形のかわらけ（369）がある。時期的には平面プラン及び立地する場所等から平安時代末期と考えられる。

S K 62土坑（図版71 写真図版30）

17-19グリッドに位置する。平面プランは長軸1.5m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは30 を測り、底面はほぼ平坦である。北西壁はオーバーハンプして壁面は被熱し赤色硬化している。底面には小ピットが2基掘り込まれる。その周囲は被熱して赤色硬化している。ピットの内面及び底面は被熱していない。

遺物は、須恵器系陶器短頸甕（370）、須恵器系陶器甕（371）がある。（370）は内外面ロクロナデ調整が施されている。（371）は口径50 の大形品である。口頸が外反し、端部を屈折する。体部外面の叩打は頸基部から一段下がった部位から打圧痕を右下がり一方向に施している。平行叩打文は3 あたり12・13目と細かく鋭い。内面は円形の押圧痕を留める。珠洲編年（吉岡1994）I期に近似する。時期的には、12世紀後半と考えられる。

S K 63土坑（図版70）

17-20グリッドに位置する。平面プランは長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは28 を測り、底面はほぼ平坦である。

須恵器系陶器甕が出土している。細片のため図化はできなかった。時期的には、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期と考えられる。

S K 71坑（図版73 写真図版30）

17-19グリッドに位置する。平面プランは長軸1.9m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは28 を測り、底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

遺物は、鎌（373）、砥石（372）がある。鎌は基端部に折り返しを有する。平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期と考えられる。

S K 81土坑（図版72）

17-18グリッドに位置する。平面プランは長軸0.9m、短軸0.5mの隅丸長方形を呈する。確

認面からの深さは25 を測り、底面はほぼ平坦である。

遺物は、灰釉陶器四耳壺（374）の耳部が出土している。時期的には、平面プラン及び立地する場所等から考えて平安時代末期と考えられる。

S K 86土坑（図版73 写真図版29）

16~19グリッドに位置する。平面プランは長軸1.5m、短軸1.2mの楕円形を呈する。確認面からの深さは58 を測り、覆土は自然堆積である。壁はやや緩やかに立ち上がり、東側壁面中段に平坦な部分が認められる。遺構底面からの遺物の出土はなかった。S K 87土坑を切る。

遺物は、須恵器系陶器片口鉢（375）の口縁部片、砥石（376）がある。（375）は片口部片で、内外面ロクロナデ調整が施される。時期的には、12世紀後半と考えられる。

S K 87土坑（図版73 写真図版29）

16~19グリッドに位置する。平面プランは長軸3.0m、短軸1.5mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは20 を測り、底面はほぼ平坦である。

遺物は、須恵器系陶器壺（377）、鉄製品（378）、鉄釘（379）が出土している。S K 86土坑に切られる。（377）は、口径20 の大形品である。口頭が外反し、口縁端部はやや丸みを帯びた面をつくる。体部外面の叩打は頸基部から一段下がった部位から打圧痕を右下がり一方向に施している。平行叩打文は3 あたり12~13目と細かく鋭い。内面は円形の押圧痕を留める。珠洲編年（吉岡1994）I期に近似する。鉄製品（378）はベルトの留め具状の形態のものであるが、用途は不明である。時期的には、12世紀前半と考えられる。

S K 91土坑（図版70）

15~20グリッドに位置する。平面プランは長軸1.3m、短軸0.7mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは10 を測り、底面はほぼ平坦である。

遺物は白磁碗（380）の底部片がある。外面・底部はケズリ調整が施され、わずかに高台を作り出している。太宰府編年IV類と考えられる。時期的には12世紀後半と考えられる。

S K 133土坑（図版71）

18~20グリッドに位置する。一部は調査区外に掛かり未検出である。平面プランは長軸（1.1）m、短軸（0.6）mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは18 を測り、底面はほぼ平坦である。

遺物は、須恵器系陶器壺（381）の底部片がある。外表面はロクロナデ調整が施され、底部切り離しは静止系切りである。珠洲編年（吉岡1994）のI~II期と考えられる。時期的には、12世紀後半~13世紀前半と考えられる。

S K 786土坑（図版71）

12~13~14グリッドに位置する。平面プランは長軸1.3m、短軸0.6mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは13 を測る。底面はほぼ平坦である。

遺物は上師器壺が出土しているが、いずれも細片のため図化はできなかった。時期的には遺構の形状から平安時代末期とも考えられる。

S K 787土坑（図版71）

12~14グリッドに位置する。平面プランは長軸1.4m、短軸0.8mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは7 を測る。底面はほぼ平坦である。

遺物の出土はみられない。時期的には、遺構の形状から平安時代末期とも考えられる。

S P 132 (図版70)

18~20グリッドに位置する。平面プランは長軸40cm、短軸28cm の楕円形を呈する。確認面からの深さは25 を測る。

遺物は青磁碗 (382) がある。龍泉窯系 I 類と考えられる。時期的には12世紀と考えられる。

S P 167 (図版70)

18~19グリッドに位置する。平面プランは長軸30cm、短軸24 の楕円形を呈する。確認面からの深さは10 を測る。

遺物は、灰釉陶器壺 (383) がある。時期的には、平安時代前期と考えられる。

S P 279 (図版70)

13~17グリッドに位置する。平面プランは径28 の円形を呈する。確認面からの深さは30cm を測る。

遺物は須恵器壺 (384) がある。時期的には、平安時代前期と考えられる。

S P 530 (図版70)

16~19グリッドに位置する。平面プランは長軸75cm、短軸55 の楕円形を呈する。確認面からの深さは25 を測る。

遺物は、ロクロ成形のかわらけ (385) がある。底部は摩滅しているが、底部切り離しの回転糸切り痕がわずかに残る。時期的には12世紀が考えられる。

S P 645 (図版70)

11~14グリッドに位置する。平面プランは径60 の円形を呈する。確認面からの深さは30cm を測る。

遺物は、瓦質土器壺 (387) がある。時期的には、平安時代末期と考えられる。

(5) 井戸跡

井戸跡は1基検出している。平安時代末期の井戸跡と考えられる。

S E 79 (図版74 写真図版29)

11~12~17グリッドに位置する素掘の井戸である。掘方のプランは、径1.2mの円形を呈し、素掘の井戸 深さは検出面から0.8mを測る。周壁は平坦な底面から緩やかに外反して立ち上がる。覆土は暗褐色シルトを基調とした炭化物を含む層と、炭化物・焼土ブロックを基調とする層が交互に堆積している。細かくレンズ状に自然堆積した様子が見て取れる。至近にカマド状遺構があり、関連が想定される。

遺物は、覆土中からの出土で須恵器壺 (389)、白磁碗 (390)、砥石 (391) のがある。(389) は流れ込みと考えられる。(390) は太宰府編年碗 V 類で、時期的には12世紀と考えられる。

(6) 土坑墓

調査区南東部で検出されている。何れも小判形を呈し、確認面からの深さは浅い。明確に土坑墓と判断できるのは、骨片が確認できた S H 80 及び S H 103 の 2 基である。他に、分布する位

置や形状などから土坑墓と考えられるものも認められるが、明確な根拠がないため、ここでの詳しい記述は避ける。

S H 80 土坑墓（図版74）

10-17グリッドに位置する。平面プランは長軸1.6m、短軸0.7mの小判形を呈する。確認面からの深さは約5を測り、覆土は1層からなる。底面はほぼ平坦で、壁は確認できる範囲では緩やかに立ち上がっている。S H 103土坑墓同様に、長軸が座標北を示し、遺構内北側に骨片を検出した。S H 103土坑墓の約半分程の規模であるが、これもS H 103土坑墓同様、頭を北に向かっての伸展葬と考えられる。

伸 展 葬
遺構内からの遺物の出土はなかった。S H 103土坑墓同様、理化学分析の結果土坑墓であることが確認されている（付図参照）。時期的には、立地する場所等から考えて平安時代末期の遺構と考えられる。

S H 103 土坑墓（図版74 写真図版30）

8-17グリッドに位置する。平面プランは長軸1.7m、短軸0.7mの小判形を呈し、長軸はほぼ座標北を示す。確認面からの深さは約8を測り、覆土は1層である。確認面よりも上の層から掘り込まれていたと考えられる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺構底面の北側で、頭骨と考えられる骨片を検出したことから、頭を北に向けて埋葬された伸展葬と考えられる。また、埋葬された身体に沿うように長さ約32cmの小刀（392）が出土しており、副葬品として納められたものと考えられる。

副 葬 品
理化学分析の結果、周囲の地山と比較して、リン・カルシウムの含有率が高く、動物遺体が埋納されていることを裏付ける結果が出ている（付図参照）。時期的には、立地する場所等から考えて平安時代末期の遺構と考えられる。

（7）カマド状遺構

調査区の東南隅で検出されている。1基だけの検出である。時期的には、平安時代末期の遺構と考えられる。

S Q 106 カマド状遺構（図版75 写真図版30）

7-19グリッドに位置する。燃焼部の長軸1.6m、短軸1.2m、焚き口部の長軸3.2m、短軸1.5mを測る。確認面からの深さは燃焼部で50cm、焚き口部で60を測る。覆土は自然堆積である。燃焼部は掘り鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面より20上部から熱を受けていることが確認できる。底面から緩やかに立ち上がり、途中、堅く焼き締まった層が内壇して立ち上ることがあることから、天井が構築されていたことが推測される。また、断面図中36層が焼上ブロックの層であることからもこのことが裏付けられる。おそらく、燃焼部はドーム状を呈していたことが考えられる。焚き口部の壁は短軸方向で約70°で急に立ち上がるが、長軸方向は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、作業を行なうようにこのような形状をしていると考えられる。根城跡、境間館跡、米山（2）遺跡等、青森県内に多く類例が認められる、所謂カマド状遺構と考えられる。本県においては、高瀬山遺跡（S A）に類例を求められるが、検出例は非常に少ない。通常燃焼部の天井中央に、開口部が設置されているが、天井部が崩落して

いるため、断面の観察からは確認できない。また、燃焼部には煙道が併設されることが多いが、本造構では重機による掘削の段階から確認されなかった。開口部の周囲に穴を穿ち、空気の流れを確保していたものと考えられる。また、焚き口部の覆土から径4程の焼土壁塊と考えられるものが多数出土している。燃焼部の断面には、縮まりのない炭化物層が2層確認できる事などから判断して、燃焼部を作り直して使用した可能性がうかがえる。しかし、断面の観察や精査の過程ではそれを裏付ける事実は確認できなかった。遺物の出土がないことから機能を特定することはできないが、鍛冶造構、炊爨施設等などの施設と考えておきたい。時期的には、平安時代末期の造構と考えられる。

(8) 溝 跡

平安時代前期の溝跡が調査区東半で集中して検出されている。南北方向に伸びる溝跡は幅も広く、隣接する畝状の造構を切る。全体のプランは不明であるが確認面の傾斜に直交するよう伸びていることが共通の特徴といえよう。区画溝の可能性も窺えるが、調査区外に統一して区画溝することから、総合的な検討が必要である。以下、主な溝跡についてその概要を述べる。

S D 604溝跡（図版76）

16-16~17グリッドに位置する。幅は約40を測る。確認面からの深さは約22を測る。西から東方向に伸びている。覆土は自然堆積である。底は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は、須恵器長頸壺（393）がある。頸部内面には、口縁部接合に円盤閉塞をおこなった痕跡が確認できる。時期的には、9世紀代と考えられる。

S D 642溝跡（図版78 写真図版31）

10-14グリッドに位置する。幅50cmの三日月形を呈し、長さは約3mを測る。深さは15cm程度で、底面の中央部がほぼ平坦で壁は比較的緩やかに立ち上がる。覆土は1層で炭化物やシルト質の土壤がブロック状に斑に混じり、人為的に埋められたものと考えられる。

遺物は、須恵器壺（394）、土師器高台壺（395）、赤焼土器壺（396~398）がある。壺類はいずれも体部が内側に傾き、口縁部が外反する。（398）は底部切り離しは回転系切で身が深い。口縁部内面には油煙状の煤が付着している。時期的には、9世紀後半と考えられる。

S D 691溝跡（図版76・77 写真図版31）

6-11-16~19グリッドに位置する。西から東に7mほど伸びた後、南東方向に向きを変え調査区の南壁まで伸びている。南端は調査区外のため不明であるが、さらに南東方向に伸びているものと考えられる。幅は最大1.5mを測り、確認面からの深さは約20を測る。覆土は自然堆積である。底面は中央部がやや平坦で、南北両壁は緩やかに立ち上がる。S D 692溝跡を切る。本造構東方にあるS D 698は西から東に向かった後、北東方向に向きを変えて調査区北壁まで伸びており、ちょうど対称の位置にある。この2つの溝跡が同じ機能を持ち、同時に機能していたとも考えられる。

遺物は、須恵器高台壺、須恵器壺、土師器壺がある。須恵器高台壺（399）、須恵器壺（400）は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る。底部切り離しはハラ切りである。時期的には、8世紀後半と考えられる。

S D 692溝跡（図版76・77 写真図版31）

8~11~15~17グリッドに位置する。幅は約1.0mを測る。確認面からの深さは約15~20cmを測る。確認面の傾斜方向と直交するように南西から北東方向に延びている。覆土は自然堆積である。底はほぼ平坦で南北両壁とも緩やかに立ち上がる。本遺構東側には同様の溝跡が検出され、2つの遺構の間に開口部が認められることから、集落とその他の区域との区画する溝の可能性も考えられる。S T 662竪穴住居跡と S D 691溝跡に切られる。

遺物は須恵器高台壠（402）、須恵器壠（403）がある。いずれも口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈する。体部は丸みをもって立ち上がり口縁部に至る。底部切り離しはヘラ切りである。時期的には、8世紀後半が考えられる。

S D 698溝跡（図版76・77 写真図版29）

12~18~15~20グリッドに位置する。確認面からの深さは、約20cmを測る。底面中央部はやや平坦で、東西両壁とも緩やかに立ち上がる。最大幅は約1mを測り、西方から東方にかけて延び、北方にいくに従って幅を狭めていく。北壁の観察から確認面の上の層から掘り込まれている様子が見て取れ、実際の幅は約1.5mほどであったことがうかがえた。S D 699溝跡を切る。

遺物は、須恵器壠、土師器壠がある。須恵器壠（404）は底部資料で、底部切り離しはヘラ切りである。土師器壠（405）は底部に木葉痕が認められる。時期的には、8世紀後半～9世紀前半が考えられる。

S D 699溝跡（図版76・77 写真図版29）

13~14~17グリッドから北東方向に延びている。S D 698溝跡に切られるため、全体のプランは不明である。幅は約50cm、確認面からの深さは約10cmを測る。壁は比較的急に立ち上がる。

遺物は須恵器高台壠（406）、土師器壠（407）がある。須恵器高台壠は底径が大きく、底部切り離しはヘラ切りである。時期的には、8世紀後半が考えられる。

S D 703溝跡（図版78 写真図版31）

15~16~13グリッドに位置する。S T 23竪穴住居跡に北側を切られているため全体のプランは不明であるが、幅40cmで直径3.2m程の円形を呈していたと考えられる。覆土は自然堆積である。内側の壁が緩やかに立ち上がる。対岸の川前2遺跡等でも類例が認められているが、用途は不明である。

遺物は、遺構覆土より須恵器や土師器の破片が出土しているが、図化できるものはなかった。時期的には重複関係などから9世紀頃と考えられる。

歛立溝（9）歛状遺構（図版77 写真図版29・30）

調査区東半に集中して検出されている。歛立溝と考えられる平行する浅い溝で、竪穴住居跡の東側の傾斜面及び低地で確認されている。大別すると調査区南部の遺構群、調査区中央部の遺構群、調査区北部の遺構群に分けることができる。規模や密度などにはばらつきがあるものの、東西方向に地形の傾斜に対応するように存在すること、何本かの歛が平行に位置することなど共通点が多い。南東方向と東西方向に延びる2方向の歛跡が確認でき、幾時期かの時期差が考えられる。長さは3.0m～11.0m、歛間はおおむね1.0mを測る。幅は30cm前後、深さ10cm前後

後を測る。壁は緩やかに立ち上がる。

各々の溝跡は覆土が似通っており、切り合いは判別できなかった。時期を判断できる遺物の出土はみられない。平安時代前期の遺構と考えられる。

(10) 性格不明遺構

S X 83 (図版78)

16~20グリッドに位置する。平面プランは長軸1.5m、短軸0.8mの溝の形状を呈する。東側が調査区外のため全体のプランは不明である。確認面からの深さは約20cmを測る。

遺物は須恵器系陶器壺(408)がある。珠洲編年(吉岡1994)のⅠ期と考えられる。時期は12世紀後半が考えられる。

S X 701 (図版78)

18~20グリッドに位置する。平面プランは長軸2.4m、短軸1.4mの楕円形を呈する。東側が調査区外に掛かり、全体のプランは不明である。確認面からの深さは約40cmを測る。

遺物は須恵器系陶器壺(409)がある。珠洲編年(吉岡1994)のⅠ期と考えられる。内外面口クロナデ、底部切り離しは静止系切りである。時期的には12世紀後半が考えられる。

S X 710 (図版74)

15~17グリッドに位置する。平面プランは長軸3.6m、短軸1.8mの楕円形を呈する。平安時代前期の遺構検出面の下で確認された。確認面からの深さは18cmを測る。

遺物は、土師器壺(410~412)がある。すべて口縁部の破片資料である。有段口縁の口縁部は、わずかに内側に受口状を呈している。摩滅のため調整等は判然としない。古墳時代前期末葉の遺物と考えられる。

2 遺 物

出土した遺物はコンテナにして82箱である。遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器・陶磁器・鉄製品・石製品などで、土器類の出土割合が最も多い。器種は壺・高台壺・双耳壺・盤・皿・鉢・壺・壺・壺・台付壺・壺などがあつた。以下時期別・種別ごとに概要を述べる。

(1) 古墳時代の遺物

遺物は平安時代前期の遺構検出面の下で確認されたS X710からの出土に限られる。

すべて壺の口縁部の破片資料である。有段口縁の口縁部は、わずかに内唇し受口状を呈している。摩滅のため調整等は判然としないが、口縁部の形態などから古墳時代前期末葉の所産とみられる。

(2) 奈良・平安時代前期の遺物

遺物は土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品・石製品で、堅穴住居跡を中心に出土している。時期はおおよそ8世紀前半から10世紀初頭にかけてのもので、年代的な指標となる一括資料も含まれている。ここでは、堅穴住居跡出土の資料を対象に器形や製作技法などから、時期的な変遷について分類・概観する。

須恵器

壺

壺を無台（A類）と、有台（B類）とに分けた。以下、A類を壺、B類を高台壺と呼称する。

A 1類 器形が箱形や逆台形を呈し、底径指数（底径÷口径×100）は60～70、器高指数（器高÷口径×100）は20～25前後のものである。底部切り離しはヘラ切りが主体である。切り離し後にヘラケズリ調整が施されるものもある。

A 2類 器形が箱形や逆台形を呈し、底径指数はA 1類と同じであるが、器高指数が30前後でやや身が深く、小振りのもの。底部切り離しはヘラ切りが主体である。

A 3類 A 1類に較べ底部径がやや小さくなる。底径指数は50前後、器高指数は25～30前後である。底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りのものが認められる。体部は直線的に開く。

A 4類 やや碗状になり、底径指数は35～45前後、器高指数は30前後のものである。底径がA 2類よりさらに小さくなる。口縁端部を小さく外反させる。底部切り離しは回転糸切りによるものが主体である。わずかにヘラ切りが認められる。

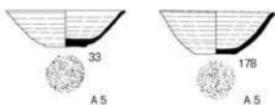
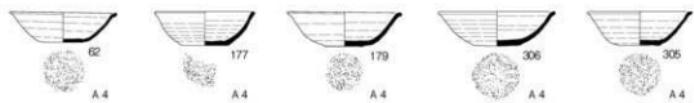
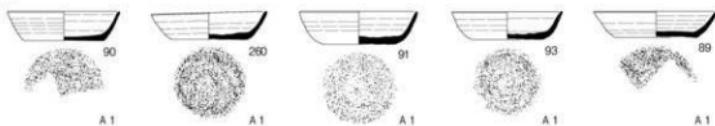
A 5類 身は深い碗状を呈する。底径がA 3類よりさらに小さくなり、底径指数は35前後、器高指数は30～35前後のものである。底部切り離しは回転糸切りである。

B 1類 体部の形態は壺A 1類に類似している。底部切り離しはヘラ切りである。

B 2類 体部の形態はB 1類より小型のもので、底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りのものが認められる。

B 3類 身は深い碗状を呈する。底径がB 2類よりさらに小さくなる。底部切り離しは回転糸切りである。

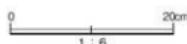
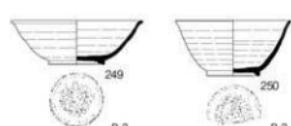
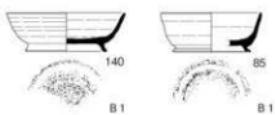
环



器



高台环



(測定器)

第16図 遺物分類図(1)

蓋 破片資料もあり、細分は行わなかった。天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。

口縁部は垂直のものとわずかに内傾するものが認められる。つまりは崩れた擬宝珠状を呈する。

双耳坏

1点のみの資料である。身が深く小型のものである。底部切り離しはヘラ切りである。

把手はほぼ体部中央に取り付く。

盤 底部資料のため、全体の形状は不明である。底部切り離しはヘラ切りである。

皿 1点のみの資料である。体部は立ち上がりから口縁部にかけて直線的にのびる。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

鉢

A類 口縁部が受け口状を呈する。

B類 体部が直線的に開き、口縁部でやや外傾する。

壺 頭部長により、長頸壺（A類）と短頸壺（B類）とに分類する。

A 1類 口縁部のみの資料。口縁部が緩やかに広がる。

A 2類 体部のみの資料。下半にケズリが施される。

B 1類 なで形の肩部をもち、口縁部が外反する。体部中程に最大径をもつとおもわれる。口縁部が外反する。

B 2類 体部下半の資料。外面ケズリ、内面ハケメが施される。

甌

A類 外反する口縁部。内外面ロクロナデが施される。

B類 最大径を体部上半にもつ。外面平行タタキ、内面同心円文アテが施される。

C類 体部破片資料。外面平行タタキ、内面平行アテが施される。

D類 体部破片資料。外面格子状タタキ、内面同心円文アテが施される。

土師器 非ロクロ成形で、ハケメ調整がみとめられるもの、黒色処理などがなされたものを

土師器とする。

坏

A類 非ロクロ成形のもの

A 1類 体部が内擣し、短い口縁部が直立する。関東地方の系譜と考えられる。

A 2類 体部が碗形を呈し、外面にヘラナデ調整が施される。関東地方の系譜と考えられる。

B類 内面黒色処理が施される無台のもの。

B 1類 非ロクロ成形の坏で体部が碗状を呈する。底部に薙痕。

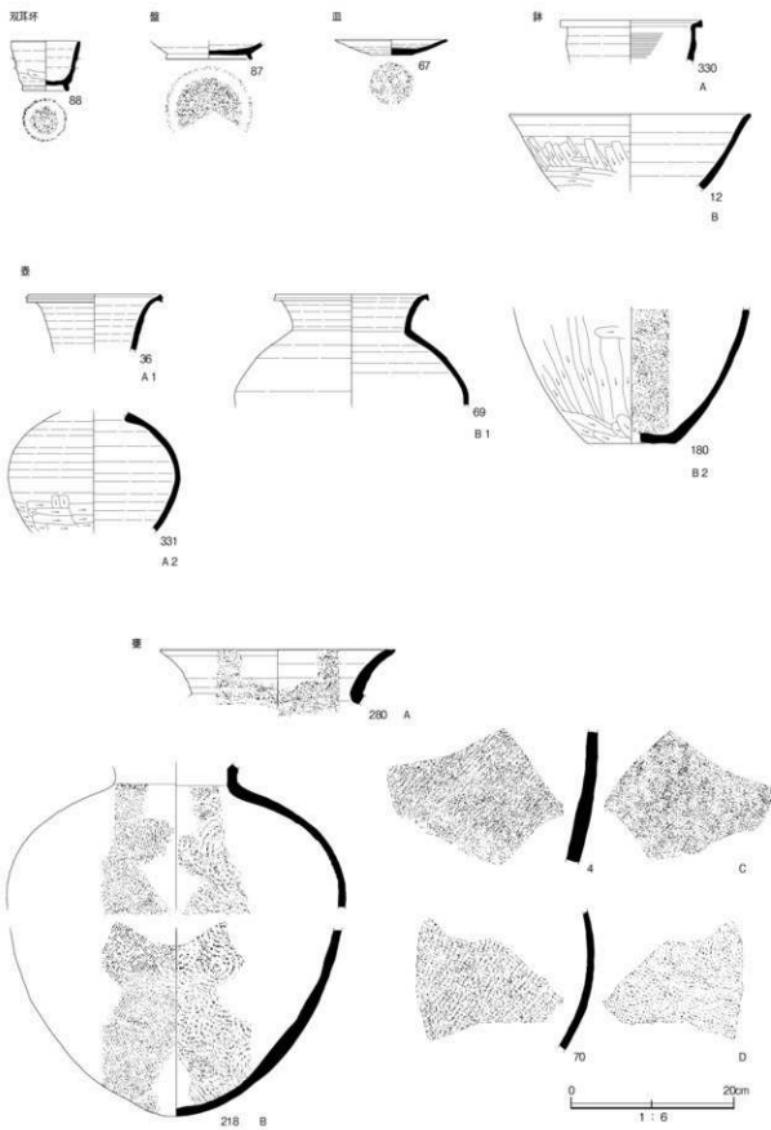
B 2類 ロクロ成形の坏で、体部が碗状を呈する。底部切り離しは回転糸切。

B 3類 ロクロ成形の坏で口縁部が外反する。底部切り離しは回転糸切。

C類 ロクロ成形で内面黒色処理が施され高台を有するもの。

C 1類 身が浅く疑似高台を有するもの。

C 2類 高台がやや低いもの。



(遺構)

第17図 遺物分類図（2）

C 3 類 高台が高く身の深いもの。

皿

内面黒色処理され底部切り離しは回転糸切りのもの。施釉陶器模倣と考えられる。

柄香炉形土器

内外面黒色処理され、体部側面の一部、厚く作り出した部分に穿孔がされているもので、

柄の付く形態と考えられる。金属器の模倣と考えられ、仏具の可能性も考えられる。

甕

大形甕 (口径20 以上、器高30 以上のもの)

A 類 球胴形で、体部最大径を下半部にもつもの。口縁部は外反し、底部はやや突出する。

B 類 長胴形で、最大径を体部上半にもち口縁部は大きく外反する。

B 1 類 外面ケズリ、内面ハケメが施される。輪積痕が残る。

B 2 類 外面全体にケズリ、内面ヘラナデ、輪積痕が残る。

B 3 類 内外面ハケメ、底面に木葉痕が認められる。

B 4 類 内外面ハケメ、頸部と体部の境に段が認められる。

C 類 口縁部を横に引き出すように外反させるもの。

D 類 外傾する口縁部を有し、体部が緩く膨らむもの。

D 1 類 口縁端部に面をもつもの。

D 2 類 口縁端部を丸くおさめるもの。

E 類 体部に膨らみをもたないもの。バケツ形を呈する。

小形甕 (口径20 未満、器高30 未満のもの)

全形が窓えないものがほとんどのため、口縁部・底部の形態で分類する。

A 類 口縁部が外反し、端部を丸くおさめるもの。

B 類 口縁部が外反し、口縁端部に面をつくるもの。頸部と体部の境に段が認められる。

C 類 口縁部が外傾し、端部を丸くおさめるもの。

D 類 口縁部が外傾し、厚みをもつもの。

E 類 口縁部が短く外反するもの。鉢形に近いものもみられる。

F 類 口縁部が直立気味に外傾するもの。

G 類 口縁部が短く、小さく外反し、端部に面をもつもの。

H 類 口縁部がほぼ直立するもの。I類と共に容量の小さいものである。

I 類 口縁部が短く外反するもの。

J 類 「ハ」の字に聞く台を有する。台付甕。

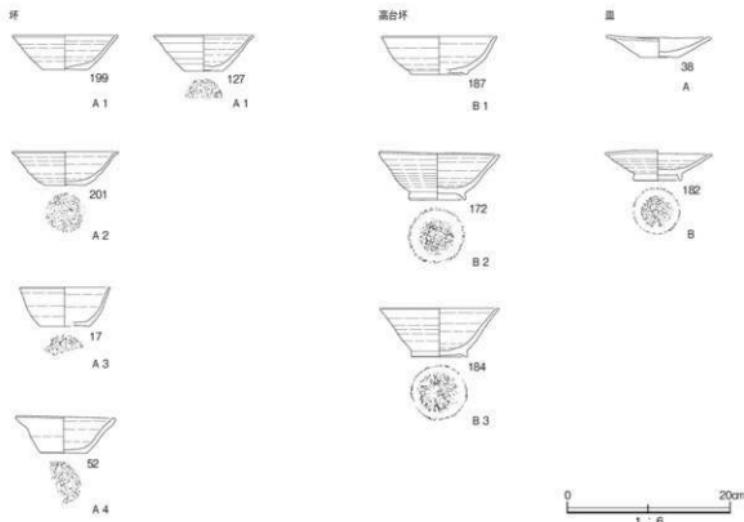
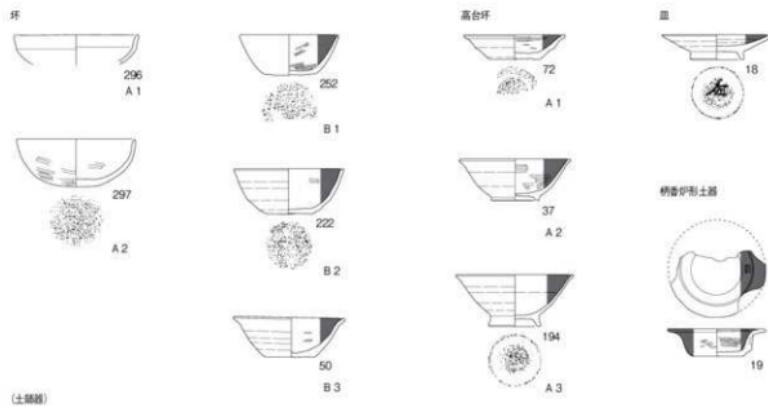
赤焼土器 酸化焰焼成で、成・整形の段階でロクロを使用したと認められるものを赤焼土器とした。

坪 無台のもの (A 類)、有台のもの (B 類) とに分けた。

A 1 類 体部が直線的に口縁部に至る。

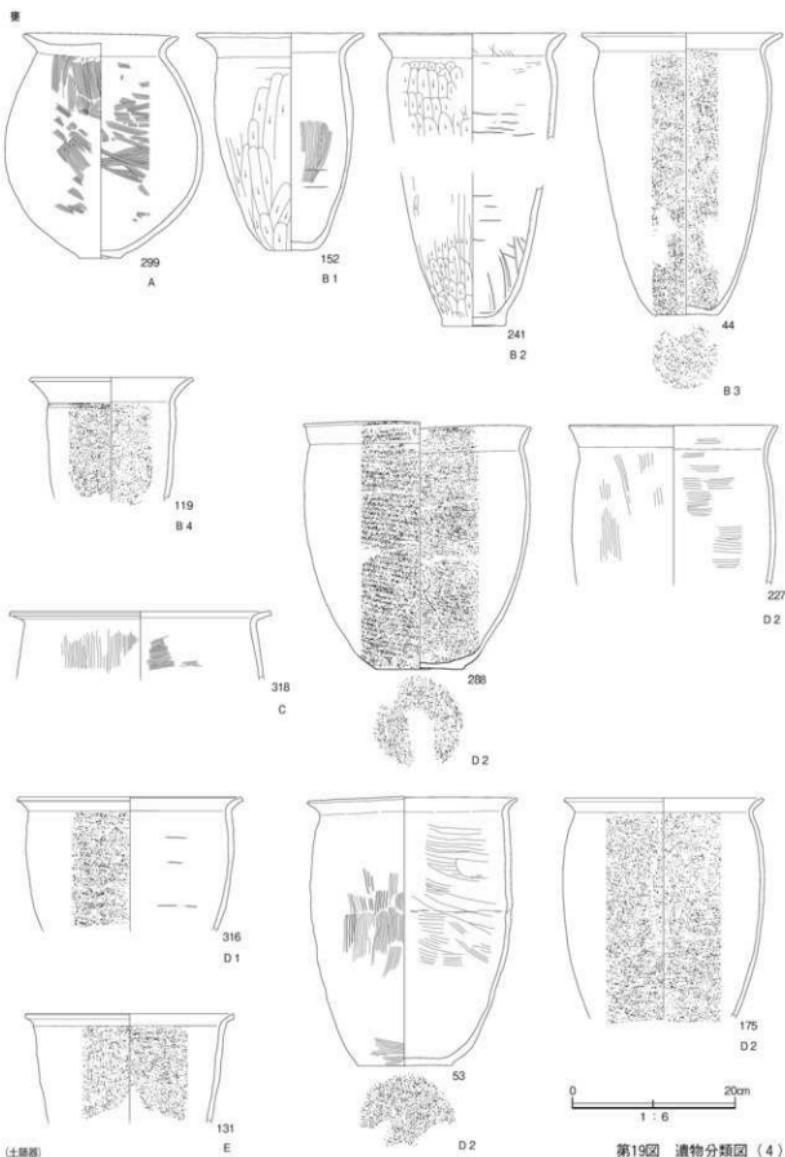
A 2 類 体部下半でわずかに膨らみ口縁端部が外反する。ロクロ目が顯著。

A 3 類 体部から口縁部にかけて内擱する。



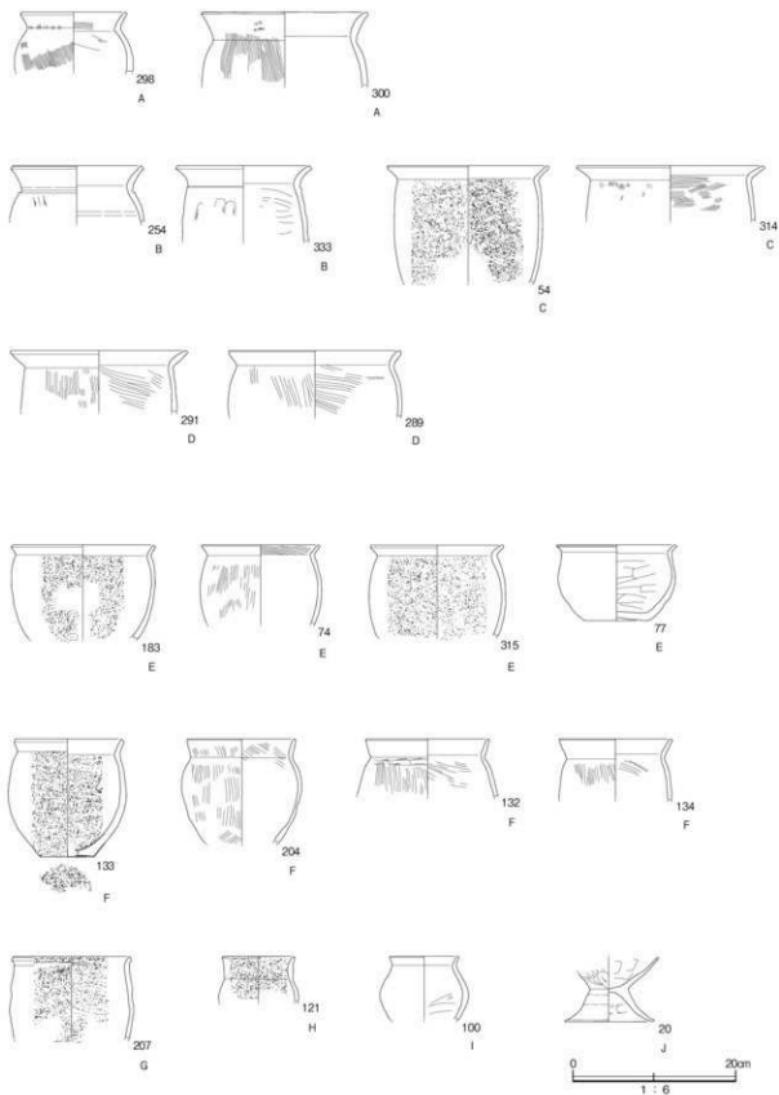
(赤绘土器)

第18図 遺物分類図（3）



第19図 遺物分類図(4)

小形器



(土器部)

第20図 遺物分類図（5）

A 4 類 全体に肉厚で体部上半から口縁部まで外反する。

B 1 類 体部下半が緩くたちあがり、中程から内擣して口縁部に至る。

B 2 類 体部が直線的に外傾する。

B 3 類 B 2 と似るが口縁部で外反する。

皿

A 類 無台で直線的に口縁部に至る。

B 類 高台を有し、口縁端部でわずかに外反する。施釉陶器模倣と考えられる。

甕

大形甕 (口径20 以上、器高30 以上のもの)

A 類 体部内外面とも上半がロクロナデ、外面の下半にケズリ、内面にハケメが施される。

底部は丸底を呈し、成形は粘土板を使った閉塞成形によるものと考えられる。

A 1 類 口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。タタキ痕が残る。

A 2 類 口縁部が外反し、口縁端部に面をつくる。タタキ痕が残るものもある。

B 類 口縁部が大きく外反し、端部に面をつくる。体部が丸みをもつ。体部内外面ともロクロナデが施される。

C 類 体部内外面とも上半がロクロナデ、外面の下半にケズリ、内面にハケメ・ヘラナデが施される。底部は平底である。

C 1 類 体部内外面とも上半がロクロナデ、外面の下半にケズリ、内面下半にヘラナデが施される。

C 2 類 体部外面上半にロクロナデ、体部外面にケズリが認められる。内面にカキメが施される。上半にタタキ痕が残る。

C 3 類 体部内外面とも上半がロクロナデ、外面の下半にケズリ、内面にカキメが施される。底部の際にタタキ痕が残る。

D 類 口縁部が外傾し、端部が下方につまみ出される。

E 類 口縁端部をわずかに上方につまみ出すもの。

F 類 口縁部が直立気味に外傾する。端部を丸くおさめる。

G 類 体部最大径を中程にもち、外傾する口縁部の外側が膨らみをもつ。

小形甕 (口径20cm未満、器高30cm未満のもの)

A 類 口縁部が外傾し、端部に面をもつ。

B 類 口縁部が外傾し、端部を薄くまるめる。

C 類 口縁端部がつまみだされるものを一括する。

C 1 類 口縁部内面が受口状を呈するもの。端部を丸くおさめる。

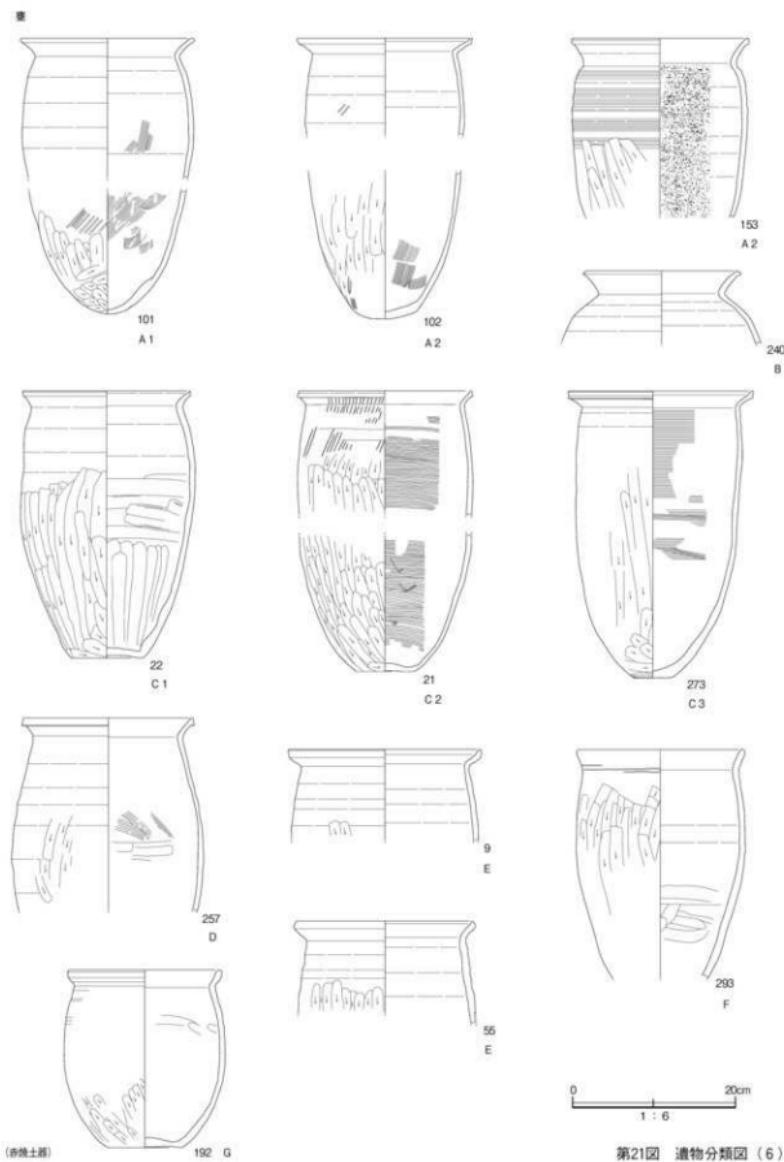
C 2 類 口縁端部は小さくつまみだされ、尖る。

壠

A 類 口縁部は外傾し、端部に面をつくる。底部は丸みをもつ平底である。内外面体部にカキメ、外面にタタキの痕跡を留める。内面はカキメ、ハケメの調整が認められる。

B 類 口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。内外面カキメ調整が施される。

C 類 口縁部は外反し、端部はつまみだされる。外面にロクロナデ、ケズリ、内面にロク



第21図 遺物分類図（6）

(赤燒土器)

ロナデ、ヘラナデの調整が施される。把手の付く形態である。

D類 口縁部は外傾し、端部に面をつくる。外面をロクロ、ケズリ、内面にカキメ調整が施される。

D1類 外面にタタキの痕跡を留める。

D2類 体部が膨らみをもたず、口縁部が厚みをもつ。

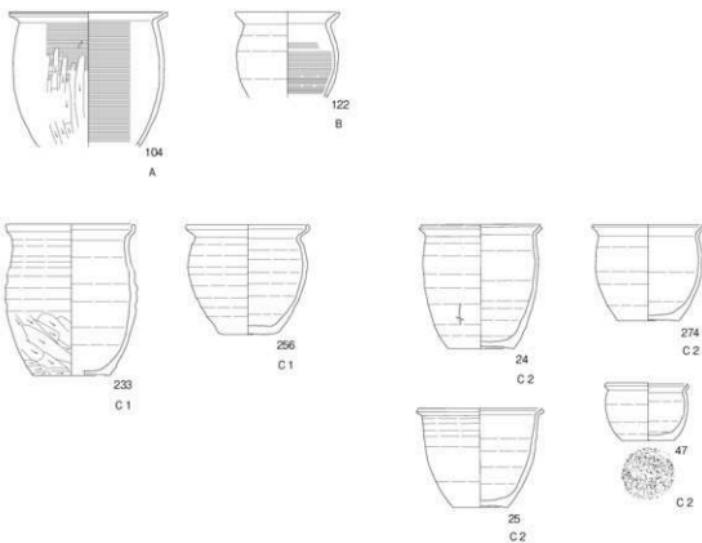
(3) 平安時代末期の遺物

平安時代末期の遺物はすべて土坑からの出土である。かわらけ、須恵器系陶器のほか、青磁・白磁などの輸入陶磁器がみられる。かわらけはロクロ成形によるものである。須恵器系陶器は壺、壷、片口鉢で珠洲編年(吉岡1994)I期のものである。青磁碗(382)は龍泉窯系I~I期に比定される。青磁碗(426)は同安窯系のものと考えられる。白磁碗(380)は太宰府編年碗IV期に、(390・427)は太宰府編年碗V期に比定される。いずれも主体時期は12世紀後半に所属する。

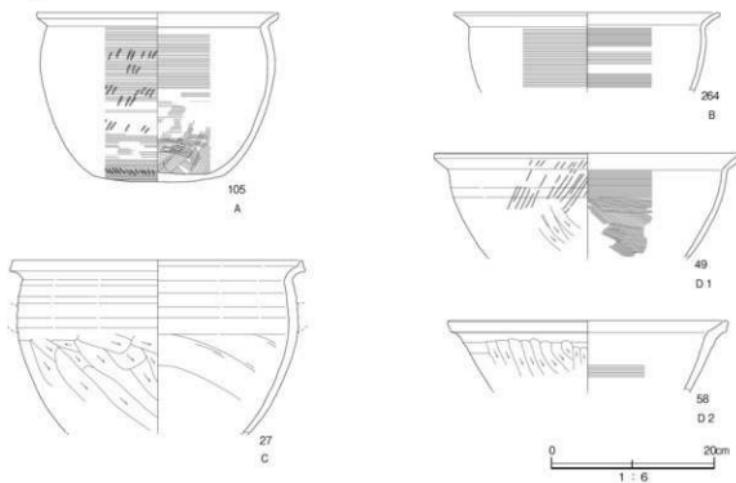
(4) 遺構外の遺物

遺構外遺物として、須恵器蓋(413・414)、須恵器坏(415・416)、須恵器蓋カ(417)、須恵器壺(418)、須恵器長颈壺(419)、須恵器壺(420)、土師器坏(421)、土師器鉢(422)、土師器壺(423)、土師器壺(424)、かわらけ(425)、青磁碗(426)、白磁碗(427)、刀子(428)がある。須恵器蓋(413)は天井部が回転糸切り後無調整で、つまみをもたないものである。須恵器蓋(414)は内面に摩滅痕が認められ、転用鏡と考えられる。(424)は外面黒色処理されるもので、(387)と同一個体とも考えられる。(425)はロクロ成形のものである。(426)は同安窯系と考えられる。口縁端部の一部と、外面下半が無釉となる。時期的には、12世紀と考えられる。(427)は太宰府編年のV類かⅥ類と考えられる。時期的には、12世紀と考えられる。

小形甌



甌



(赤燒土器)

第22図 遺物分類図 (7)

3 遺構の変遷

調査の結果、奈良～平安時代前期の遺構では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、畝状遺構が、平安時代末期では掘立柱建物跡、土坑墓、カマド状遺構、井戸跡などが検出された。

奈良～平安時代前期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、調査区西半の自然堤防上に集中する。そのなかでも、竪穴住居跡はほぼ全城に分布するが、掘立柱建物跡は北側に集中してみられ、分布に偏りがある。竪穴住居の形態は、方形を主体とし、一部長方形が認められる。規模は、床面積が約10坪以上の大型住居（S T26・27）、4坪以上10坪未満の中型住居（S T3・13・23・34・35・36・43・44・46・50・54・660・662・674）、4坪未満の小型住居（S T7・28・37・38・39・40・643）に三分することができる。大型のものは方形に近いプランをもち、中・小型は方形・長方形が混在する。また、時期の降る9世紀末～10世紀にかけては小型化する傾向が窺えた。主柱穴は大型の竪穴住居跡S T27が4隅に有するのに限られ、その他は2本以下かまったく認められなかった。カマドはS T7以外の住居にはすべて設けられている。カマドの位置は、南北棟の竪穴住居跡は南壁に、東西棟の竪穴住居跡は東壁に多く設置されている傾向が見受けられた。北壁に位置するものもわずかに認められるが、西壁にはまったく設置されていない。各棟の中央に位置することはほとんどなく、住居のコーナー近くに偏って位置することが多い。カマドの位置については、風向きを考慮したものか、または方位に関する何らかの考え方があったものと考えられる。

構築はおもに粘土を用いて設けられるものが多く、袖芯材として、川原石や、甕を転用したものが認められた。平安時代前期に所属する井戸跡は検出されなかった。

掘立柱建物跡は調査区北側に3棟検出されている。建物の構造は、側柱建物、総柱建物が認められる。主軸方向はすべて南北棟である。 2×2 間の側柱建物（S B545）と倉庫と考えられる 2×3 間の総柱建物（S B551）の2棟が検出された。2棟は柱穴の切り合いは認められないものの、プランが重複しており、時期差のあることが考えられる。規模は面積が $15m^2$ 前後の小型のものと、約 $30m^2$ の比較的大型のものとが認められる。S B597はS T54の廃絶後に構築されている。掘立柱建物跡は竪穴住居跡に較べ検出棟数が少なく、セット関係を有する竪穴住居跡の付属的な役割をもつ建物であったことも考えられる。

平安末期に所属する可能性のあるものは7棟である。自然堤防の東側の低地の広い範囲に分散して位置している。建物の構造は側柱建物が6棟、側柱建物の二面に庇が付くものが1棟である。掘立柱建物跡の主軸方向は南北棟・東西棟に大別される。南北棟（S B112・S B418）、東西棟（S B204・417・788・641）があり、主軸方向の違いから時期差があるものと考えられる。中小規模の側柱建物は梁間が1間のもので面積は $20m^2$ 前後のものが主体をなしている。S B204は側柱建物に二面に庇をもつ大型の建物である。確認できた範囲では、身舎が梁行2間、桁行5間の規模をもつ。

12世紀における庇を持つ掘立柱建物として、東北では奥州平泉関連の建築物が想起される。平泉遺跡群においては、内部地区の中心建物群において「四面庇」という形態が固定的に使われており、「側柱四面庇」建物跡は、平泉の建物跡の大きな特徴として捉えられている。

12世紀平泉における庇付き建物の源流は、都城及びその建築形態を持ち込んだと見られる官

術遺跡などにあると見られており、この庇付き建物の在り方は、用途においても、12世紀平泉とそれ以前の在地の建物文化の違いを表していると見られている。

S B204掘立柱建物跡は、平泉建物跡の大きな特徴である四面庇建物跡と同時期にある。また、S B204掘立柱建物跡は、本遺跡の同時期の建物と比較すると規模も大きく、西面及び北面に庇を持つという特徴があり、平泉の建物跡との関連性も考えられる。これらのことからS B204掘立柱建物跡は、その用途において、当時、何らかの重要な役割を果たしていた中心的な施設であったことが考えられる。

柵列か屏列と考えられる S A862・863、S A864・865柱列跡は、S B204の南側に近接し軸線が近似することから同時期に機能し、S B204に付随していたことも考えられる。しかし、建物同士の切り合いや、時期を判断する遺物の出土がみられないため、建物の新旧関係は不明である。

カマド状造構は一基検出された。遺物の出土がなく機能を特定することはできないが、鍛冶造構、炊爨施設などの機能も考えられる。カマド状造構は東北北部に多くの類例が検出されており、それらの影響を強く受けていることが窺える。

掘立柱建物跡は土坑群・土坑墓・カマド状造構との重複が見られる。土坑墓 S H80・S H103は北東の屋敷地との関連も想定されるが、掘立柱建物が廃棄されてから後、東半の区域一帯が墓域となっていた可能性も考えられる。

井戸はS E79が検出されている。覆土が多量の炭・焼土塊で占められており、カマド状造構との関連が想定される。

以下、竪穴住居跡出土の供膳形態の土器を指標にして、奈良・平安時代前期の造構をⅠ期～V期に、平安時代末期をVI期に大別する。

I 期

S T660出土の資料がある。非ロクロ成形の土師器壺（A 1類）は関東の真間式の技法・形態をとるものと考えられる。共伴する土師器壺（大形A類）は球胴形で、体部最大径を中程より下にもつ下膨らみの形態のものである。須恵器壺の出土はみられない。

II 期

S T27・S T28・S T35・S T50出土の資料がある。須恵器壺（A 1類）は口径・底径が大きく、身も深い箱形を呈し、底部はすべてヘラ切りが施される。土師器壺は非ロクロで内面黒色処理が施される。土師器壺は（大形壺B類）（小形壺B類）、赤焼壺は（大形壺A・B類）、（小形壺A・B類）が認められる。土師器壺は頭部外面に段をもつもの（B 4）がみられる。赤焼土器壺A類はロクロ技法やタタキ技法を用いてつくられた丸底長胴壺で「北陸系型壺」に近似する。

III 期

S T3・7・23・44・54・643・674の資料がある。須恵器壺は（A 2・A 3類）で前期より、口径が小さくなり、底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りが認められる。須恵器壺が供膳形態の主体を占める。土師器壺は（大形壺B類）（小形壺C・E・F類）、赤焼壺は（大形壺C類）、（小形壺C類）が認められる。土師器壺は（大形壺B類）は胴部上半に張りをもつものが多い。赤焼土器壺（大形壺E類）はロクロ技法やタタキ技法を用いてつくられた平底長胴壺で、北陸

的要素は散見されるものの「陸奥型壺」の様相を呈している。「武藏型」の台付壺や、金属器模倣の柄香炉型土器の出土も認められる。

IV 期

S T 1・2・13・25・26・36・37・38・40・43・46・658・662出土の資料がある。須恵器壺は（A 4類）でやや碗状になり。底径がA 2類よりさらに小さくなる。IV期後半には、供膳形態では、須恵器壺（A 5類）のように身が深く碗状のものがわずかに認められるが、土師器・須恵器壺が減少し、ほとんどが赤焼土器壺で占められる。底部切り離しは回転糸切りによるものが主体である。また、土師器皿に施釉陶器模倣のものがみられる。土師器壺は（大形壺C・D類）（小形壺C・D・E・F類）が認められる。土師器壺は（大形壺D類）は口径に対する器高の割合が小さくなり、やや、寸胴系形となる。赤焼土器壺は（大形壺D・E・F類）、（小形壺C類）が認められる。ロクロ調整の壺にみられたカキメやタタキメは認められない。口縁端部を上方や下方に引きだし口縁帯をつくりだすものがみられる

V 期

S T 34・39出土の資料がある。須恵器が減少し、供膳形態では赤焼土器が主体となる。赤焼土器壺は（A 4類）で身が深くロクロ目の凹凸の目立つものが多い。土師器壺は（大形壺E類）（小形壺F類）、赤焼壺は（大形壺G類）、（小形壺C類）が認められる。赤焼土器壺は寸胴形となり、口縁部の端部のつくりだしが簡素化する傾向がうかがえる。

VI 期

平安末期の遺物は土坑出土の資料に限られる。かわらけ、青磁、白磁、須恵器系陶器などがある。かわらけはすべてロクロ成形のものである。青磁・白磁碗は破片資料である。

これまでの内容をまとめると概ね次のようになる。

I 期（8世紀前半）

II 期（8世紀後半）

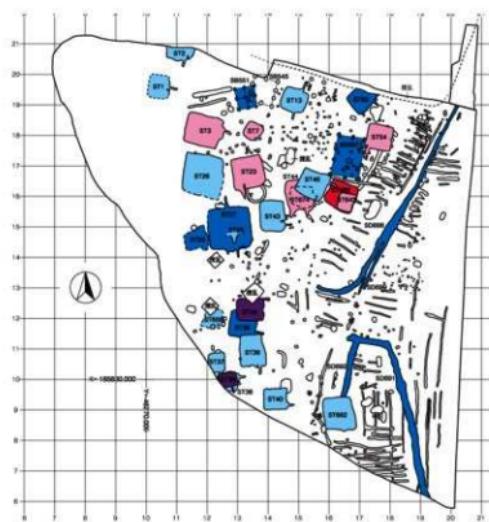
III 期（9世紀前半）

IV 期（9世紀後半）

V 期（10世紀前半）

VI 期（12世紀後半）

堅穴住居跡の帰属時期は、8世紀～10世紀初頭のおおよそ2世紀の時期に収まると考えられる。堅穴住居跡は8世紀においては、調査区の北側の区域にわずかに分布するのに対して、9世紀前半では分布が北側の区域だけでなく全体に増加傾向を示して広がり、9世紀後半では最多となる。9世紀末葉から10世紀にかけては分布の範囲は南側に移動する。しかし、10世紀前半には明らかに棟数が激減し、それ以降の遺構は認められない。以上のことから、8世紀に開始した集落は10世紀前半には一旦廃絶し、12世紀後半に掘立柱建物を中心として、再び営まれたことになる。



第23図 遺構変遷図

上敷免跡の集落の時期変遷を概観すると、8世紀前半に堅穴住居を主体に成立し、8世紀～9世紀にかけて継続して營まれ、10世紀前半には衰退して廃絶していくという様相を窺うことができる。8世紀という時期に着目するならば、律令体制との関連でとらえることができ、それは律令体制が崩壊するとされる9世紀末から10世紀に、上敷免の集落が一旦廃絶することとも符合するといえる。官衙遺跡は8世紀前半に成立し、9世紀後半以降衰退していく動向とも関連しており、その動向を裏付けるように、本遺跡の発掘調査において10世紀前半以降の遺構は確認できない。集落は一旦廃絶したあと、平安末期12世紀後半に再び營まれたことがわかる。

本遺跡の歴史的背景を見ると、本遺跡は山形市北部大郷地区にあり、須川と白川（馬見ヶ崎川下流）が合流する手前の沖積地帯に形成された成安集落にある。上敷免は、須川沿いの原野で強酸性の土地であり、耕地には不向きで税等級は低かったためにその名が起きたと伝えられている。『地名語源辞典』には、「上敷免」について、「雜色免のなまりの当て字。雜色とは雜役夫を意味した古語。官職により定められた色がないため、雜食の服を着たことからである。免とは免税地の意。雜色の費用に当てるために免税となった土地を雜色免といった。」とある。遺跡は、その那可郷に属していたと比定されている。

上敷免は、川岸の土が重粘土層で非常に堅く、舟荷の積み出しに適した地である。須川に接する上敷免には「米出場」と呼ばれた舟着き場があって、江戸時代には成安地内を通って、この「米出場」から上納米を積み出していた。上敷免は、内陸河川を拠り所とした交通や物流の要衝としての機能を兼ね備えている場所である。

本遺跡の東、成安地内の白川右岸に三条の目という集落があり、周辺の田園で長地式坪割による条里跡がみられる。関連地名として「三条目、一の坪」があり、本遺跡周辺において、律令期にはすでに水田耕作が行われていたことがわかる。

関東系土器 奈良時代の遺構では、堅穴住居跡が5棟検出され、関東系土器（土師器壺）が出土した。関東の土器形式で真間式に相当し、時期は8世紀前半と考えられる。

律令期には、坂東諸国から陸奥国及び出羽国への権戸の移配が何度も行われたが、それに伴って権戸が携えてきた関東系土器等が、東北に広く分布するようになったと考えられる。このことから、本遺跡から出土した関東系土器（土師器壺）は、権戸の移配に関連するものとも考えられる。

『倭名類聚抄』に、最上郡の郷の地名が記されているが、その中に那可と呼ぶ郷名があり、現在の中野を含む近郷一帯の呼称であるといわれる。また、那可是最上郡の中央、馬見ヶ崎川と須川の交わる地点にあり、内陸河川を拠り所とした交通や物流の要衝であったといわれる。

本遺跡南東には、今塚遺跡があり、平成5年の緊急発掘調査の結果、「仁寿三年（835）六月三日」を記す木簡が出土している。木簡には古代の役所が兵士に支給した米の量、食料の支給請求に関する内容がある。また、墨書き器も多数出土し、「調所」「書生」等の文字資料もあることから、9世紀初期には、本遺跡一帯は、役所的な機能をそなえた地域組織が確立していたことが窺える。

奈良～平安時代を通して中央政府の支配が確立している出羽国南部では、早い時期から莊園が成立した。これらの多くは皇室や藤原摂関家の莊園であり、在地の開発土豪による寄進地系

の莊園であった。

本遺跡は、八条院の皇室領であった成生莊・大山莊、摂関家領であった大曾禰莊、莊園領主が明確でない山辺莊などが接する位置に所在しており、本遺跡が所在する須川東部一帯は、大山莊に属すると推定されている。

「古今和歌集」東歌に最上川の船舟の和歌が詠まれており、莊園から生産された米が最上川などの内陸河川を通して流通していたことから、周辺が莊園によって囲まれた本遺跡も、米などの積み出し場として、流通の拠点的性格を持つことが考えられる。

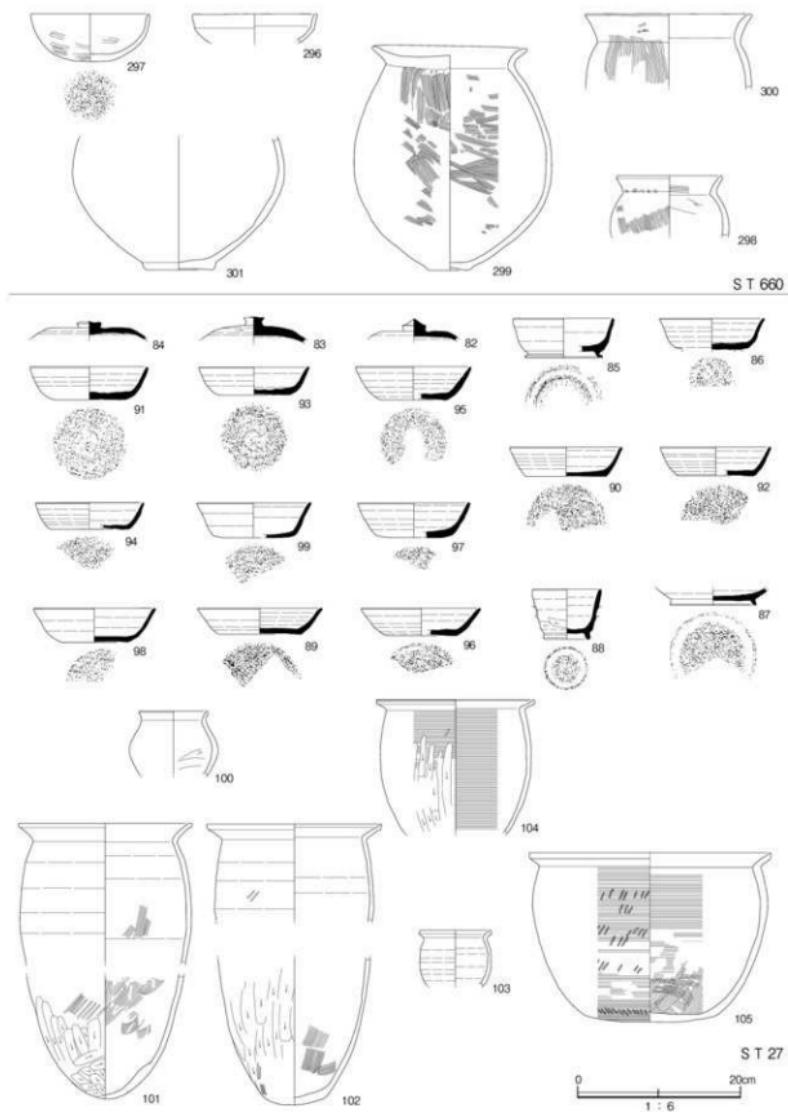
奥州藤原氏は、全奥州を統一的に支配する中で、これまでの在地領主に取って代わり、莊園の現地管理者となって莊園にも介在するようになった。奥州藤原氏は、陸奥出羽押領使として、出羽国の庄園も管理する立場にもあった。そして、領家たる摂関家の奥州莊園の總預かり的性格をもって、12世紀には東北一円の莊園を把握している。本遺跡からは、12世紀代の須恵器系陶器、青磁・白磁碗などの輸入陶磁器、ロクロ成形のかわらけが出土している。これらは、岩手県の奥州藤原氏に関係する平泉遺跡群から出土している遺物と共通性を持っていることが窺える。

八条院領であった成生莊・大山莊、摂関家領であった大曾禰莊は、12世紀には既に存在しており、本遺跡から出土した遺物のなかには12世紀末期のものがあることから、本遺跡出土の遺物と周辺にある莊園の時期が一致していることがわかる。

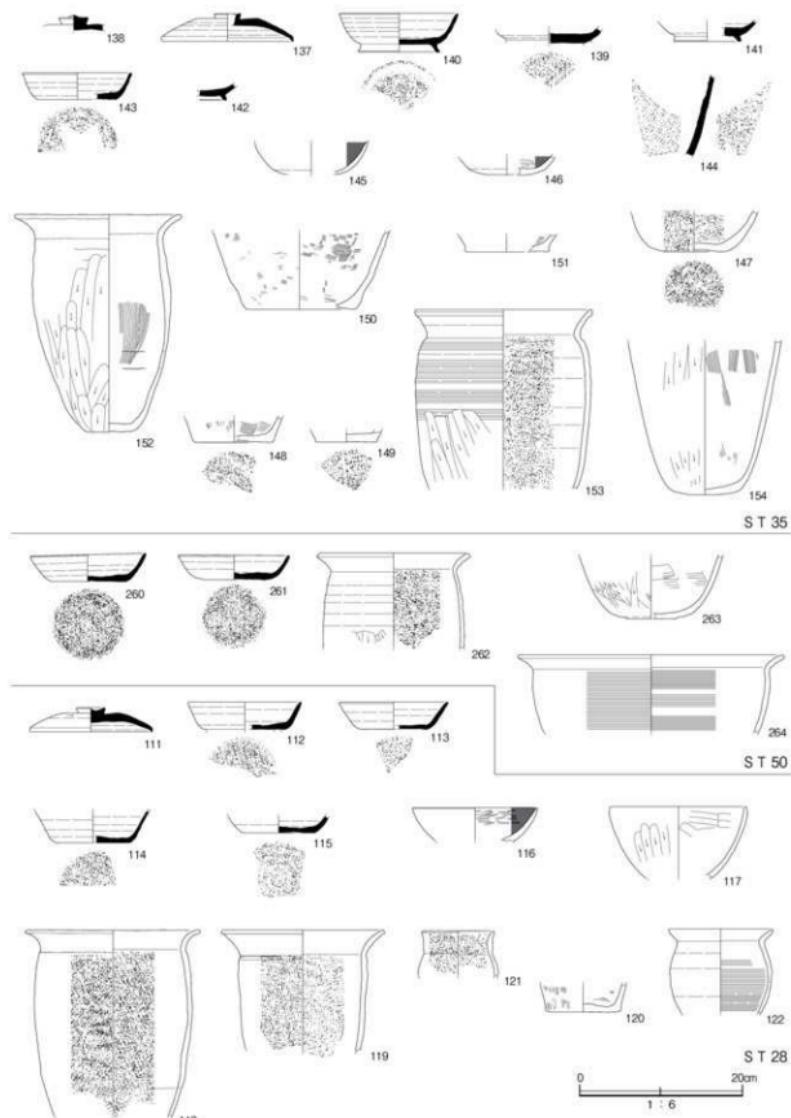
奥州藤原氏は、莊園を管理するに当たって、主要河川の北上川、雄物川、最上川等主要河川の内陸部に支配の拠点を持ち現地管理を行っている。そして、莊園や交通ルートを支えるために、在地領主との主従関係を形成していた。

本遺跡からは、身舎に二面に庇を持つ大型の掘立柱建物跡や、多数の掘立柱建物跡を検出していること、さらに、當時入手が困難であった輸入陶磁器が出土したほか、刀などの鉄製品、屋敷墓などから、本遺跡は、当時の河川交通の要衝に居をかまえた、在地領主の存在の居館跡とも想定される。

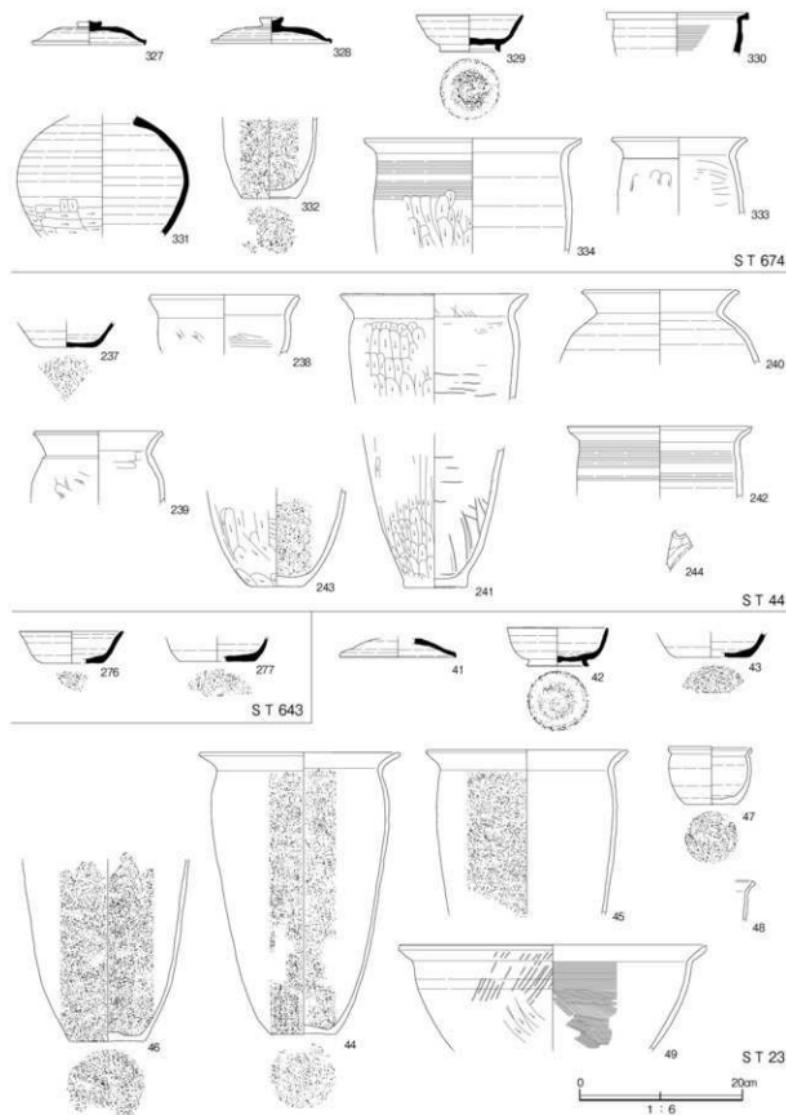
本遺跡から出土した、かわらけ・白磁・青磁・須恵器系陶器の遺物や遺構形態、近隣に存在する摂関家領である大曾禰莊が奥州藤原氏の管理する莊園であることや、寒河江莊にある慈恩寺に平泉文化が跡をとどめていることなどからも、領主の存在の有力者は、陸奥出羽押領使として奥羽の治安を一手に握り、摂関家領莊園の現地管理を担っていた奥州藤原氏との関わりがあったことが想定される。



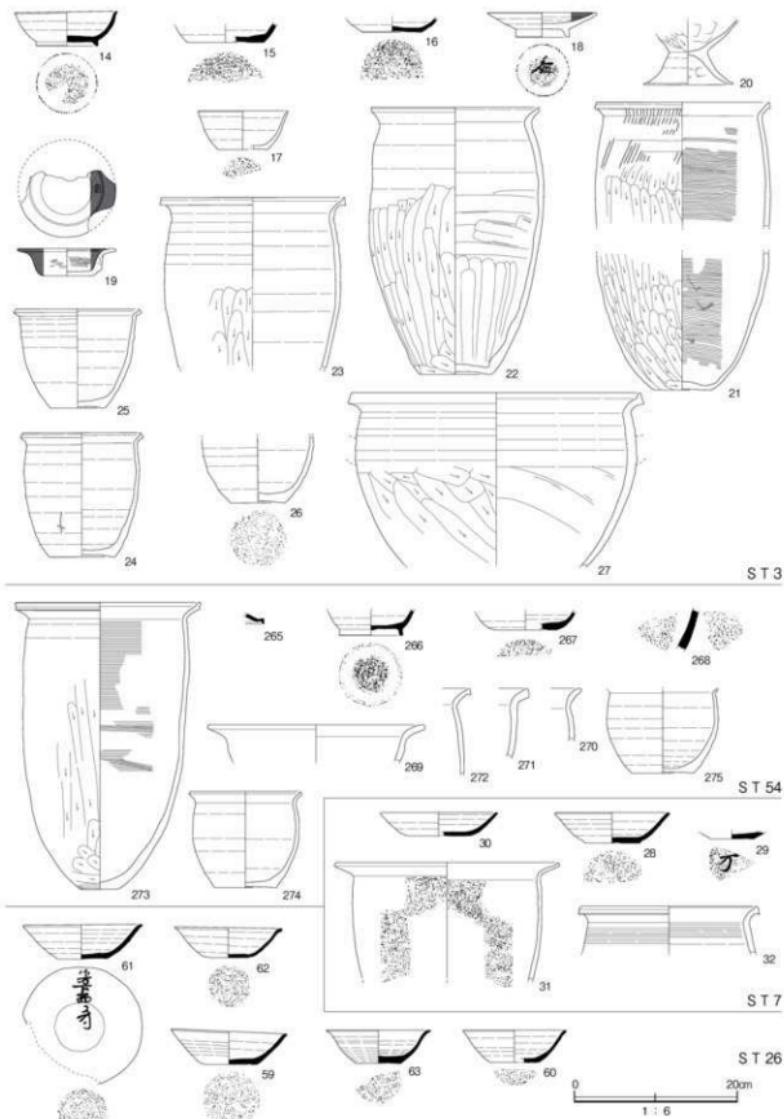
第24図 整穴住居跡出土土器集成図（1）



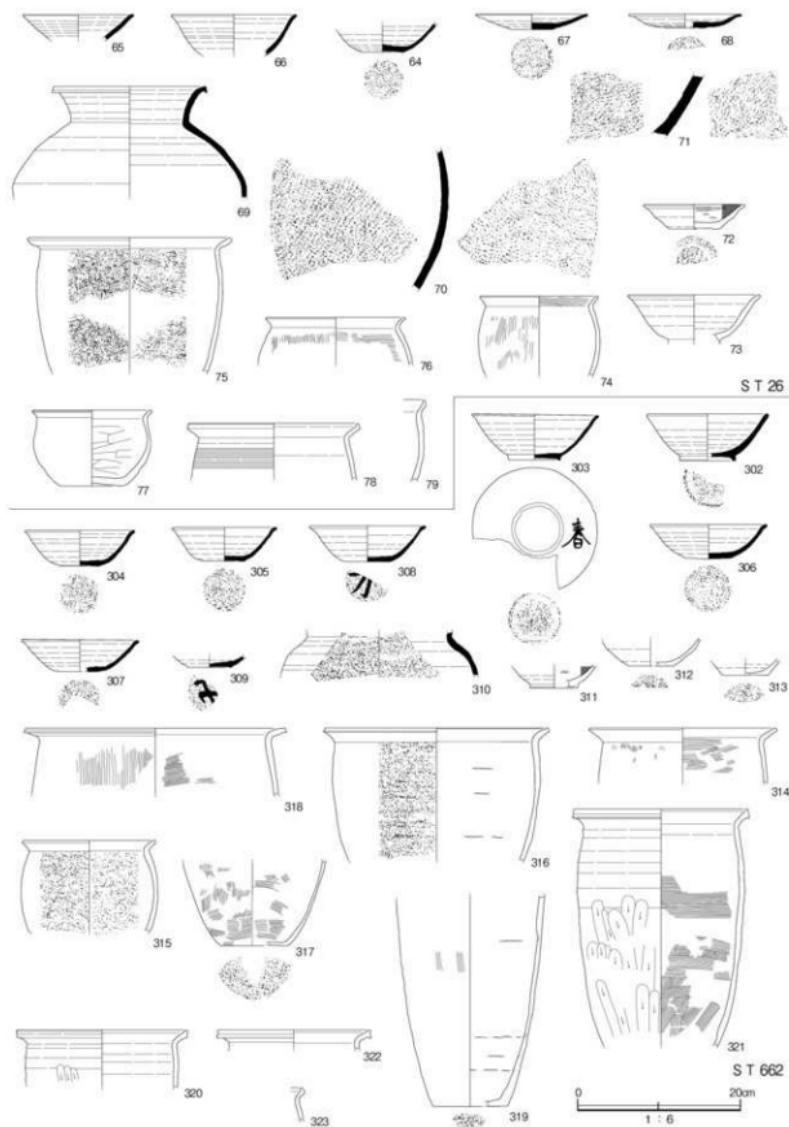
第25図 整穴住居跡出土土器集成図（2）



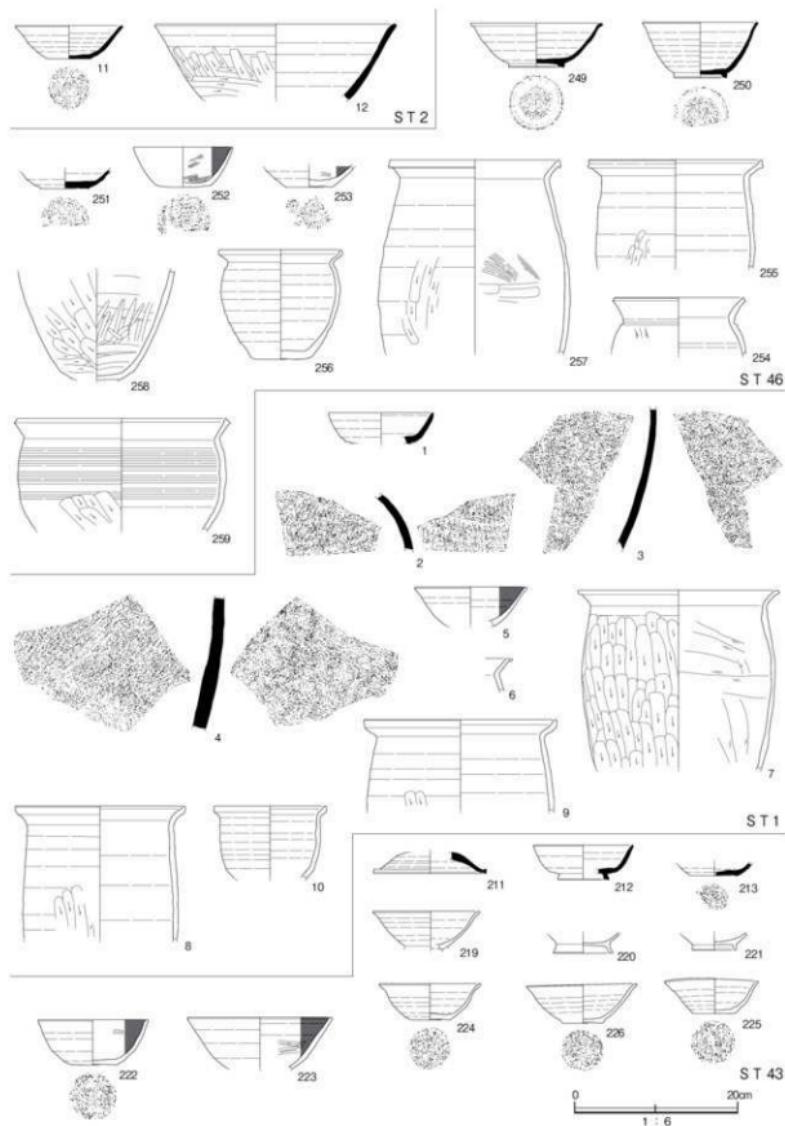
第26図 整穴住居跡出土土器集成図（3）



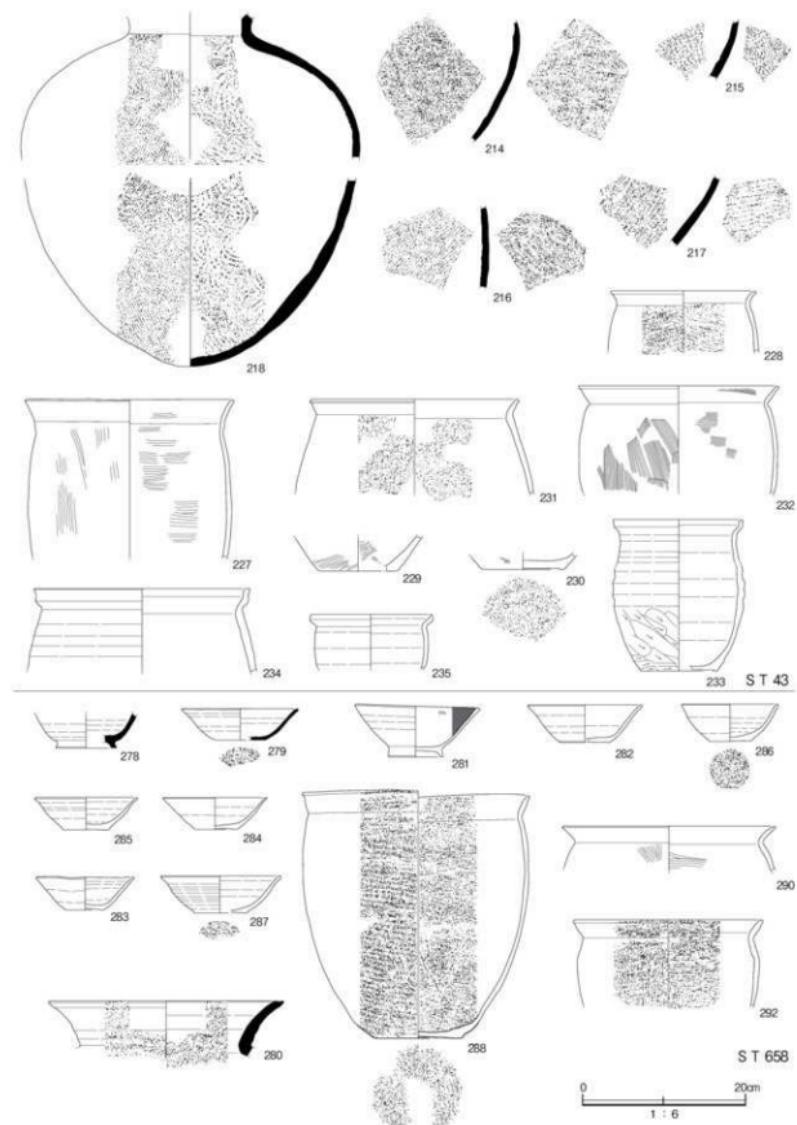
第27図 整穴住居跡出土土器集成図（4）



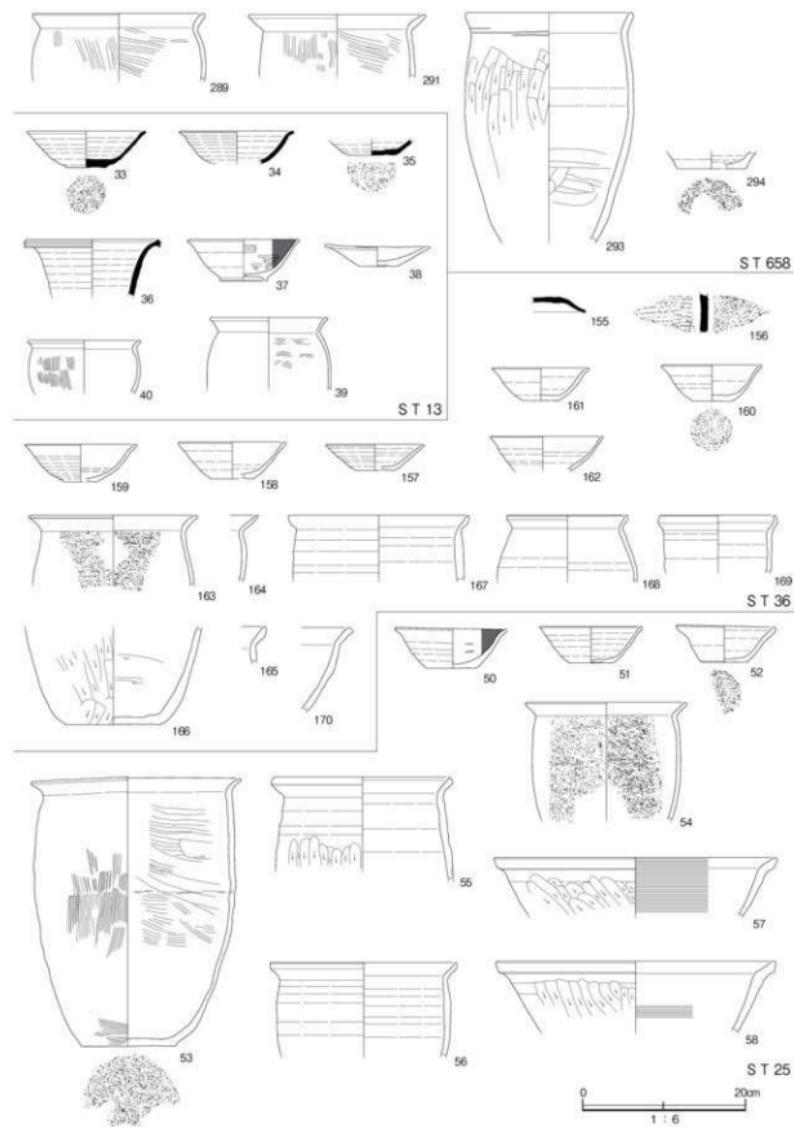
第28図 整穴住居跡出土土器集成図（5）



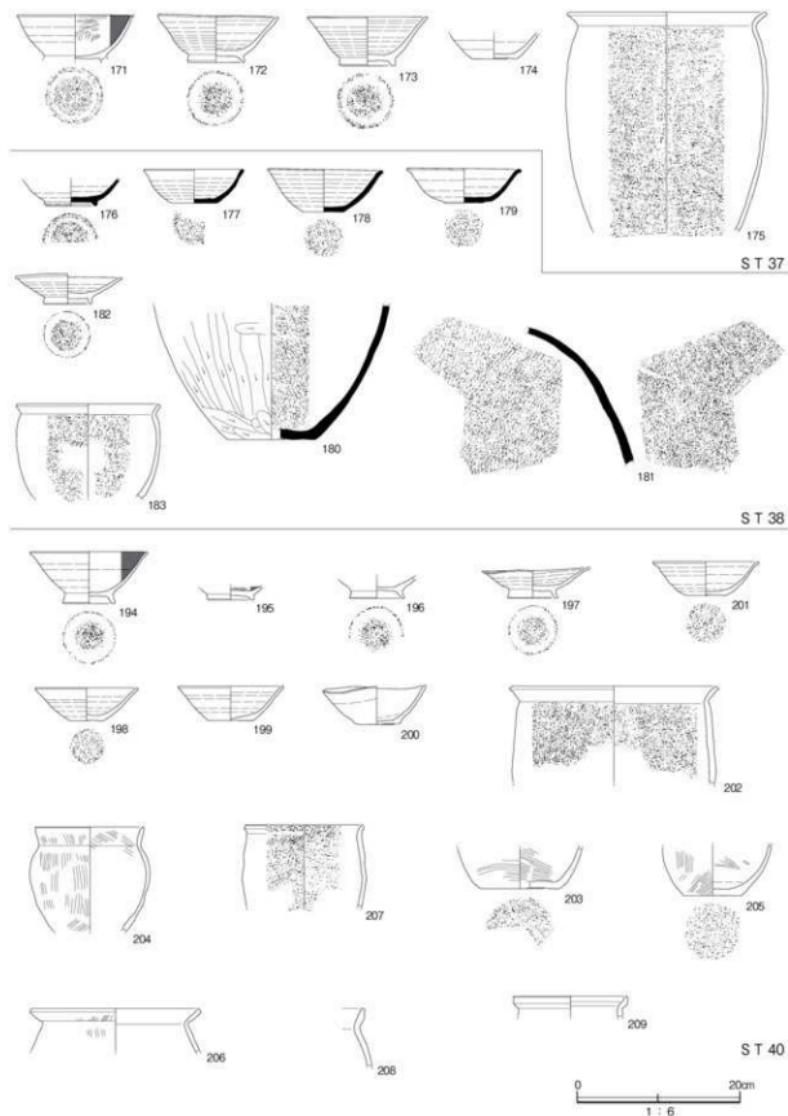
第29図 整穴住居跡出土土器集成図（6）



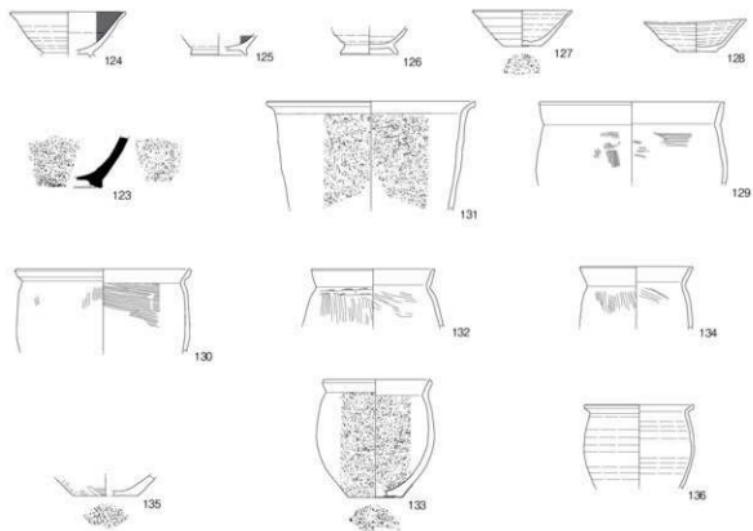
第30図 竪穴住居跡出土土器集成図（7）



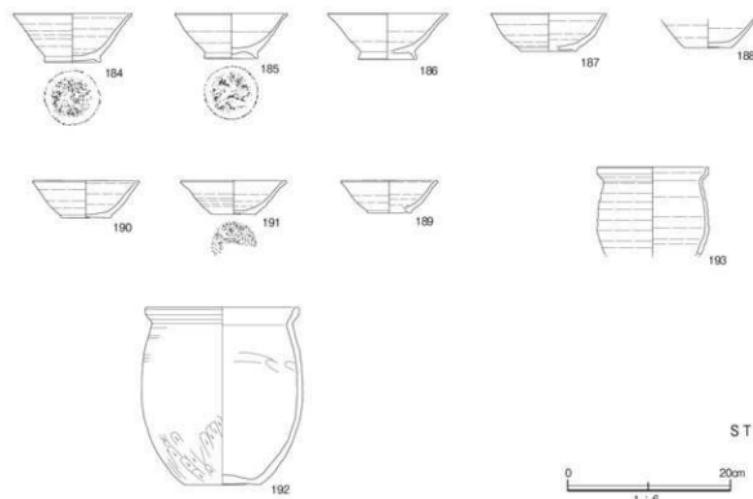
第31図 整穴住居跡出土土器集成図（8）



第32図 整穴住居跡出土土器集成図（9）



ST 34



ST 39

第33図 整穴住居跡出土土器集成図 (10)

V まとめ

- 1 上敷免遺跡は山形県山形市大字成安字上敷免に所在する。本遺跡は、須川の右岸の標高94mの自然堤防上に位置する。
- 2 本遺跡が立地する、古代の最上郡の諸郷については、奈良時代については不明であるが、平安時代に二郡に分けられてからの最上郡の諸郷の名が『和名類聚抄』に掲載されている。これによると、本遺跡は那可郷に比定されている。那可郷は最上郡の中央にあり、馬見ヶ崎川と須川の交わる地点にあり、内陸河川を扱り所とした交通や物流の要衝であったと考えられる。
- 3 遺跡からは、古墳時代前期末葉の性格不明遺構と、奈良時代（8世紀）、平安時代前期（9世紀前半～10世紀前半）、平安時代末期（12世紀後半）の集落跡が検出された。集落は8世紀～9世紀にかけて継続して営まれ、10世紀代前半には衰退して一旦廃絶し、12世紀後半に再び営まれたことが確認できた。
- 4 奈良時代の遺構は、堅穴住居跡が5棟検出された。堅穴住居跡（S T 660）からは関東系土器（土師器坏）が出土している。関東の土器形式にいう真間式に相当し、8世紀前半と考えられる。この関東系土器は、坂東から陸奥国に移住した棚戸との関連が考えられる。
- 5 平安時代前期の遺構は堅穴住居跡22棟、掘立柱建物跡3棟、土坑、ピット、溝、畝状遺構を検出した。堅穴住居跡には切り合っているものが多くみられ、何度も建て替えられた様子が覗えた。微高地に住居域を設け、微高地から低地にかけては、畠跡と考えられる畝状遺構などの生業域が分布していることから、地形を意識した土地利用が図られていたことが分かった。
- 6 平安時代末期の遺構は掘立柱建物跡7棟、カマド状遺構1基、井戸跡1基、土坑墓2基が認められた。S B204掘立柱建物跡は梁行長3.9m、桁行長10.7m以上の規模の二面に庇をもつ建物で、本遺跡の中心的な建物であったと考えられる。これらの建物と隣接して屋敷墓と考えられるS H80・S H103を検出した。骨片の他、副葬品として刀子が出土している。カマド状遺構は調査区東南隅から検出された。
- 7 遺物として、古墳時代・奈良時代では土師器、平安時代前期では土師器・須恵器・赤焼土器・鉄製品・石製品、平安時代末期ではかわらけ・白磁・青磁・須恵器系陶器・鉄製品などが出土している。
- 8 平安時代前期の堅穴住居跡（S T 3）からは、金属器を模倣したと考えられる柄香炉形土器、関東地方の「武藏窯」の系譜と考えられる台付壺が出土している。堅穴住居跡（S T 26）からは「〔淨々〕万下西寺」と墨書きされた須恵器坏が出土しており、柄香炉形土器の出土と併せて、村落内で仏教的な儀礼がおこなわれていたことが考えられる。生業関連遺物として軽鍑車（鉄製・石製）・砥石などが出土している。
- 9 平安時代末期の遺物は12世紀後半が主体である。須恵器系陶器は珠洲編年Ⅰ期のものである。輸入陶磁器には青磁碗・白磁碗がある。かわらけは3点の出土でロクロ成形のものであ

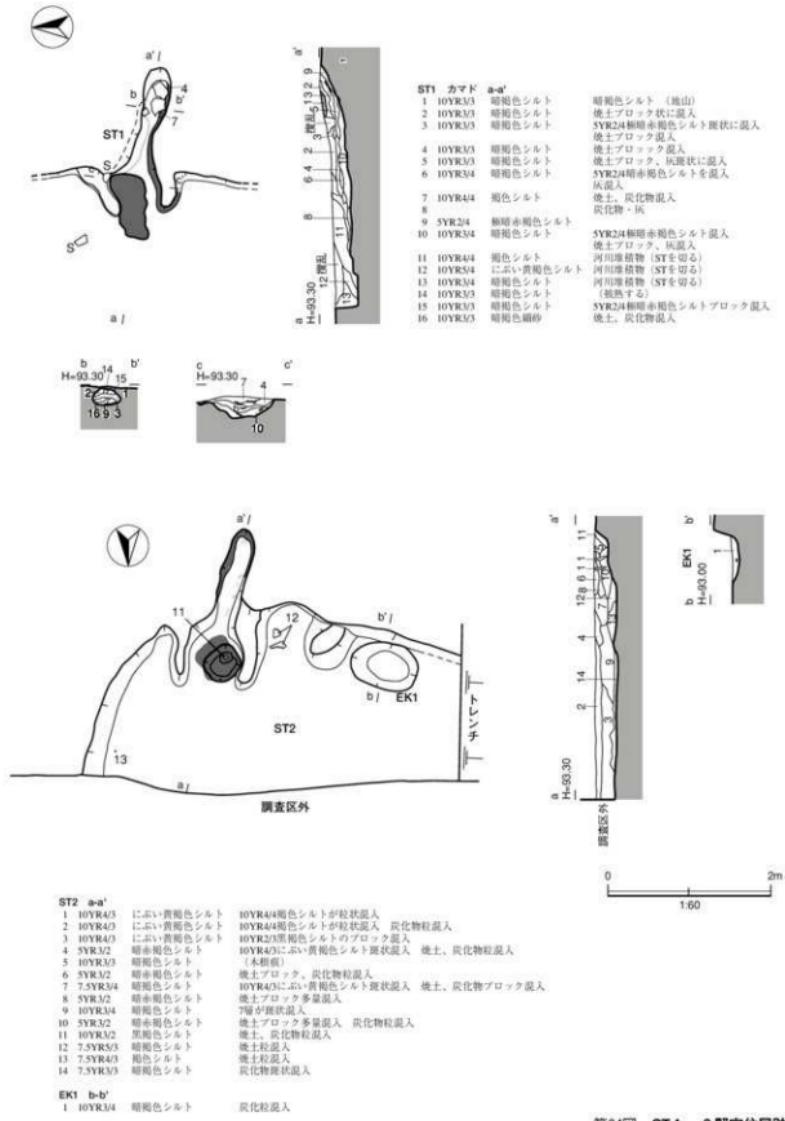
る。

10 本遺跡は、大型のものを含む多数の掘立柱建物や、当時入手が困難であった輸入陶磁器が出土したことから、当時の在地領主的存在の居館跡と考えられる。かわらけ・白磁・須恵器系陶器の出土や、寒河江荘内の慈恩寺に平泉文化が跡をとどめていることなどからも、領主的存在の有力者は陸奥・出羽押領使として奥羽の治安を一手に握り、折闇家領莊園の現地管理を担っていた奥州藤原氏との関わりがあったことも想定される。

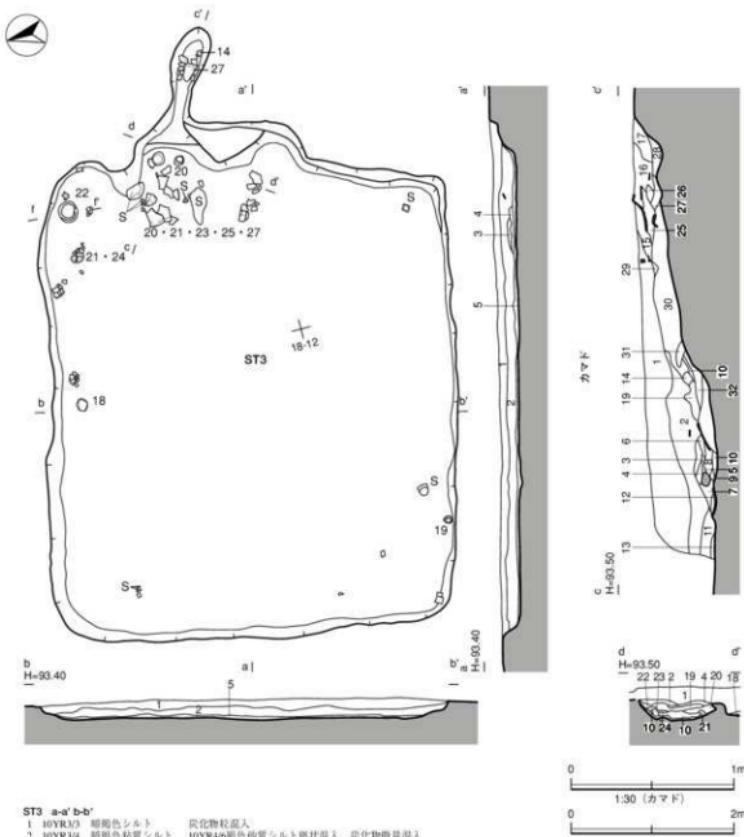
最後に調査にあたってご協力いただいた国土交通省山形川国道工事事務所をはじめとする関係機関各位、並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた作業員各位に対して心よりお礼を申し上げる。

〈参考・引用文献〉

- 阿部明彦・木戸弘美 1999 「山形県の古代土器編」「第25回古代城櫓官衙遺跡検討会資料」
 佐藤庄一ほか 1997 「平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書」
 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集
- 阿部明彦ほか 2004 「達房寺遺跡第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第104集
 伊藤邦弘ほか 2001 「高麗山遺跡（SA）第2・3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集
 須賀井新人ほか 1994 「今塙遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集
 植松玲彦 2006 「北向遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第146集
 坂井秀弥ほか 1989 「山三賀遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新潟県教育委員会
 芦川隆史ほか 2006 「大坪遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 新潟県教育委員会
 1998 「古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4—一差炊具—」古代の土器研究会
 飯村 均ほか 2003 「中世奥羽の土器・陶磁器」東北中世考古学会編
 伊藤清朗ほか 2002 「中世出羽の領主と城館」奥羽史研究叢書 高史書院
 1988 「大郷の地名をたずねて」山形市大郷郷土研究会
 1973 「山形市史」上巻（原始・古代・中世編）山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会
 山中襄太 1968 「地名語源辞典」校倉書房



第34図 ST 1・2 肩穴住居跡



- ST3 a-a' b-b'**
- 10YVR3/3 暗褐色シルト 灰化物軽混入
 - 2 10YVR3/4 暗褐色粘質シルト 10YVR4/6暗褐色質シルト斑状混入 灰化物微量混入
 - 3 10YVR3/4 暗褐色粘質シルト 焼土を挟状混入
 - 4 10YVR3/4 暗褐色粘質シルト 2.5YS/暗褐色質シルト混入
 - 5 10YTR4/4 黄褐色質シルト 10YR2/2暗褐色粘質シルト挟状混入(駆床)

カマド c-c' dd'

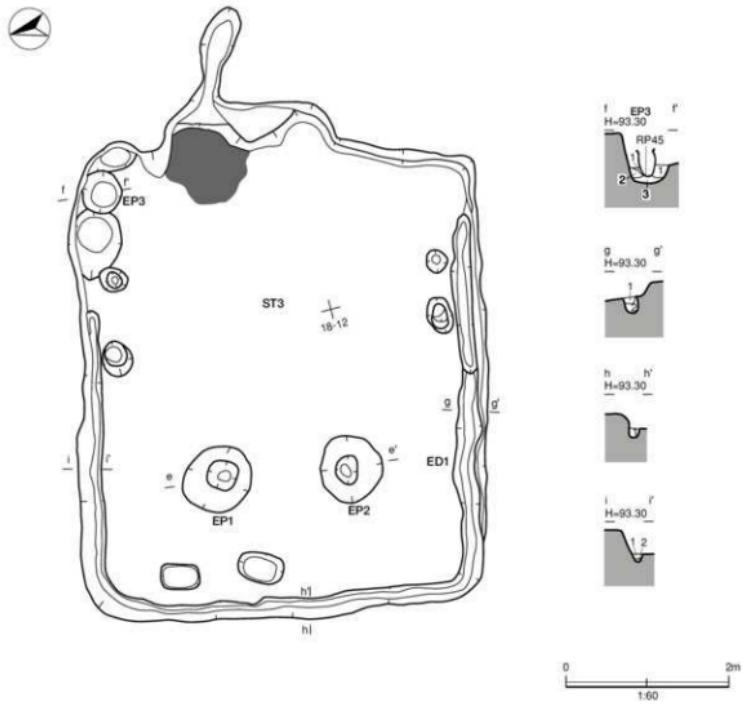
- 1 10YVR2/4 黒褐色シルト 10YRA4/6暗褐色シルトがブロック状混入
- 2 10YVR3/3 暗褐色シルト 焼土微量混入
- 3 10YVR3/3 暗褐色シルト 10YRA4/6暗褐色シルトがブロック状混入
- 4 10YVR3/3 暗褐色粘質シルト 焼土混入
- 5 SYR2/4 紅褐色含鉄粘土 カマド天井部か
- 6 10YVR3/4 暗褐色シルト
- 7 10YVR3/4 暗褐色シルト 10YRS/2/6黄褐色シルト少量混入
- 8 SYR2/4 橙褐色赤褐色シルト 焼土混入
- 9 10YRS/2 淡褐色シルト 焼土ブロック混入
- 10 10YRS/2 淡褐色シルト 焼土微量混入
- 11 10YR3/4 暗褐色シルト 10YRS/2/6黄褐色シルト少量混入
- 12 11と同上 烧土混入
- 13 10YVR3/4 暗褐色シルト 烧土多量混入
- 14 SYR2/4 橙褐色赤褐色シルト 烧土ブロック、灰化物混入
- 15 10YRS/2 黑褐色シルト
- 16 10YR2/3 黑褐色シルト SYR2/4橙褐色赤褐色シルト挟状混入
- 17 10YR3/3 暗褐色シルト SYR2/4橙褐色シルト少量混入

第35図 ST3 壁穴住居跡（1）

- 18 10YR3/3 周褐色シルト
 19 10YR2/3 黒褐色シルト
 20 地上ブロック
 21 10YR3/4 周褐色シルト
 22 桃・炭化物
 23 10YR3/5 周褐色シルト
 24 地上・炭化物・灰
 25 10YR2/3 黑褐色シルト
 26 10YR3/4 周褐色シルト
 27 10YR2/3 黑褐色シルト
 28 10YR2/3 黑褐色シルト
 29 5YR2/4 周褐色シルト
 30 10YR2/3 黑褐色シルト
 31 10YR3/4 周褐色シルト
 32 10YR3/4 周褐色シルト
- 炭化物多量混入
 SYR2/4細粒赤褐色シルト多量混入
 灰を斑状に混入
 地上ブロック混入
 10YR5/2灰黒褐色シルト微量混入
 地上・炭化物
 SYR2/4細粒赤褐色シルト多量混入
 地上粒混入
 地上粒混入
 SYR2/4細粒赤褐色シルト
 地上ブロック混入
 地上ブロック混入
 地上粒混入
 10YR3/4細粒褐色シルト多量混入
 SYR2/4細粒赤褐色シルト多量混入



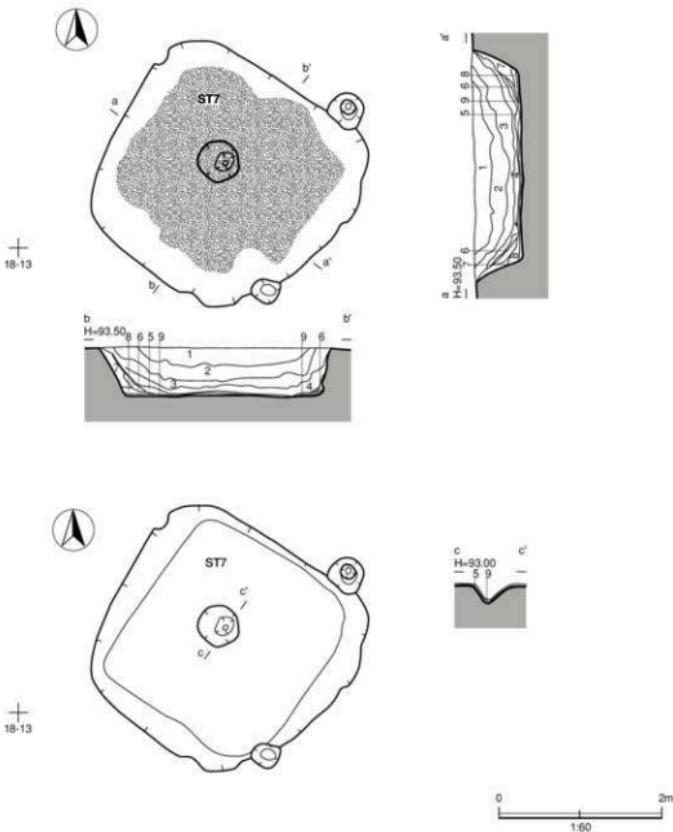
EP1 - EP2 e-e'
 1 10YR3/4 周褐色シルト 10YR4/4褐色シルトのブロック混入
 2 炭化物層



EP3 f-f'
 1 7.5YR3/2 黒褐色シルト 10YR4/6褐色粘質シルト枝、炭化物粒混入
 2 7.5YR4/5 褐色砂質シルト 7.5YR4/6褐色シルトのブロック状混入
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 7.5YR4/6褐色シルトのブロック状混入 炭化物微量混入

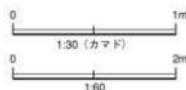
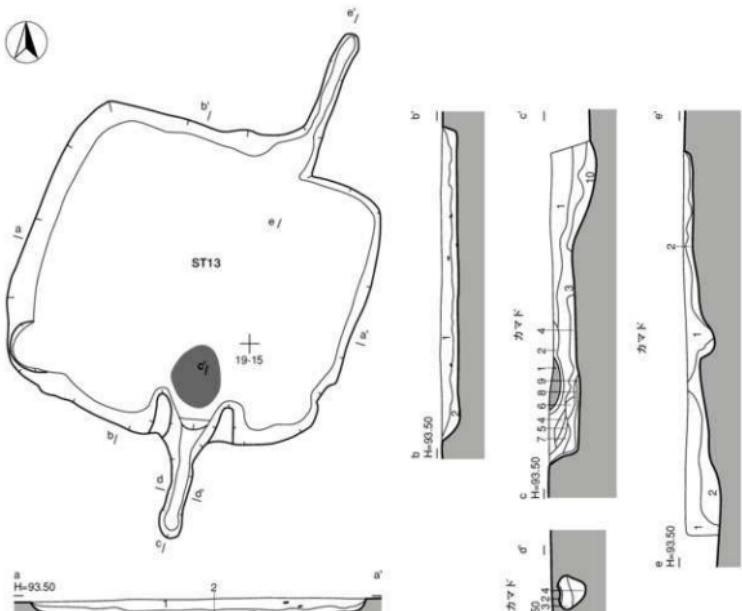
ED1 g-g' h-h' i-i'
 1 10YR4/4 褐色シルト 10YR2/2黒褐色シルトが粒状混入
 2 2.5YR3/5 壤オーリーブ褐色砂 炭化物（炭化した植物根）を微量混入

第36図 ST 3 穴住居跡（2）



- ST 7 a-a' b-b' c-c'**
- | | | |
|-----------|-------------|------------------------------------|
| 1 HOYR2/3 | 黒褐色シルト | 炭化物粒混入 植による獲物多い |
| 2 HOYR2/3 | 黒褐色シルト | HOYR3/4暗褐色シルト HOYR2/2黒褐色シルトのブロック混入 |
| 3 HOYR3/4 | 暗褐色シルト | HOYR3/1黒褐色粘質シルトのブロック状混入 炭化物混入 |
| 4 HOYR3/4 | 暗褐色シルト | HOYR2/3暗褐色粘質シルトのブロック状混入 炭化物多量混入 |
| 5 黒褐色シルト | | 炭化物多量混入 |
| 6 HOYR2/3 | 黒褐色シルト | HOYR4/3にぶい貴褐色砂質シルト混入 炭化物粒混入 |
| 7 HOYR4/3 | にぶい貴褐色砂質シルト | HOYR2/3黒褐色シルト粒状混入 |
| 8 HOYR2/3 | 黒褐色シルト | HOYR4/3にぶい貴褐色砂質シルト混入 炭化物粒多量混入 |
| 9 HOYR4/3 | にぶい貴褐色砂質シルト | HOYR2/3黒褐色シルト混入 |

第37図 ST7 整穴住居跡

**ST13 a-a' b-b'**

- 1 IOYR1/4 明褐色シルト
2 IOYR3/4 明褐色シルト

IOYR4/4褐色シルト混入 灰化物ブロック混入
IOYR4/4褐色シルト混入 地土ブロック混入

カマド c-c' d-d'

- 1 IOYR1/4 黄褐色質シルト
2 IOYR4/4 黄褐色シルト
3 IOYR1/4 明褐色シルト
4 IOYR2/2 黑褐色シルト
5 IOYR3/3 明褐色シルト
6 IOYR4/3 にぶい黄褐色糀質シルト
7 IOYR2/2 黑褐色シルト
8 IOYR2/2 黑褐色シルト
9 IOYR4/4 褐色シルト
10 IOYR3/3 喧褐色シルト

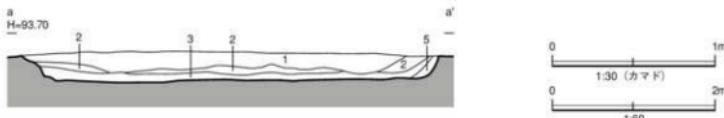
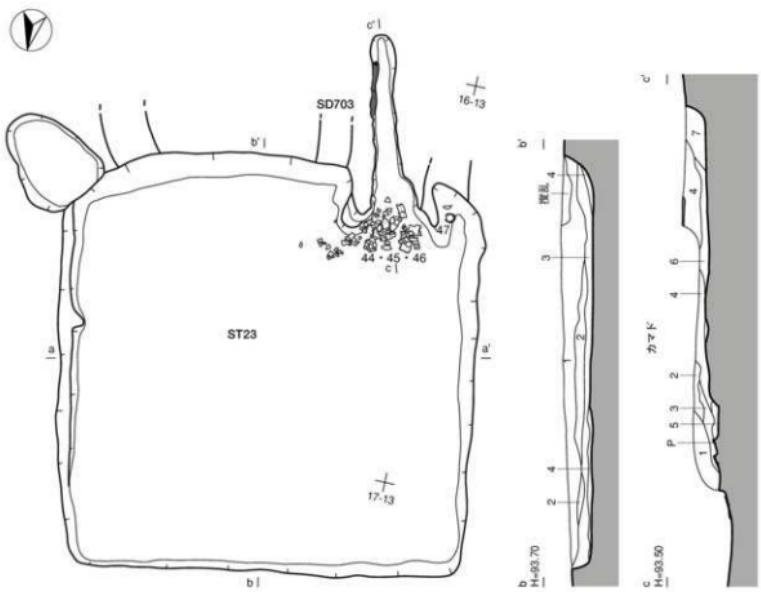
被熱層
IOYR4/4褐色シルトの粒状多量混入 地土、灰化物混入
灰化物多量混入 地土ブロック混入
IOYR4/3にぶい黄褐色シルトブロック、灰化物ブロック混入
IOYR4/3にぶい黄褐色シルトブロック、地土、灰化物ブロック混入
地土ブロック混入
IOYR4/3にぶい黄褐色シルトがブロック状混入 地土ブロック多量混入

カマド e-e'

- 1 IOYR3/4 明褐色シルト
2 IOYR3/4 明褐色シルト

IOYR4/4褐色シルト混入
1上り IOYR4/4褐色シルトが多く混入

第38図 ST13整穴住居跡

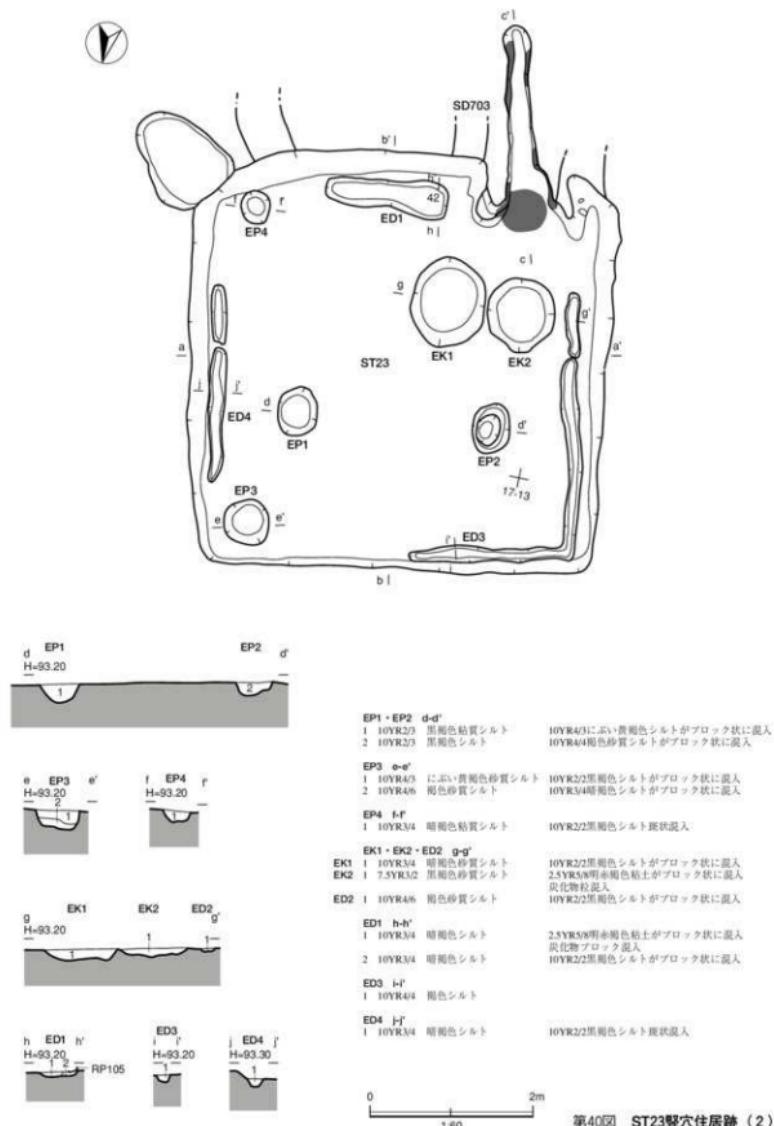


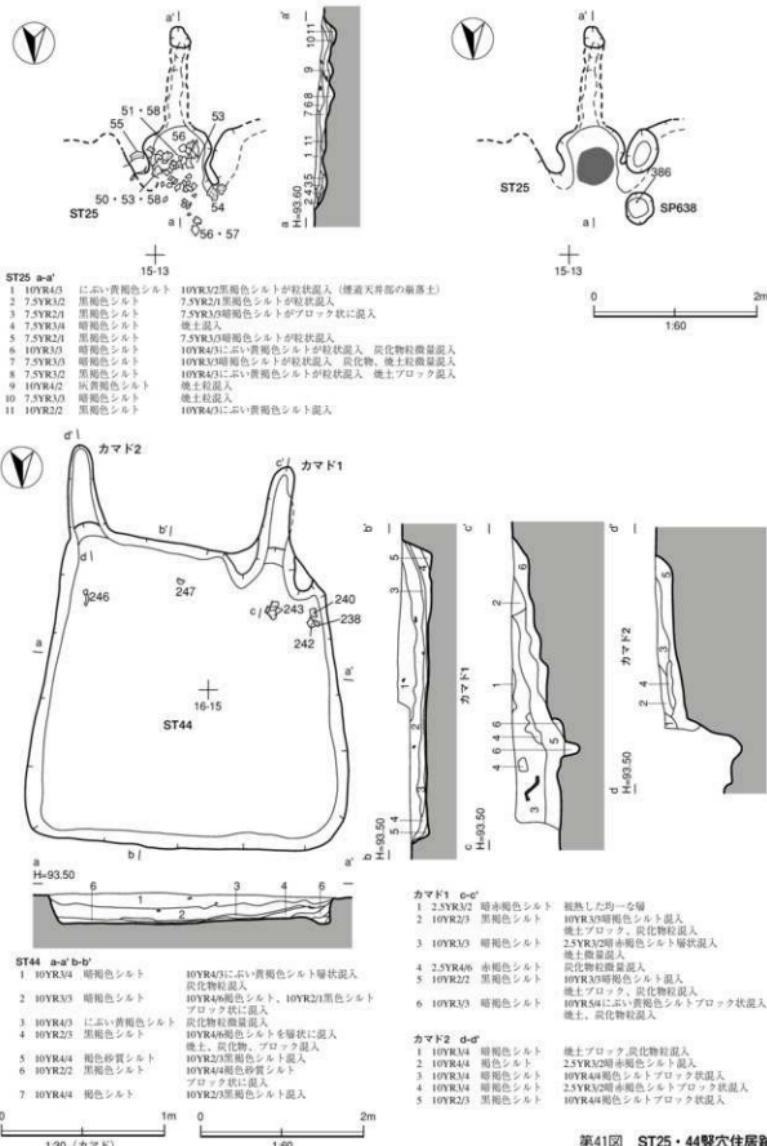
ST23 a-a' b-b'

- | | | |
|---|----------------|----------------------------|
| 1 | HOYR2/3 黒褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルトのブロック混入 |
| 2 | HOYR2/3 黒褐色シルト | 1より10YR3/4暗褐色シルトのブロック多量混入 |
| 3 | HOYR2/3 黒褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルト斑状混入 |
| 4 | HOYR3/4 暗褐色シルト | 10YR2/3黒褐色シルト微量混入 |
| 5 | HOYR3/4 暗褐色シルト | 10YR2/3黒褐色シルト微量混入
炭化物混入 |

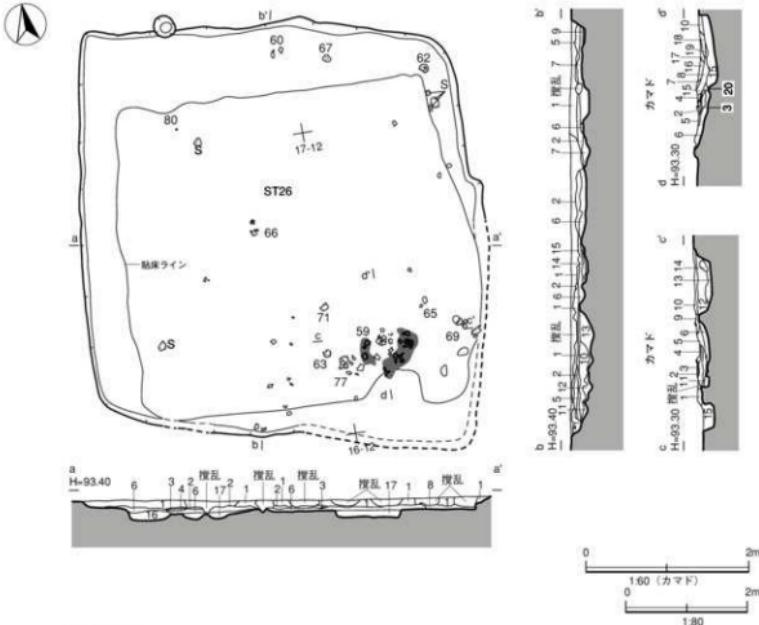
- | | | | |
|----------|---|----------------|-----------------------------|
| カマド c-c' | 1 | HOYR2/3 黒褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルトが斑状混入 硫土混入 |
| | 2 | HOYR3/4 暗褐色シルト | 硫土多量混入 |
| | 3 | HOYR2/3 黑褐色シルト | HOYR2/3黒褐色シルト微量混入 硫土多量混入 |
| | 4 | HOYR2/3 黑褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルトが斑状混入 硫土多量混入 |
| | 5 | HOYR3/4 暗褐色シルト | 硫土と炭化物混入 |
| | 6 | HOYR2/3 黑褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルト斑状混入 硫土ブロック混入 |
| | 7 | HOYR2/3 黑褐色シルト | 10YR3/4暗褐色シルトがブロック状に混入 硫土混入 |

39図 ST23竪穴住居跡（1）





第41図 ST25・44竪穴住居跡

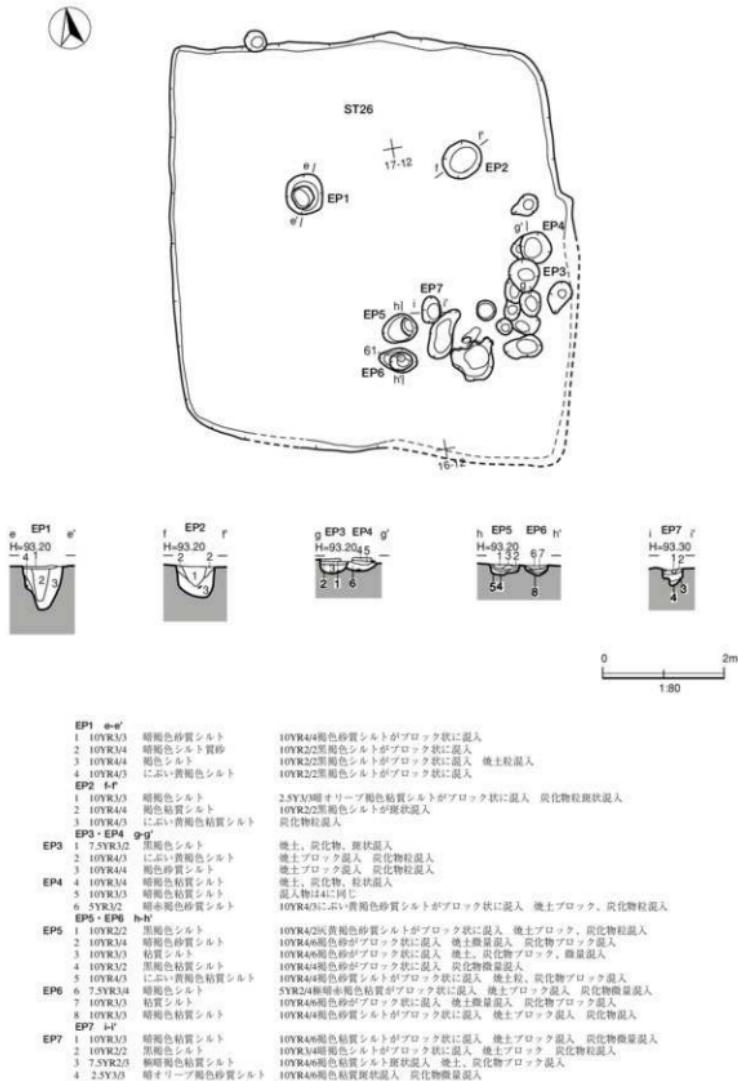


ST26 a-a' b-b'

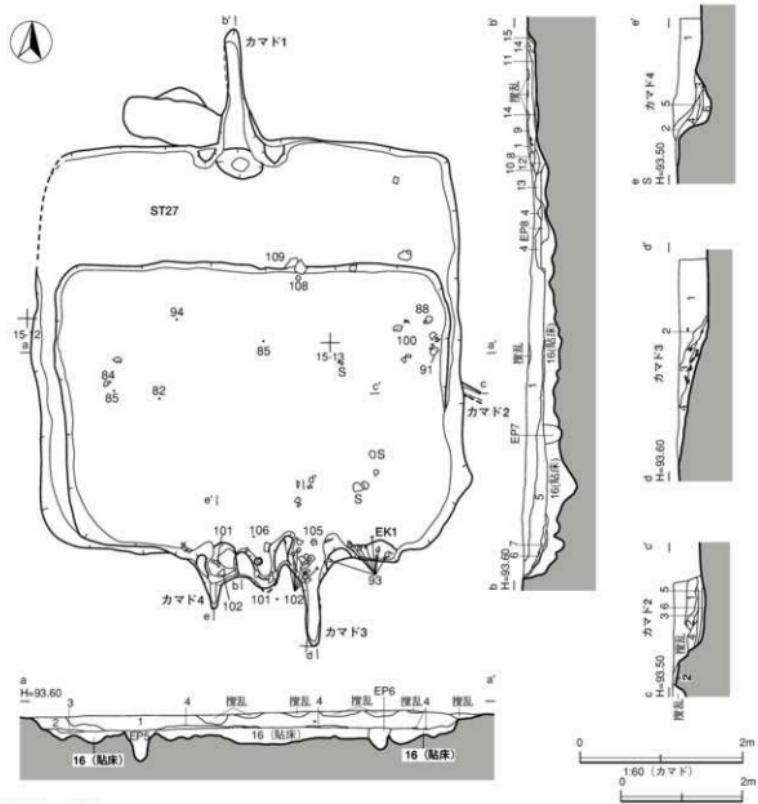
- | | | |
|---------------------|------------|--|
| 2) HYDR4/3 | [に]い黄褐色シルト | 2.5YSR/8明るい褐色土上に灰状混入。炭化物を粒状、層状に混入 |
| 3) HYDR4/4 | 暗褐色粘質シルト | 10YR4/4暗褐色の砂質土質。糞便物、堆肥化物混入。貼り床用 |
| 4) と同上 | | 10YR4/5[に]い黄褐色シルト 土状混入 |
| 5) と同上 | | 10YR4/6暗褐色粘質 ルート透水性 |
| 6) と同上 | 暗褐色粘質シルト | 10YR4/6暗褐色膠泥状土質。糞便物、堆肥化物混入。貼り床用 |
| 7) HYDR4/2 | 黒褐色粘質シルト | 炭化物を粒状に混入 |
| 8) HYDR4/2 | 黑褐色粘質シルト | 炭化物を粒状に混入 |
| 9) と同上 | | 7.5YSR/8暗褐色粘質 ルート透水性 |
| 10) HYDR4/3 | [に]い黄褐色シルト | 10YR4/6暗褐色粘質 ルート透水性 |
| 11) と同上 ただし、炭化物混入せず | | 10YR4/6暗褐色粘質 ルート透水性。糞便、炭化物混入 |
| 12) HYDR4/3 | 暗褐色粘質シルト | 10YR4/6暗褐色粘質 ルート透水性。糞便、堆肥化物混入 |
| 13) HYDR4/3 | 暗褐色粘質シルト | 10YR4/6暗褐色粘質 ルート透水性。糞便、堆肥化物混入 |
| 14) HYDR4/4 | 褐シルト [黄質] | 10YR2/2暗褐色シルト。2.5YSR/4に[に]い赤褐色シルトとブロッカット状に混入 |
| 15) HYDR4/4 | 褐シルト [黄質] | 2.5YSR/4に[に]い黄褐色シルト。2.5YSR/8明るい褐色シルト、がブロッカット状に混入 |
| 16) HYDR4/4 | 褐シルト [黄質] | 10YR4/6暗褐色粘質。糞便、炭化物混入 |
| 17) HYDR4/3 | [に]い黄褐色シルト | 10YR4/6暗褐色粘質 ルートがブロッカット状に混入。糞便、炭化物が灰状混入 |

カマド c-c' d-d'

- | | | |
|--------------|------------|------------------------------------|
| 1) HYR3/3 | 暗褐色シルト | 壤土、炭化物粒状混入 |
| 2) HYR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 10YR4/4.0暗色砂質混入、壤土粒状。炭化物微混入 |
| 3) HYR3/2 | 黒褐色質シルト | 2.5YR4/3暗褐色砂質シルト+プロック状に混入 |
| 4) HYR3/2 | 黒褐色質シルト | 壤土+プロック、炭化物微混入 |
| 5) SYR3/4 | にい黄褐色砂質シルト | 壤土+プロック状混入 |
| 6) SYR3/4 | 暗褐色シルト | 炭化物微混入 |
| 7) 土壌 | | 非常に硬く、まるはば切一 |
| 8) SYR3/4 | 暗褐色シルト | 壤土、炭化物がプロック状に混入 |
| 9) HYR3/4 | 暗褐色シルト | 壤土+プロック状混入、炭化物微混入 |
| 10) HYR3/4 | 暗褐色シルト | 10YR4/4.0暗色砂質混入、壤土、炭化物、粒状混入 |
| 11) HYR3/4 | 暗褐色シルト | 10YR4/4暗色砂質シルト+プロック状に混入 |
| 12) 土同上 | | 地盤+プロック混入、炭化物粒状混入 |
| 13) HYR3/4 | にい黄褐色砂質シルト | 10YR4/4暗色砂質シルト+プロック状に混入、壤土、炭化物粒状混入 |
| 14) HYR3/4 | にい黄褐色砂質シルト | 10YR4/4暗色砂質シルト+プロック状に混入、炭化物微混入 |
| 15) HYR3/4 | にい黄褐色砂質シルト | 10YR4/4暗色砂質シルト+プロック状に混入、炭化物微混入 |
| 16) HYR3/4 | にい黄褐色砂質シルト | 10YR2/2暗褐色シルト+プロック状に混入、壤土粒状混入 |
| 17) 7.5YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 10YR4/4暗色砂質混入、壤土粒状混入 |
| 18) 7.5YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 壤土+炭化物粒状混入 |
| 19) 7.5YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | 地盤+炭化物粒状混入 |
| 20) HYR4/4 | 暗褐色シルト | 壤土、炭化物+プロック状混入 |



第43回 ST26腎穴住居跡（2）



ST27カマド 1 a-a' b-b'

- | | | |
|-------------|------------|--|
| 1 10YR4/3 | に、ぶい黄褐色シルト | 10YR5/6に、ぶい黄褐色シルトがブロック状に混入 |
| 2 10YR4/4 | 暗褐色シルト | 10YR4/6暗褐色シルト混入、微土粒混入 |
| 3 10YR4/6 | 褐色シルト | 10YR3/4褐色シルト混入 |
| 4 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 微土粒混入、炭化物多量混入 |
| 5 7.5YR4/4 | 褐色シルト | 10YR3/4褐色シルト混入 |
| 6 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 10YR4/6に、ぶい黄褐色シルトが粒状混入、焼土、炭化物、粒状混入 |
| 7 10YR1/2 | 黒褐色シルト | 焼土、炭化物、粒状混入 |
| 8 10YR4/4 | に、ぶい黄褐色シルト | 10YR5/6に、ぶい黄褐色シルトが粒状混入、焼土ブロック混入 |
| 9 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 焼土ブロック混入 |
| 10 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 7.5YR3/4褐色シルトを磁粒状に混入、微土粒混入 |
| 11 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 10YR2/2黒褐色シルト混入、焼土ブロック混入 |
| 12 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 焼土粒混入、炭化物多量混入 |
| 13 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | 10YR5/6に、ぶい黄褐色シルトが粒状混入、焼土、炭化物、粒状混入 |
| 14 10YR4/3 | 褐色シルト | 10YR4/6に、ぶい黄褐色シルトが粒状混入、焼土、炭化物、粒状混入 (鉢り跡) |
| 16 10YR4/3 | 褐色シルト | |

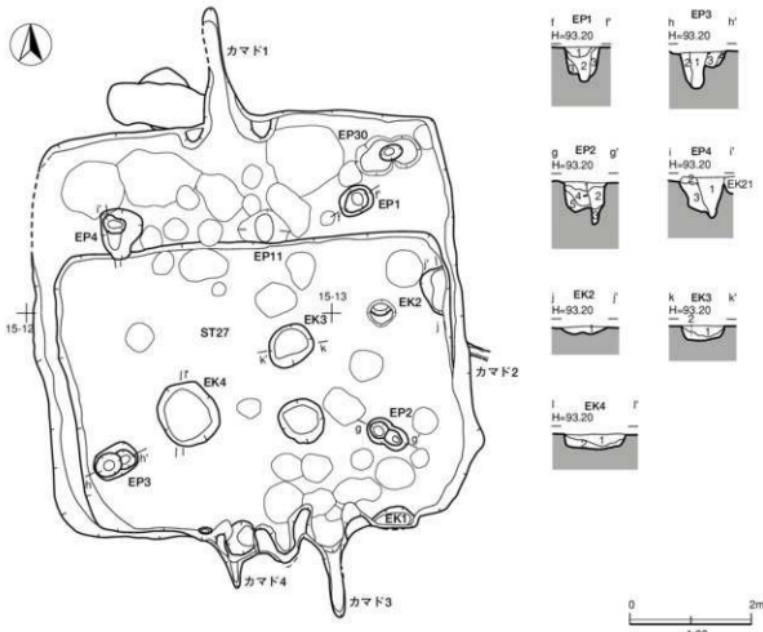
カマド 2 c-c'

- | | | |
|------------|--------|----------------------|
| 1 10YR4/3 | 暗褐色シルト | 10YR4/4暗褐色シルトブロック状混入 |
| 2 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト | 地土、炭化物、ブロック混入 |
| 3 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト | 焼土、炭化物、粒状混入 |
| 4 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト | 10YR4/4暗褐色シルト粒状混入 |
| 5 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト | 焼土粒混入 |
| 6 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 焼土、炭化物、混入 |

カマド 3 d-d'

- | | | |
|------------|---------|---------------------------------|
| 1 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 10YR4/4暗褐色シルトがブロック状に混入 |
| 2 10YR3/4 | 暗褐色シルト | 地土、炭化物、粒状混入 |
| 3 7.5YR3/3 | 褐色シルト | 3YR3/4暗褐色シルトがブロック状に混入 (天井部の崩落土) |
| 4 5YR3/4 | 暗赤褐色シルト | 7.5YR3/4暗褐色シルト粒状混入
焼土ブロック混入 |

第44図 ST27竪穴住居跡 (1)



カマド 1-4'

- 1 7SYR32 黒褐色シルト
2 7SYR33 黑褐色シルト
3 7SYR34 黑褐色シルト
4 7SYR35 黑褐色シルト
5 灰化物
6 7SYR36 黑褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルトがブロック状に混入 壤土、炭化物、粒状混入
地土ブロック多く混入
10YR4/3暗褐色シルト混入
10YR4/4に於いて黒褐色シルト斑状混入
10YR4/5黒褐色シルト斑状混入
10YR4/6に於いて黒褐色シルト粒状混入、他土、炭化物、粒状混入

EP1 1-4'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 暗褐色シルト
3 10YR4/4 に於いて黒褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルトがブロック状に混入 地土ブロック混入、炭化物礫に混入
10YR4/4に於いて黒褐色シルト混入、他土、炭化物、粒状混入
10YR3/3黒褐色シルト混入

EP2 g-g'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 暗褐色シルト
3 10YR4/6 暗褐色シルト
4 10YR4/6 黑褐色シルト
5 10YR5/1 暗褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルト斑状混入、他土、炭化物、粒状混入
10YR4/6暗褐色シルト斑状混入、他土、炭化物、粒状混入
10YR3/3暗褐色シルト混入
10YR4/6暗褐色シルトブロック状に混入 地土粒、炭化物粒、多量混入
10YR5/1黒褐色シルト混入

EP3 h-h'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 暗褐色シルト
3 10YR4/3 暗褐色シルト
4 10YR4/4 暗褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルト粒状混入、他土粒を均一に混入
10YR4/3暗褐色シルト混入
10YR4/3暗褐色シルト混入
10YR4/3暗褐色シルト混入

EP4 i-i'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 に於いて黒褐色シルト
3 10YR4/3 に於いて黒褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルトがブロック状に混入 炭化物粒を均一に混入
10YR3/3暗褐色シルト斑状混入
10YR4/3暗褐色シルト粒状混入
10YR4/3暗褐色シルト混入

EK2 h'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルト粒状混入、他土、炭化物、混入

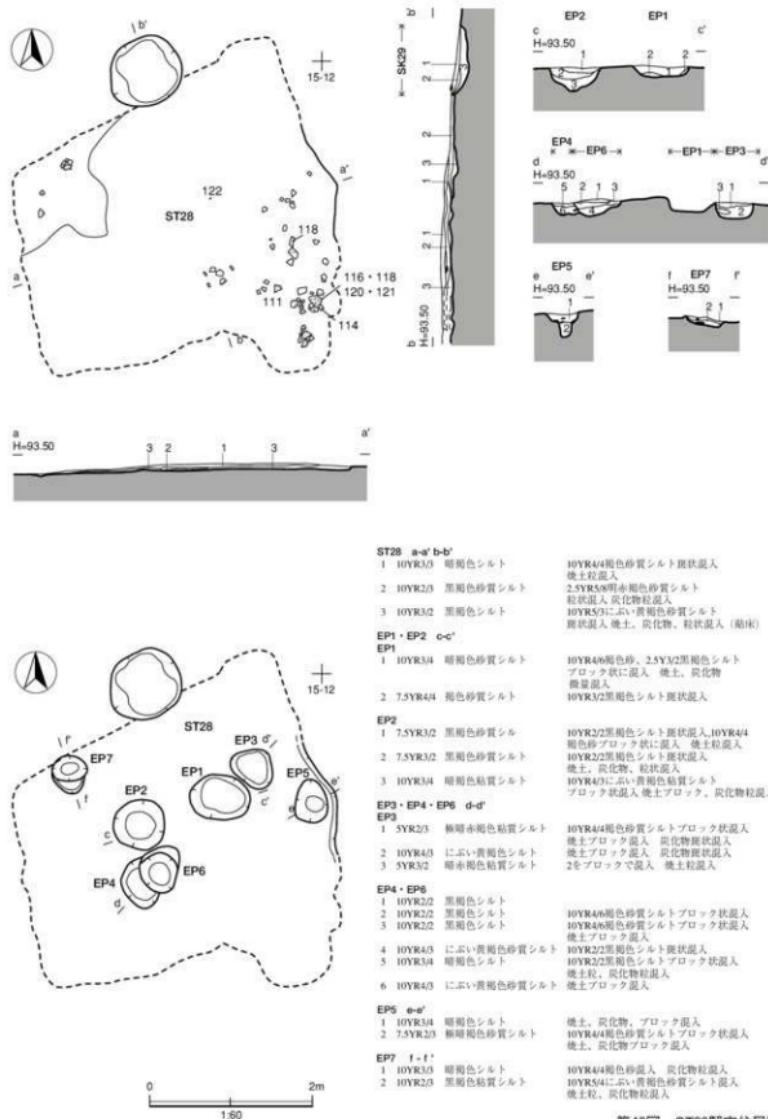
EK3 k-k'

- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 暗褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルト斑状混入、他土粒、炭化物、多量混入
10YR4/3に於いて黒褐色シルト粒状混入、他土粒、炭化物粒、多量混入

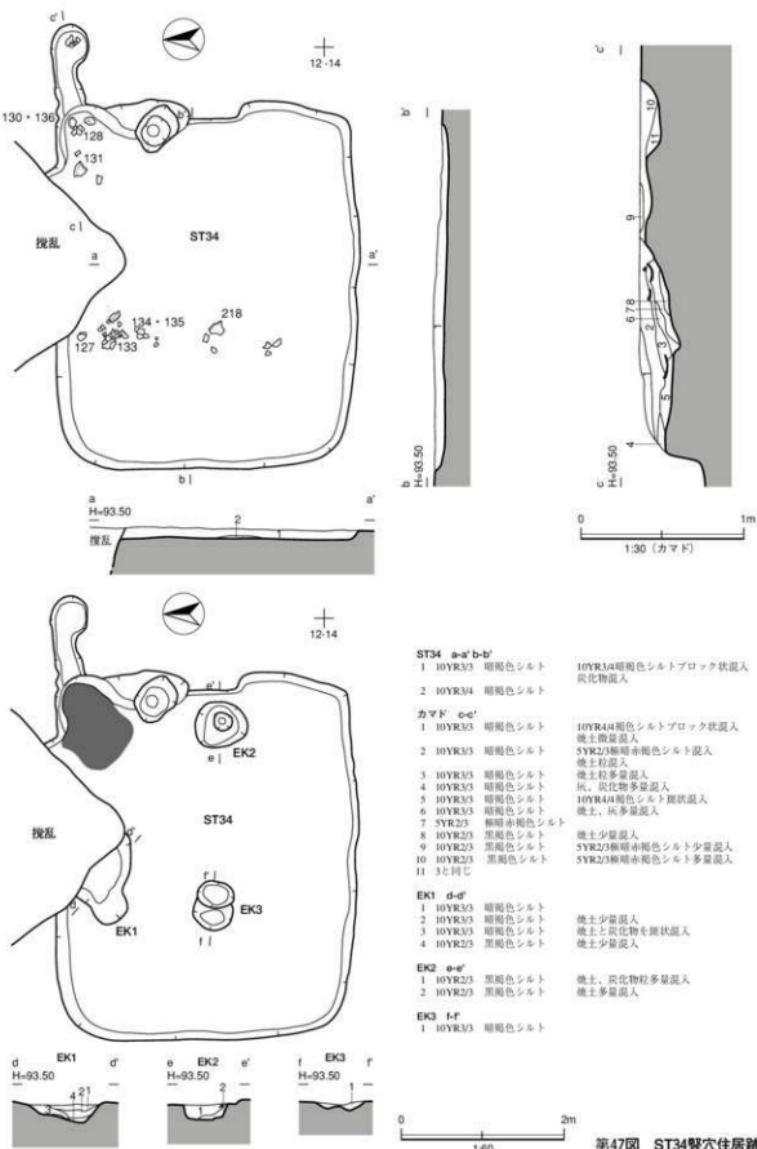
EK4 i-i'

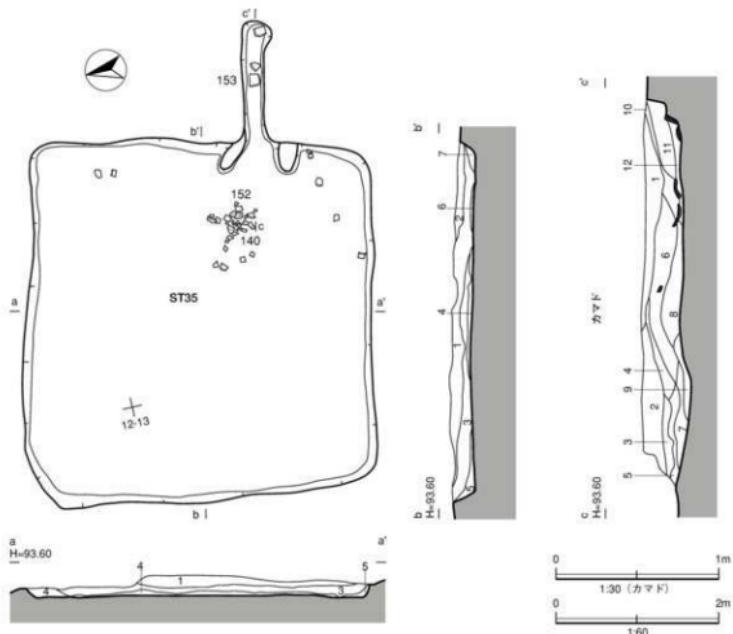
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト
2 10YR4/3 に於いて黒褐色シルト
- 10YR4/3に於いて黒褐色シルト斑状混入、他土、炭化物、ブロック状混入
10YR3/3暗褐色シルト混入 炭化物粒混入

第45図 ST27堅穴住居跡（2）

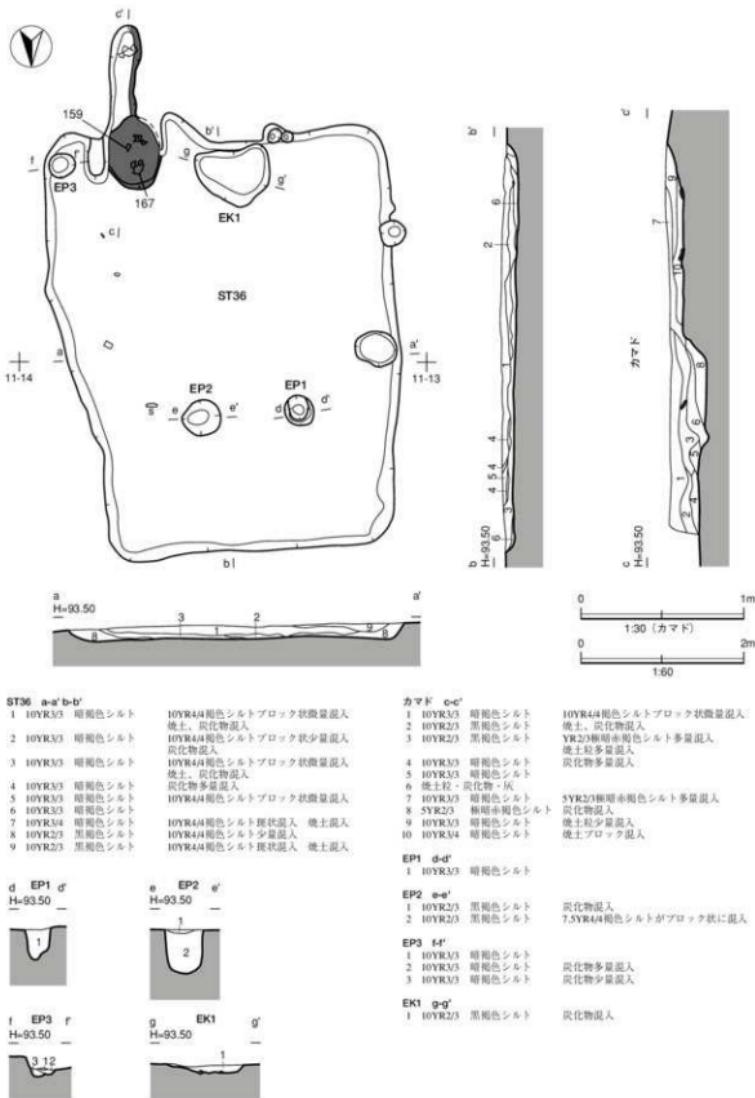


第46図 ST28豊穴住居跡

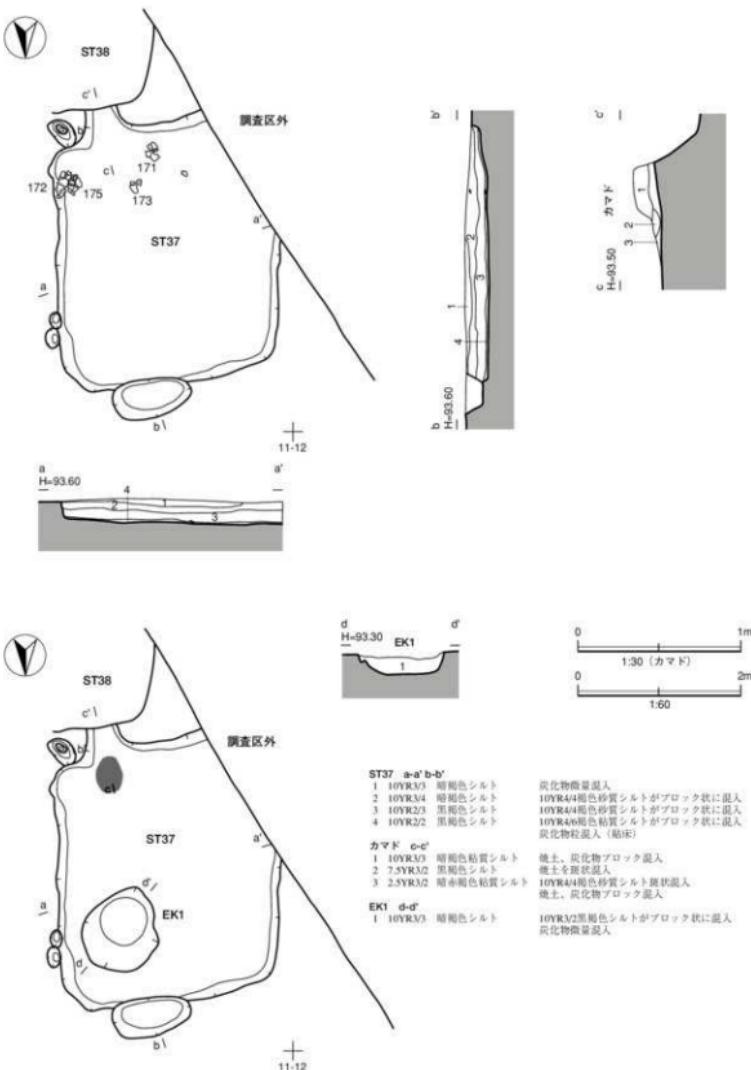




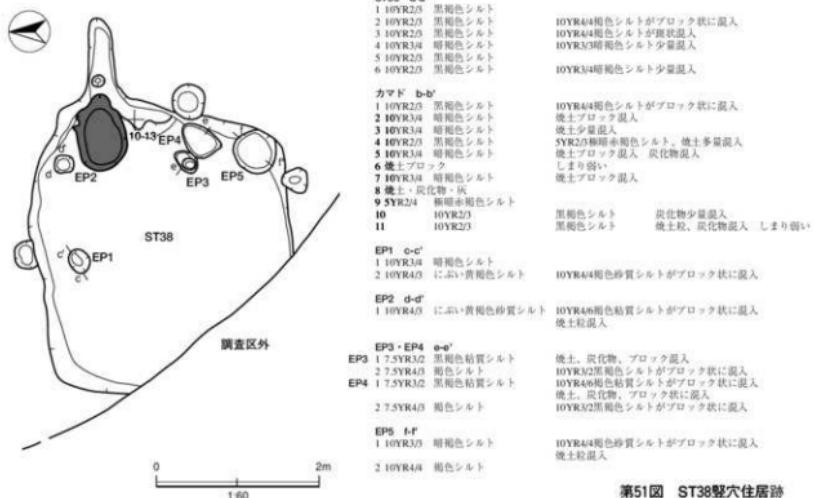
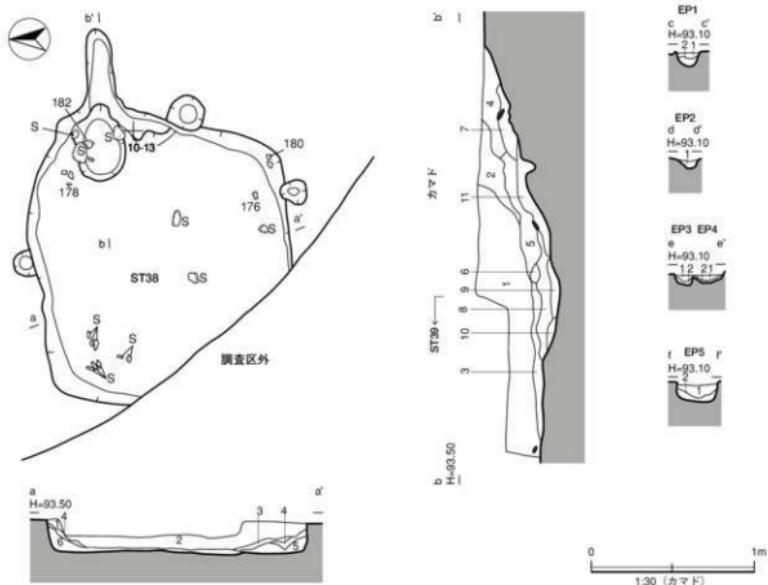
第48図 ST35整穴住居跡



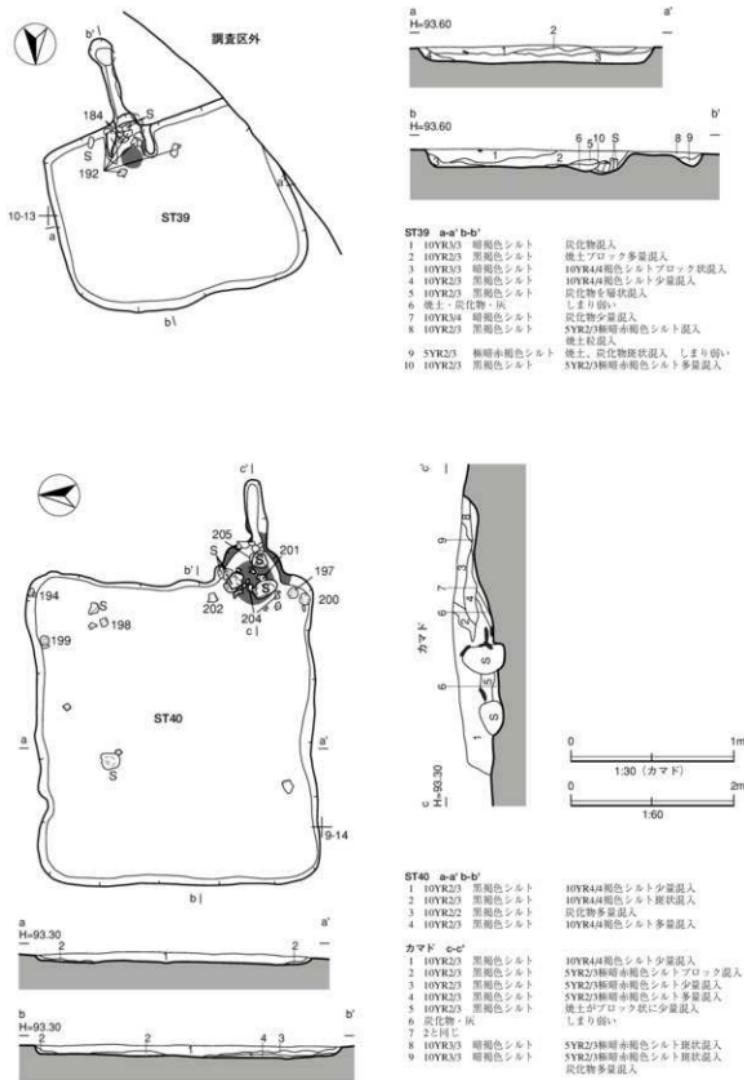
第49図 ST36腎穴住居跡



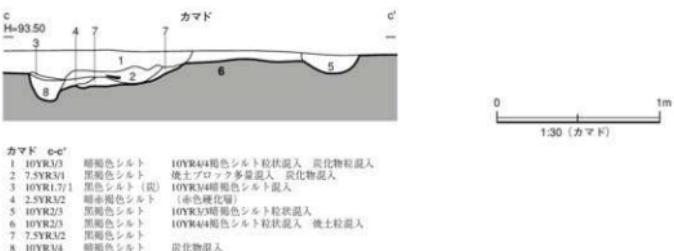
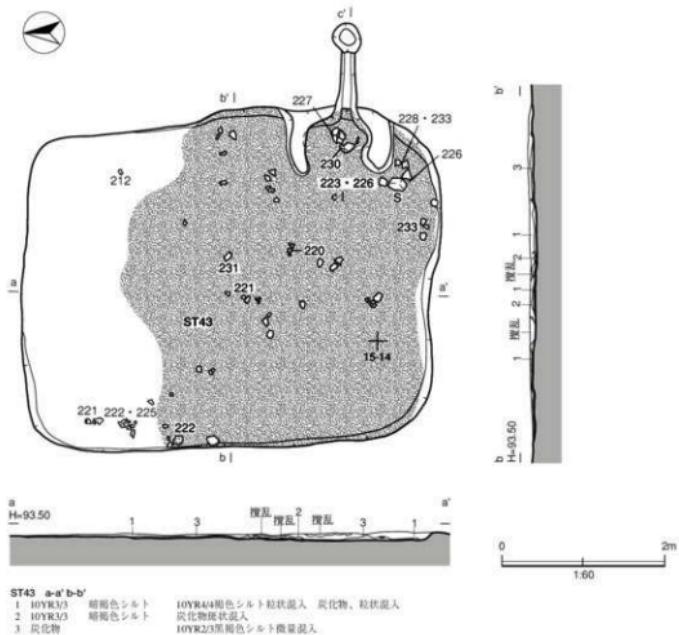
第50図 ST37整穴住居跡



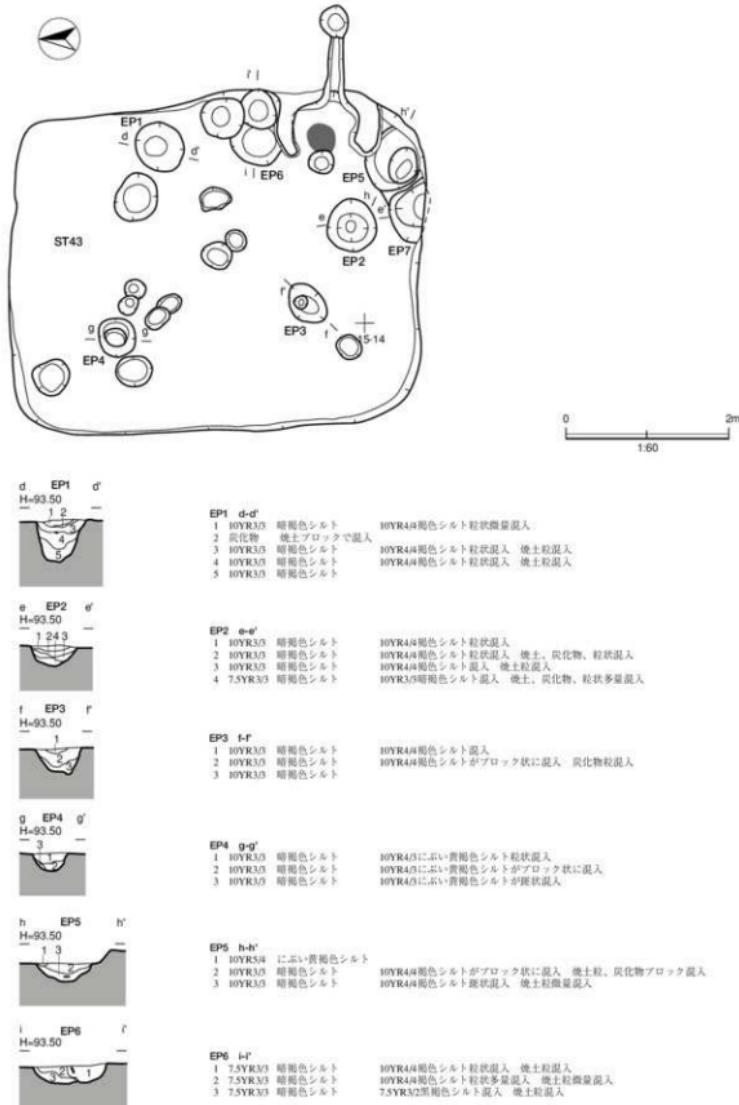
第51図 ST38豎穴住居跡



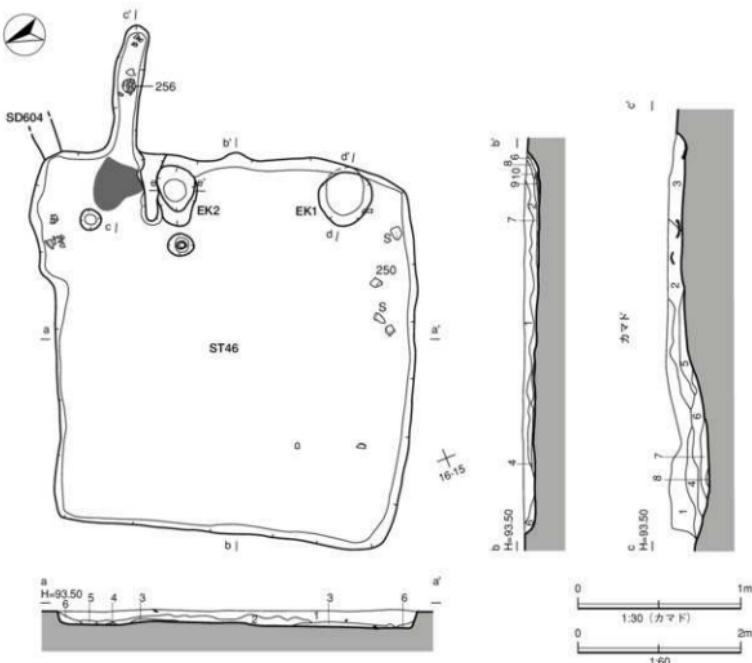
第52図 ST39・40竪穴住居跡



第53図 ST43竪穴住居跡（1）

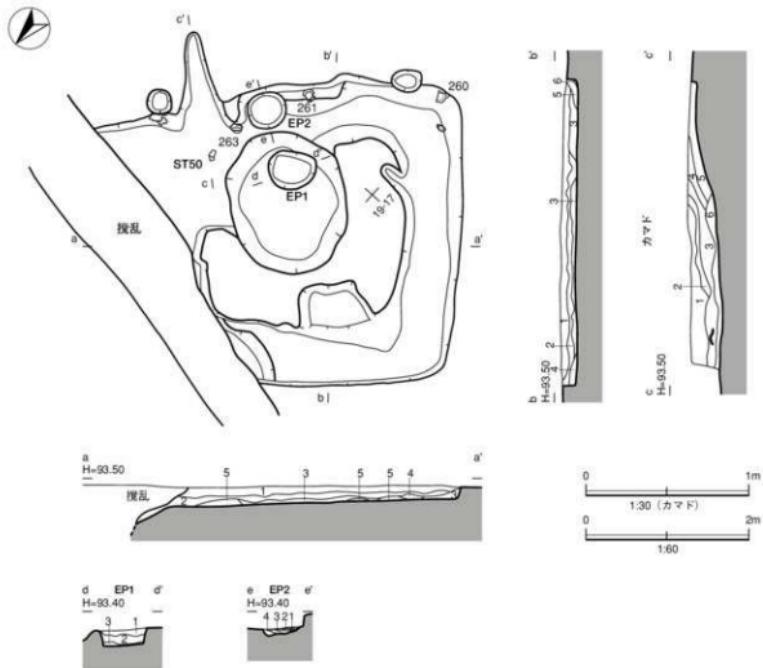


第54図 ST43堅穴住居跡（2）



EK1 d-d'		ET46 a-a' b-b'	
H=93.40	=	1 IOYR2/0 單色シルト	10YR4/4褐色シルトがブロック状に混入 水化物混入
1 3	=	2 IOYR2/0 單色シルト	10YR4/4褐色シルト
Z	=	3 IOYR2/0 單色シルト	10YR4/4褐色シルト
		4 IOYR4/4 褐色シルト	褐色土、風化物混入
		5 3同じ	10YR4/4褐色シルト斑状混入
		6 IOYR3/0 單色シルト	褐色土、風化物混入
		7 IOYR3/0 單色シルト	褐色土、風化物混入
		8 IOYR3/0 單色シルト	10YR4/4褐色シルト少量混入
		9 IOYR3/0 單色シルト	風化物多量混入
		10 IOYR3/0 單色シルト	褐色土、風化物多量混入
EK2 e-e'		カマド c-c'	
H=93.40	=	1 IOYR2/0 單色シルト	10YR4/4褐色シルトがブロック状に混入
24321	=	2 IOYR2/0 單色シルト	褐色土ブロック混入
30523	=	3 IOYR3/0 單色シルト	SYR2/4褐色赤褐色シルト微量混入
		4 IOYR2/0 黒褐色シルト	褐色土ブロック少量化混入
		5 IOYR2/0 黑褐色シルト	SYR2/4褐色赤褐色シルトがブロック状に混入
		6 IOYR2/0 黑褐色シルト	SYR2/4褐色赤褐色シルト、褐色土ブロック、風化物混入
		7 IOYR3/0 單色シルト	
		8 黄土	
EK3 d-d'		均一な層 積ししまる	
		1 IOYR2/0 黑褐色粘質シルト	均一な層 積ししまる
		2 IOYR3/0 單色シルト	IOYR4/4褐色シルトがブロック状に混入、褐色土、風化物ブロック平面
		3 IOYR2/0 黑褐色シルト	IOYR3/0 單色シルト、IOYR4/4褐色シルト混入
EK2 e-e'		均一な層 積ししまる	
		1 IOYR2/0 單色シルト	均一な層 積ししまる
		2 IOYR2/0 黑褐色シルト	IOYR6/2褐色シルトを混入、地材料。風化物ブロックを混入
		3 IOYR4/4 褐色シルト	IOYR2/2黑褐色シルトと斑状混入
		4 IOYR2/2 黑褐色シルト	IOYR4/4褐色シルトを混入、地材料、風化物混入

第55図 ST46腎穴住居跡

**ST50 a-a' b-b'**

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 SYR3/1 黒褐色シルト | 灰黄褐色シルト粒状混入、植物根混入 |
| 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 灰黄褐色シルト多量混入 |
| 3 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 2より灰黄褐色シルト多量混入 |
| 4 SYR3/1 黑褐色シルト | 灰黄褐色シルト粒状混入、植物根混入 |
| 5 H0YR4/2 灰黄褐色シルト | 黑褐色シルト粒状混入 |
| 6 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 灰黄褐色シルトブロック混入 |

カマド c-c'

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 SYR3/1 黑褐色シルト | 灰黄褐色シルト粒状混入、砂土混入 |
| 2 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 灰黄褐色シルト多量混入 |
| 3 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 砂土粒混入 |
| 4 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 砂土ブロック混入 |
| 5 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 砂土微細混入 |
| 6 7.5YR3/1 黑褐色シルト | 砂土、炭化物多量混入 |

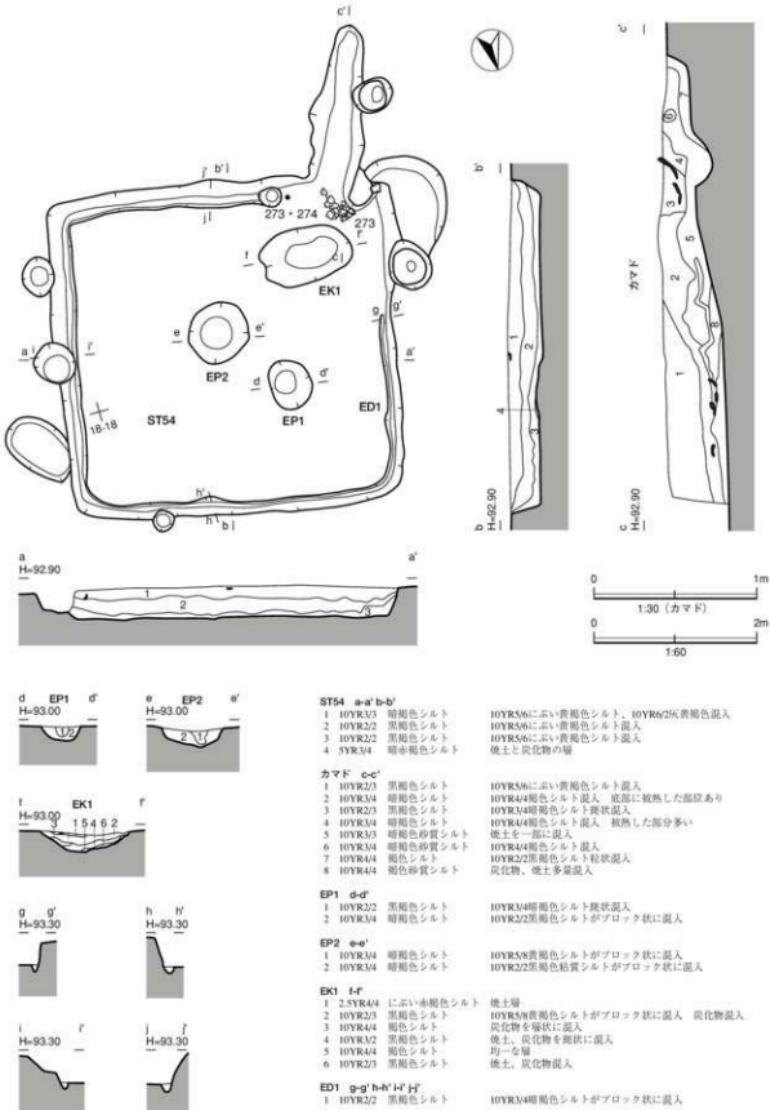
EP1 d-d'

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 H0YR2/2 黑褐色シルト | 砂土、炭化物、ブロック混入 |
| 2 H0YR3/4 研磨色シルト | 砂土をまばらに混入 |
| 3 H0YR3/0 灰褐色シルト | 10YR4/4灰色シルト斑状混入 |

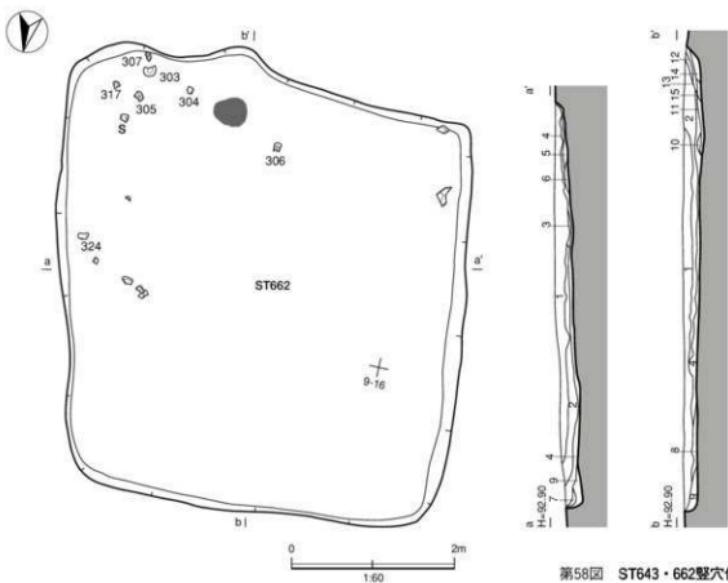
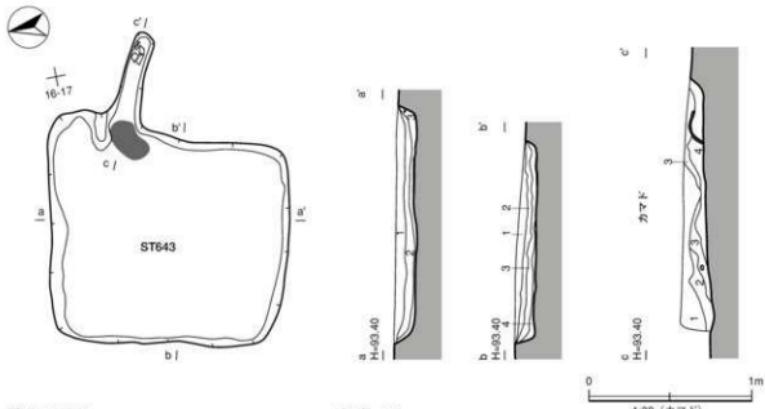
EP2 e-e'

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 H0YR2/2 黑褐色シルト | 砂土、炭化物、ブロック状混入 |
| 2 H0YR3/4 研磨色シルト | 砂土をまばらに混入 |
| 3 H0YR2/2 黑褐色シルト | 10YR4/4灰色シルト斑状混入 |
| 4 H0YR3/0 灰褐色シルト | |

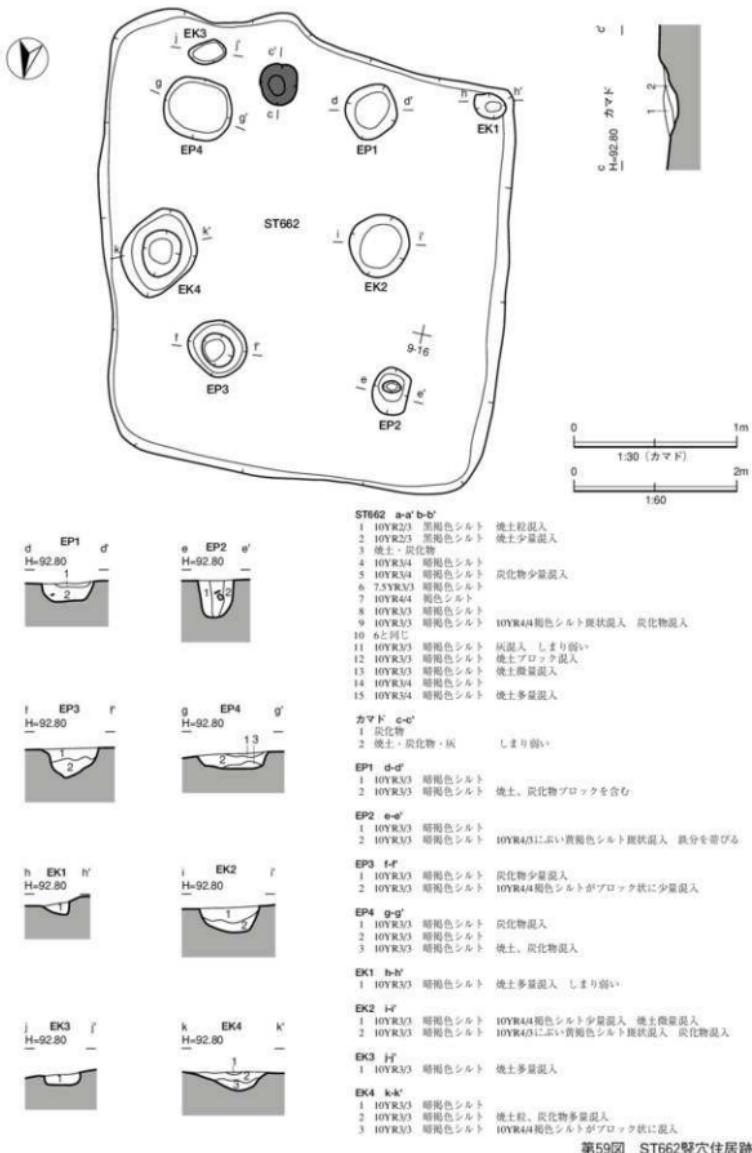
第56図 ST50整穴住居跡

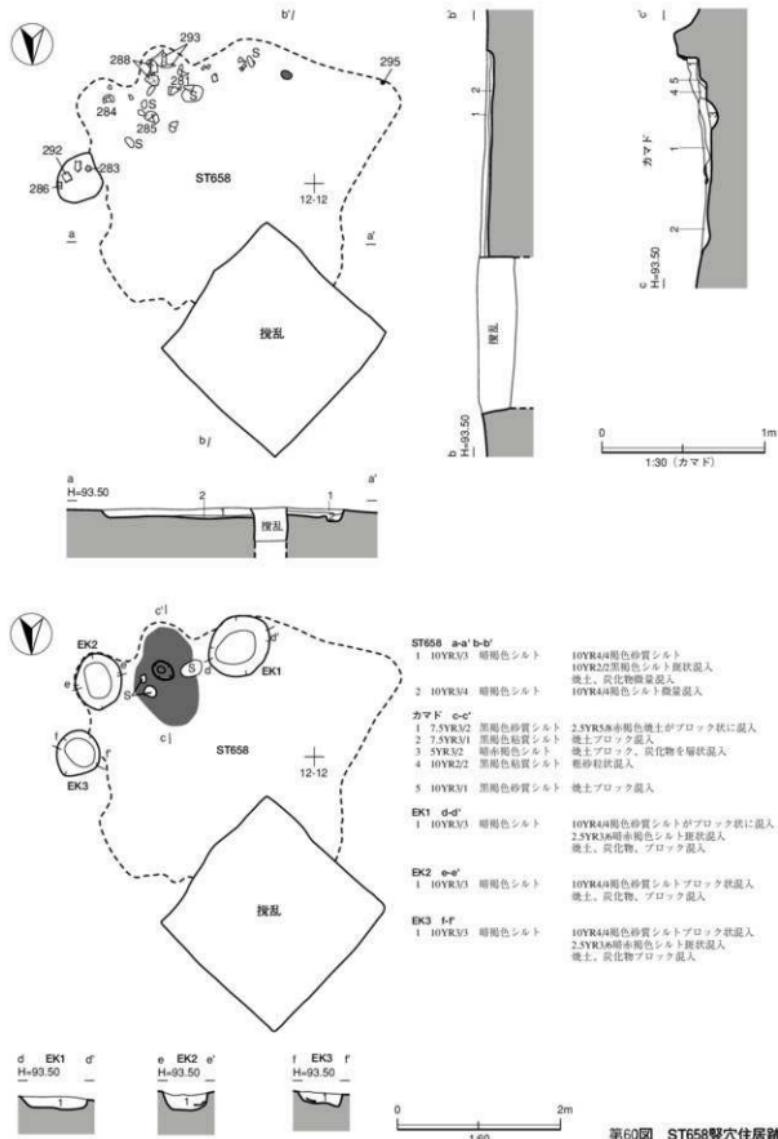


第57図 ST54豎穴住居跡

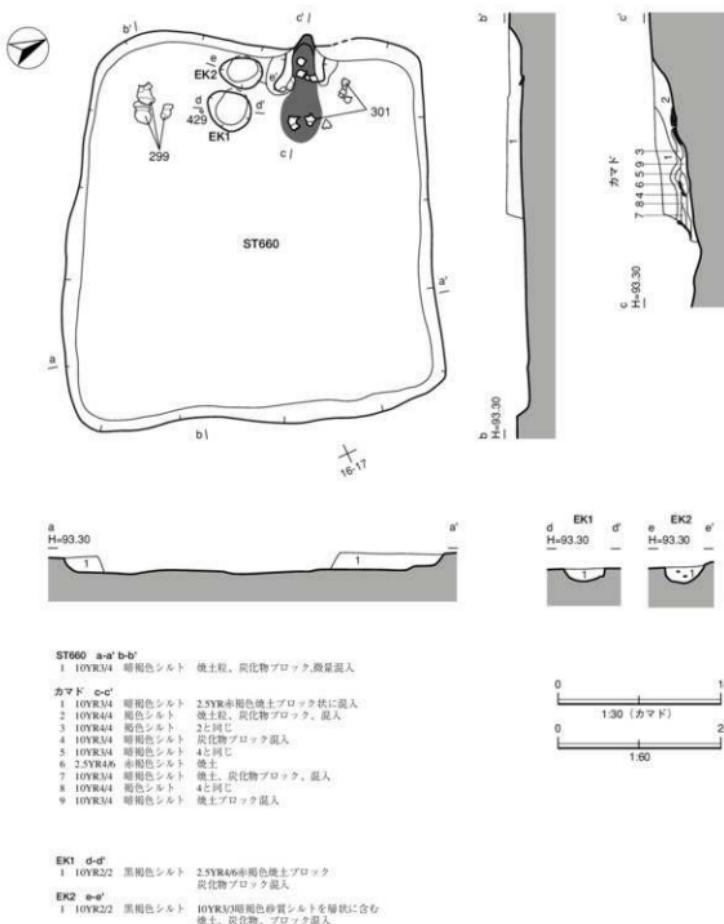


第58図 ST643・662竪穴住居跡

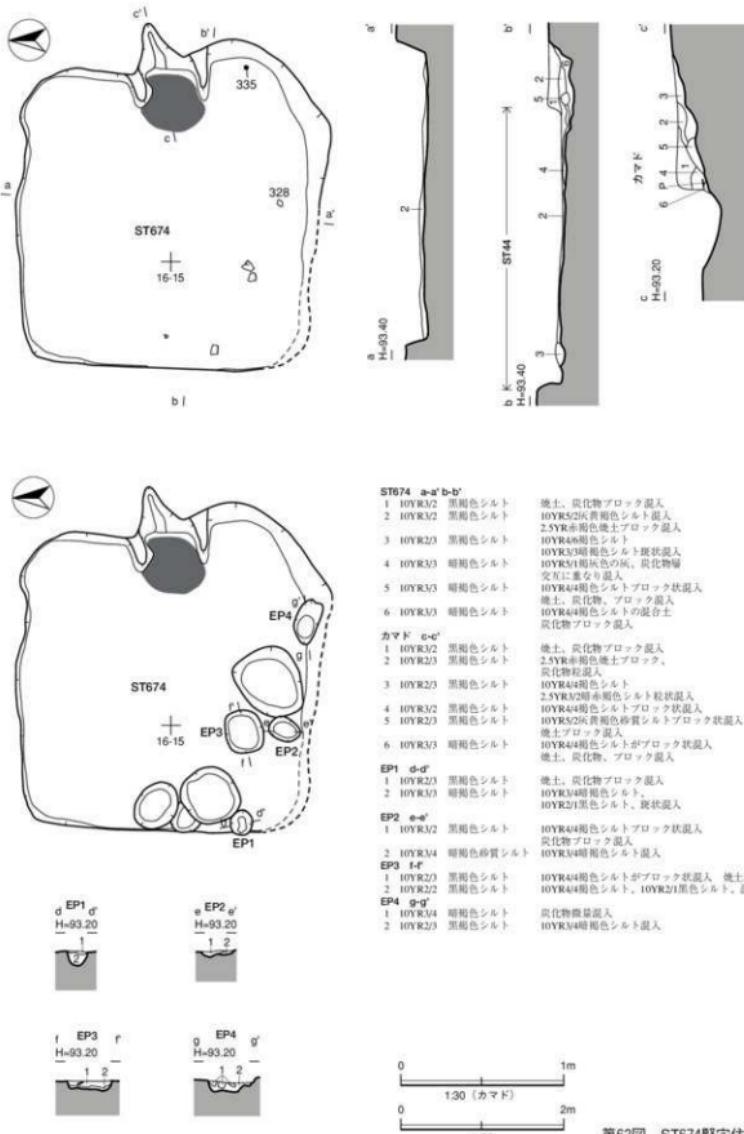




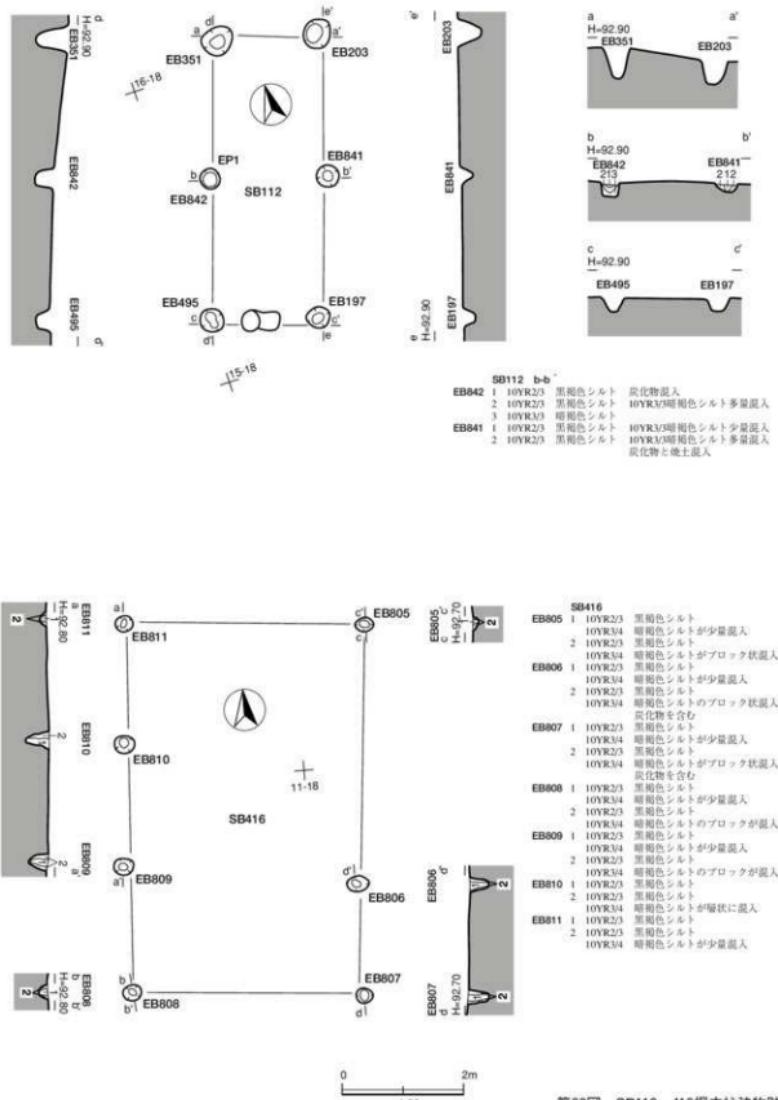
第60図 ST658竪穴住居跡



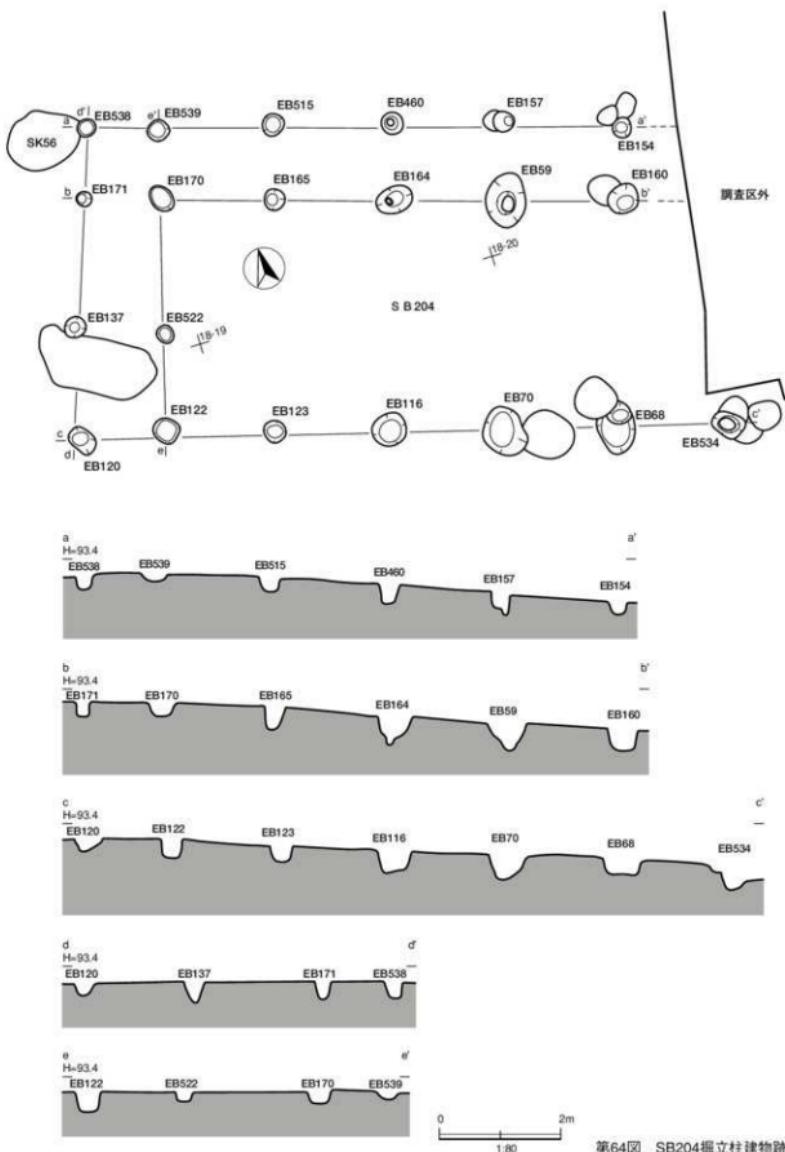
第61図 ST660整穴住居跡



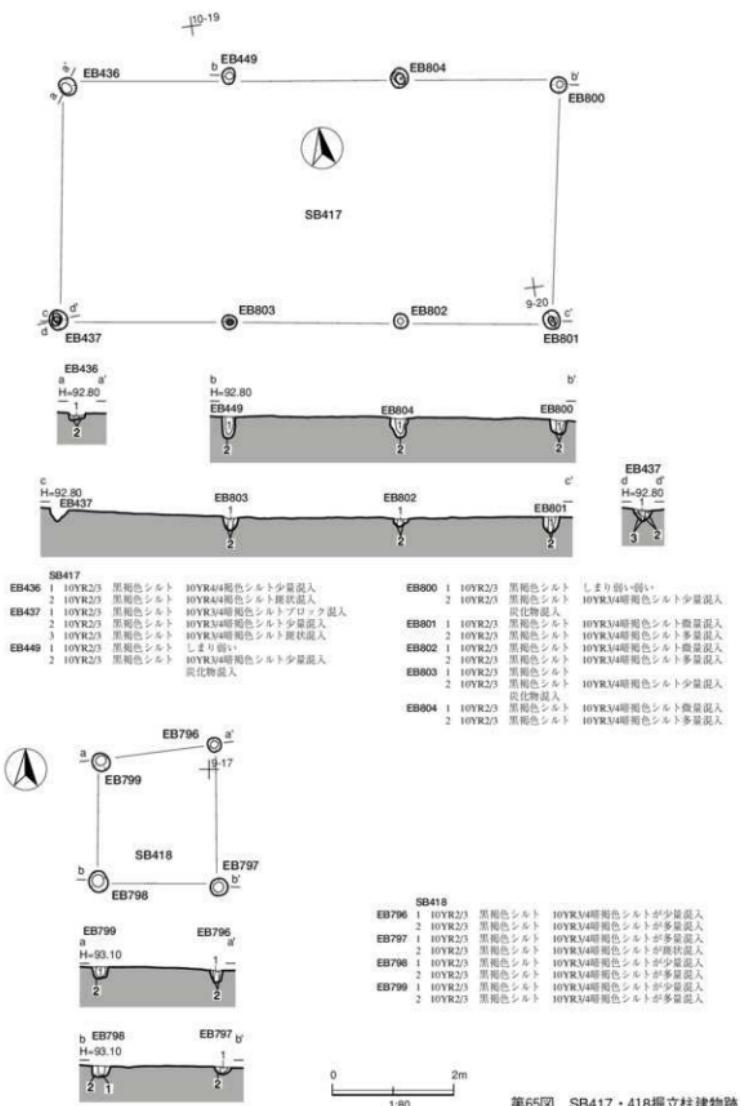
第62図 ST674竪穴住居跡



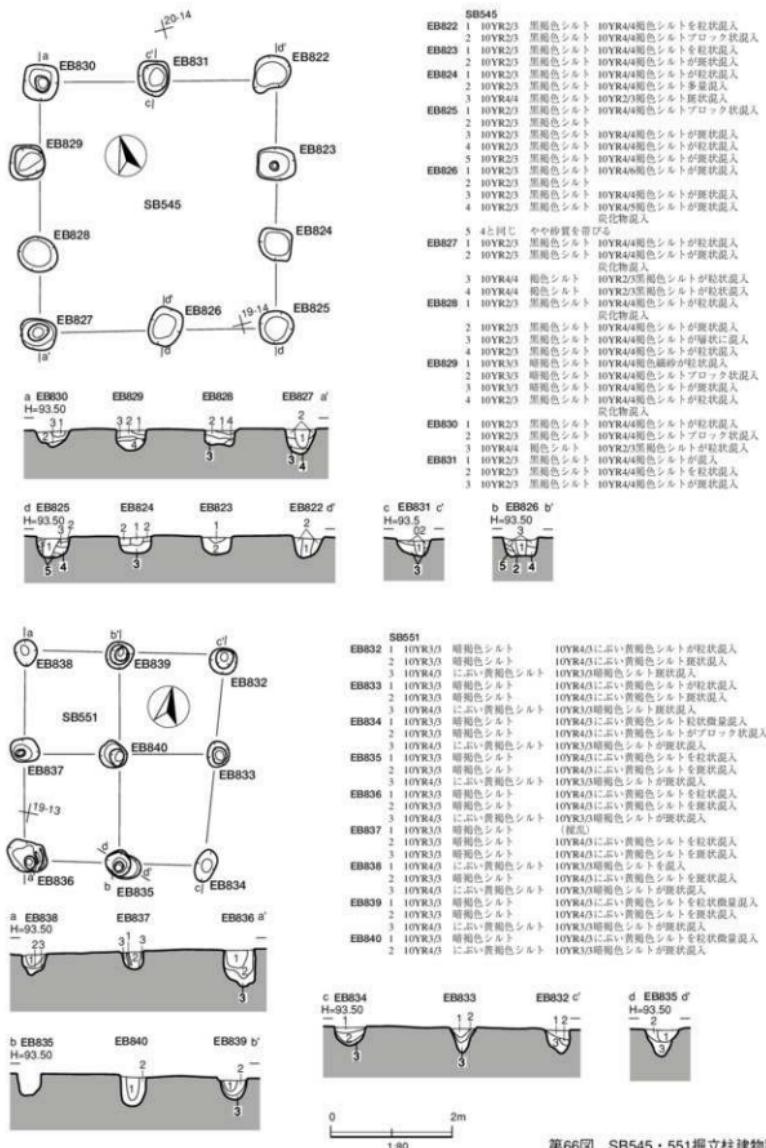
第63図 SB112・416掘立柱建物跡



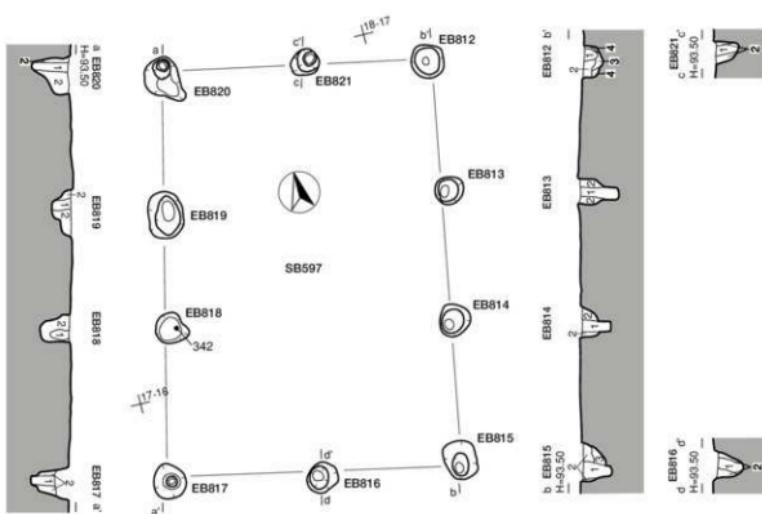
第64図 SB204掘立柱建物跡



第65図 SB417・418掘立柱建物跡



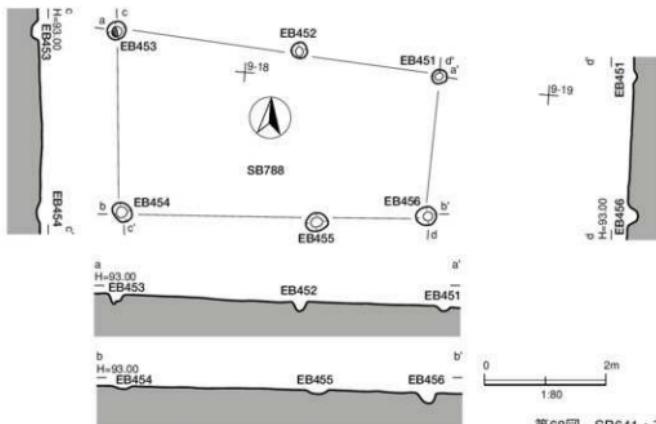
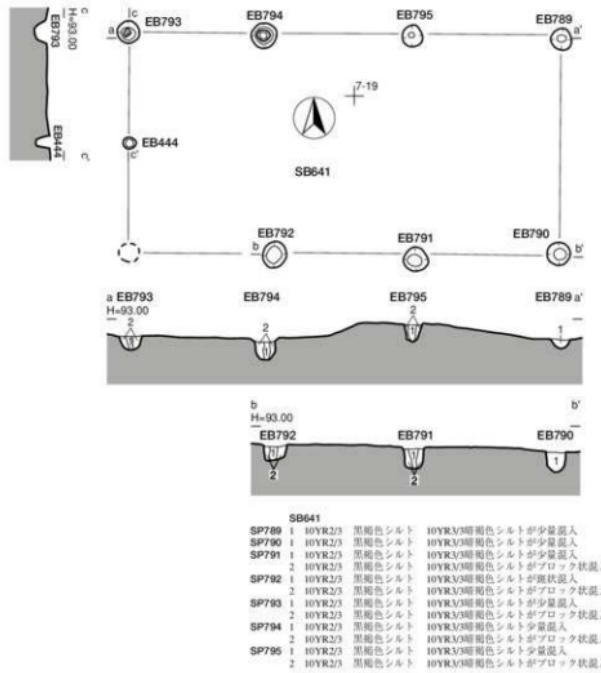
第66図 SB545・551掘立柱建物跡



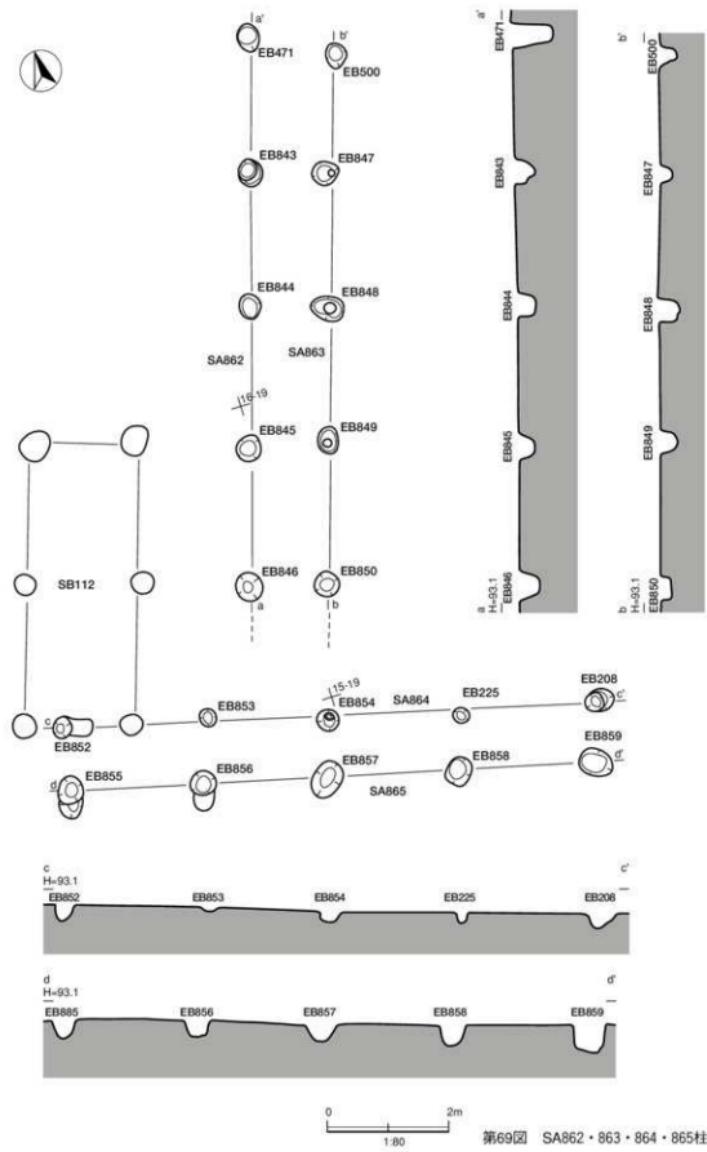
SB597		
EB812	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	3	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/明褐色シルトを少量混入
		HOYR/3/明褐色シルトを多量混入
EB813	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/明褐色シルトがブロック状混入(柱根)
EB814	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/3/明褐色シルトがブロック状混入
EB815	1	EB1/2/2同じ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトが少量混入
		HOYR/3/4明褐色シルトが多量混入
EB816	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトを少量混入
EB817	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトが少量混入
EB818	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトが少量混入
EB819	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトを少量混入
EB820	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトを少量混入
EB821	1	HOYR/2/ 黒褐色シルト
	2	HOYR/2/ 黒褐色シルト
		HOYR/3/4明褐色シルトを少量混入

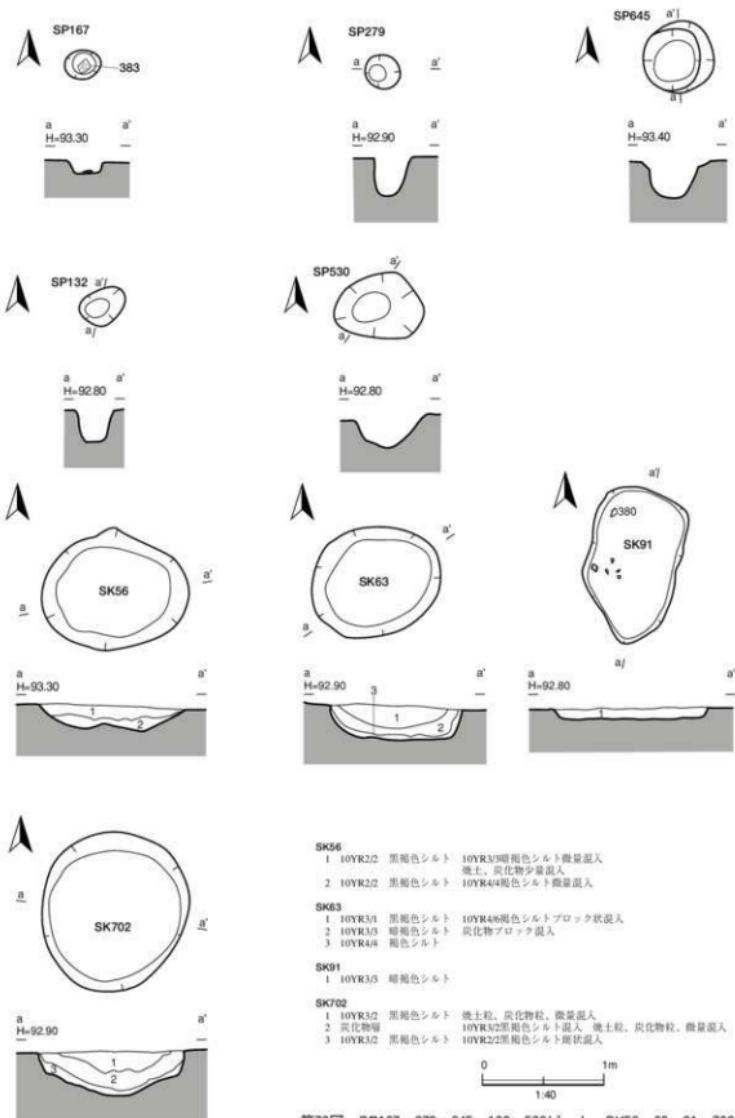
0
1.80
2m

第67図 SB597掘立柱建物跡

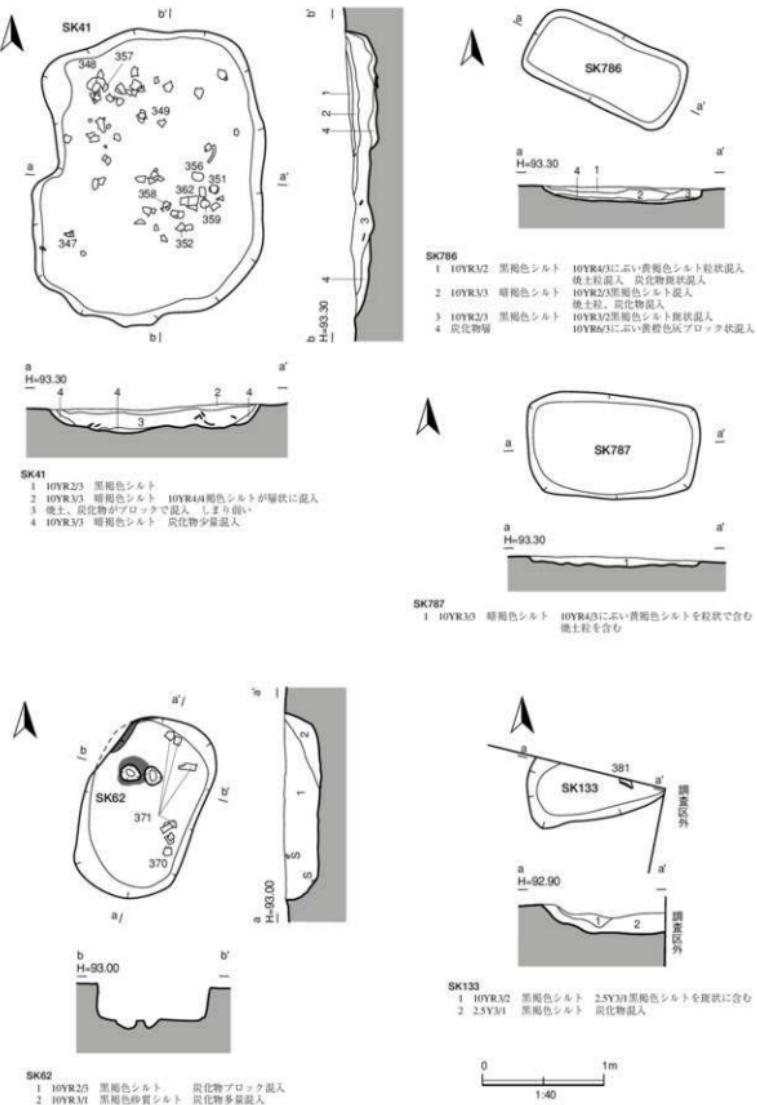


第68図 SB641・788掘立柱建物跡

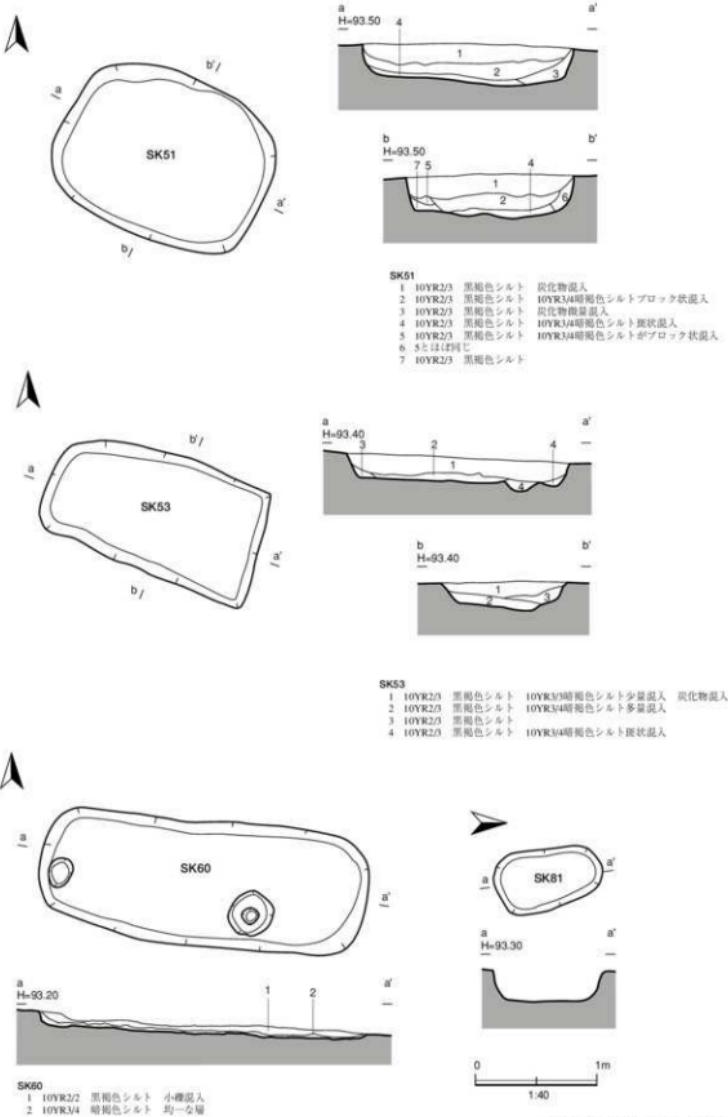




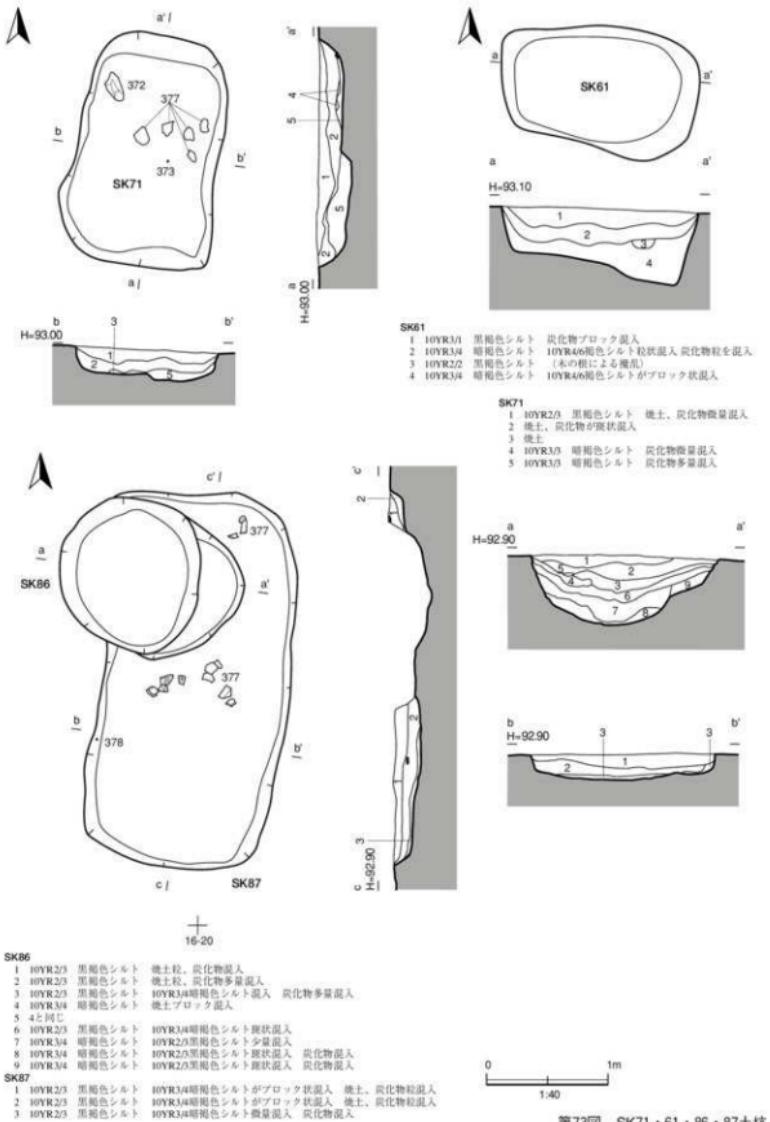
第70図 SP167・279・645・132・530ピット、SK56・63・91・702土坑



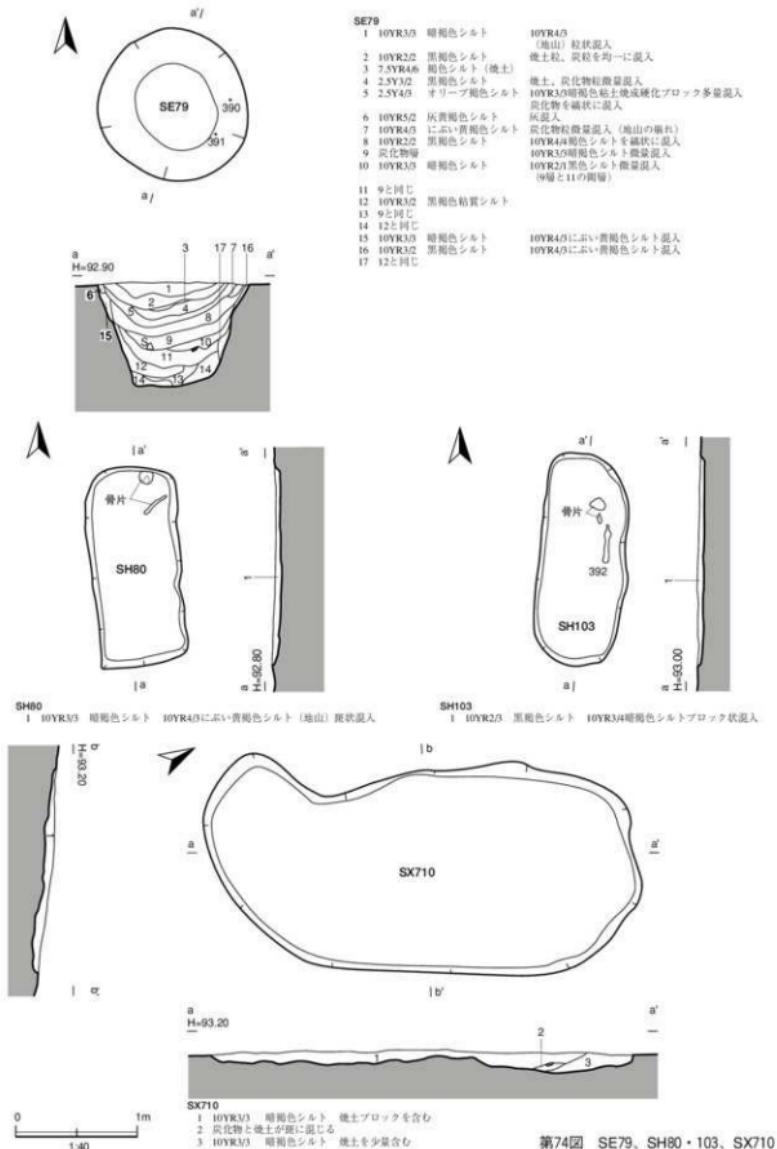
第71図 SK41・786・787・62・133土坑

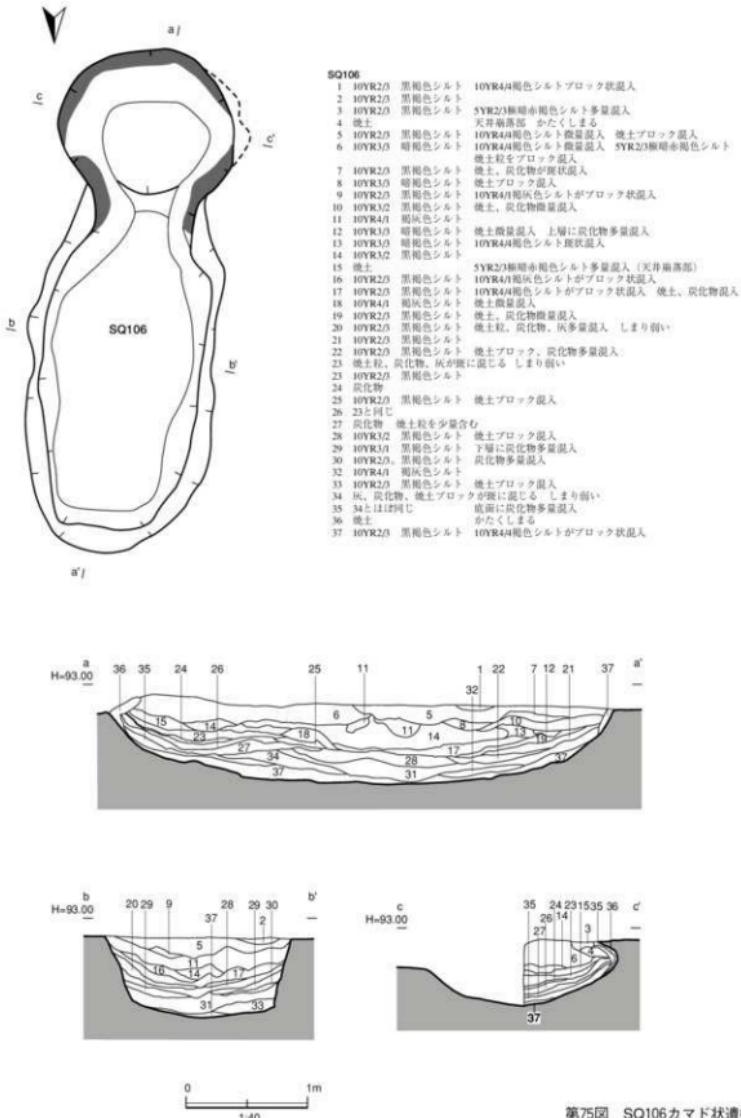


第72図 SK51・53・60・81土坑

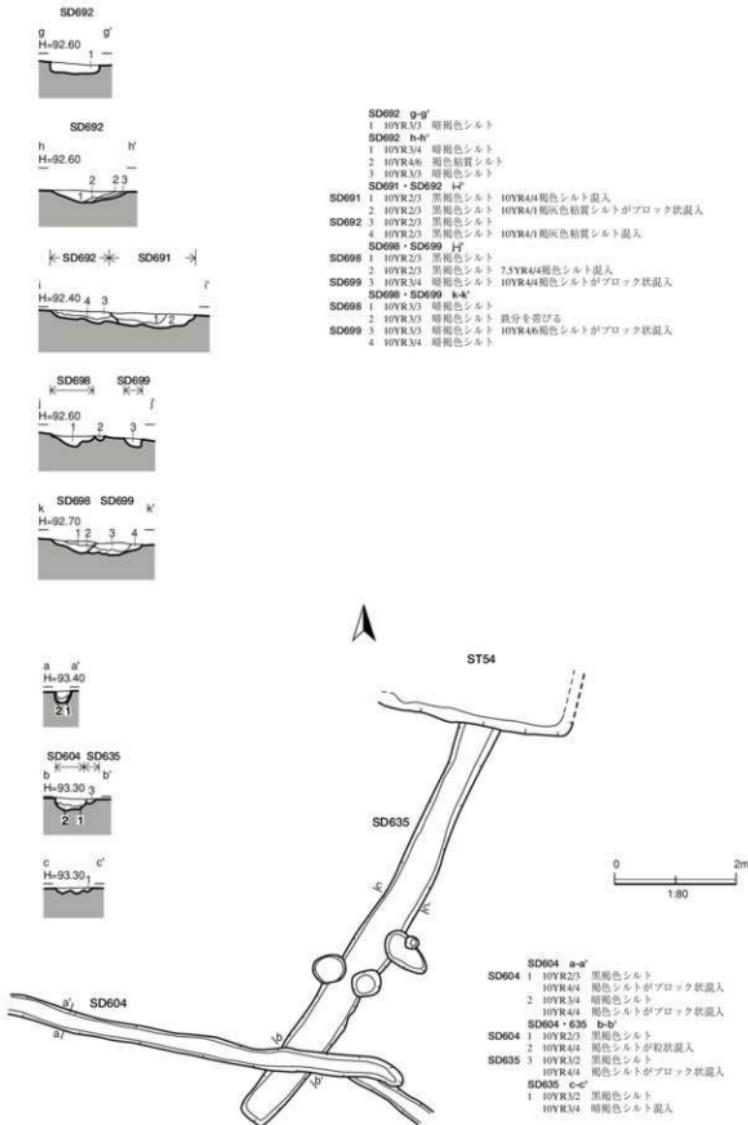


第73図 SK71・61・86・87土坑

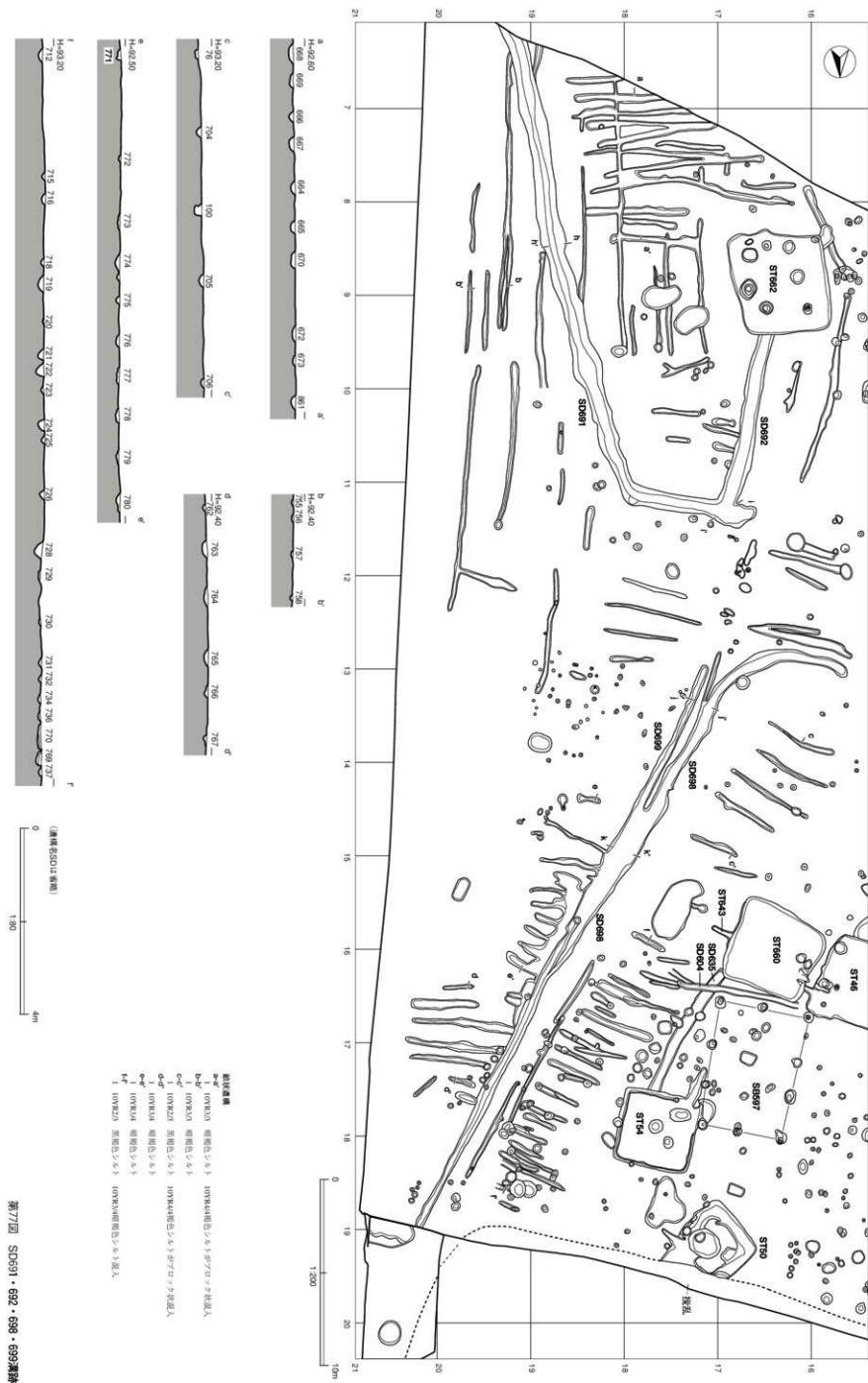


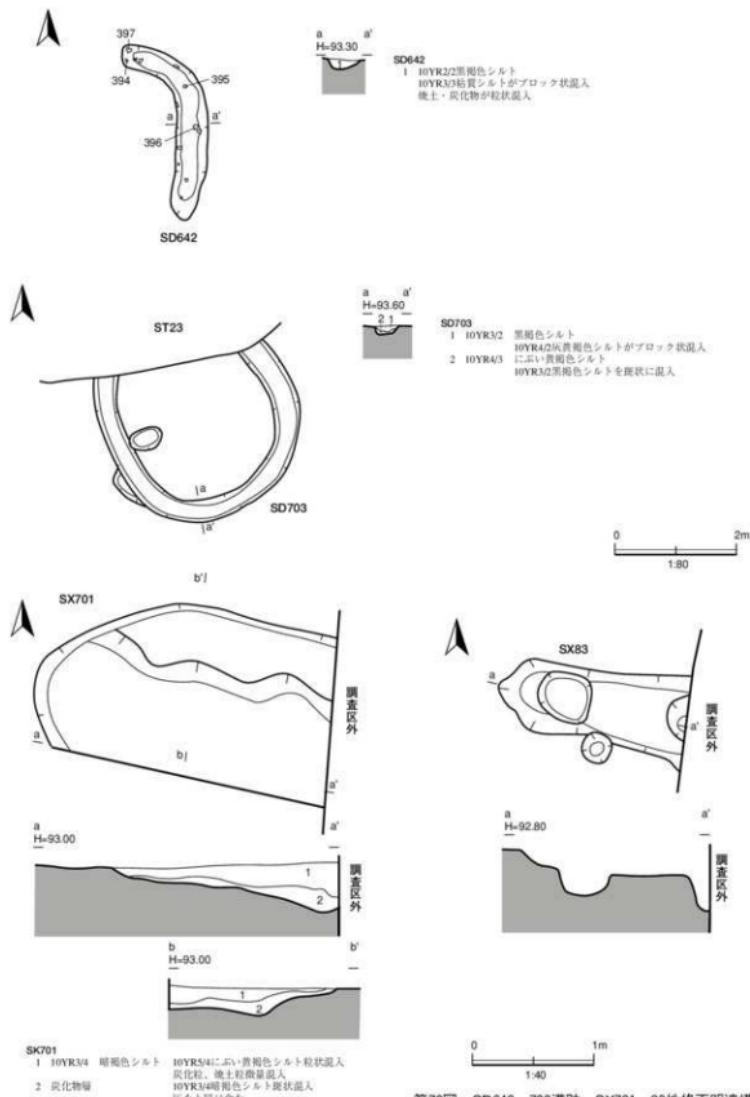


第75図 SQ106カマド状遺構

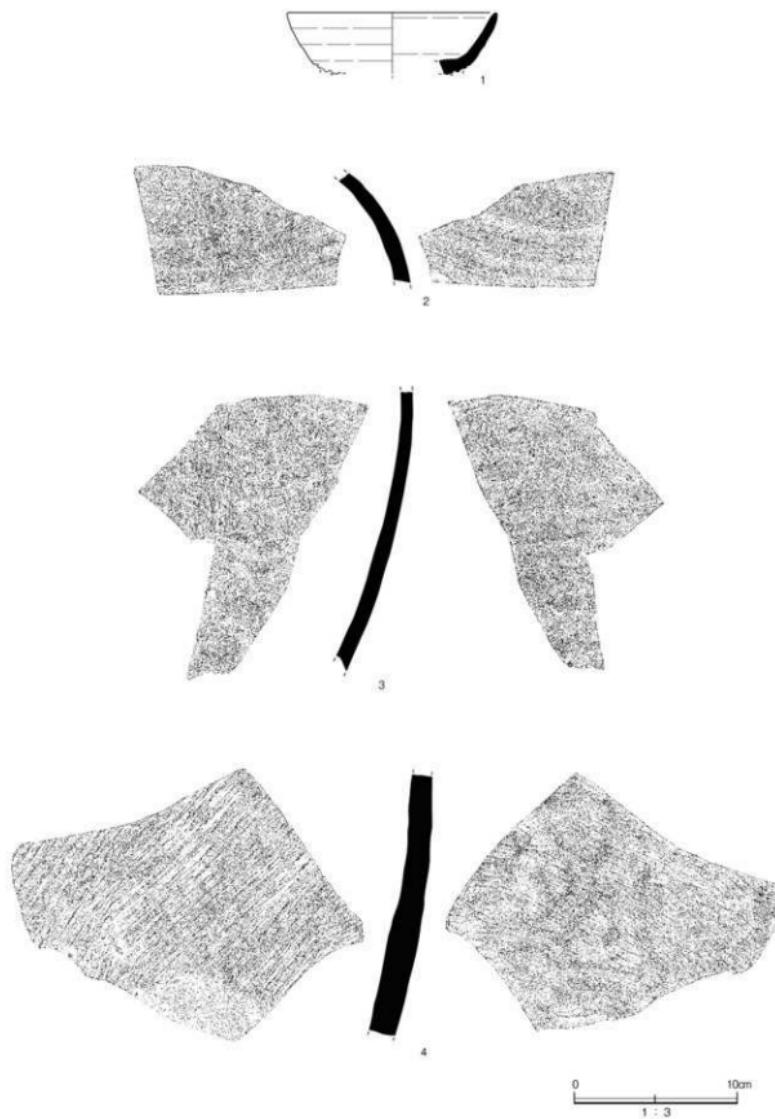


第76図 SD604・635溝跡

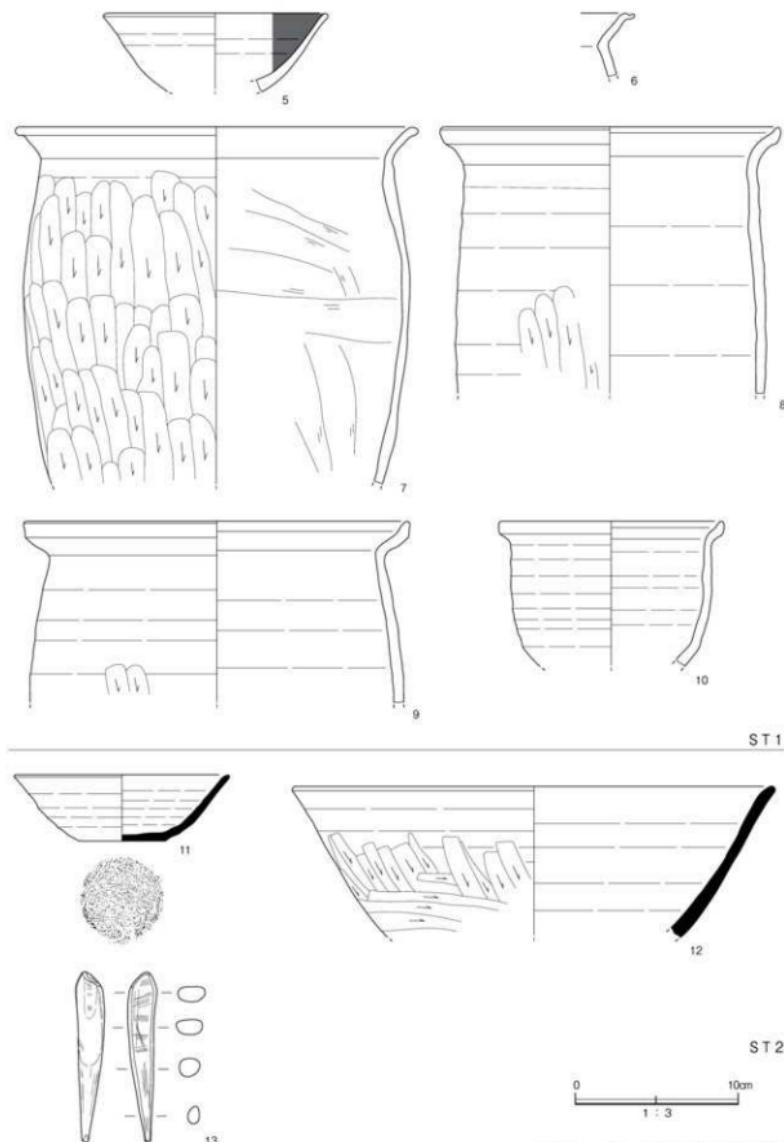




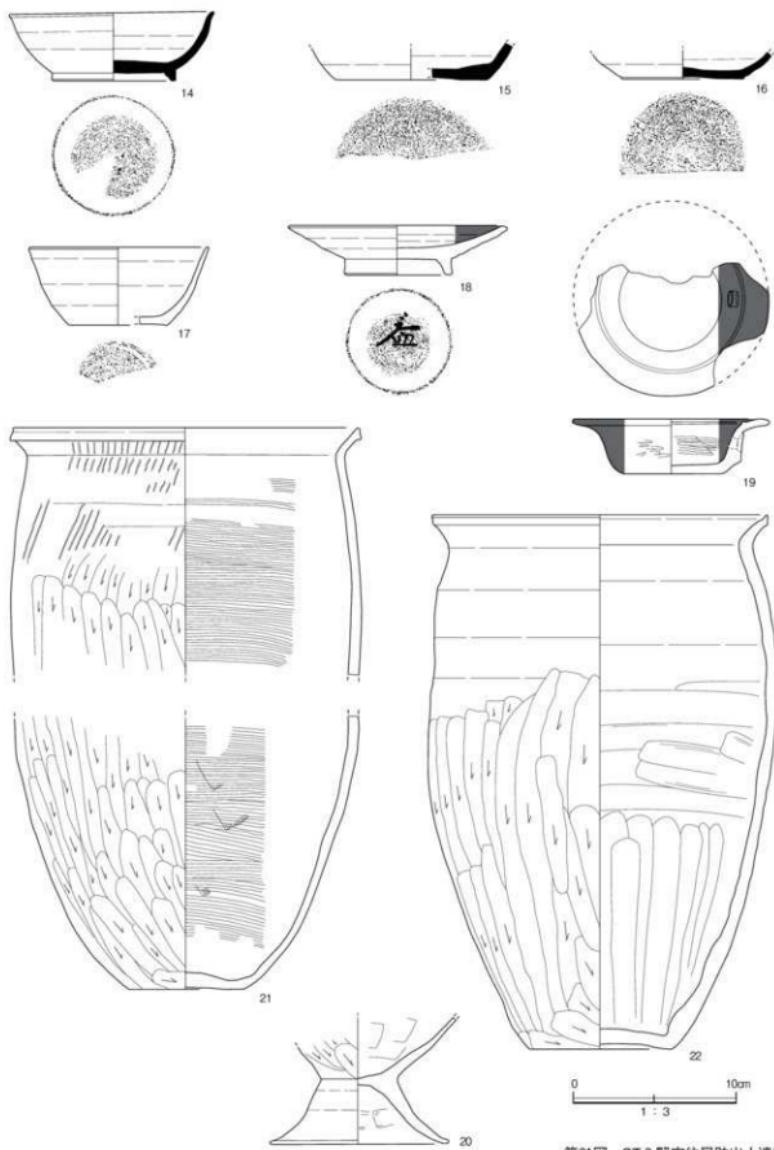
第78図 SD642・703溝跡、SX701・83性格不明遺構



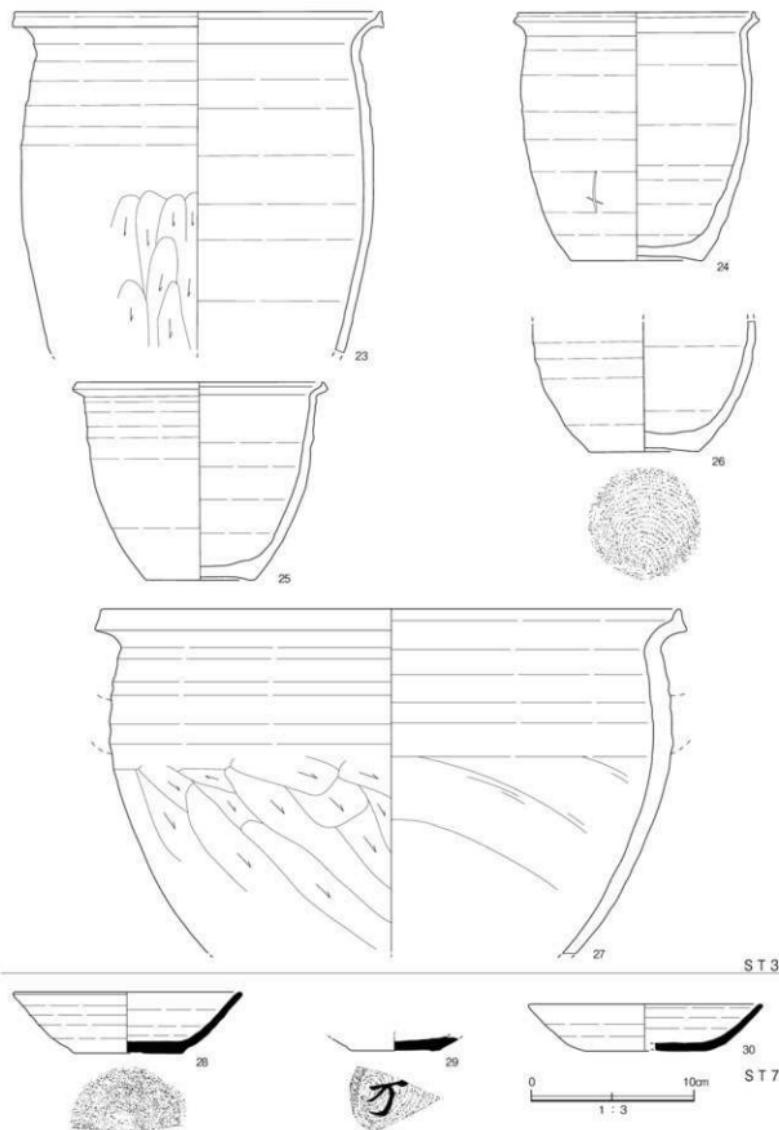
第79図 ST 1 壁穴住居跡出土遺物



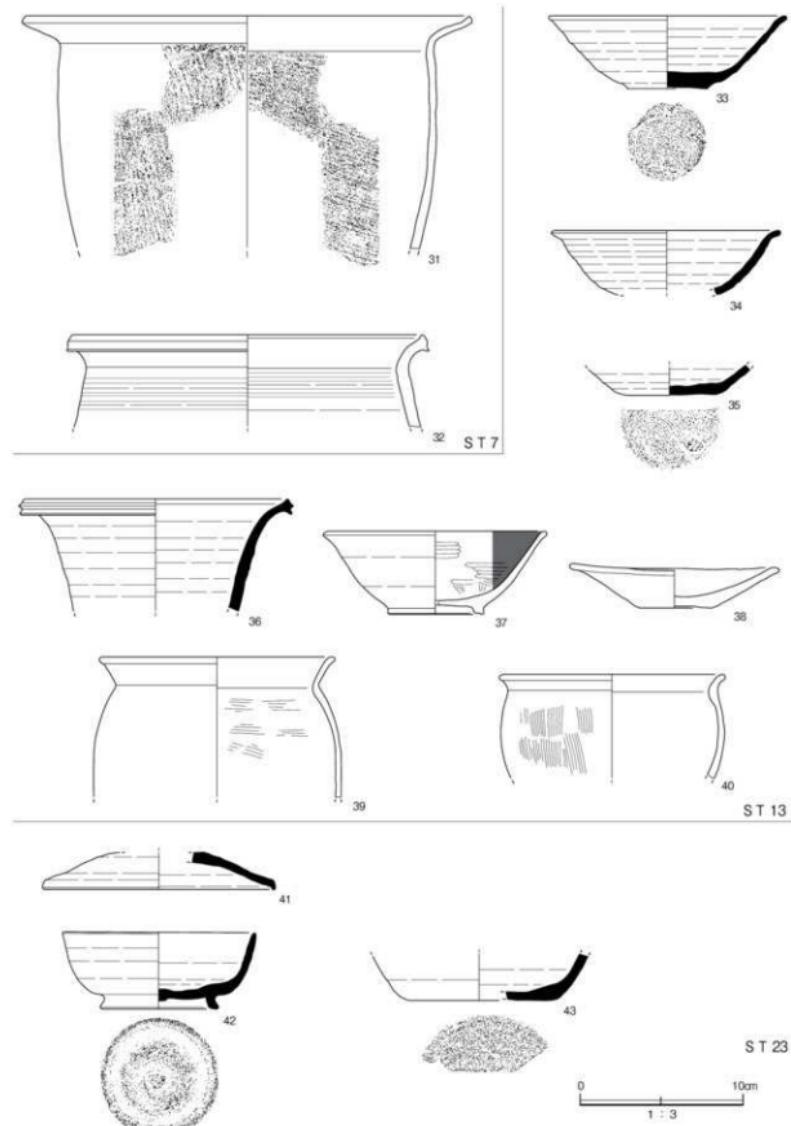
第80図 ST 1・2 穴住居出土遺物



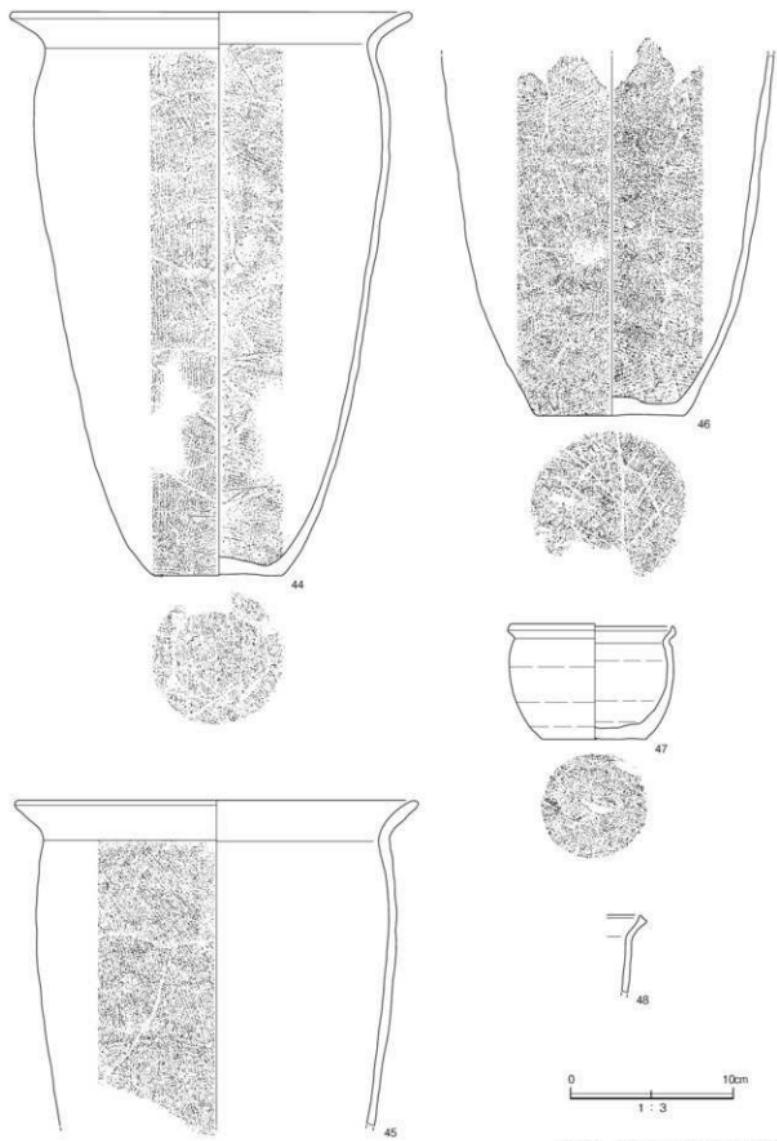
第81図 ST 3 穫穴住居跡出土遺物



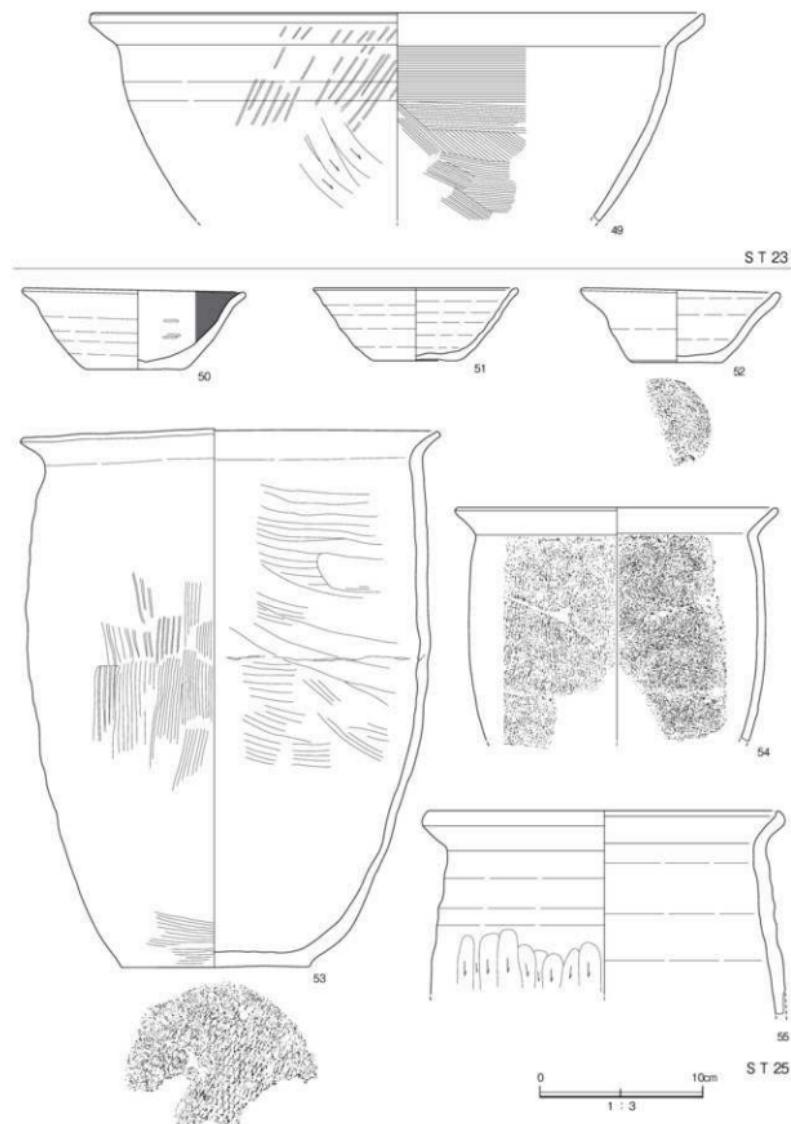
第82図 ST 3・7 穂穴住居跡出土遺物



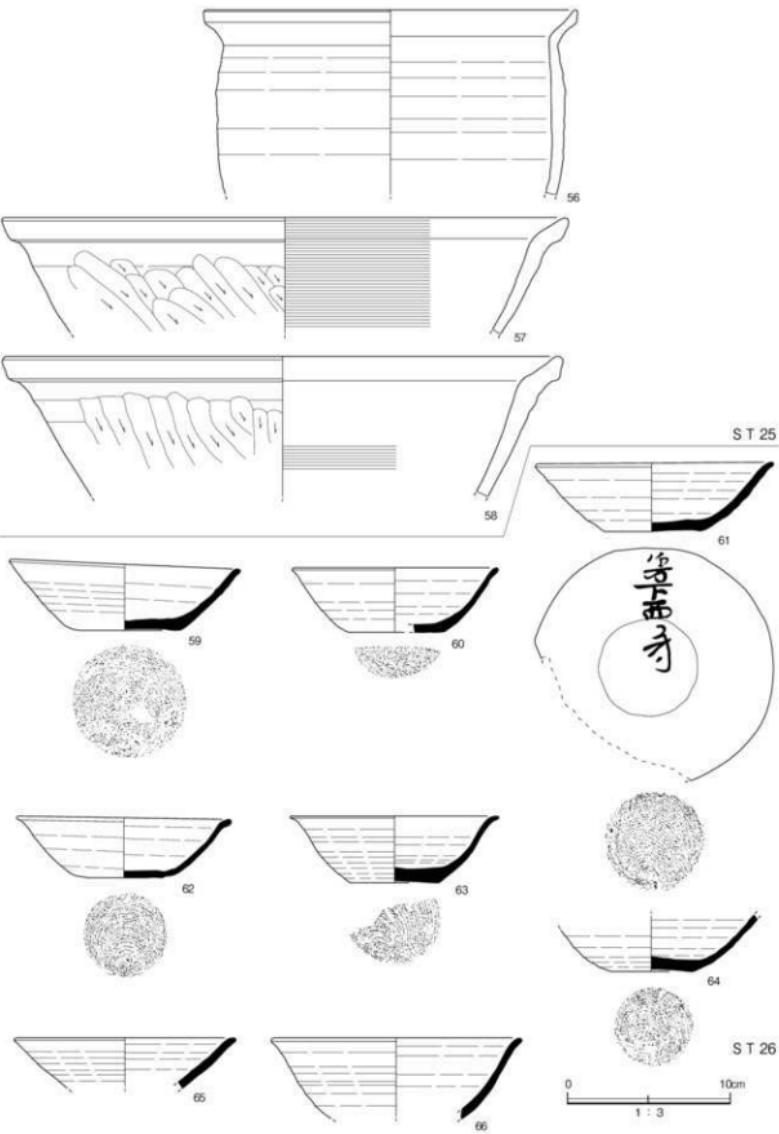
第88図 ST 7・13・23竪穴住居跡出土遺物



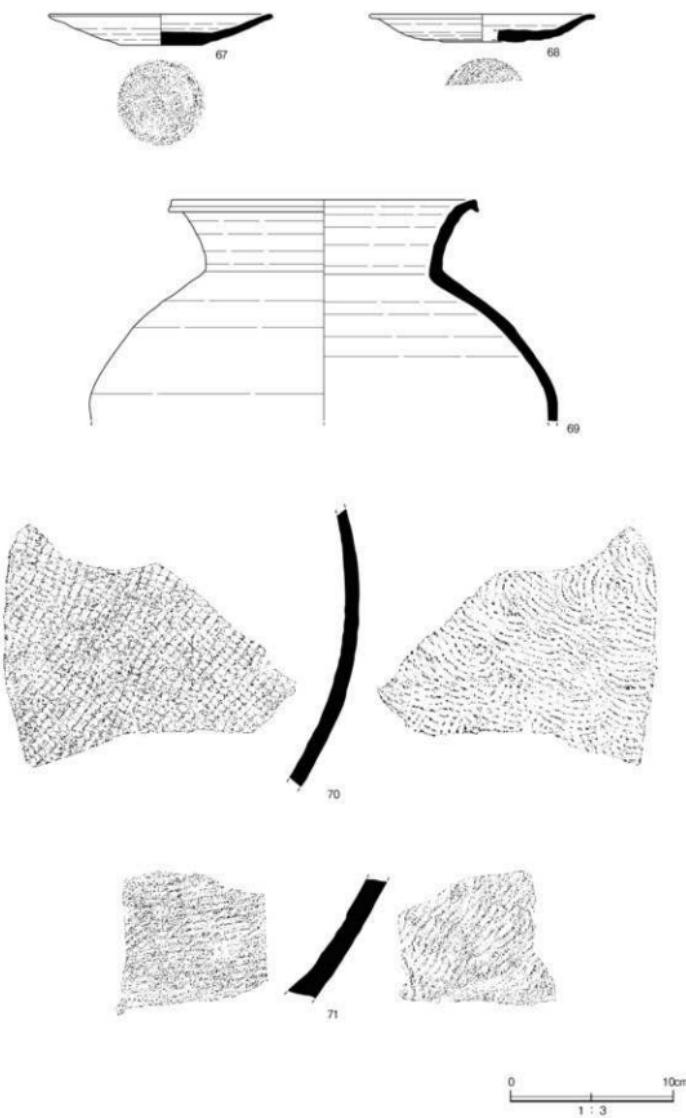
第84図 ST23壁穴住居跡出土遺物



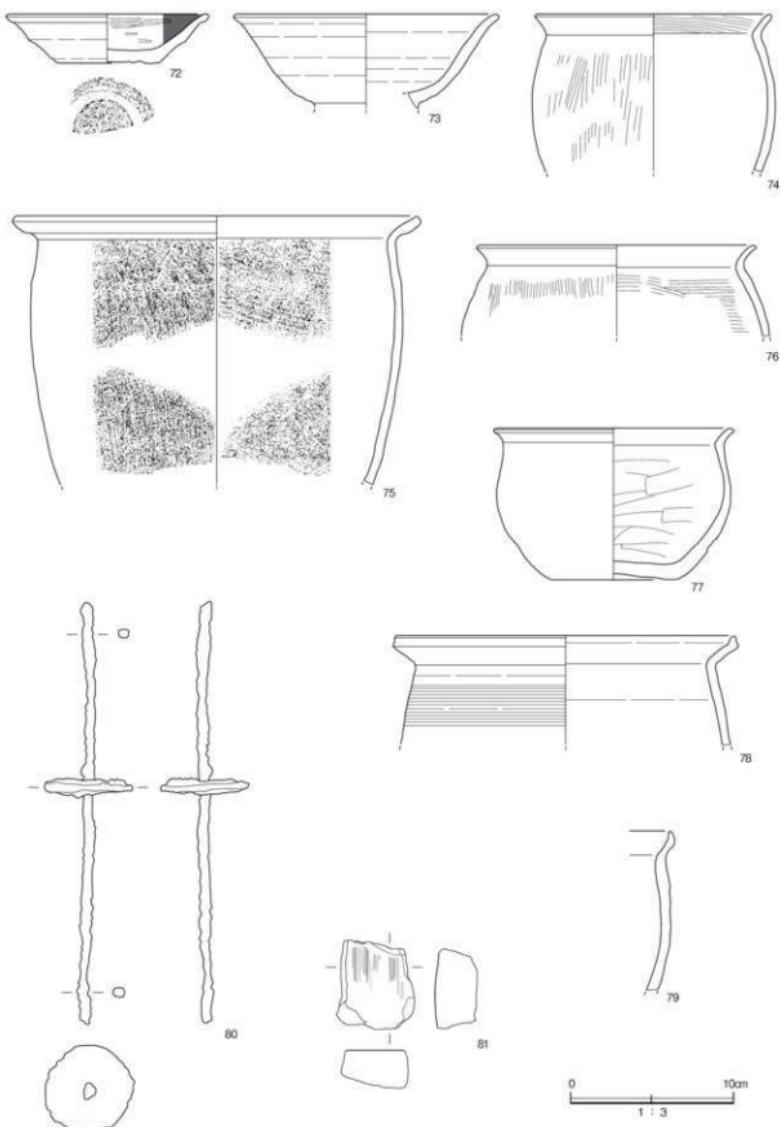
第85図 ST23・25整穴住居跡出土遺物



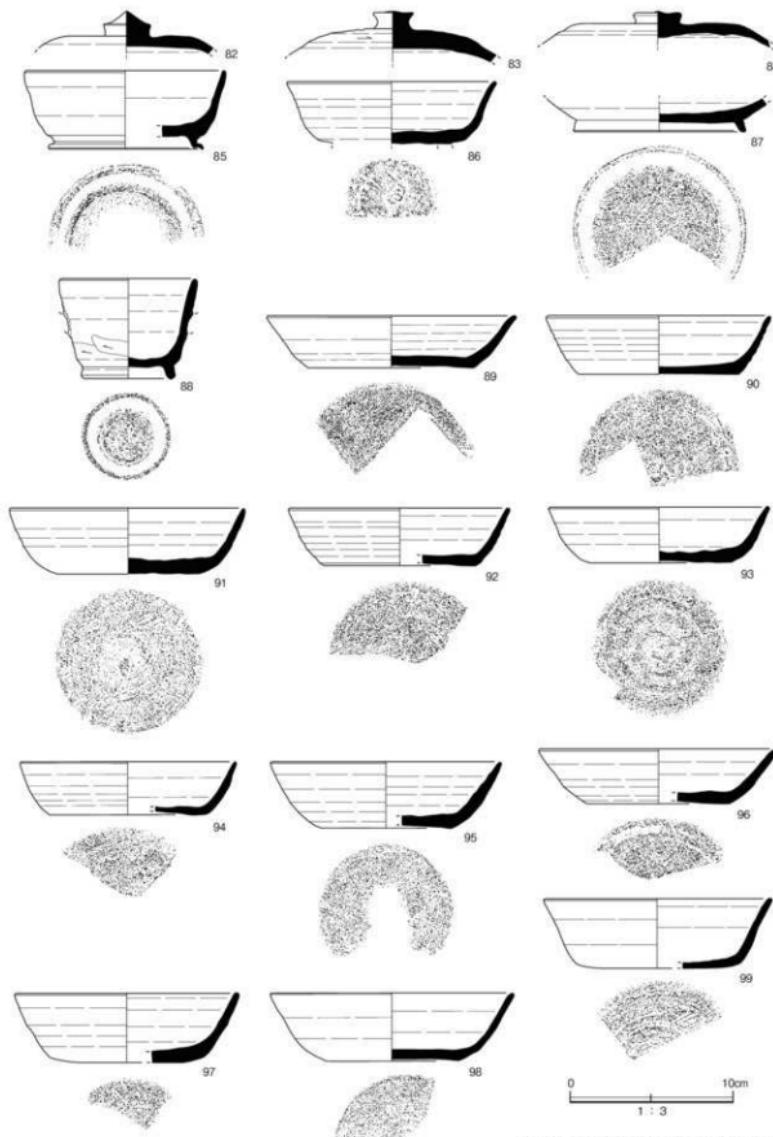
第86図 ST25・26竪穴住居跡出土遺物



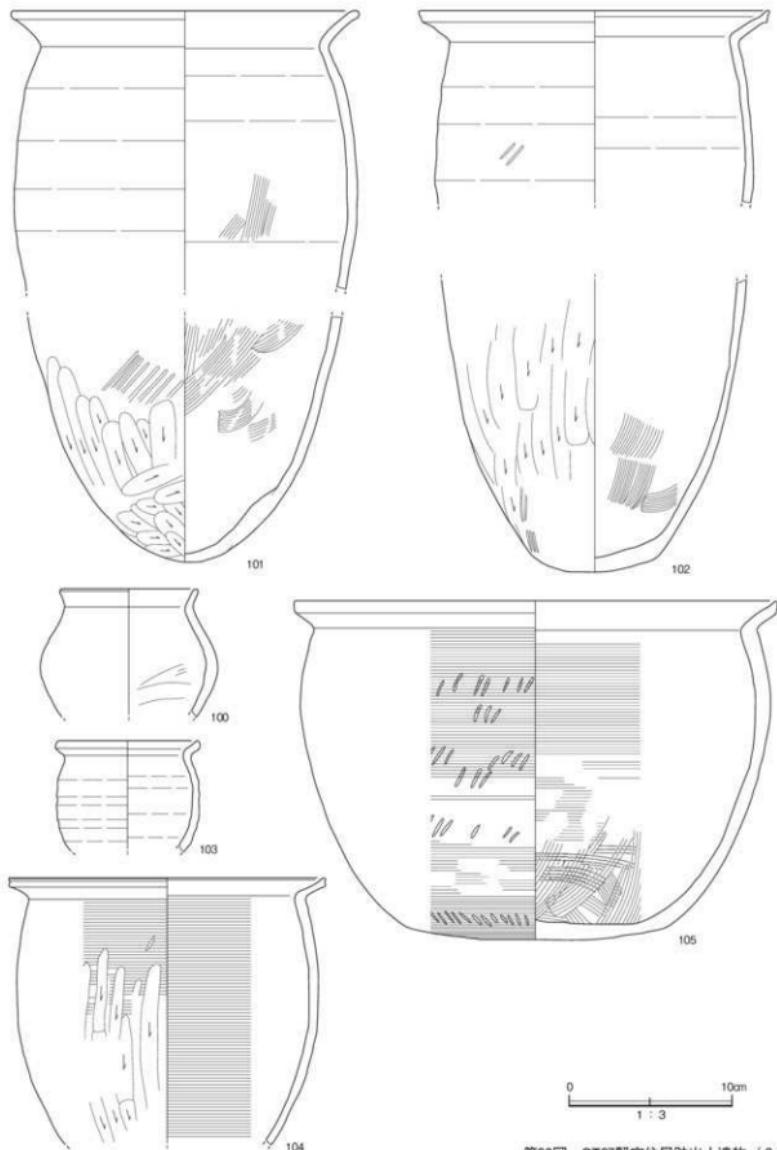
第87図 ST26竪穴住居跡出土遺物（1）



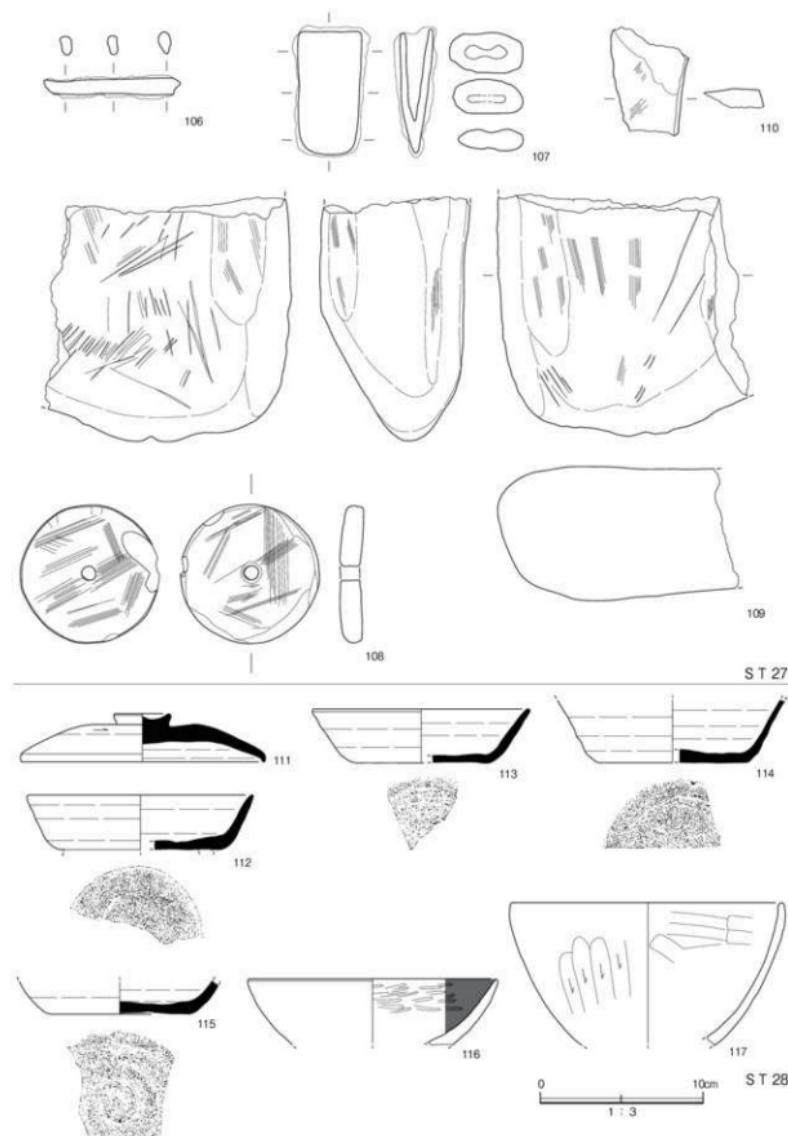
第88図 ST26竪穴住跡出土遺物（2）



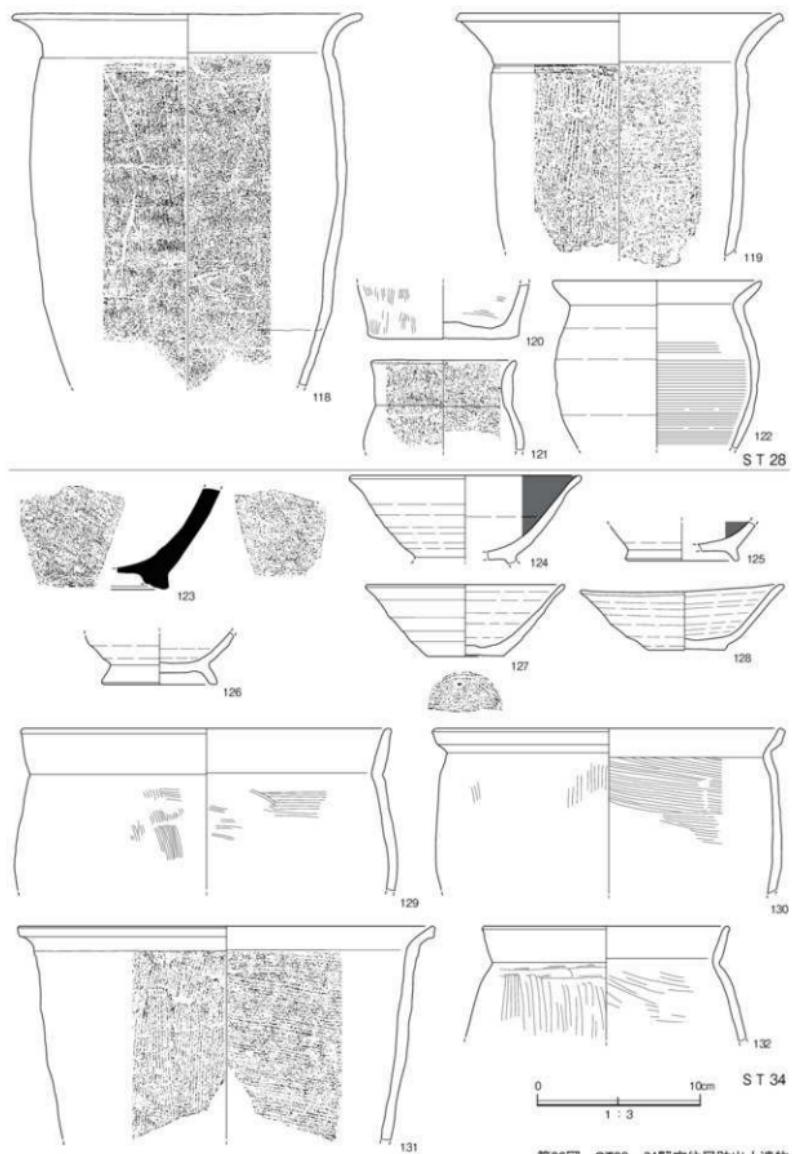
第89図 ST27堅穴住居出土遺物（1）

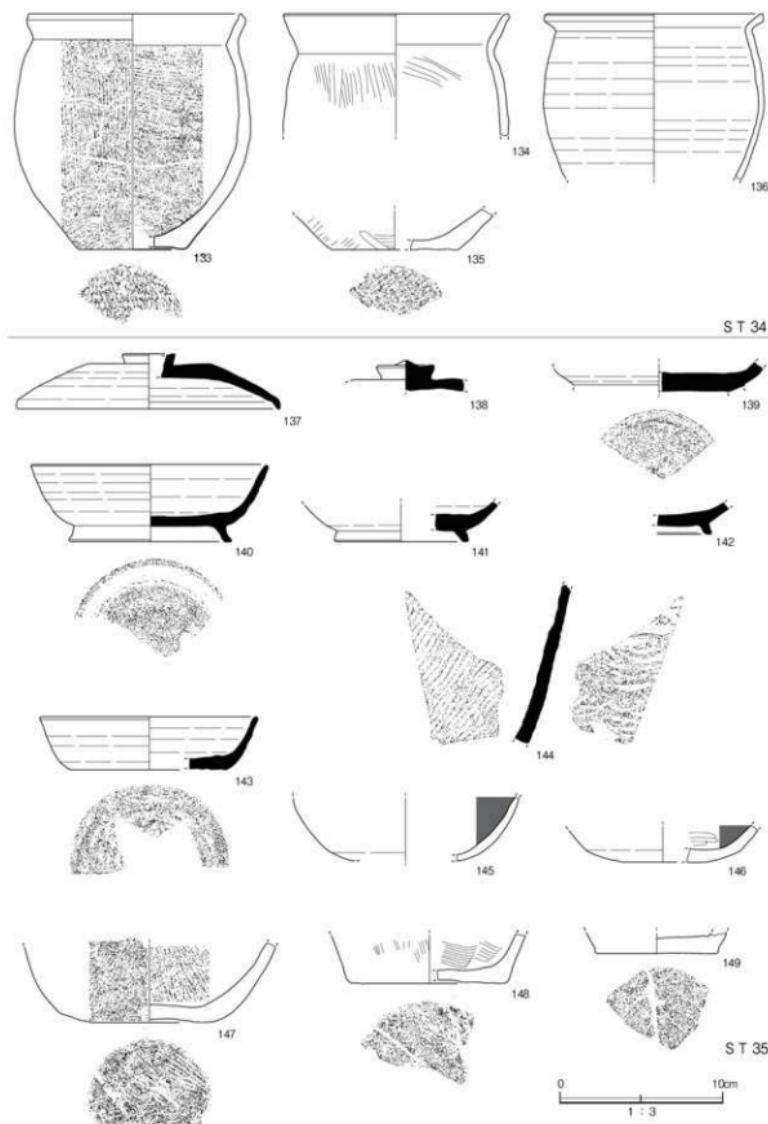


第90図 ST27堅穴住跡出土遺物（2）

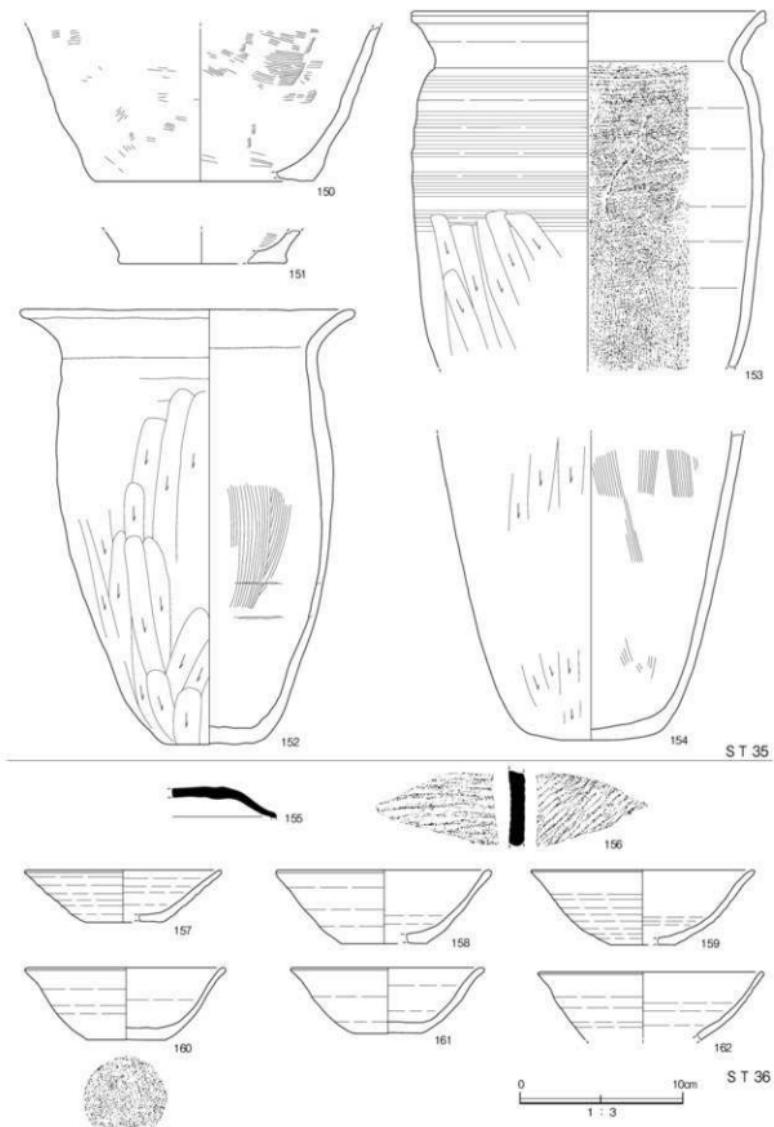


第91図 ST27・28竪穴住居跡出土遺物

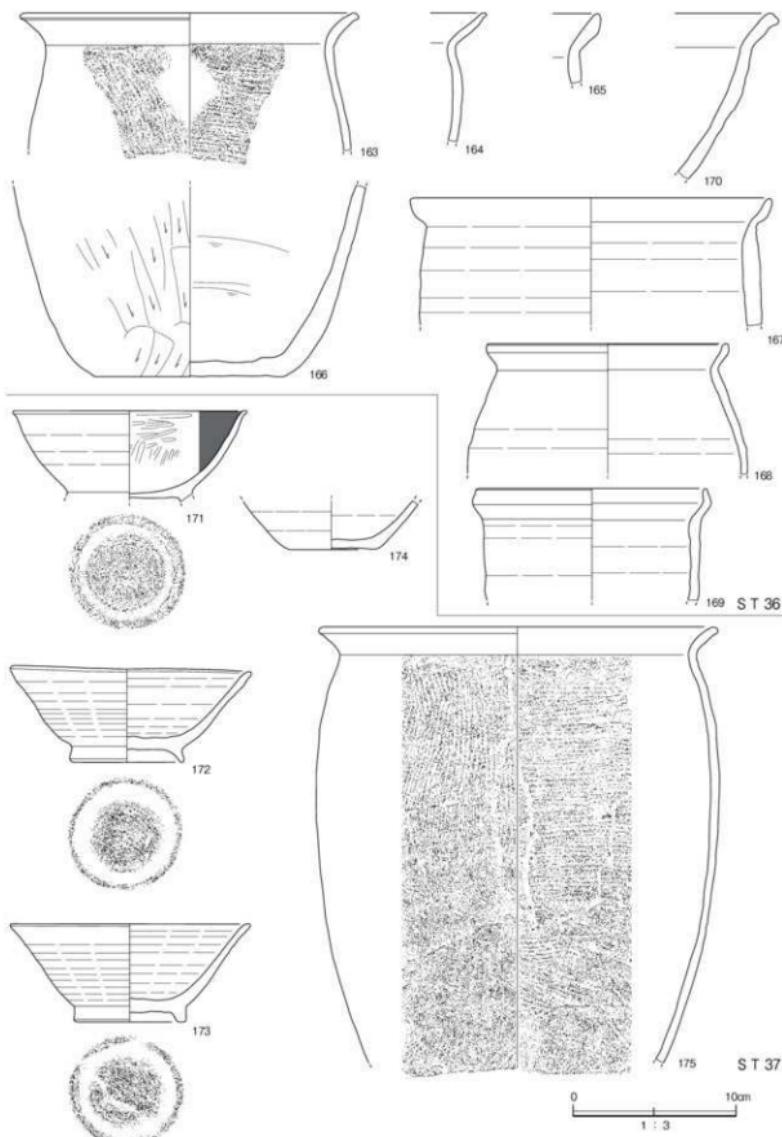




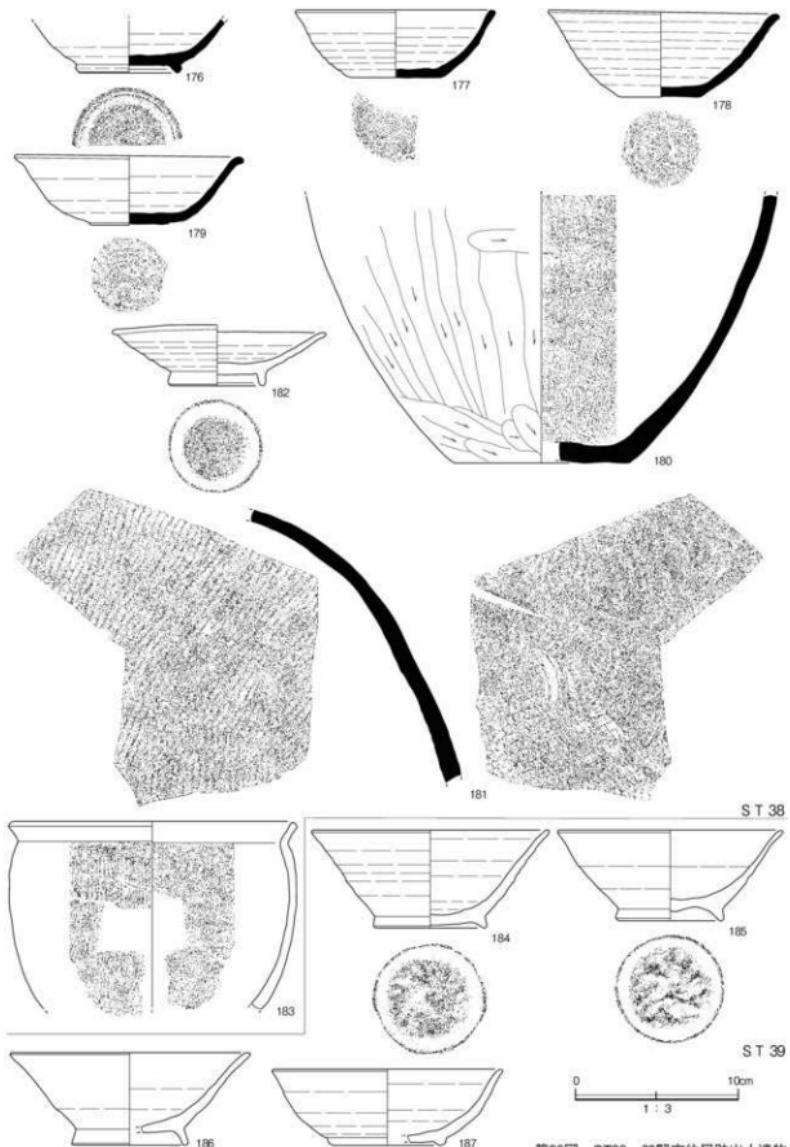
第93図 ST34・35竪穴住居跡出土遺物



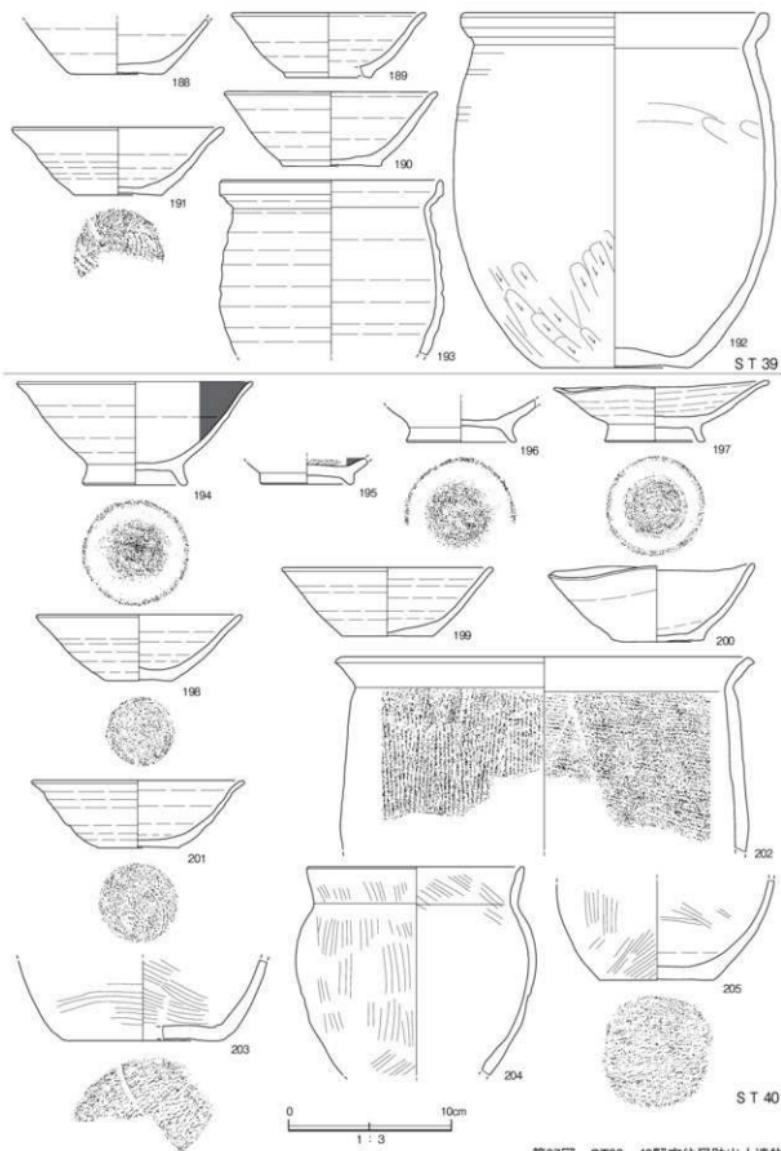
第94図 ST35・36竪穴住居跡出土遺物



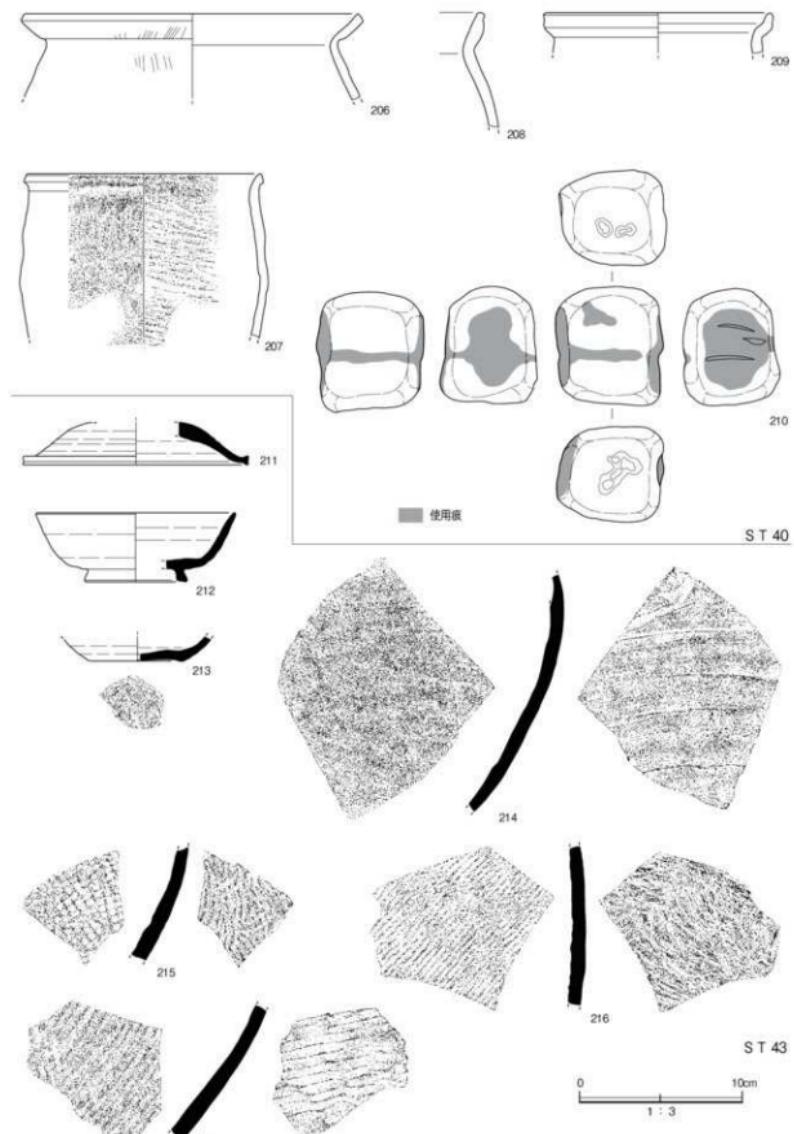
第95図 ST36・37竪穴住居跡出土遺物



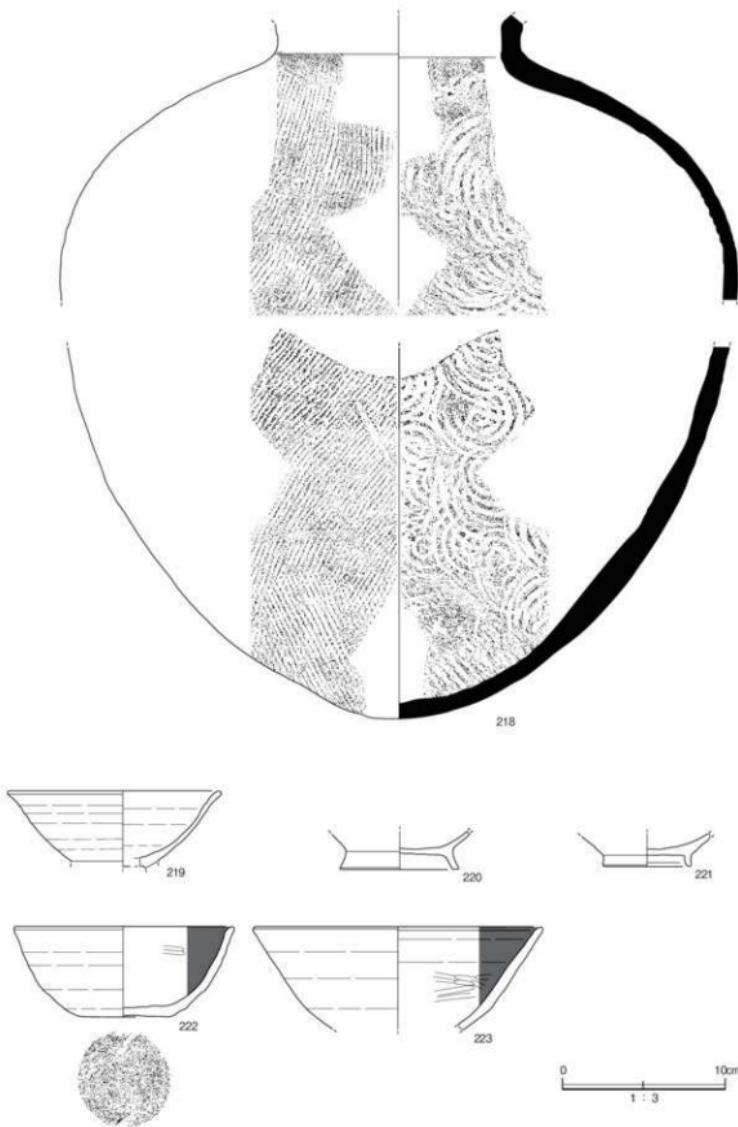
第96図 ST38・39竪穴住居跡出土遺物



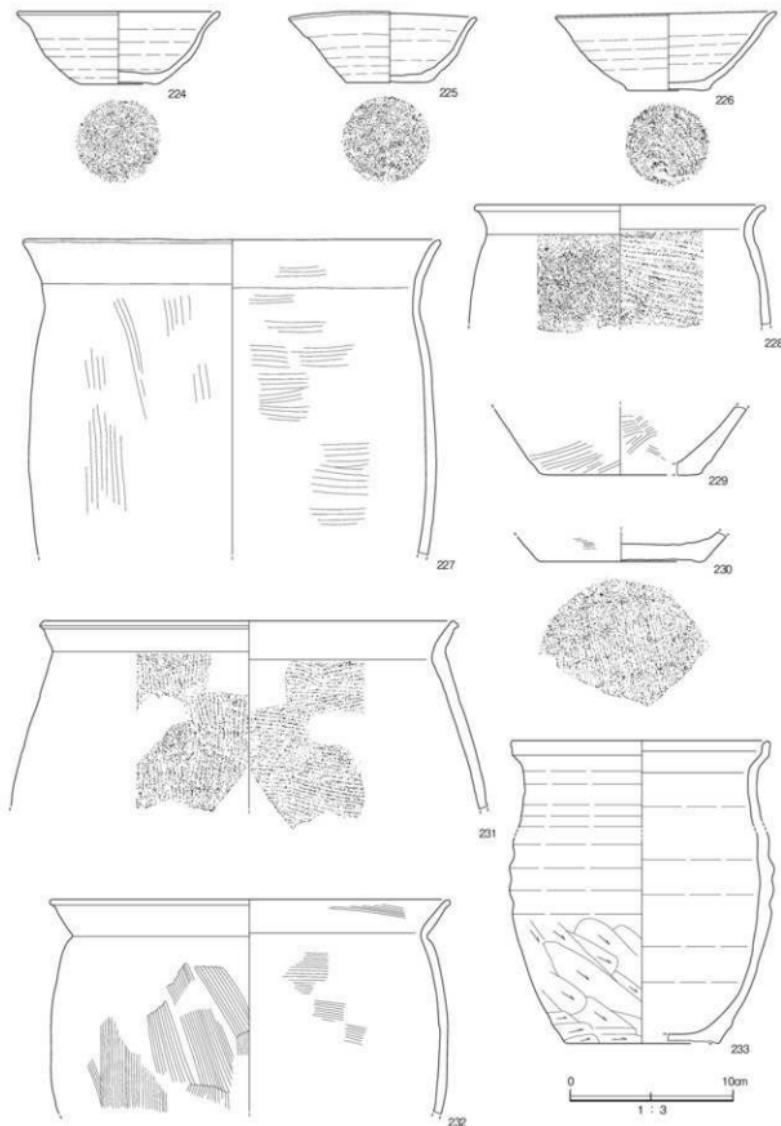
第97図 ST39・40竪穴住居跡出土遺物



第96図 ST40・43竪穴住居跡出土遺物



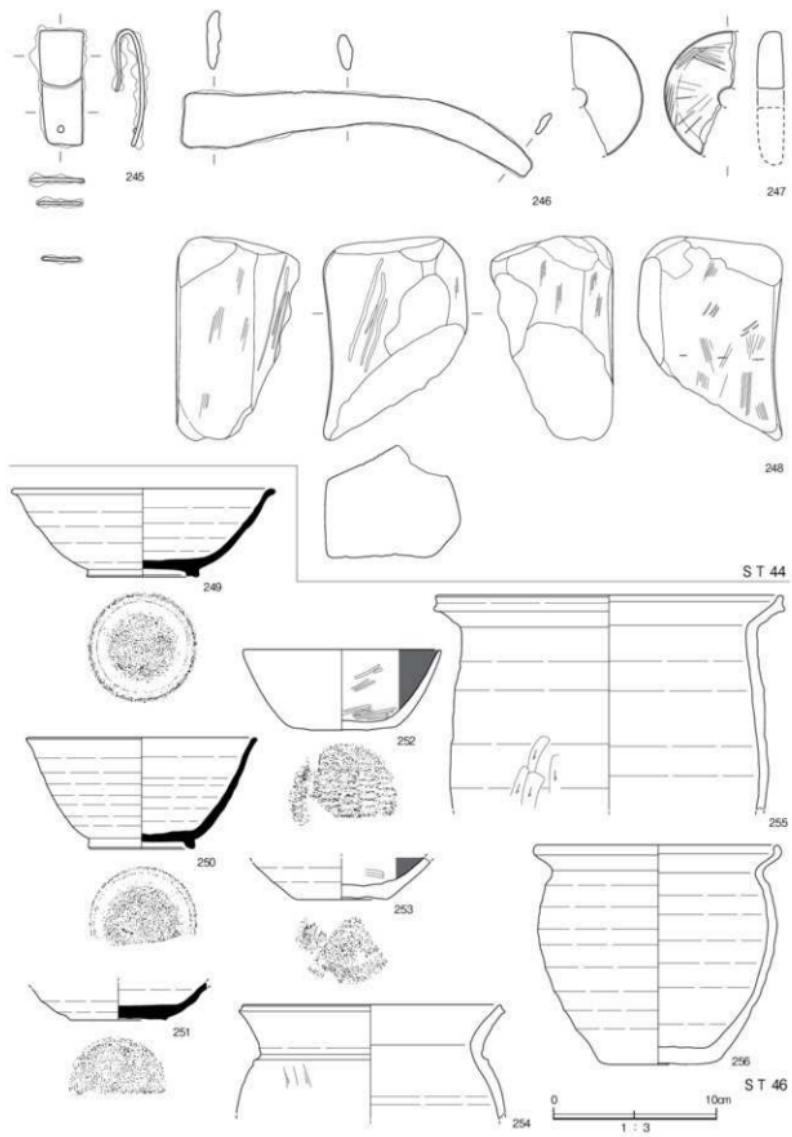
第99図 ST43堅穴住居跡出土遺物（1）



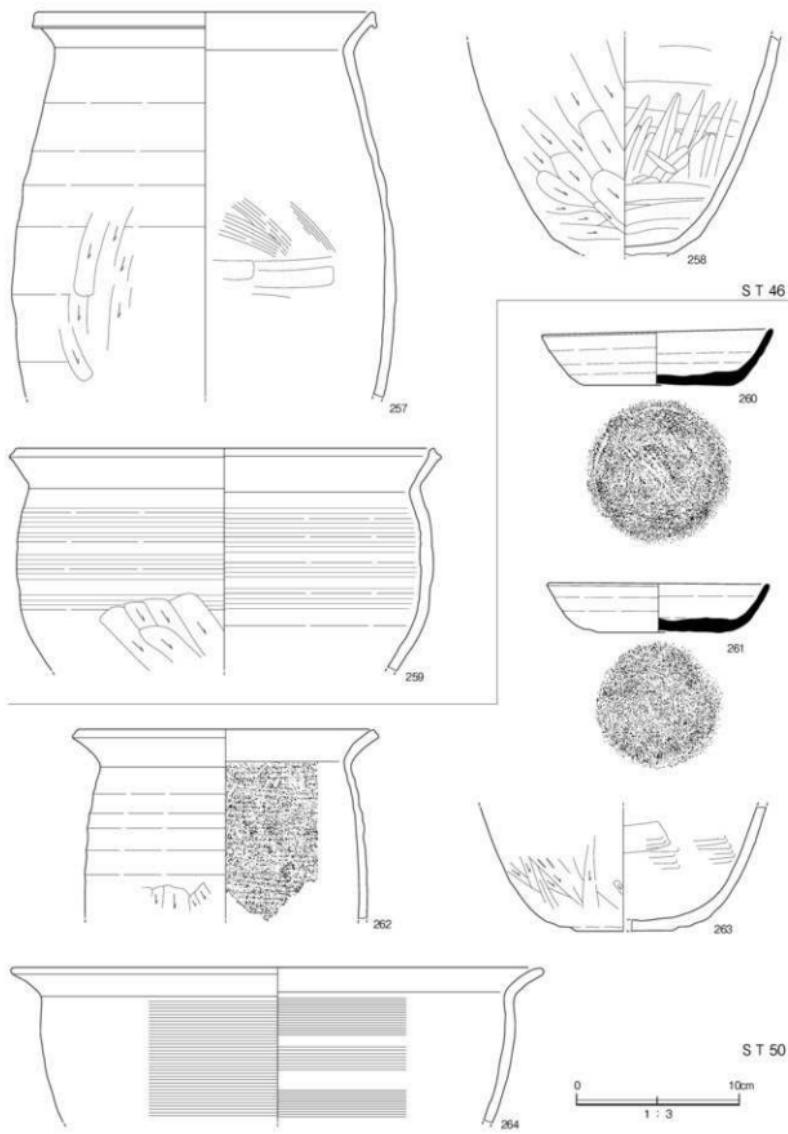
第100図 ST43堅穴住居出土遺物（2）



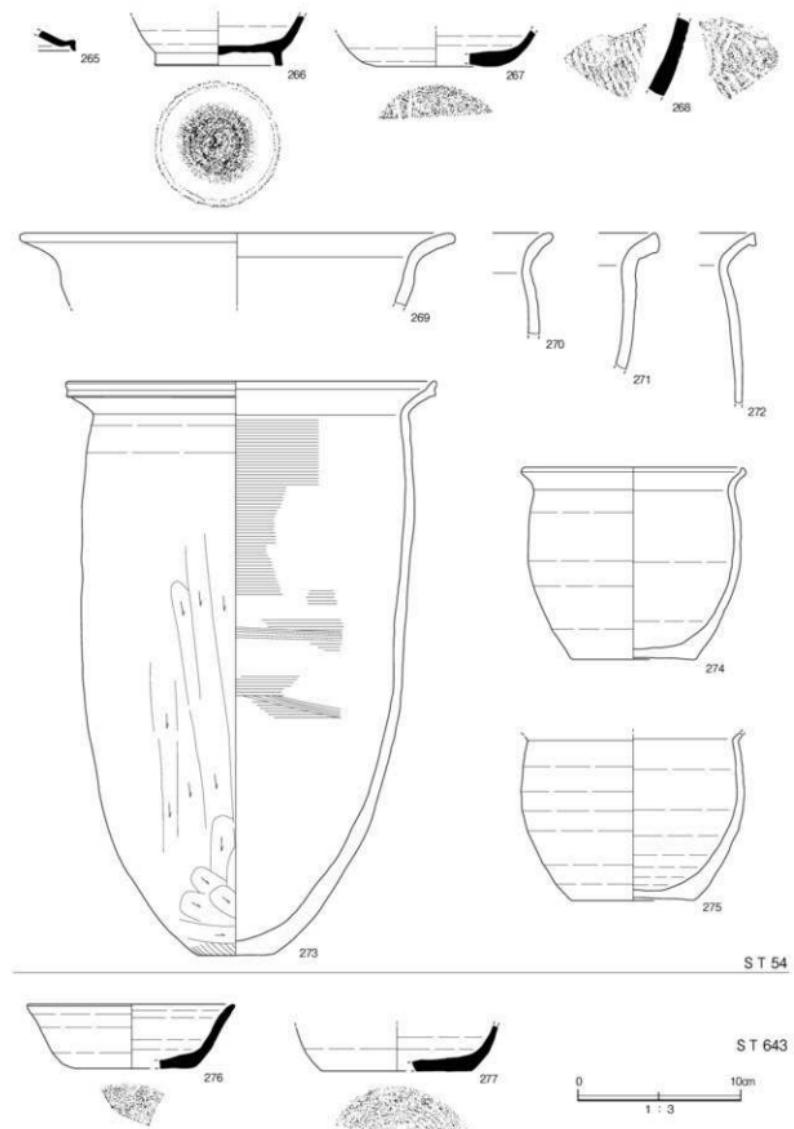
第101図 ST43・44竪穴住居跡出土遺物



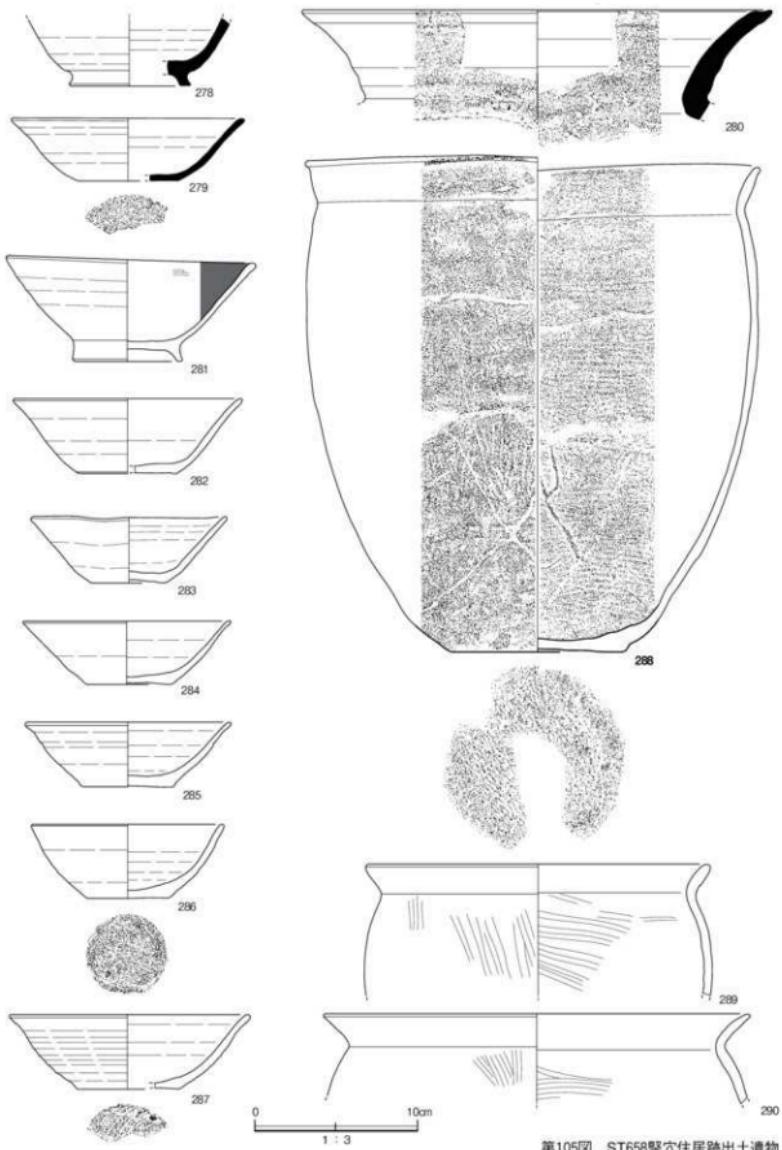
第102図 ST44・46竪穴住居跡出土遺物



第103図 ST46・50竪穴住居跡出土遺物

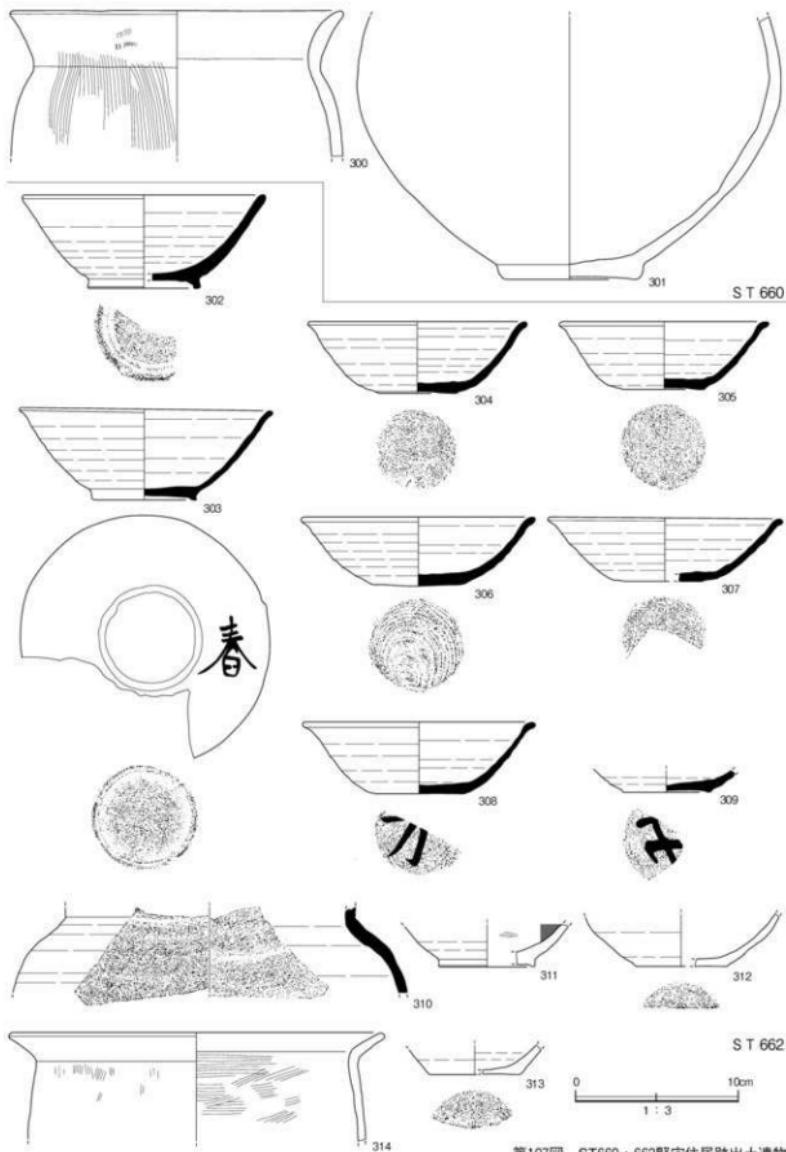


第104図 ST54・643竪穴住居跡出土遺物

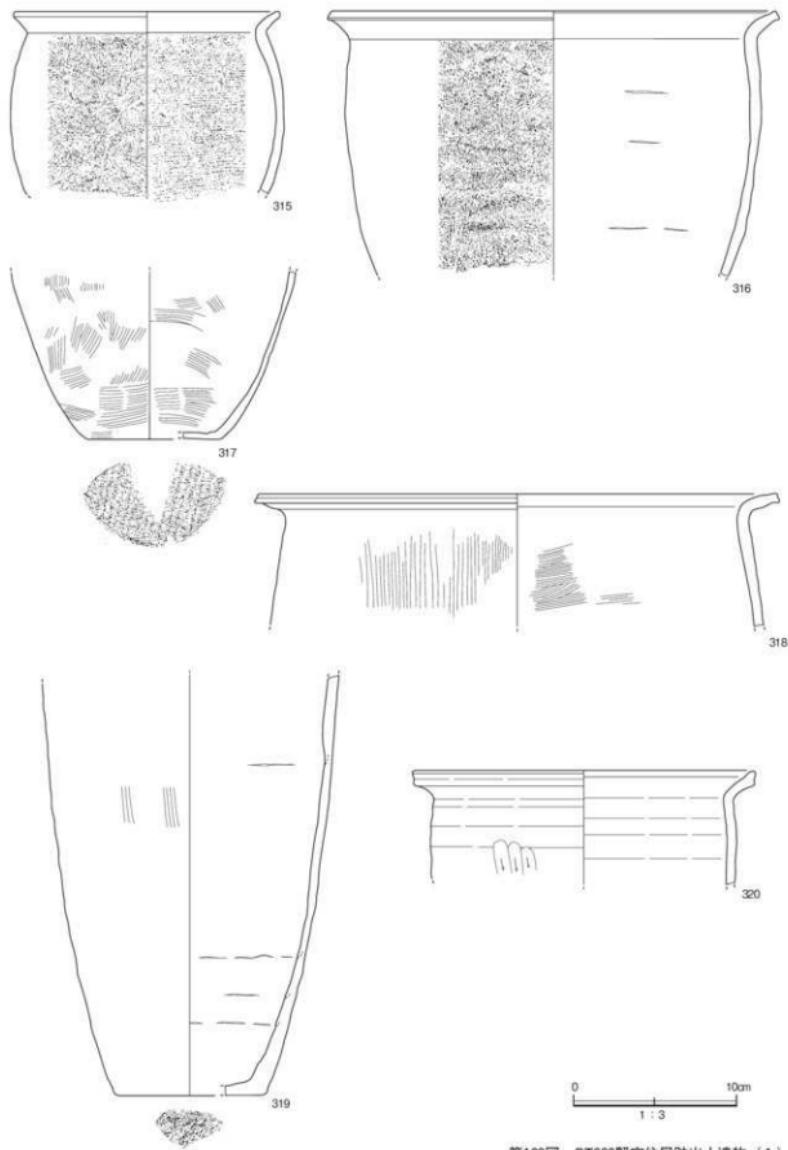


第105図 ST658竪穴住居跡出土遺物





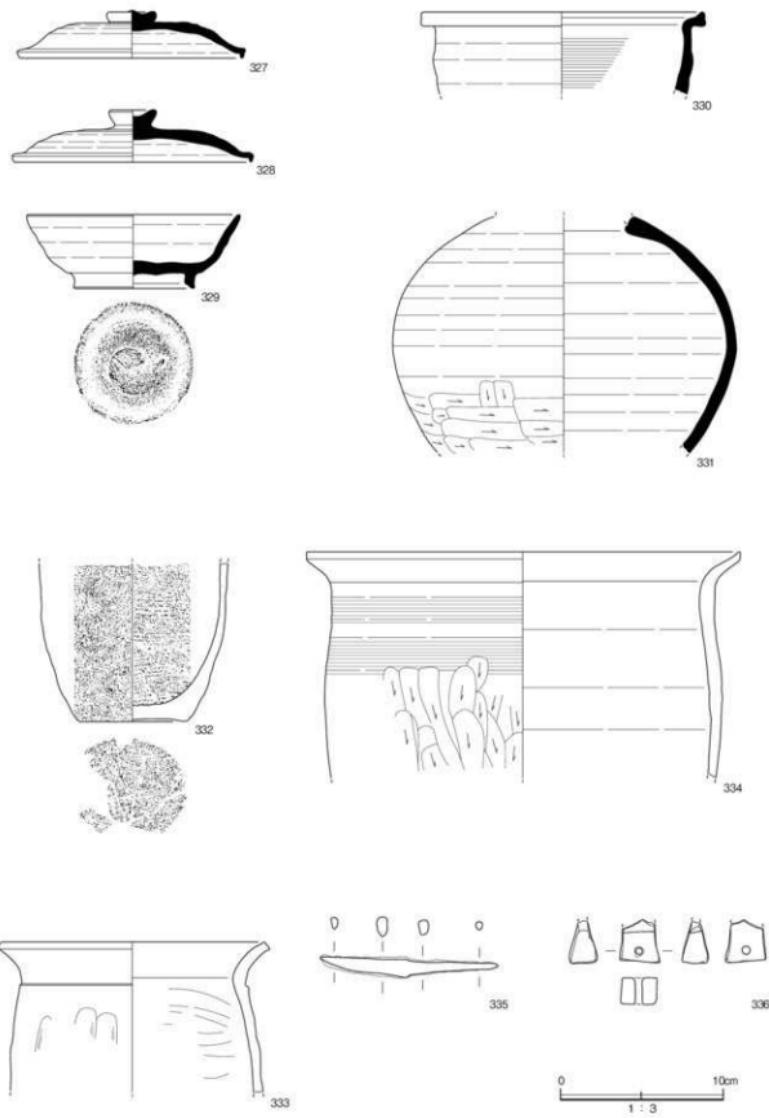
第107図 ST660・662竪穴住居跡出土遺物



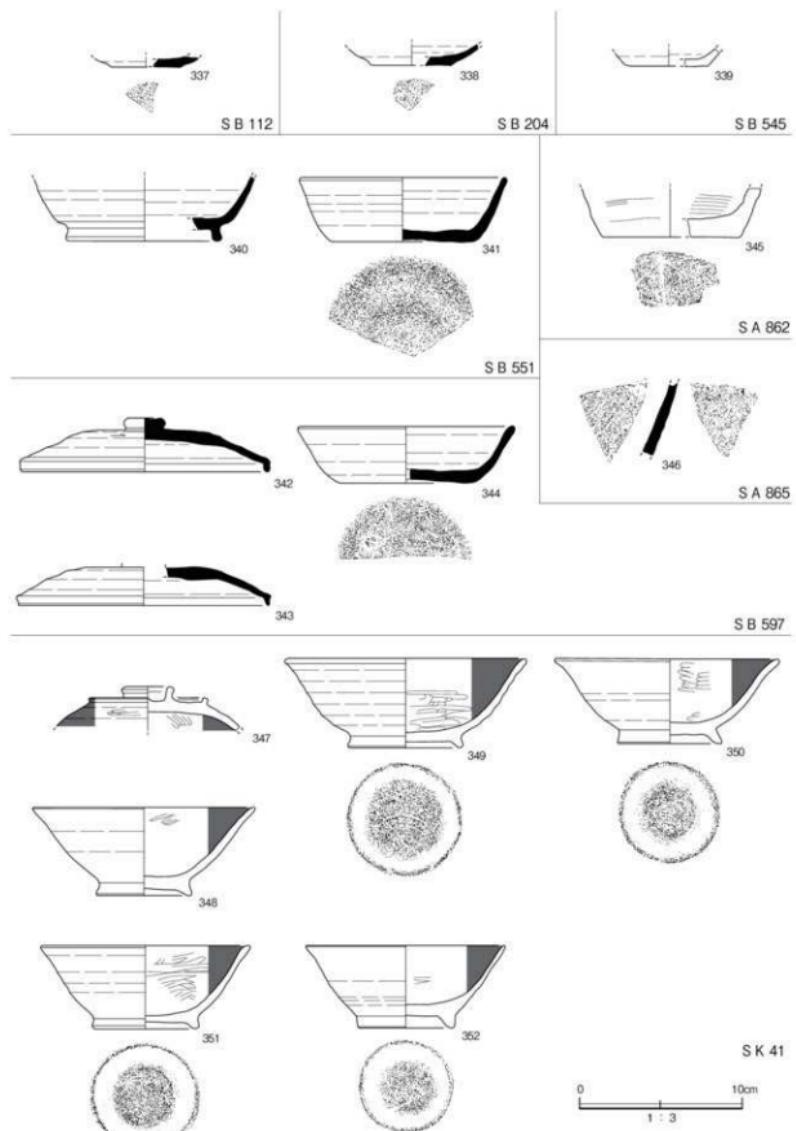
第108図 ST662堅穴住跡出土遺物（1）



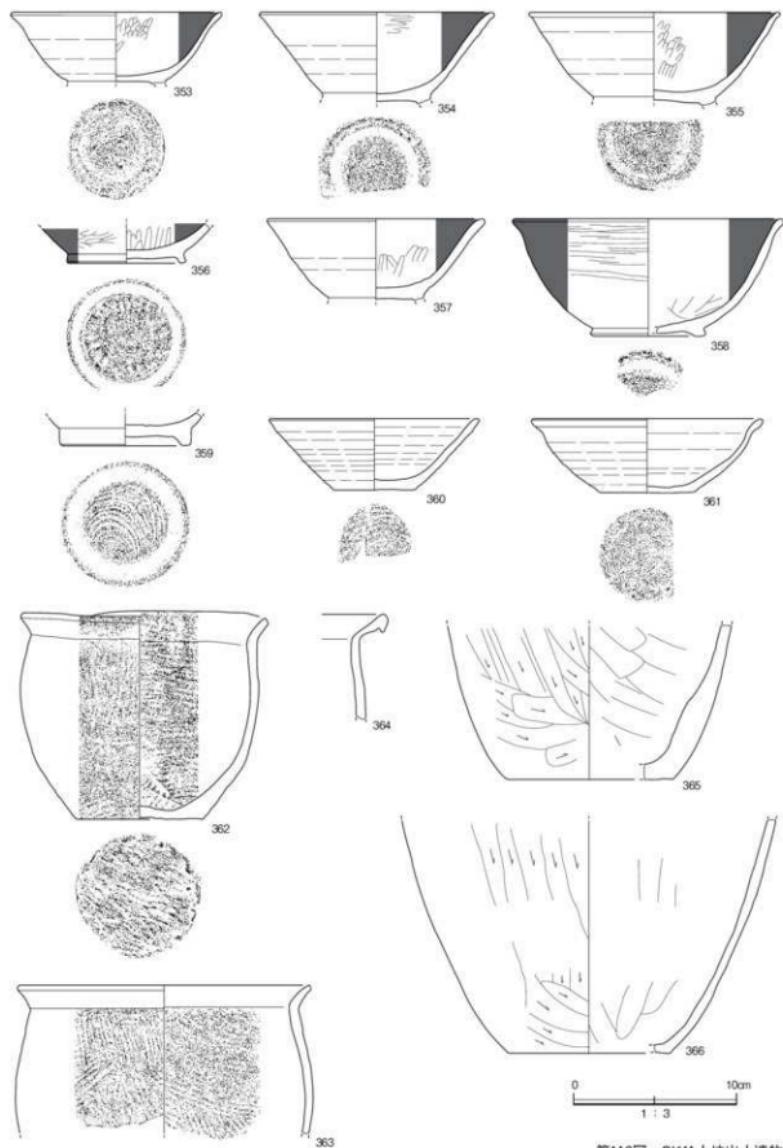
第109図 ST662竪穴住跡出土遺物（2）



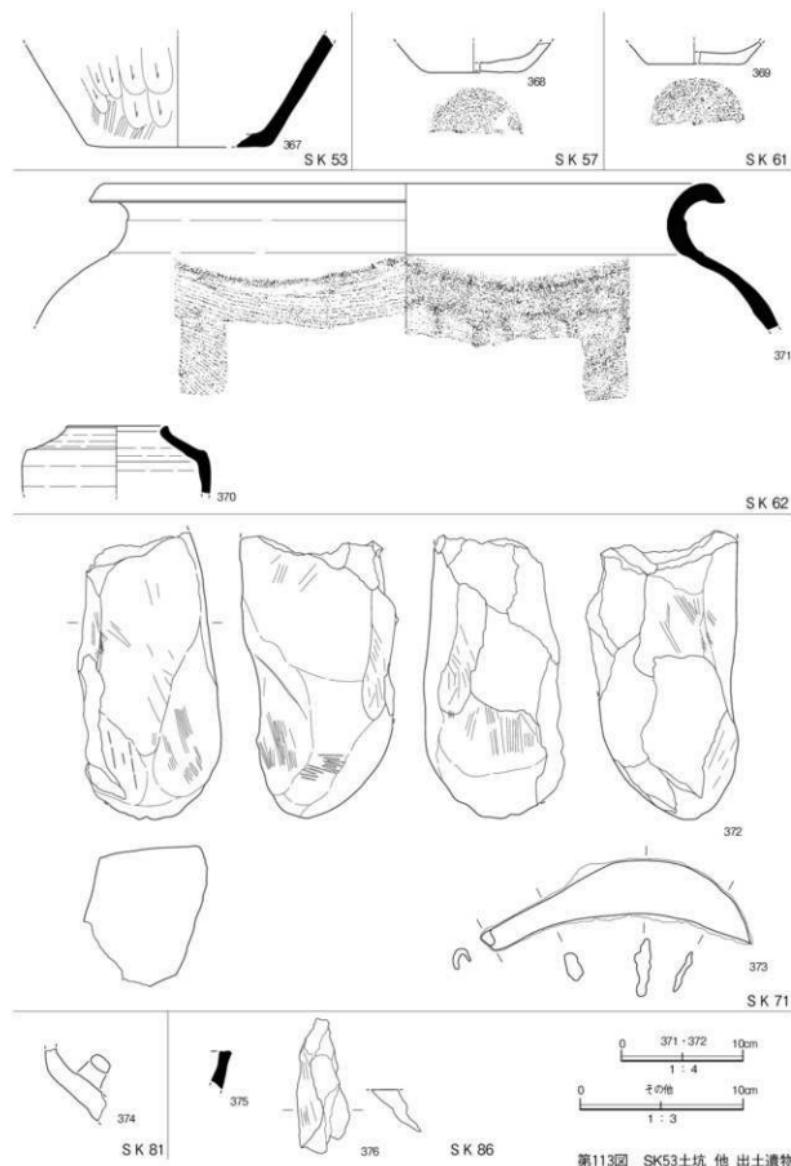
第110図 ST674竪穴住居跡出土遺物



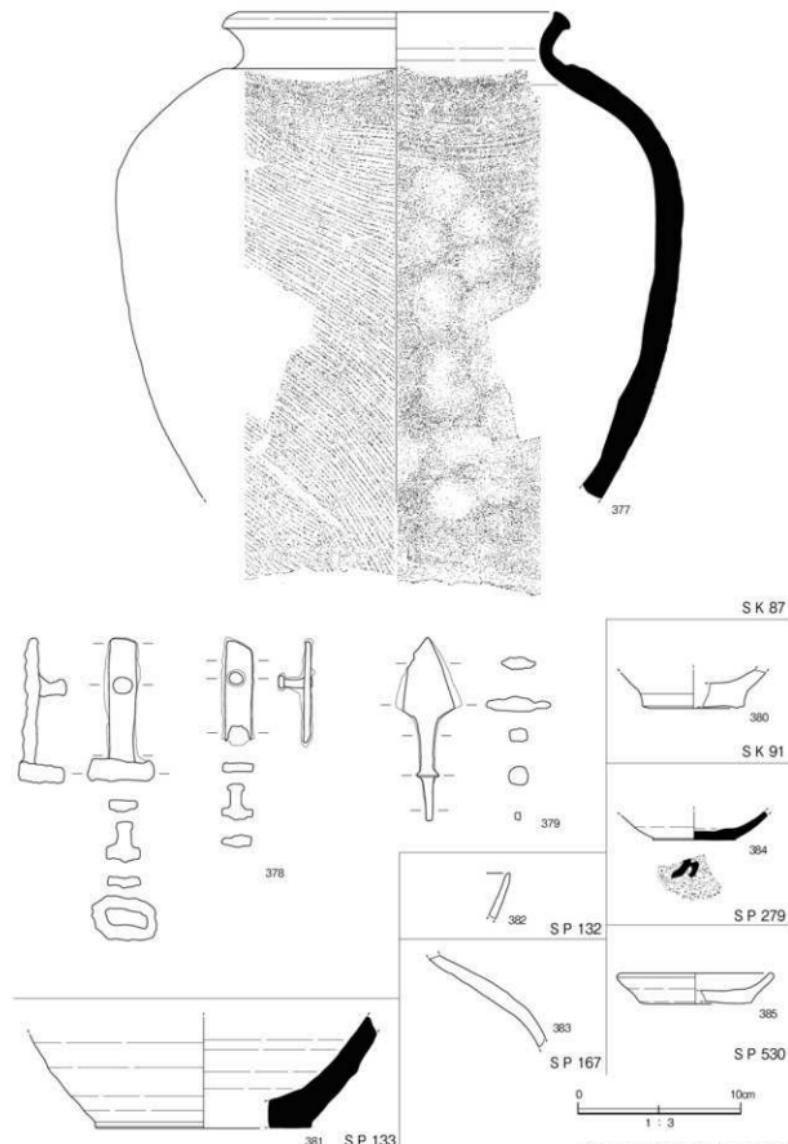
第111図 SB112掘立柱建物跡 他 出土遺物



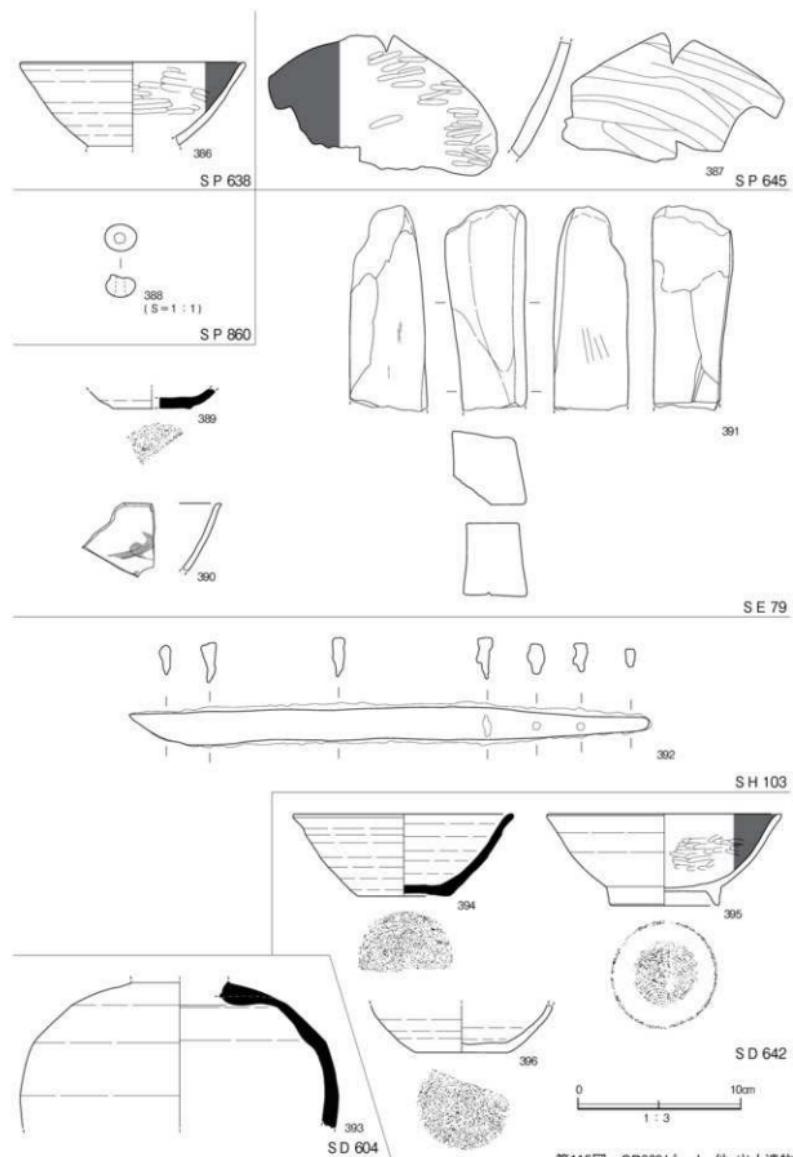
第112図 SK41土坑出土遺物



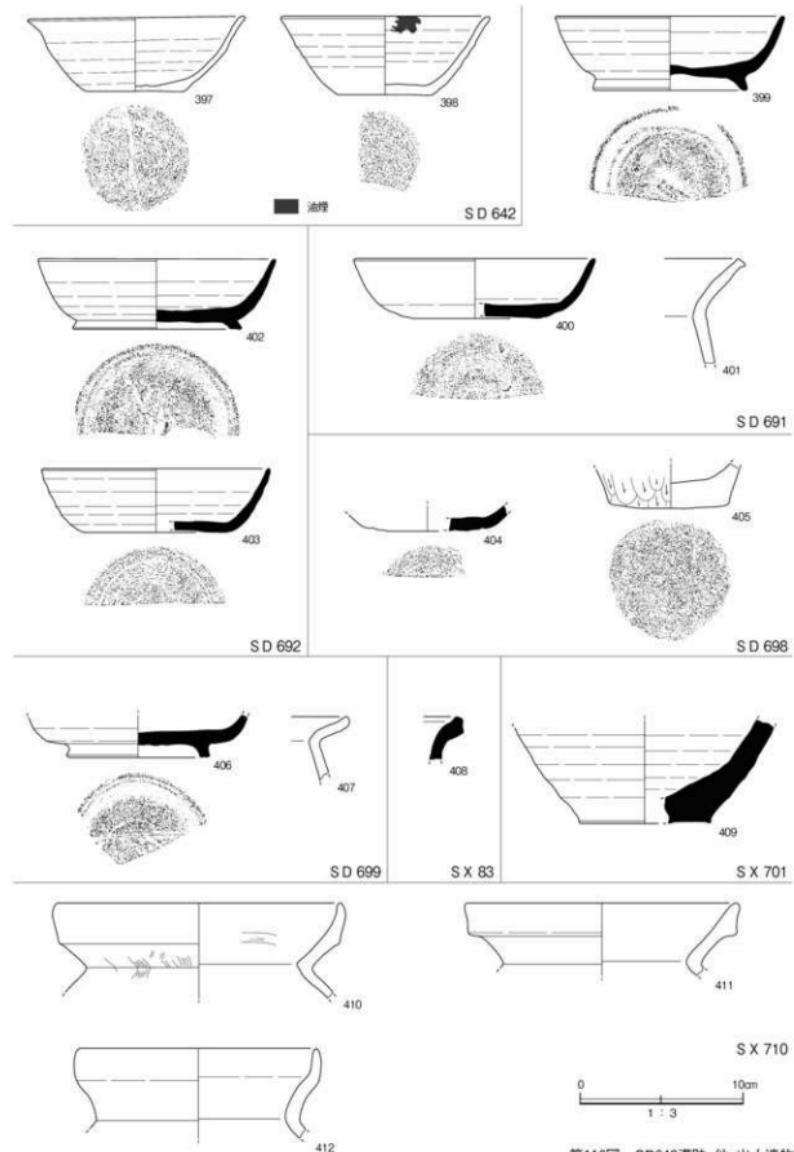
第113図 SK53土坑 他 出土遺物



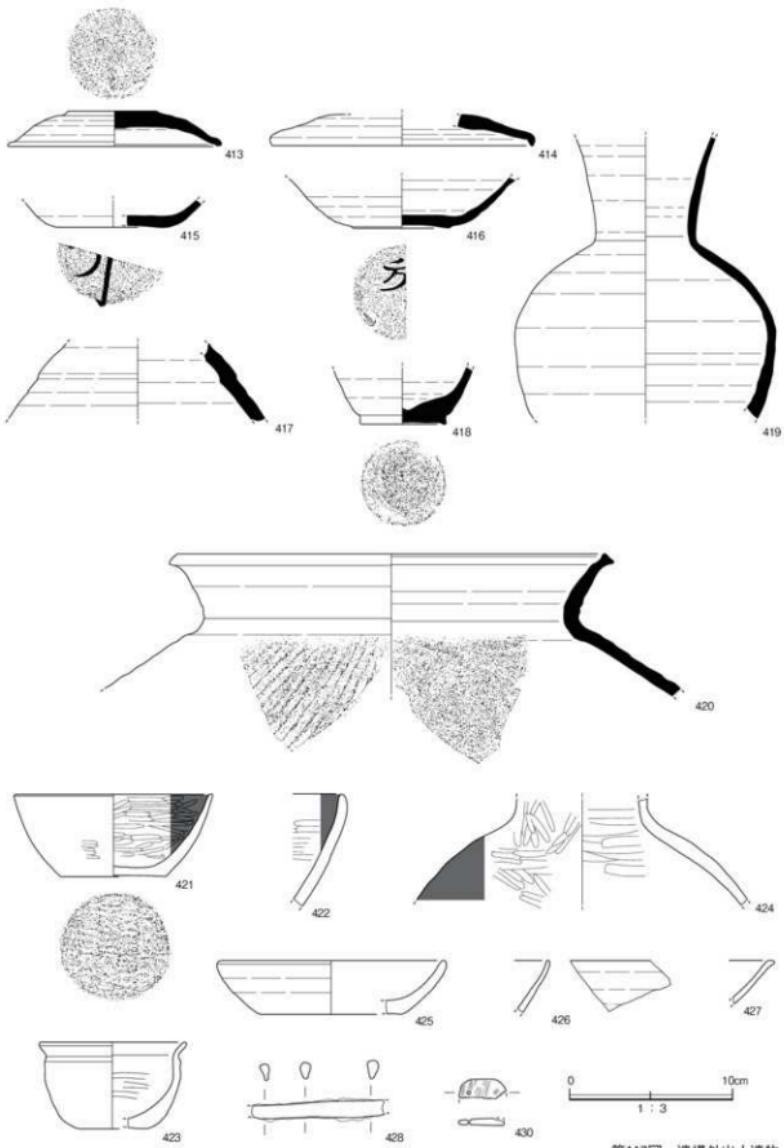
第114図 SK87土坑 他 出土遺物



第115図 SP638ピット 他 出土遺物



第116図 SD642溝跡 他 出土遺物



第117図 遺構外出土遺物

表1 土器・陶磁器観察表(1)

図版 写真 図版	出土点地 種別	器種	計測値()			調査技法		出土	登録 番号	備考
			口径	底径	器高	外面	内面			
79 1	ST1-カマド	須恵器 高台壇	(130)	-	(38)	ロクロ	ロクロ	織		
2	ST1-カマド	須恵器 壺	-	-	(66)	ロクロ	ロクロ	織		
3	ST1-カマド	須恵器 壺	-	-	(174)	ケズリ	ロクロ	粗		
4	ST1-カマド	須恵器 壺	-	-	(162)	平行タキ	平行アテ	綴	42	
80 5	ST1-カマド	土師器 壺	140	-	(49)	ロクロ	ロクロ	織		
6	ST1-カマド	土師器 壺	223	-	(39)	ハケメ・ナデ	ハケメ	織		
7 32	ST1-カマド	赤土上器 壺	(250)	-	(220)	ロクロ・ケズリ	ヘラナデ	織・美	43	
8 32	ST1-カマド	赤土上器 壺	212	-	(165)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	織・美		
9 32	ST1-カマド	赤土上器 壺	240	-	(112)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	織・雲		
10	ST1-カマド	赤土上器 壺	(139)	-	(89)	ロクロ	ロクロ	織・雲		
11 32	ST2	須恵器 壺	134	52	41	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	34
12	ST2	須恵器 壺	(300)	-	(92)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	織	35	
81 14 32	ST3-カマド	須恵器 高台壇	128	76	43	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	38
15	ST3-F	須恵器 壺	-	(93)	(23)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織・海	
16	ST3-Y	須恵器 壺	-	75	(18)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織	
17	ST3-Y	赤土上器 壺	(111)	(61)	48	ロクロ	ロクロ	回転系切	織	
18 32	ST3	土師器 壺	135	67	31	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	46 内黒 墓書「壹」高台付
19 33	ST3	土師器 合併型	122	62	34	ミガキ・ケズリ	ミガキ	織・海	47 両黒 金属器模倣	
20 33	ST3-カマド	土師器 合併型	-	112	(78)	ナデ・ケズリ	ヘラナデ	微・雲・長	55 開東系	
21 33	ST3-カマド	赤土上器 壺	214	72	(348)	タタキ・ログ	ナデ・カキメ	織・海・雲・長	44	
22 33	ST3-E P3	赤土上器 壺	206	88	33	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	指揮丘痕	織・長	45 外面保有
82 23	ST3-カマド	赤土上器 壺	(228)	-	(210)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	織・海・雲・長	44	
24 33	ST3	赤土上器 壺	148	84	54	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海・雲	56 体部にヘラ記号「メ」
25 33	ST3-カマド	赤土上器 壺	155	69	123	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・雲・長	44
26 33	ST3-Y	赤土上器 壺	-	68	(80)	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・雲・長	
27 32	ST3-カマド	赤土上器 壺	180	-	(215)	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	織・雲・長	44	
28 34	ST7	須恵器 壺	(142)	(68)	38	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織	
29	ST7	須恵器 壺	-	(54)	(9)	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	墨書「□万」
30	ST7	須恵器 壺	(145)	(75)	29	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織	
83 31 34	ST7	土師器 壺	(280)	-	(146)	ハケメ	ハケメ	粗・長		
32	ST4	赤土上器 壺	(218)	-	(58)	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	織・雲・長		
33 34	ST13	須恵器 壺	(148)	50	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	粗・海	
34	ST13	須恵器 壺	142	-	(40)	ロクロ	ロクロ	織・海		
35	ST13	須恵器 壺	-	60	(28)	ロクロ	ロクロ	回転系切	織	
36	ST13-カマド	須恵器 長頸壇	(163)	-	(69)	ロクロ	ロクロ	綴		
37	ST13	土師器 高台壇	(138)	(60)	51	ロクロ	ミガキ	回転系切	織・海	内黒
38 34	ST13	赤土上器 高台壇	130	46	28	ハケメ	ハケメ	織・外表面磨滅		
39	ST13	土師器 壺	(146)	-	(87)	ハケメ	ハラナデ	織	外表面磨滅	
40	ST13	土師器 壺	(140)	-	(64)	ハケメ	ハラナデ	織		
41	ST23-F	須恵器 壺	(145)	-	(23)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織	
42 34	ST23-ED1	須恵器 高台壇	125	75	48	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織	105
43	ST23-F	須恵器 壺	-	(90)	(28)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織・海	
84 44	ST23-カマド	土師器 壺	(249)	84	350	ハロメ	ハケメ	木葉痕	粗・長	53
45	ST23-カマド	土師器 壺	249	-	(202)	ハケメ	ハケメ		53 内面磨滅	
46 34	ST23-カマド	土師器 壺	-	93	(223)	ハケメ	ハケメ	木葉痕	粗・長	53
47 35	ST23-カマド	赤土上器 壺	(104)	64	72	ロクロ	ロクロ	板状痕	織・雲	259 外面保有
48	ST23-F	赤土上器 壺	(166)	-	(49)	ロクロ	ロクロ	織・雲・長		
85 49 35	ST23-F	赤土上器 壺	(382)	-	(130)	タタキ・ログ	カキメ・ハケメ	粗・雲・長		
50 35	ST25-カマド	土師器 壺	139	64	51	ロクロ	ミガキ	回転系切	織・海	79 内黒
51 35	ST25	赤土上器 壺	(127)	57	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	80
52 35	ST25	赤土上器 壺	(124)	56	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海・雲	89
53 35	ST25-カマド	土師器 壺	260	(117)	33	ハケメ	ハケメ・ヘラナデ	織痕	織・海・英	79 編縫痕
54 36	ST25-カマド	土師器 壺	(196)	-	(145)	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	織	112	
55 36	ST25-カマド	赤土上器 壺	226	-	(125)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	織・海・長	115 外面保有	
86 56 36	ST25-カマド	赤土上器 壺	(232)	-	(114)	ロクロ	ロクロ	織・海・英	110 外面保有	
57	ST25-Y	赤土上器 壺	(350)	-	(71)	ロクロ・ケズリ	カキメ	織・海・英	113	
58	ST25-カマド	赤土上器 壺	(348)	-	(87)	ロクロ・ケズリ	カキメ	織・海・英	79	
59 36	ST26-カマド	須恵器 壺	144	69	44	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	29
60	ST26	須恵器 壺	(126)	(60)	40	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	15
61 36	ST26	須恵器 壺	148	60	43	ロクロ	ロクロ	回転系切	織・海	52 墓書「浮ヶ」万下西等

表2 土器・陶磁器観察表(2)

図版	写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値()			調査技法	出土 底部	登録 番号	備考		
					口径	底径	器高	外面	内面				
86	62	36	S T26	須恵器 环	134	50	38	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	17	
	63	36	S T26	須恵器 环	(130)	(55)	41	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	21	
	64	S T26-F	須恵器 环	-	50	(35)	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	20		
	65	S T26-カマド	須恵器 环	(138)	-	(32)	ロクロ	ロクロ	縦・海	32			
	66	S T26-F	須恵器 环	(151)	-	(51)	ロクロ	ロクロ	縦				
	87	67	36	S T26	須恵器 罩	140	50	19	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	16
88	68	S T26-E P 3	須恵器 罩	(140)	(52)	17	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海・英			
	69	36	S T26	須恵器 罩	186	-	(137)	ロクロ	ロクロ	縦	30		
	70	S T26-カマド	須恵器 罩	-	-	(175)	筋子状タクタ	青海波文	縦・海				
	71	S T26	須恵器 罩	-	(73)	平行タクタ	平行タクタ	平行アテ	縦・海	22			
89	72	36	S T26-Y	土器器 高台环	(126)	(64)	31	ロクロ	ロクロ・ミガキ	回転系切	縦・海	内黒 頂似高台	
	73	S T26-E P 3	赤織上器 高台环	(164)	-	(57)	ロクロ	ロクロ	縦・海・英				
	74	S T26-F	土器器 罩	(146)	-	(97)	ハケメ	ハケメ・ラナデ	縦・美				
	75	S T26-F	土器器 罩	(248)	-	(167)	ハケメ	ハケメ	縦・長				
	76	S T26-F	土器器 罩	(171)	-	(56)	ハケメ	ハケメ	縦・美				
	77	37	S T26-カマド	土器器 罩	(148)	(78)	94	ナデ	ナデ	31	外面部減 火はね		
	78	S T26-F	赤織上器 罩	(214)	-	(67)	ロクロ・カキメ	ロクロ	縦・青・長				
	79	S T26-F	赤織上器 罩	-	(98)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	ロクロ	縦・海・長				
	80	S T27	須恵器 罩	-	(27)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	92			
89	82	37	S T27	須恵器 罩	-	(27)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦			
	83	S T27-貼床	須恵器 罩	-	(27)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦				
	84	37	S T27-Y	須恵器 罩	-	(22)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦	101		
	85	37	S T27	須恵器 高台环	126	96	48	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	93	
	86	37	S T27-F	須恵器 高台环	130	77	(39)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海		
	87	37	S T27-E P 11	須恵器 罩	107	(18)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海			
	88	37	S T27-E K 2	須恵器 反耳环	86	54	62	ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海・長	240 耳部欠損	
	89	37	S T27-F	須恵器 环	156	(104)	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海		
	90	37	S T27-E P 30	須恵器 环	(139)	99	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海		
	91	37	S T27-Y	須恵器 环	(147)	91	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦	212	
90	92	S T27-カマド1	須恵器 环	(138)	(94)	36	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海			
	93	37	S T27-カマド3	須恵器 环	137	86	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦	194	
	94	S T27	須恵器 环	(135)	(97)	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	97		
	95	37	S T27-E P 11	須恵器 环	144	80	41	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦		
	96	S T27-カマド1	須恵器 环	(148)	(88)	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦	197		
	97	S T27-E P 30	須恵器 环	(136)	(70)	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海			
	98	S T27-E P 11	須恵器 环	(152)	(82)	42	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦			
	99	S T27-F	須恵器 环	(142)	(110)	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦			
	100	38	S T27-E K 2	土器器 罩	(86)	-	(80)	ナデ	ナデ	ナデ	縦・美	242 外面部減	
	101	38	S T27-カマド3	赤織上器 罩	215	-	(342)	タ・タキ・ログ	ロクロ・ハケメ	ナデ	縦・美・長	215	
91	102	38	S T27-カマド3	赤織上器 罩	220	65	(349)	タ・タキ・ログ	ロクロ・ハケメ ケズリ	ナデ	縦・美・長	215	
	103	38	S T27-F	赤織上器 罩	(90)	-	(69)	ロクロ	ロクロ	ナデ	外面部付着		
	104	39	S T27-カマド3	赤織上器 罩	(196)	-	(166)	ロクロ・カキメ	カキメ	ナデ	縦・長		
	105	39	S T27-カマド3	赤織上器 罩	(300)	(150)	210	タ・タキ・ログロ	カキメ・ハケメ カキメ	ナデ	縦・海・長	214	
	106	S T28	須恵器 罩	152	-	30	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	23		
	107	39	S T28-E P 5	須恵器 高台环	(140)	-	(34)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海		
	108	S T28-Y	須恵器 环	(136)	(86)	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海			
	109	S T28-F	須恵器 环	-	(93)	(39)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	25		
	110	S T28	土器器 环	-	90	(20)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海			
	111	S T28-E P 3	土器器 环	(150)	-	(41)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	24 内黒	外面部減		
92	112	S T28	須恵器 罩	218	-	(230)	ハナデ・ケズリ	ハナデ	ナデ	縦・美・長	24 輪積痕		
	113	S T28-E P 4	土器器 罩	(204)	-	(150)	ハケメ	ハケメ	ナデ	縦・長	24		
	114	S T28	土器器 罩	-	(94)	(34)	ハケメ	ハケメ	ナデ	縦・長	24		
	115	S T28-F	須恵器 环	-	(93)	(39)	ロクロ	ロクロ	ナデ	縦・長	50		
	116	S T28	土器器 环	-	(156)	-	ミガキ	ミガキ	ナデ	縦・長			
	117	S T28-E P 3	土器器 罩	(150)	-	(88)	タ・タキ・ログロ	カキメ・ハケメ カキメ	ナデ	縦・長			
	118	S T28	土器器 罩	218	-	(230)	ハナデ・ケズリ・ラナデ	ハナデ	ナデ	縦・美・長	24		
	119	S T28-E P 4	土器器 罩	(204)	-	(150)	ハケメ	ハケメ	ナデ	縦・長	24		
	120	S T28	土器器 罩	-	(94)	(34)	ハケメ	ハケメ	ナデ	縦・長	24		
	121	39	S T28-Y	土器器 罩	(90)	-	(51)	ハケメ	ハケメ	ナデ	縦・長	24	
122	122	S T28-E P 2	赤織上器 罩	(129)	-	(104)	ロクロ	ロクロ	ナキメ	ナキメ	縦・長	50	
	123	S T34-E K 1	須恵器 罩	-	-	(62)	平行タクタ	ラナデ	ラナデ	ナデ	縦・長		
	124	S T34-F	土器器 高台环	(144)	-	(35)	ロクロ	ロクロ	春花ナデ	ナデ	内黒		
	125	S T34-F	土器器 高台环	-	(70)	(23)	ロクロ	ロクロ	回転系切	ナデ	内黒 内面部減		
126	126	S T34-F	赤織上器 高台环	-	72	(32)	ロクロ	ロクロ	回転系切	ナデ	内黒 内面部減		
	127	S T34	赤織上器 环	(123)	(47)	44	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	83		

表3 土器・陶磁器観察表(3)

図版 写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値()			調査法	出土	登録 番号	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	底部		
92	128 39	S T34	赤土器 环	(127)	50	41	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・長	83
129	S T34 - F	土器器 瓶	(230)	-	(102)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・海・英		
130	S T34	土器器 瓶	(215)	-	(102)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・長	84	
131	S T34	土器器 瓶	(260)	-	(135)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・長	85	輪積底
132	S T34 - カマド	土器器 瓶	(154)	-	(63)	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	纏・海		
93	133 39	S T34 - E K I	土器器 瓶	132 (66)	146	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	纏板	纏・長	130	外面煤付着
134	39 S T34 - F	土器器 瓶	(142)	-	(75)	ハケメ・ナデ	ハケメ	ハケメ	纏・海・英	87	
135	S T34	土器器 瓶	-	(80)	(25)	ハケメ・ヘラナデ	纏板	纏・青・長	87	内面摩滅	
136	S T34	赤土器 瓶	(136)	-	(102)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・海・長	84	
137	S T35	須恵器 瓶	164	-	34	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏		
138	40 S T35	須恵器 瓶	-	-	(18)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏		
139	S T35	須恵器 高台环	-	-	(17)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏		
140	40 S T35	須恵器 高台环	(142) (100)	48	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏	154	
141	S T35	須恵器 高台环	-	83	(25)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏		
142	S T35	須恵器 高台环	-	-	(20)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏・海		
143	S T35 - F	須恵器 环	(135) (97)	33	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏・海		
144	S T35	須恵器 瓶	-	-	(98)	平行タキ・ダ	青海波文	纏・海			
145	40 S T35	土器器 环	-	-	(40)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・長	内黒	内面摩滅
146	40 S T35	土器器 环	-	52	(20)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	纏・長	内黒	外黒
147	40 S T35 - Y	土器器 瓶	-	80	(49)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・長		
148	S T35	土器器 瓶	-	(97)	(30)	ハケメ	ハケメ	木葉底	木葉底	纏・長	
149	S T35	土器器 瓶	-	(76)	(13)	ハケメ	ハケメ	木葉底	木葉底	纏	
94	150 S T35	土器器 瓶	-	(135)	(95)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・青・長	輪積痕	
151	S T35	土器器 瓶	-	(102)	(20)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏	外面摩滅	
152	40 S T35	土器器 瓶	(208)	60	270	ハラナデ・ケズリ	ハラナデ・ケズリ	ケズリ	纏・青・長	153	輪積痕
153	40 S T35 - カマド	赤土器 瓶	(220)	-	(220)	ロクロ・カキロクロ・カキメ・ケズリ	ロクロ・カキロクロ・カキメ・ハケメ	ロクロ	纏・長	155	
154	40 S T35 - Y	赤土器 瓶	-	80	(189)	ケズリ	ハケメ	ハケメ	纏・海・長		
155	S T36 - カマド	須恵器 瓶	-	-	(18)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	纏・海		
156	S T36 - カマド	須恵器 瓶	-	-	(46)	平行タキ	平行タキ	平行アテ	纏・海		
157	41 S T36 - カマド	赤土器 环	(122)	47	32	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏		
158	S T36 - Y	赤土器 环	(134)	53	46	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏		
159	S T36	赤土器 环	(138)	40	47	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海	118	
160	41 S T36 - カマド	赤土器 环	(124)	50	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏		
161	41 S T36 - カマド	赤土器 环	-	119	47	40	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・長	
162	41 S T36	赤土器 环	(140)	-	(43)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏		
95	163 S T36 - カマド	土器器 瓶	(210)	-	(85)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・海		
164	S T36 - カマド	土器器 瓶	-	-	(79)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	纏・海・英		
165	S T36 - Y	赤土器 瓶	-	-	(43)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・長	内面摩滅	
166	41 S T36 - E K I	赤土器 瓶	-	120	(118)	ケズリ	ハラナデ	ハラナデ	纏・青・長		
167	S T36 - カマド	赤土器 瓶	(226)	-	(80)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・長		
168	S T36 - カマド	赤土器 瓶	(150)	-	(81)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・海・英		
169	S T36 - カマド	赤土器 瓶	(144)	-	(69)	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・海	外面煤付着	
170	S T36 - カマド	赤土器 瓶	-	-	(98)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	ロクロ	纏・青・長	外面煤付着	
171	41 S T37	土器器 高台环	(146) (70)	56	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長	202	内黒
172	41 S T37	赤土器 高台环	(150)	70	60	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長	205	
173	41 S T37 - F	赤土器 高台环	(149)	68	61	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長	204	
174	S T37	赤土器 环	-	58	(30)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長		
175	41 S T37	土器器 瓶	-	248	-	(270)	ハケメ	ハケメ	ハケメ	206	外面煤付着
96	176 42 S T38	須恵器 高台环	-	63	(33)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海	182	
177	S T38 - E P 4	須恵器 环	136 (64)	42	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏		
178	42 S T38	須恵器 环	144	50	54	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海	230	
179	42 S T38 - カマド	須恵器 环	143	48	43	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海		
180	S T38	須恵器 瓶	-	(108)	(165)	ケズリ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	181	
181	S T38 - P	須恵器 瓶	-	-	(166)	平行タキ	平行タキ	平行タキ	纏・海		
182	42 S T38	赤土器 瓶	133	60	38	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海	180	高台付
183	S T38 - カマド	土器器 瓶	(175)	-	(114)	ハケメ	ハラナデ	ハラナデ	纏・海		
184	42 S T39	赤土器 高台环	148	70	60	ロクロ	ロクロ	菊花ナデ	纏・海	134	
185	42 S T39 - F	赤土器 高台环	(140)	62	57	ロクロ	ロクロ	菊花ナデ	纏・海		
186	S T39 - F	赤土器 高台环	(149)	(73)	57	ロクロ	ロクロ	ロクロ	纏・海		

表4 土器・陶磁器観察表(4)

図版 写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値()			調査法	出土 部	登録 番号	備考
				口径	底径	器高	外面	内面		
96 187	S T39 - F	赤線上器	高台环	(144)	(72)	47	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・長
97 188	S T39 - F	赤線上器	环	-	60	(36)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・英・長
189 42	S T39 - F	赤線上器	环	(122)	(52)	40	ロクロ	ロクロ	纏・長	
190 42	S T39 - F	赤線上器	环	(133)	(63)	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・英・長
191 42	S T39 - F	赤線上器	环	(132)	(56)	42	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長
192 42	S T39 - F	赤線上器	盖	(192)	94	220	ロクロ・ケズリ	ヘラナデ	纏・海・長	135 外面焼付着
193 42	S T39 - F	赤線上器	盖	(136)	-	(113)	ロクロ	ロクロ	纏・海・英	外面焼付着
194 43	S T40 - F	土師器	高台环	(146)	64	64	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長 148 内黒
195	S T40 - Y	土師器	高台环	-	58	(16)	ミガキ	回転系切	纏・海	内黒・外面摩滅
196	S T40 - カマド	赤線上器	高台环	-	68	(20)		回転系切	纏・海・長	外内面摩滅
197 43	S T40	赤線上器	盖	(134)	62	38	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長 140 高台付
198 43	S T40 - F	赤線上器	环	(128)	42	41	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海 146
199 43	S T40 - F	赤線上器	环	(131)	56	42	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏 147
200 43	S T40	赤線上器	环	128	56	47	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長 139
201 43	S T40 - F	赤線上器	环	(132)	56	42	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海 142
202 43	S T40 - カマド	土師器	盖	(252)	-	(119)	ハケメ	ハケメ	纏	纏・長 144
203 43	S T40 - F	土師器	盖	-	(98)	(49)	ハケメ	ハケメ	纏板	纏・長
204 43	S T40	土師器	盖	(136)	-	(129)	ハケメ	ハケメ	纏・海・英 143	外面焼付着
205	S T40 - カマド	土師器	盖	-	70	(65)	ハケメ	ハケメ	纏板	纏・海・英 145
98 206	S T40 - F	土師器	盖	(208)	-	(52)	ハケメ	ハケメ	纏・長	内面摩滅
207 43	S T40 - カマド	土師器	盖	(146)	-	(102)	ハケメ	ハケメ	纏・長	
208	S T40 - P	赤線上器	盖	-	-	(68)	ヘラナデ	ヘラナデ	纏・英	
209	S T40 - F	赤線上器	盖	(144)	-	(25)	ロクロ	ロクロ	纏・海・長	
211	S T43 - Y	須恵器	蓋	(140)	-	(21)	ロクロ	ロクロ	纏・海	
212	S T43	須恵器	高台环	(123)	(63)	43	ロクロ	ロクロ	纏	132
213	S T43 - P	須恵器	环	-	(57)	(15)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海
214	S T43 - Y	須恵器	蓋	-	-	(147)	ロクロ・ヘラナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	纏・長	
215	S T43 - F	須恵器	蓋	-	-	(70)	格子状タクタク	青海波文	纏・海	
216	S T43 - F	須恵器	蓋	-	-	(98)	平行タクタク	青海波文	纏	
217	S T43 - P	須恵器	蓋	-	-	(83)	平行タクタク	平行アテ	纏・海	
99 218 44	S T43 - F	須恵器	蓋	-	-	(434)	平行タクタク	青海波文	纏	
219	S T43 - F	赤線上器	高台环	(134)	-	(47)	ロクロ	ロクロ	纏・海・長	
220 44	S T43 - Y	赤線上器	高台环	-	75	(23)		回転系切	纏・海	126 内外面摩滅
221	S T43 - Y	赤線上器	高台环	-	(54)	(20)		回転系切	纏	125 内外面摩滅
222 44	S T43 - Y	土師器	环	(137)	53	56	ロクロ	ミガキ	回転系切	纏・海 128 内黒
223	S T43 - E P 5	土師器	环	(180)	-	(63)	ロクロ	ロクロ・ミガキ	纏・海・英 137 内黒	
100 224 44	S T43 - E P 1	赤線上器	环	(126)	52	45	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・長
225 44	S T43 - Y	赤線上器	环	(117)	54	44	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・長 128
226 44	S T43 - E P 5	赤線上器	环	(138)	52	49	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海・英・長 137
227	S T43 - カマド	土師器	盖	(258)	-	(200)	ハケメ	ハケメ	纏・海	122
228	S T43 - E P 5	土師器	盖	(179)	-	(74)	ハケメ	ハケメ	纏・海	152
229	S T43 - E P 5	土師器	盖	-	(100)	(41)	ハケメ	ハケメ	纏	
230	S T43 - カマド	土師器	盖	-	(100)	(19)	ハケメ	ヘラナデ	纏	121
231	S T43 - Y	土師器	盖	(260)	-	(115)	ハケメ	ハケメ	纏	124 輪積板
232	S T43 - F	土師器	盖	(248)	-	(132)	ハケメ	ハケメ	纏・海・英	
233 44	S T43 - E P 7	赤線上器	盖	(162)	(95)	(188)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	纏・海・長 151	
101 234	S T43 - E P 6	赤線上器	盖	(268)	-	(103)	ロクロ	ロクロ	纏・雲・長	内面摩滅
235	S T43 - Y	赤線上器	盖	(150)	-	(68)	ロクロ	ロクロ	纏・雲・英	
237	S T44 - F	須恵器	环	-	(68)	(30)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海
238	S T44 - カマド	土師器	盖	92	-	(72)	ヘラナデ	ヘラナデ	纏・海	177
239 45	S T44 - F	土師器	盖	(158)	-	(88)	ヘラナデ	ヘラナデ	纏	瓶部に段
240	S T44 - カマド	土師器	盖	(187)	-	(90)	ロクロ	ロクロ	纏・雲・長	176
241 45	S T44 - カマド	土師器	盖	(226)	74	(360)	ケズリ	ヘラナデ	纏・海・雲	外面焼付着 輪積板
242	S T44 - カマド	赤線上器	盖	(230)	-	(87)	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	纏・海・雲	175
243	S T44 - カマド	赤線上器	盖	-	62	(120)	ケズリ	ハケメ	纏・雲・長	178 外面焼付着
244 45	S T44 - F	赤線上器	盖	-	-	(47)	ケズリ	ハケメ	纏・長	把手部
102 249 46	S T46 - E K 3	須恵器	高台环	(164)	69	55	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海
250 46	S T46	須恵器	高台环	(144)	66	69	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海 71
251	S T46 - F	須恵器	环	-	60	(23)	ロクロ	ロクロ	回転系切	纏・海
252 46	S T46 - E K 1	土師器	环	(123)	65	50	ミガキ	塵痕	纏・英・長	内黒・外面摩滅
253	S T46 - カマド	土師器	环	-	58	(26)	ロクロ	ミガキ	回転系切	纏・海 内黒

表5 土器・陶磁器観察表（5）

図版 写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値（cm）			調査法	船上	登録番号	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	底部		
102 254	S T46-P	土器器	甕	160	-	(67)	ロクロ・ヘラナデ	ロクロ・ナデ	粗	船積板 船艤内段	
255	S T46-Y	赤焼土器	甕	214	-	(132)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	細・海・雲		
256 46	S T46-P	赤焼土器	甕	150	72	136	ロクロ	ロクロ	回転系切	粗・雲・長 73	
103 257 46	S T46-カマド	赤焼土器	甕	(210)	-	(238)	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	細・海・雲・長		
258	S T46-カマド	赤焼土器	甕	-	-	(137)	ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	細・海・雲・長		
259 46	S T46-P	赤焼土器	瓶	(260)	-	(138)	ロクロ・カキメ	ロクロ・カキメ	細		
260 46	S T50	須恵器	环	143	92	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微・海 69	
261 46	S T50	須恵器	环	138	80	31	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細・海 70	
262	S T50	赤焼土器	甕	(180)	-	(115)	ロクロ・ケズリ	カキメ	細・海・長		
263	S T50	赤焼土器	甕	-	-	(77)	ケズリ	ハケメ・ヘラナデ	粗・海・長 78		
264	S T50	赤焼土器	瓶	(330)	-	(93)	カキメ	カキメ	細・海・雲・長		
104 265	S T54-カマド	須恵器	蓋	-	-	(12)	ロクロ	ロクロ	細		
266 46	S T54-カマド	須恵器	高台环	-	79	(30)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微・海	
267	S T54	須恵器	环	-	(80)	(22)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微・海	
268	S T54	須恵器	甕	-	-	(48)	平行タタキ	青海波文	微・海		
269	S T54	土器器	甕	267	-	(45)	(45)	(45)	粗・海・長	内面摩滅	
270	S T54	赤焼土器	甕	-	-	(61)	カキメ	カキメ	細・雲・長		
271	S T54	赤焼土器	甕	-	-	(84)	ロクロ	ロクロ	粗・雲・長		
272	S T54-カマド	赤焼土器	甕	-	-	(105)	ロクロ	粗・海・堂・長	内面摩滅		
273 46	S T54-カマド	赤焼土器	甕	(230) 470	355	タキヨ・ロ・カキメ	タキヨ・ロ・カキメ	タキヨ・ロ・カキメ	細・海・雲・長 75	外面煤付着	
274 47	S T54-カマド	赤焼土器	甕	140	76	119	ロクロ	ロクロ	粗・美・長 76		
275 47	S T54-Y	赤焼土器	甕	-	78	(105)	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海・雲	
276	S T643	須恵器	环	(129) 74	40	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細・長	
277	S T643	須恵器	环	-	(94)	(27)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細・長	
105 278	S T658-EK3	須恵器	高台环	-	(75)	(42)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微	
279	S T658-EK5	須恵器	环	(144) 61	39	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
280 47	S T658-EK5	須恵器	甕	(290)	-	(67)	ロクロ	ロクロ	粗・長		
281 47	S T658	土器器	高台环	(155) 68	66	ロクロ	ミガキ	回転系切	微・海 227	内黒	
282	S T658-EK2	赤焼土器	高台环	(142) 60	46	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海		
283 47	S T658-EK3	赤焼土器	环	(122) 48	41	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海・長 245		
284 47	S T658-EK2	赤焼土器	环	130	53	39	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・雲・長 244	
285 47	S T658-カマド	赤焼土器	环	(128) 56	40	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・長 228		
286 47	S T658-EK3	赤焼土器	环	(120) 50	47	ロクロ	ロクロ	回転系切	細 254		
287	S T658-EK2	赤焼土器	环	(149) 64	46	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海・長		
288 47	S T658-カマド	赤焼土器	甕	(282) 107	305	ハケメ	ハケメ	密痕	細・海・英 226		
289	S T658-EK1	土器器	甕	(212)	-	(80)	ハケメ	ハケメ	細・海・英		
290	S T658-EK2	土器器	甕	(264)	-	(55)	ハケメ	ハケメ	細・海		
106 291	S T658-F	土器器	甕	(220)	-	(75)	ハケメ	ハケメ	細・海		
292	S T658-EK3	土器器	甕	(233)	-	(104)	ハケメ	ハケメ	細・海・英 256		
293 48	S T658-カマド	赤焼土器	甕	(208)	-	(283)	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ヘラナデ	細・長 225		
294	S T658-F	土器器	甕	-	(82)	(20)	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・長	
296 48	S T660	土器器	环	(154)	-	(34)	ロクロ	ロクロ	微・長	内面摩滅、東面系々	
297	48	S T660-カマド	土器器	环	146	45	59	ヘラナデ	ヘラナデ	回転ヘラ記号「メ」西 東系々	
298	48	S T660-カマド	土器器	甕	(128)	-	(73)	ハケメ	ハラナデ	細・雲・長	
299	48	S T660	土器器	甕	194	54	279	ハケメ・ヘラナデ	ハケメ	粗・海・長 253	
107 300	S T660-カマド	土器器	甕	(206)	-	(90)	ハケメ	ハケメ	内面摩滅、外面煤付着		
301 49	S T660-カマド	土器器	甕	-	84	(163)	ロクロ	ロクロ	粗・美・長 252	内面摩滅	
302	S T662	須恵器	高台环	(152) 70	58	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海		
303 49	S T662	須恵器	高台环	157	63	57	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海・長 235	墨書「春」
304 49	S T662	須恵器	环	(136)	50	44	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海 234	
305 49	S T662	須恵器	环	(130)	50	42	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海 237	
306 49	S T662-F	須恵器	环	146	56	43	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海 233	
307 49	S T662-F	須恵器	环	146	50	39	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海 236	
308 49	S T662-E P2	須恵器	环	(145)	56	44	ロクロ	ロクロ	回転系切	微	墨書「万」
309	S T662-F	須恵器	环	-	(55)	(13)	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海	墨書「社」+
310	S T662	須恵器	甕	-	-	(53)	ロクロ	ロクロ	細・長		
311	S T662-E P1	土器器	高台环	-	(60)	(25)	ロクロ	ミガキ	微	内黒	
312	S T662-F	赤焼土器	环	-	(56)	(32)	ロクロ	ロクロ	回転系切	微	
313	S T662-E P4	赤焼土器	环	-	(56)	(18)	ロクロ	ロクロ	回転系切	細・海・英・長	

表6 土器・陶磁器観察表（6）

図版 写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値（cm）			調査法	出土 部	登録 番号	備考	
				口径	底径	高さ					
107 314	S T662-E K4	土器器	甕	(230)	-	(64)	ハケメ	ハケメ	継・長		
108 315	S T662-E P1	土器器	甕	(165)	-	(112)	ハケメ	ハケメ	継・長		
316	S T662-F	土器器	甕	(280)	-	(164)	ハケメ		継・長	内面摩滅 縫痕	
317	S T662-F	土器器	甕	-	(84)	(102)	ハケメ	ハケメ	継・長	238	
318	S T662-E P4	土器器	甕	(322)	-	(81)	ハケメ	ハケメ	継・長		
319 50	S T662-E K4	土器器	甕	-	(94)	(254)	ハケメ	ハケメ	継・長	内面摩滅 縫痕	
320	S T662-E P2	赤絨土器	甕	(214)	-	(71)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	継・海・雲・ 莫・長		
109 321 49	S T662-F	赤絨土器	甕	(215)	-	(293)	ロクロ・ケズリ	ロクロ・カキ ス・ハケメ	継・雲・長		
322	S T662-F	赤絨土器	甕	(190)	-	(23)	ロクロ	ロクロ	継・海・雲		
323	S T662-F	赤絨土器	甕	-	(40)	(40)	ロクロ	ロクロ	継・長		
110 327 50	S T674	須恵器	釜	138	-	30	ロクロ	ロクロ	継・海		
328 50	S T674	須恵器	釜	147	-	32	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海 258	
329 50	S T674	須恵器	高台环	(132)	75	46	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海	
330	S T674-カマフ	須恵器	鉢	(171)	-	(50)	ロクロ	カキメ	継・海・長		
331 50	S T674	須恵器	長颈瓶	-	-	(146)	ロクロ・ケズリ	ロクロ	継		
332 50	S T674	土器器	甕	-	(68)	(98)	ハケメ		木葉瓶	継・長	
333	S T674	土器器	甕	(164)	-	(92)	ヘラナデ	ヘラナデ		頭部に段	
334	S T674-E K8	赤絨土器	甕	(270)	-	(140)	ロクロ・カ キメ・ズリ	ロクロ	継・長		
111 337	S B112-E B203	須恵器	坪	-	(44)	(65)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海	
338	S B204-E B165	須恵器	坪	-	(50)	(14)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海	
339	S B557-E B29	赤絨土器	坪	-	(48)	(11)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・美	
340	S B551-E B305	須恵器	高台环	-	(94)	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継	
341 51	S B551-E B400	須恵器	坪	(128)	(88)	40	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海	
342 51	S B557-E B38	須恵器	釜	(153)	-	33	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海	
343	S B597-E B813	須恵器	釜	(155)	-	(24)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海 49 天井部黒痕	
344 51	S B597-E B818	須恵器	坪	(134)	(82)	35	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	継・海	
345	S A802-E B471	土器器	甕	-	(84)	(30)	ヘラナデ	ハケメ	木葉瓶	継・長	
346	S A805-E B655	須恵器	甕	-	-	44	平行タキ	ヘラナデ	継・長		
347 51	S K41	土器器	釜	-	-	(27)	ロクロ・ミガキ	ミガキ	継・海・英 168 両黒		
348	S K41	土器器	高台环	(138)	60	55	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海 160 内黒	
349 51	S K41	土器器	高台环	(150)	71	55	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海 162 内黒	
350 51	S K41-P	土器器	高台环	140	64	52	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海 内黒	
351	S K41	土器器	高台环	(130)	64	51	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海 164 内黒	
352 51	S K41	土器器	高台环	(124)	(58)	51	ロクロ・ミガキ	ミガキ	回転糸切	継・海 167 内黒	
112 353	S K41-F	土器器	高台环	(132)	-	43	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海・英・長 内黒	
354	S K41-F	土器器	高台环	(146)	-	(55)	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海・英 内黒	
355 51	S K41-F	土器器	高台环	(156)	-	(56)	ロクロ	ミガキ	回転糸切	継・海・長 内黒	
356 51	S K41	土器器	高台环	-	(73)	(24)	ロクロ・ミガキ	ミガキ	回転糸切	継・海 163 両黒	
357 51	S K41	土器器	高台环	134	54	50	ロクロ	ミガキ	継・海	161 内黒	
358 51	S K41	土器器	高台环	(168)	(72)	73	ロクロ・ミガキ	ミガキ	回転糸切	継・海 166 両黒	
359	S K41	赤絨土器	高台环	-	-	80	(20)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海 169 底部
360	S K41-F	赤絨土器	坪	(130)	(50)	44	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海・長	
361 51	S K41-F	赤絨土器	坪	(144)	(58)	46	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海・長	
362 52	S K41	土器器	甕	154	78	129	ハケメ	ハケメ	須恵	継・長 165 外面焼付着	
363 52	S K41-Y	土器器	甕	(182)	-	(92)	ハケメ	ハケメ	継・長		
364 52	S K41-F	赤絨土器	甕	-	-	(65)	ロクロ	ロクロ	継・海	外表面焼付着	
365	S K41-F	赤絨土器	甕	-	(102)	(96)	ヘラナデ	ヘラナデ	継・海・長		
366 52	S K41-F	赤絨土器	甕	-	(100)	(144)	ケズリ	ナデ	継・海・英	外表面焼付着	
113 367	S K53	須恵器	甕	-	(114)	(69)	平行タキ・ケ ズリ	ロクロ・ナデ	継		
368 52	S K57	赤絨土器	甕	-	(28)	(18)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	継・海・長	
369 52	S K61	かわらけ	-	(60)	(13)				回転糸切	継 浅青褐色 内外面摩滅	
370 52	S K62	須恵器系 陶器	規則壺	(60)	-	(42)	ロクロ	ロクロ	継	6 珠洲 期	
371 52	S K62	須恵器系 陶器	甕	(493)	-	(118)	平行タキ	アテ	継	7 珠洲 期	
374 53	S K81	灰陶陶器	四耳甕	-	-	(45)	ロクロ	ロクロ	継		
375	S K86	須恵器系 陶器	片口甕	-	-	(24)	ロクロ	ロクロ	継	珠洲 期 片口部片	

表7 土器・陶磁器観察表(7)

図版	写真 図版	出土地点	種別	器種	計測値()			調査技法	出土 部	登録 番号	備考	
					口径	底径	器高	外面	内面	底部		
114	377	53	S K87	須恵器系 盆	(195)	-	(300)	平行タキ	アテ	縦	8 珠洲 期	
380	54	S K91	白磁	碗	-	(62)	(24)	ケズリ	-	ケズリ	黑色粒混入 12 色調5Y7/1灰白色 太平府編年鏡五期	
381	54	S K133	須恵器系 盆	-	(134)	(58)	ロクロ	ロクロ	静止系切	微・海・長	156 珠洲 期	
382	54	S P132	青磁	碗	-	-	(29)	-	-	黑色粒混入	色調10Y7/1灰白色 龍泉空系I-1類	
383		S P167	灰釉陶器	盆	-	-	(56)	ロクロ	ロクロ	微	5	
384	54	S P279	須恵器	环	-	(51)	(18)	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
385	54	S P530	かわらけ	-	(98)	(70)	19	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦	
115	386	54	S P638-Y	土師器 高台环	(140)	-	(51)	ロクロ	ミガキ	縦・海	123 内黒	
387		S P645	瓦質上器	盆	-	-	(72)	ミガキ	ナデ	微・海		
389		S E79-F	須恵器	环	-	(44)	(12)	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦	
390	54	S E79	白磁	碗	-	-	(42)	-	描模	黑色粒混	36 色調5Y7/2灰白色 太平府編年鏡V類	
393		S D604	須恵器 長颈瓶	-	(90)	ロクロ	ロクロ	粗				
394	55	S D642	須恵器	环	(136)	57	51	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
395	55	S D642	土師器	高台环	146	67	56	ロクロ	ミガキ	回転系切	微・海	
396		S D642	赤織上器	环	-	56	(29)	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海・長	
116	397	55	S D642	赤織上器	环	(135)	64	47	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海・長
398	55	S D642-F	赤織上器	环	(130)	(58)	48	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
399	55	S D691-Y	須恵器	高台环	(142)	(94)	46	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	
400		S D691-F	須恵器	环	(150)	(66)	37	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微・海	
401		S D691	土師器	甕	-	-	(65)	ハケメ・ヘラナデハケメ・ヘラナデ	縦・海・長			
402	55	S D692-F	須恵器	高台环	147	105	43	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微	
403	55	S D692-F	須恵器	环	(142)	(90)	39	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海	
404		S D698	須恵器	环	-	(66)	(16)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	微	
405	55	S D698-F	土師器	甕	-	72	(28)	ケズリ	ヘラナデ	木葉痕	縦・海	
406	55	S D699	須恵器	高台环	-	87	(26)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	縦・海・長	
407		S D699-F	土師器	甕	-	-	(40)	ハケメ	ヘラナデ	縦・雲・長	ヘラ記号「-」	
408		S XR3	須恵器系	甕	-	-	(27)	ロクロ	ロクロ	縦	珠洲 期	
409		S X701	須恵器系	甕	-	(78)	(59)	ロクロ	ロクロ	静止系切	微・海	
410	55	S X710	土師器	甕	177	-	(60)	ハケメ	ヘラナデ	縦・雲・長	珠洲 期	
411	55	S X710	土師器	甕	(168)	-	(45)			粗・雲・長	内外面磨滅	
412	55	S X710	土師器	甕	(75)	-	(56)			縦・長	内外面磨滅	
117	413	56	15-11G	須恵器	蓋	132	53	22	ロクロ	回転系切	縦・海	
414		グリッド	須恵器	蓋	(161)	-	(19)	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	
415	56	グリッド	須恵器	环	-	(68)	(17)	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦・海	
416	56	16-18G	須恵器	环	-	(60)	(32)	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
417	56	グリッド	須恵器	蓋	-	-	(47)	ロクロ	ロクロ	縦・海	墨書「万」	
418	56	13-18G	須恵器	蓋	-	53	(35)	ロクロ	ロクロ	回転系切	微・海	
419	56	11-16G	須恵器	長颈瓶	-	-	(175)	ロクロ	ロクロ	縦		
420	12-14G	須恵器	甕	(264)	-	(83)	平行タキ・ロ	青白波文	縦			
421	56	15-11G	土師器	环	(123)	66	51	ミガキ	ミガキ	密痕	縦	
422	8	16G	土師器	甕	-	-	(69)	ミガキ	ミガキ	微・海	内黒	
423	56	12-14G	土師器	甕	(91)	(44)	54		ナデ	縦・長	外面磨滅	
424	56	11-15G	瓦質上器	甕	-	-	(70)	ミガキ	ヘラナデ	微・海		
425		グリッド	かわらけ	-	(138)	(88)	33	ロクロ	ロクロ	回転系切	縦	
426	56	17-18G	青磁	碗	-	-	(32)	上平青釉物 下平無釉	青釉物	-	色調7.5Y6/2 灰アーチ・波 口沿部墨書き 同安窯系青磁	
427	56	グリッド	白磁	碗	-	-	(27)	透明釉	透明釉	黑色粒混入	色調5Y7/2灰白色 太平府編年鏡V類	

註：出土は以下の略語を用いた。

縦(器の裏じりがなく縦直)
粗(底身をむじむ)縦(縦身をむじむ)
粗(縦身をむじむ)海(海縫合封)
荒(全表面)美(石美)
長(長石)

表8 石製品観察表

図版 写真 図版	出土地点	登録番号	器種	計測値()			石質	備考
				長さ	幅	厚さ		
89 13 32	S T 2-Y	R Q 33	刀子状石製品	106	17	12	安山岩	
88 81 37	S T 26-Y	-	砥石	53	47	26	安山岩	中級 砥面1面
91 108 38	S T 27-Y	R Q 107	剃鉗車	径 86		13	凝灰岩	孔径9()
109 38	S T 27-Y	R Q 246	砥石	(148)	(149)	92	安山岩	荒砥 砥面2面
110 38	S T 27-F	-	砥石	63	47	12	流紋岩	仕上砥 砥面2面
98 210 43	S T 40-Y	-	円石	73	65	59	安山岩+	網引痕
101 236 44	S T 43-F	-	砥石	50	50	20	凝灰質泥岩	中級 砥面4面
102 247 45	S T 74	R Q 174	剃鉗車	径 (81)		16	凝灰岩	孔径12()
248 45	S T 44-F	-	砥石	125	87	75	凝灰岩	荒砥 砥面5面
109 324 50	S T 662	R Q 239	砥石	131	58	45	凝灰質泥岩	中級 砥面4面 穴孔途中
325 50	S T 662-E P 1	-	砥石	192	80	78	流紋岩	荒砥 砥面4面
326 50	S T 662-F	-	磨製斧斧	61	32	11	綠泥片岩	
110 336 50	S T 674	-	砥石	27	25	17	凝灰岩	中級 砥面4面 穴孔
113 372 53	S K 71	R Q 3	砥石	235	125	115	安山岩	中級 砥面7面
376 53	S K 86	-	砥石	83	32	26	流紋岩	仕上砥 砥面1面
115 391 54	S E 79	R Q 40	砥石	127	50	46	花崗閃綠岩	荒砥 砥面4面
106 429 49	S T 660	R Q 229	石製模造品	32	31	4	安山岩	粗製圓板 孔径1.5()
117 430 56	14-12G	-	石製模造品	29	(12)	4	頁岩	粗製圓板 孔径1.5()

表9 玉製品観察表

図版 写真 図版	出土地点	登録番号	器種	計測値()		備考
				径	厚さ	
115 388 54	S P 860	R XII	小玉	6	5	ガラス質+ 孔径2()

表10 金属製品観察表

図版 写真 図版	出土地点	登録番号	器種	計測値()			保存処理No.	備考
				長さ	幅	厚さ		
88 80 37	S T 26	R M 14	剃鉗車	258	55	3	5	軸断面3×3 (mm)
91 106 38	S T 27	R M 198	刀子	85	10	(8)	11	
107 38	S T 27	-	鉈斧	71	39	20	10	
102 245 45	S T 44	R M 158	用途不明品	(71)	27	2	2	
246 45	S T 44	R M 157	鍬+	(219)	53	(9)	1	
108 295 47	S T 658-F	R M 208	剃鉗車	径 50		(7)	9	孔径4()
110 335 50	S T 674	R M 209	刀子	109	11	(7)	8	
113 373 53	S K 71	R M 1	鍬	(166)	33	(10)	3	
114 378 54	S K 87	R M 4	用途不明品	(89)	(42)	(28)	6	
379 54	S K 87	-	鍬	114	32	(12)	7	
115 392 54	S H 103	R M 10	刀	(321)	21	(11)	4	
117 428 56	11-12G	-	刀子	82	10	(7)	12	

註 計測値は最大値を表し、X線写真に於いて実際の判明した値を示す。
() 内の数値は、頭を含む複数値を表す。

写 真 図 版



調査区南半壁穴住居跡 実掘状況（北から）



ST35壁穴住居跡 床面検出状況（西から）



ST37・38竪穴住居跡 完掘状況（北西から）



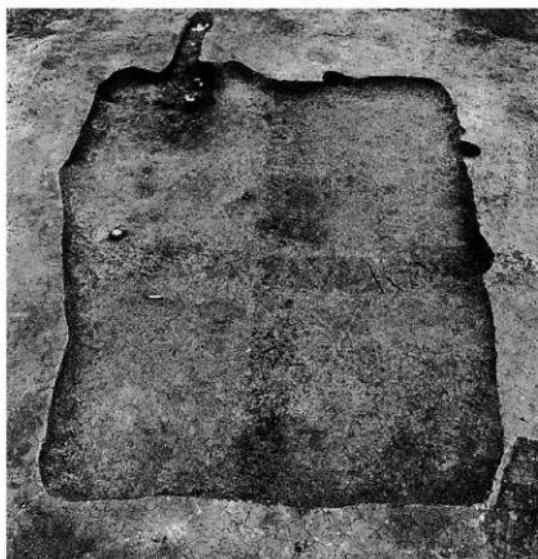
ST37竪穴住居跡 床面検出状況（西から）



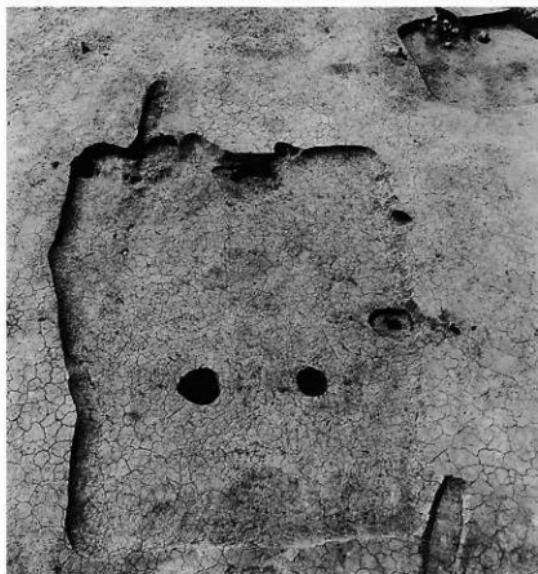
ST39竪穴住居跡 床面突出状況（北から）



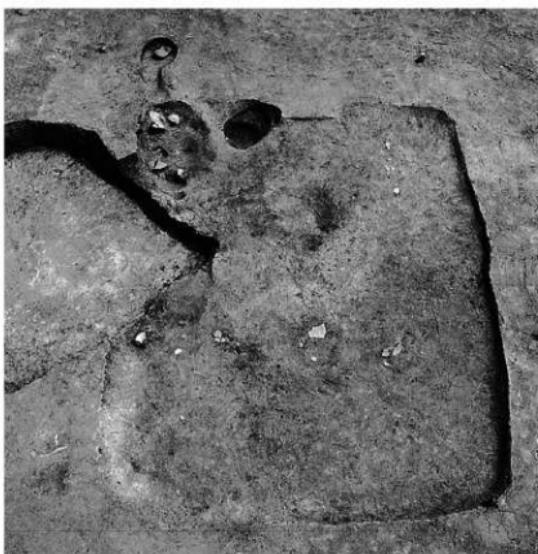
ST38竪穴住居跡 床面突出状況（西から）



ST36竪穴住居跡
床面突出状況（北から）



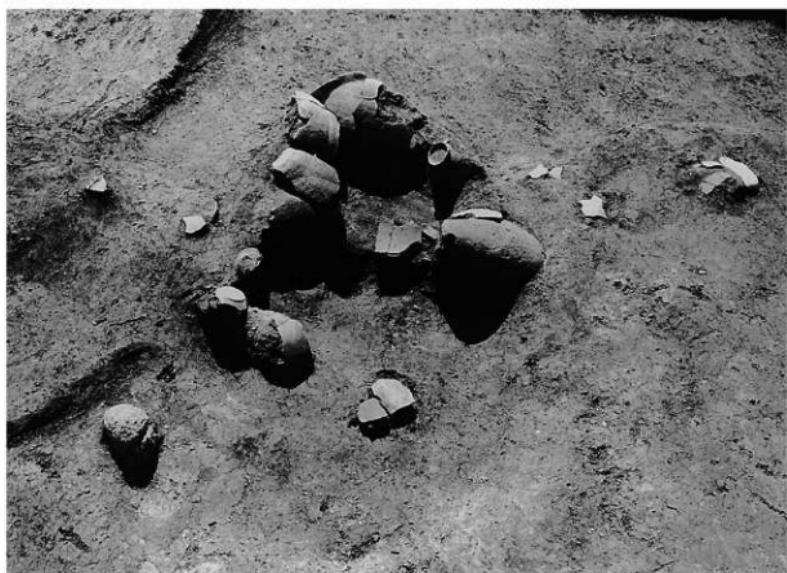
ST36竪穴住居跡 完掘状況
(北から)



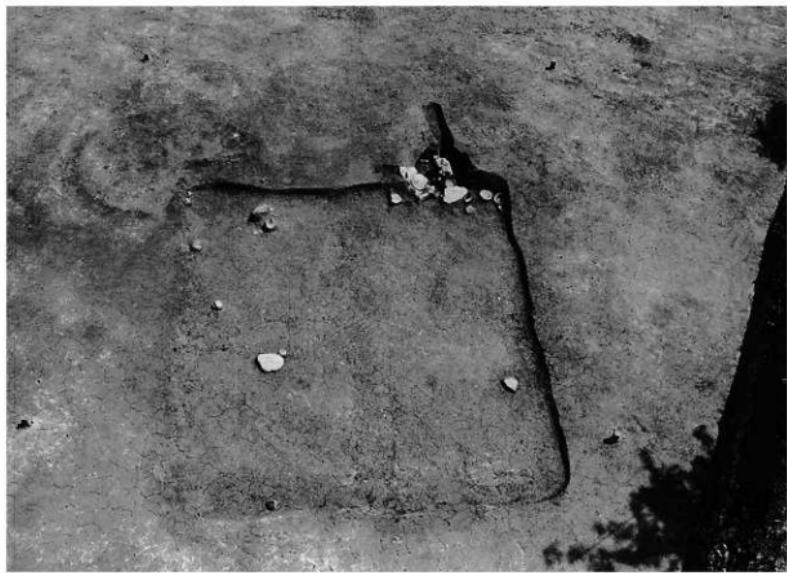
ST34竪穴住居跡
床面検出状況（西から）



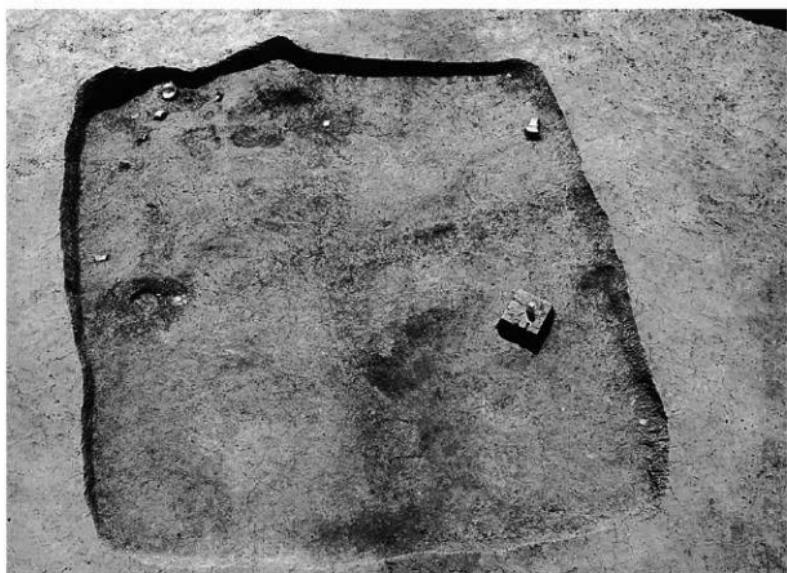
ST34竪穴住居跡 完掘状況
(西から)



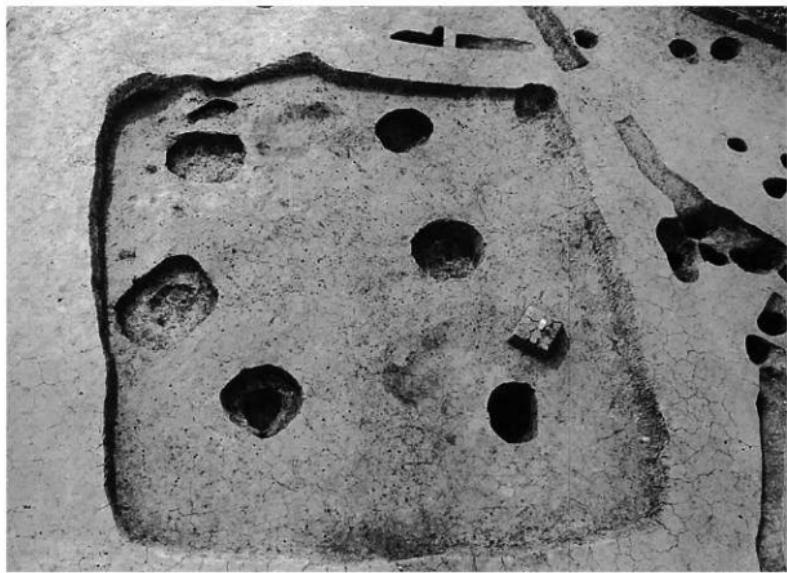
ST658カマド 遺物出土状況（北から）



ST40堅穴住居跡 床面検出状況（西から）



ST662竪穴住居跡 床面棟出状況（北から）



ST662竪穴住居跡 完掘状況（北から）



ST50竪穴住居跡 床面検出状況（南西から）



ST50竪穴住居跡 完掘状況（南西から）



ST 2 穴住居跡 完掘状況
(南西から)



ST 2 カマド 遺物出土状況
(北から)



ST 1 カマド 完掘状況
(西から)



調査区中央部竪穴住居跡 完掘状況（北西から）



ST 3 竪穴住居跡 床面検出状況（南西から）



ST 3 整穴住居跡 完掘状況（西から）



ST 3 カマド 遺物出土状況（西から）



柄香炉形土器 出土状況（北西から）



ST 3 出土 柄香炉形土器



ST 7 壁穴住居跡 炭化物様出状況（西から）



ST 7 壁穴住居跡 完掘状況（北から）



ST23整穴住居跡 床面検出状況（北東から）



ST23整穴住居跡 完掘状況（北から）



ST13整穴住居跡 完掘状況（北から）



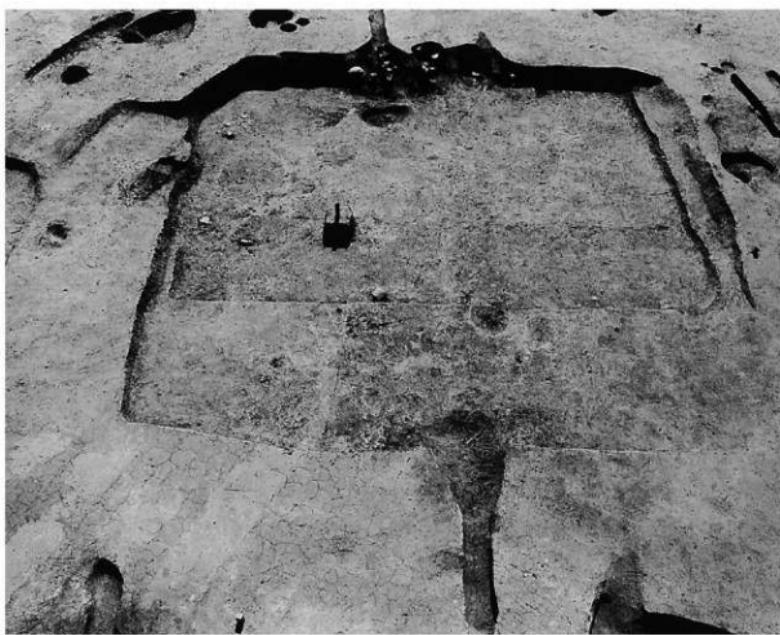
ST674整穴住居跡 完掘状況（西から）



ST26整穴住居跡 完掘状況（北から）



ST43整穴住居跡 完掘状況（西から）



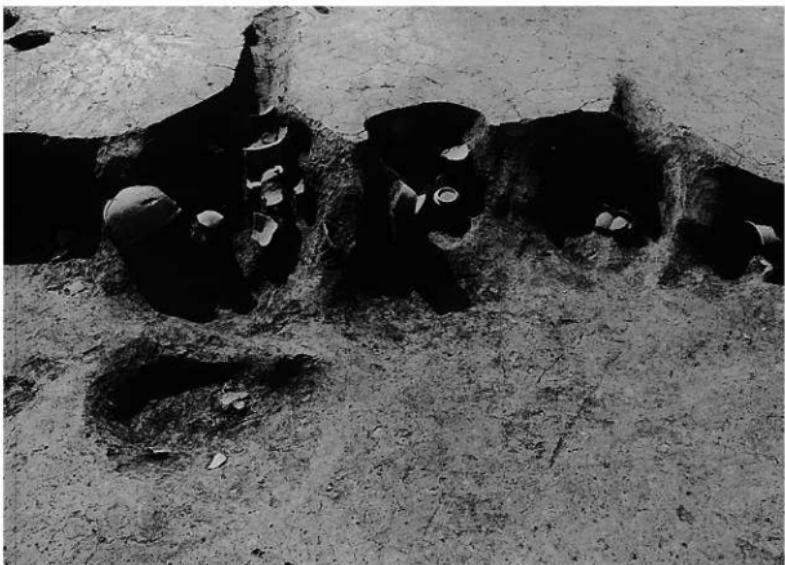
ST27整穴住居跡 床面検出状況（北から）



ST27整穴住居跡 完掘状況（北から）



ST27カマド1 完掘状況（南から）



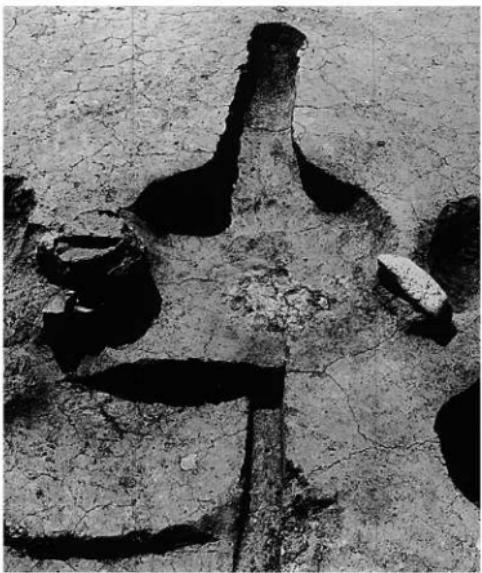
ST27カマド3・4 遺物出土状況（北から）



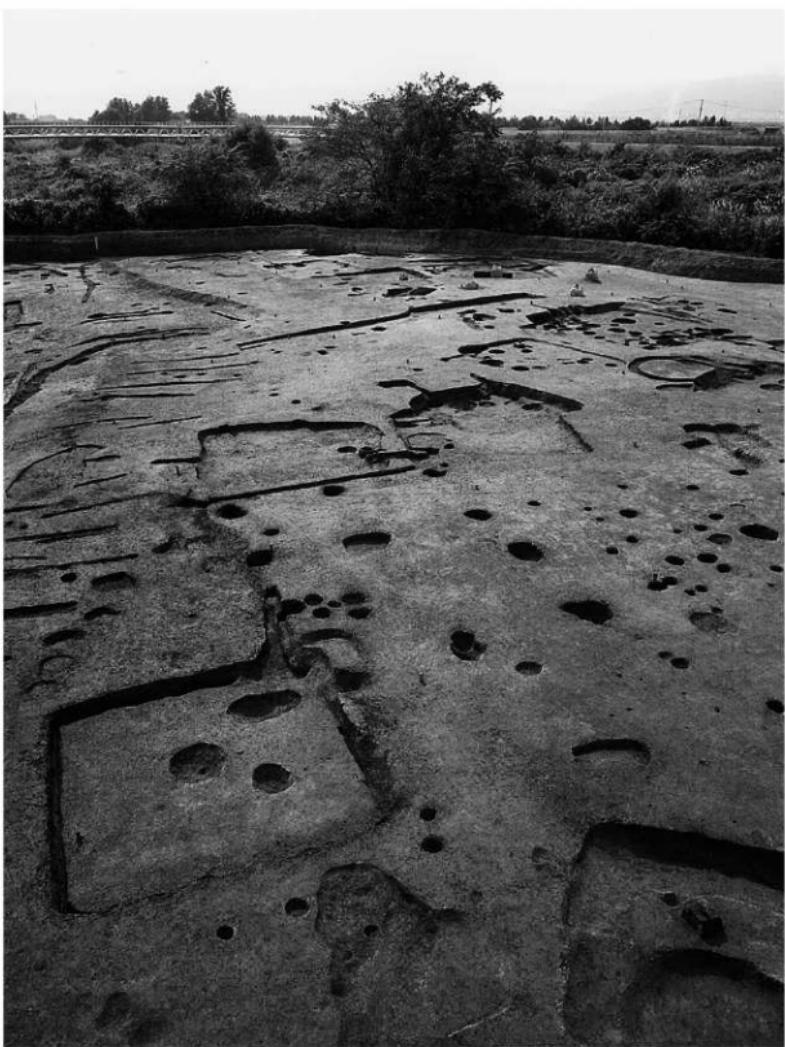
ST28堅穴住居跡 完掘状況（北から）



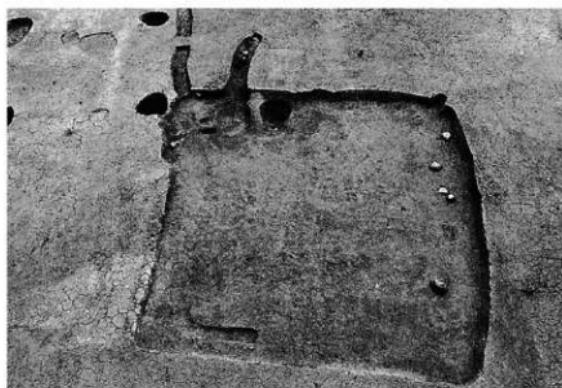
ST25カマド 遺物出土状況（北から）



ST25カマド 完掘状況（北から）



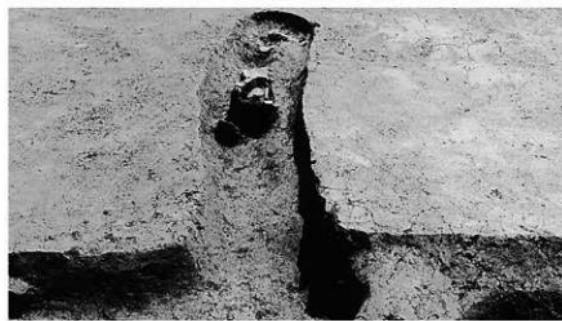
調査区中央部竪穴住居跡 完掘状況（北から）



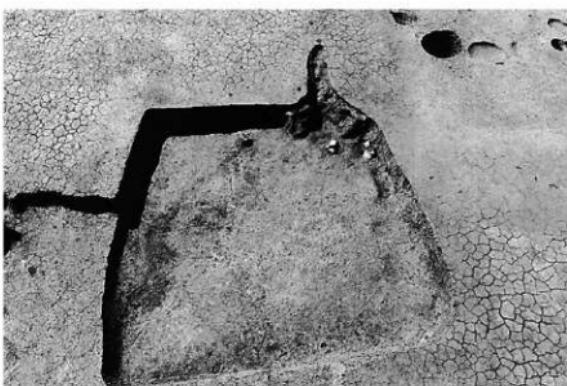
ST46竪穴住居跡 床面検出状況
(西から)



ST46竪穴住居跡 実掘状況
(西から)



ST46カマド 遺物出土状況状況
(西から)



ST44竪穴住居跡
床面検出状況（北から）



ST54竪穴住居跡
床面検出状況（北から）



ST54竪穴住居跡
完掘状況（北から）



ST660竪穴住居跡 床面様出状況（東から）



ST660竪穴住居跡 完掘状況（東から）



ST643整穴住居跡 床面突出状況（西から）



SB597掘立柱建物跡 完掘状況（南から）



SB545掘立柱建物跡 完掘状況（南から）



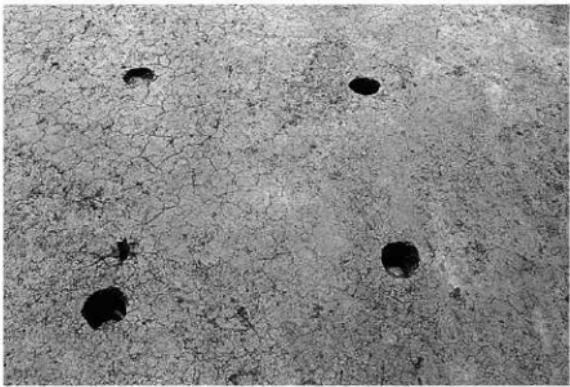
SB551掘立柱建物跡 完掘状況（南から）



SB416 振立柱建物跡
完掘状況（北から）



SB417 振立柱建物跡
完掘状況（西から）



SB418 振立柱建物跡
完掘状況（北から）



SB204掘立柱建物跡 完掘状況（西から）



SB641掘立柱建物跡 完掘状況（東から）



SA862・863・864・865柱列跡 完掘状況（北から）



調査区東半掘立柱建物跡 完掘状況（北から）



SE79井戸跡 完掘状況（東から）



SK86・87土坑 遺物出土状況（北から）



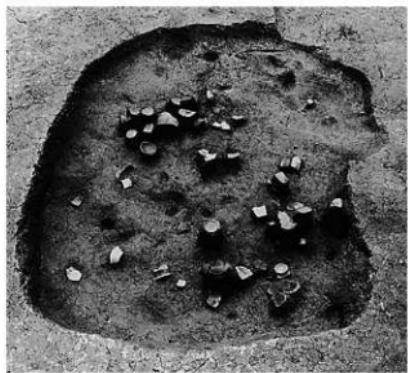
調査区東半溝跡 完掘状況（北から）



SQ106カマド状遺構 実掘状況（北から）



SQ106カマド状遺構燃焼部 実掘状況（東から）



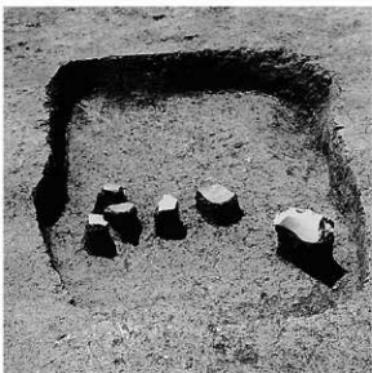
SK41土坑 遺物出土状況（北から）



SK62土坑 遺物出土状況（南から）



SH103土坑 遺物出土状況（北から）



SK71土坑 遺物出土状況（北から）



調査区南東部鉄状遺構 完掘状況（北東から）



SD703溝跡 完掘状況（北東から）



SD642溝跡 遺物出土状況（北西から）



SD691・692溝跡 完掘状況（北から）

ST1 7~9



7

8

ST2 11·13



9



11

13

ST3 14·18·27



14



18



27

出土遺物(1)

ST3 19~22・24~26



外面



内面

19



20



24



26



25



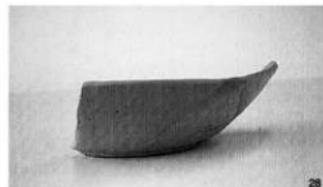
21



22

出土遺物(2)

ST7 28·31·32



ST13 33·38



31

28



32

33



38

ST23 42·44·46



42



46



44

出土遺物(3)

ST23 45・47・49



45



49



47

ST25 50～53



50



51



52



53

出土遺物(4)

ST25 54~56



54



56

ST26 59·61~63·67·69·72



59



61



62



63

55



67



69

出土遺物(5)

ST26 77-80-81



77

ST27 82-84~91-93-95



82



84



81



80



85



86



88



90



91



93



95



87



側面



88

出土遺物(6)

ST27 100~103・106~110



100



103



106



110



106



107



109



101



102

出土遺物(7)

ST27 104·105



ST28 111·112·121·122



111



112



105



121



122

ST34 126·128·133·134



126



128



134

133
出土遺物(8)

ST35 138・140・145～147・152～154



138



140



145



146



147



152



153



154

出土遺物(9)

ST36 157・160～162・166



157



160



161



162

ST37 171～173・175



171



166



172



173



175

出土遺物(10)

ST38 176・178・179・182



176

178

179

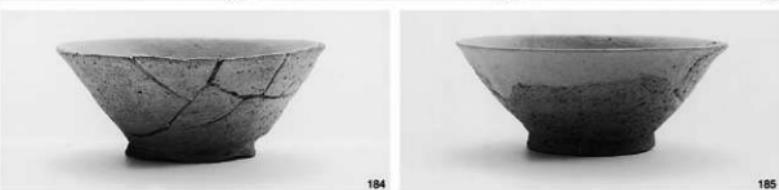
ST39 184・185・189～193



182

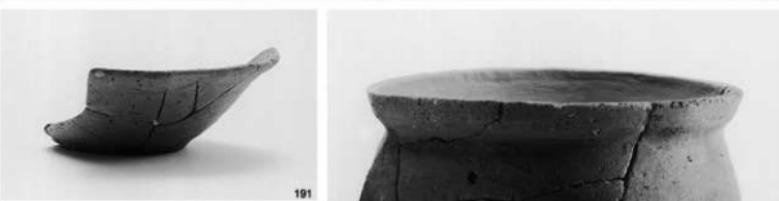
189

190



184

185



191



193

192

出土遺物(11)

ST40 194・197～204・207・210



194



197



198



199



200



201



203



202



207



210



204

出土遺物(12)

ST43 218・220・222・224～226・233・236



220



222



224



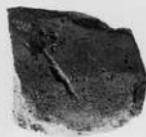
225



226



233



236



218

出土遺物(13)

ST44 239・241・244～248



239



244



245



241



246



247



248

出土遺物(14)

ST46 249·250·252·256·257·259



249



250



252



256



257



259

ST50 260·261



260



261

ST54 266·273



266



273

出土遺物(15)

ST54 274・275



274



275



281



283



284



286



285



288



286



295

出土遺物(16)

ST658 293



ST660 296~299



296



297



298



299

出土遺物(17)

ST660 301~429



301



429

ST662 303~308·321



303



304



305



306



307



308



321

出土遺物(18)

ST662 319・324～326



319



325



324



326

ST674 327～329・331・332・335・336



327



328



329



331



332



336



335

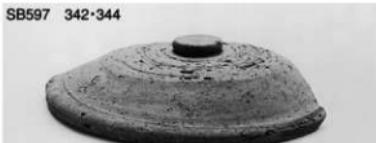
出土遺物(19)

SB551



341

SB597 342・344



342

SK41 347・349・350・352・355～358・361



344

347



349



350



352



355



356



357



358



359

出土遺物(20)

SK41 362~364・366



362



363



364



366

SK57



368

SK61



369

SK62 370・371



370



371

出土遺物(21)

SK71 372-373



372



373

SK81



374

SK86



376

SK87 377



377

出土遺物(22)

SK87 378-379



378



SK91



380

SK133



381

SP132



382

SP279



384

SP530



385

SP638

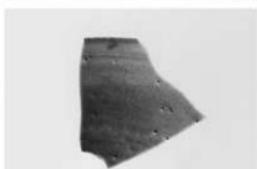


386

SP860



388



390

SE79 390-391



391

SH103



392

出土遺物 (23)

SD642 394・395・397・398



394



395



398

SD691



397



399

SD692 402・403



402



403

SD698



405

SD699



406

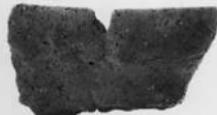
SX710 410~412



410



411



412

出土遺物(24)

遺構外 413・415～419・421・423・424・426～428・430



出土遺物 (25)

付 編

上敷免遺跡の自然科学分析

<目次>

はじめに	1
1. 試料	1
2. 分析方法	1
放射性炭素年代測定 p. 1	
土壤化学分析（リン・カルシウム分析含む）	1
植物珪酸体分析	2
種実同定	2
骨同定	2
3. 結果	2
放射性炭素年代測定	2
土壤化学分析（リン・カルシウム分析含む）	3
植物珪酸体分析	3
種実同定	3
骨同定	4
4. 考察	4
土坑墓の検討	4
長脣甌の用途	4
引用文献	5

<表・図版一覧>

- 表1 放射性炭素年代測定結果
表2 历年較正結果
表3 土壤化学分析結果（リン・カルシウム分析含む）
表4 植物珪酸体分析結果
表5 種実同定結果

図版1 植物珪酸体・種実遺体

上敷免遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上敷免遺跡は、山形市北西部を北流する須川右岸の自然堤防上に位置する。発掘調査により奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の自然科学分析調査では、古代の遺構を中心に、以下のような課題に基づいて実施する。SE79は、平安時代とされる土坑で、炭化物や焼土などが検出されている。この炭化物を対象にした年代測定を実施する。SK53、SK61、SK71、SH80、SH103、SK62は墓坑の可能性が指摘されており、骨片とみられる遺物が出土した遺構もみられる。これらの覆土や対照試料とする地山についてリン・カルシウム分析を行い、遺体埋納に関する検証を行う。カマド脇から検出された埋甕（RP45）について、その用途や内容物に関する情報を得る目的で、埋甕内覆土を対象に、種実同定ならびに土壤化学分析を実施する。また、SH80とSH103で検出された骨とみられる出土遺物に関して、骨同定を実施する。

1. 試料

放射性炭素年代測定用試料は、SE79から採取された炭化物1点である。リン・カルシウム分析は土坑墓と考えられるSK53、SK61、SK71、SH80、SH103、SK62の遺構覆土と対照試料である地山の計7点である。植物珪酸体分析、土壤化学分析、種実同定は、埋甕（RP45）内の覆土について分析を行う。覆土は位置によって4つに分割されているが、土壤化学分析と植物珪酸体分析については底部の1点を、種実同定に関しては4点（上、中、下、底部）全てを分析する。なお、RP45の4点はまとめて分析して可との事であったが、位置による傾向の差がみられる可能性があるので、別々に分析することにする。骨同定は、SH80から採取されたNo.5・9、SH103から採取されたNo.6・10、計2試料である。いずれも土塊である。

2. 分析方法

放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・L5SDHを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma 68%）に相当する年代である。暦年校正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

土壤化学分析（リン・カルシウム分析含む）

内容物に関する情報を得る目的で、全炭素、全窒素、全リン酸、全カルシウムの4項目について分析を行う。全炭素・全窒素はCNコーダー法、全リン酸・全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法および原子吸光法でそれぞれ行った（土壤標準分析・測定法委員会,1986）。以下に各項目の操作工程を示す。

・分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2～3の箇所でふるい分けをする。この箇所通過試料を風乾細土試料とし、

分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5 メッシュを全通させ、粉碎土試料を作成する。

風乾細土試料については、105°C で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

・全炭素・全窒素量

粉碎土試料500~1000 mg を正確にはかり、サンプルボードに充填した後、CNコーダー（ヤナコ分析工業製）に挿入する。試料をキャリアガス（He）気流中で950°C に加熱燃焼し、発生した燃焼ガスを純化させ、CO₂ 及びN₂ の組成にする。TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの全炭素量（T-C%）および全窒素量（T-N%）を求める。また、全炭素量を全窒素量で除し、C/N（炭素率）を算出する。

・全リン酸・全カルシウム量

粉碎土試料1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5 mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10 mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100 mLに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

植物珪酸体分析

湿重5 g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カーバガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

種実同定

試料は、再分析可能な量（200cc程度）を残し、他の全量を分析する（表参照）。分析試料は水に一晩浸した後0.5 メッシュを通して水洗し、残渣を粒径別にシャーレに集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や木材、炭化材を抽出する。種実遺体の形態的特徴から種類を同定し個数を求め、表示する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。木材、炭化材は、年代測定対象試料とし、詳細を別項目にて報告する。

骨同定

試料を肉眼で観察し、種類・部位を同定する。

3. 結果

放射性炭素年代測定

SE79の炭化材(種類はカエデ属)の測定値は、885±20BPである（表1）。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正す

ることである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年校正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が96%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。測定誤差を σ として計算させた結果、14C-1はcalAD1055-1207である(表2)。これは、発掘調査所見の年代観(平安時代末)と比較しても調和的である。

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代(BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	Code No.	測定機関番号
S E79	炭材(木エド欄)	885 ± 20	-26.08 ± 0.14	9027-1	P LD-5475

1) 年代値の算出には、L i b b y の半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の96%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料名	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)								相対比	Code No.	
		σ	cal A D	1,055	-	cal A D	1,077	cal B P	895	-	873	
S E79	887 ± 21	cal A D	1,154	-	cal A D	1,191	cal B P	796	-	759	0.598	9027-1
		cal A D	1,196	-	cal A D	1,207	cal B P	754	-	743	0.133	
		cal A D	1,046	-	cal A D	1,092	cal B P	904	-	858	0.293	
		cal A D	1,120	-	cal A D	1,140	cal B P	830	-	810	0.084	
		cal A D	1,148	-	cal A D	1,216	cal B P	802	-	734	0.623	

1) 計算是には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。

2) 計算是には示した丸めた前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

土壤化学分析(リン・カルシウム分析含む)

結果を表3に示す。対照試料とした地山の値が、リン酸1.98 /g、カルシウム6.35 /gであるのに対し、分析を行った上坑内の試料は、いずれも対照試料の値を上回っている。特に、骨?が検出されているSH80やSH103では高い値が得られている。

表3. 土壤化学分析結果(リン・カルシウム分析含む)

試料名	土性	土色	全炭素(%)	全窒素(%)	C/N	P2O5(/ g)	CaO(/ g)
No.2 S K53	LIC	10YR 4 / 3 にせい黄褐色	-	-	-	2.51	7.13
No.3 S K61 下2	LIC	2.5Y 3 / 2 黒褐	-	-	-	3.82	7.92
No.4 S K71	LIC	2.5Y 3 / 1 黒褐	-	-	-	3.82	13.30
No.5 S H80	LIC	10YR 4 / 4 褐	-	-	-	49.80	63.42
No.6 S H103	LIC	10YR 4 / 4 褐	-	-	-	86.58	116.54
No.7 S H103付近 地山	LIC	10YR 4 / 3 にせい黄褐色	-	-	-	1.98	6.35
No.11 S K62	LIC	10YR 1.7 / 1 黑	-	-	-	4.00	38.60
No.8-4 R P45(S T 3) F(底部)	LIC	10YR 5 / 2 灰黄褐	1.46	0.13	11	3.02	6.55

注。(1) 土色:マンセル色色系に準じた新版標準色色板(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性:土壤調査ハンドブック(ハドロジスト・懇親会編、1984)の野外土性による。

LIC:軽粘土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)

植物珪酸体分析

結果を表4に示す。試料番号RP45では植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。栽培植物であるイネ属の機動細胞珪酸体1個体が検出された他は、分類群を特定できない不明珪酸体である。

種実同定

結果を表5に示す。検出されたのは、イネの胚乳（炭化米）の破片1つのみであった。炭化米は大きさ3程度で、一部欠ける。表面の隆起構造や胚が脱落したあとが見られるので、イネと同定された。その他微細（2以下）の炭化材等が微量認められた。

骨同定

No.5・9は、緻密質および海綿質が観察され、骨であると判断される。保存状態が極めて悪いために土壌から剥離することができず、また形質も残していないが、大きさなどからみて脳頭蓋の一部と思われる。一方、No.6・10は、組織構造をみることができず、骨と断定するにはいたらない。

表4. 植物珪酸体分析結果

種類	N o. 8-4	
	試料番号	下(底部)
イネ科葉部短細胞珪酸体		
不明キビ型	1	
不明ヒゲシバ型	1	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	1	
不明	4	
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	2	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5	
総計	7	

表5. 種実同定結果

試料名	No. 8-1	No. 8-2	No. 8-3	No. 8-4	備考
	RP45 (ST3)	RP45 (ST3)	RP45 (ST3)	RP45 (ST3)	
分類群 部位	上	中	F	下(底部)	
イネ 胚乳	-	1個	-	-	長さ3、幅1.5
炭化材	<0.1 g	0.1 g	<0.1 g	<0.1 g	
不明炭化物	<0.1 g	<0.1 g	<0.1 g	<0.1 g	
土壤分析量 ()	600	600	400	200	
(g)	976	1013	700	331	

4. 考察

土坑墓の検討

リン酸やカルシウムは、哺乳動物の生命維持に必要な元素であり、特に、脳、内臓、骨などに多く含まれている。これらの元素は、土壌中にも含まれており、周辺地形、土壌の種類、周辺植生などによって、その含量が異なる。動物の遺体に含まれるリン酸やカルシウムは、土壌中と比べて桁違いに多いので、これらが土壌中に埋納されると、高濃度のリン酸やカルシウムが土壌中に多く残存することになる。これらは、遺体が腐敗したあとも成分として土壌中に残存するが、経年変化によって徐々に流失していく。このなかでも、リン酸は水に溶けにくくことから、土壌中の移動が少なく、長い間残ると考えられている。一方、カルシウムは、水に溶けやすいため流失しやすく、石灰岩を含む土壌などでは非常に高くなるなど、後背の地質に影響されやすい。

今回対照試料となる地山の分析結果は、リン酸1.98/g、カルシウム6.35/gである。当社の事例をみると、河川性の堆積物が母材となっている場合、自然状態でのリン酸値は、1/g前後、カルシウムは、1~2/g前後を示すことが多い。今回は地山の試料自体、自然状態よりも高い値を示す。リン酸は粘土等とともに下方移動する可能性があること（バーンズほか,1986）や、カルシウムは水に溶けやすく、移動・流失しやすいことを考慮すると、墓坑内のリン酸やカルシウムが地山にも拡散していると推定される。分析を行った土坑内の試料は、対照試料の値をいずれも上回っており、いずれの土坑も遺体埋納された可能性が高い。特にSH80やSH103では高い値が得られているが、これらの遺構から骨が検出されていることから、微細な骨片を直接測っているものと推測される。

長胴甕の用途

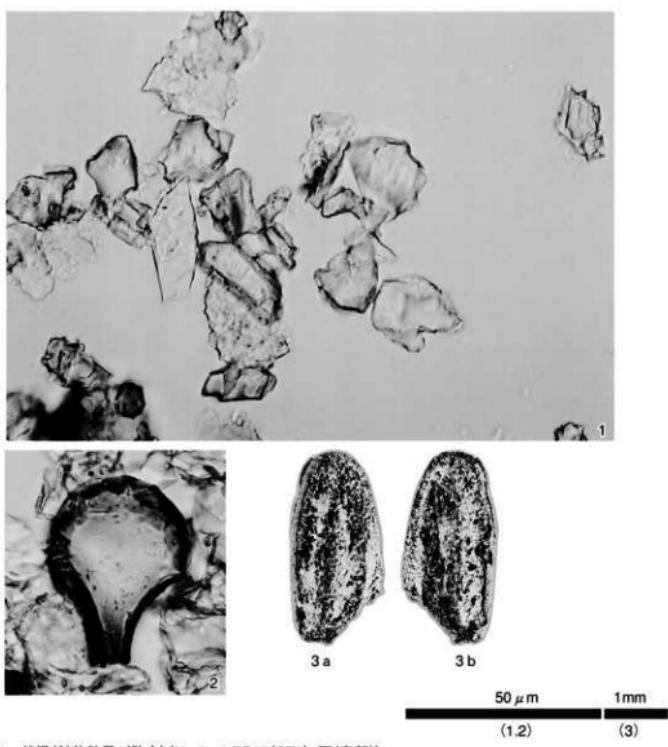
土壤化学分析の結果、長胴壺中の土壤の炭素率（C/N）は11であった。炭素率は腐植化の進行と共に低下する傾向にあり、炭化物や未分解物が多いと値が高くなる傾向にある。11という値は、一般的にみると、分解が進み、腐植化した土壤であることを示す。リン・カルシウムの値は、対照試料である地山よりも高く、前述した墓坑の値に近い。このことから、なんらかの動物遺体が埋納されていた可能性もあるが、墓坑から成分が流失、拡散したことによって高くなっている可能性もある。今回の結果からは、いずれの理由によるかの判断は難しい。これを確認する方法は、対照試料、壺内の試料とも複数点分析を行い、値のばらつきや腐植との相関を調べ、比較検討することによって判明する可能性がある。

一方、種実同定の結果は、埋壺の中位から炭化米が一点検出されたのみであった。炭化米はいずれも微量で、検出量の比較はできないが、中位や上位で多く、底部で少ない傾向にある。このことから、炭化材や炭化米は埋納されたというよりは、むしろ埋没過程の中で混入したと考えられる。

引用文献

- 土壤標準分析・測定法委員会編,1986. 土壤標準分析・測定法.博友社,354p.
ジナ・バーンズ, ルール・プラント, サイモン・ケーナ, ディビット・ロリガー, 西田史朗,1986.
日本の土壤中の構造物の草創,考古学と自然科學,19,57-68.
農林省農林水産技術会議事務局監修,1967. 新版標準土色図.
近藤 錦三,2004. 植物ケイ酸体研究ペドロジスト,48,46-64.
ペドロジスト懇談会編,1984. 土壌調査ハンドブック.博友社,156p.

図版1 植物珪酸体・種実遺体



1. 状況(鉱物粒子が散在)(No.8-4;RP45(ST3) 下(底部))
2. イネ属機動細胞珪酸体(No.8-4;RP45(ST3) 下(底部))
3. イネ胚乳(No.8-2;RP45(ST3) 中)

山形市上敷免遺跡出土の墨書き土器

山形大学
三一上喜孝

一 積文

(淨力)

(1) 「□万下西寺」

外面の体部から底部にかけて、正位に墨書きされている。このうち、「寺」と判読できる文字は底部に、その他の文字は体部に書かれている。

体部に書かれた文字は、底部の文字に比べて小さく扁平であり、体部に無理に収めようとして書いたように見える。このことからすると、まず体部に「寺」の文字を書いた後、体部に収まるように四字を書いたか、あるいは、底部に「寺」がぐるのように体部に四字分を収めた、といった可能性が考えられる。

「寺」の字を書いた墨書き土器は、全国的には数多く出土しているものの、山形県内ではほとんど確認されておらず、米沢市篠原遺跡から土師器の环に「寺」と書かれたもの（九世紀初頭から中葉か）や、遊佐町浮橋遺跡から赤焼土器の体部外面に正位で「寺」と書かれたもの（一〇世紀前半か）が各一点出土するなど、きわめて少ない。また、本遺跡出土の「寺」墨書き土器は一字ではなく、複数の文字が書かれている点が注目される。

「寺」の前に複数の文字がみえる場合、一般には寺名を墨書きしたものと解されている。寺名を書いた墨書き土器には、大きく分けて

- ①「觀音寺」「法華寺」「四天王寺」などの一般的な寺名。

図版86-61

図版81-18

(2) 「盃」

内面黒色土器の高台付皿の底部外面に墨書きされている。
「益」の可能性もあるが、残画から「盃」と読むのが妥当と考える。器種は高台付皿であり、内面に黒色処理を施している。この器の用途を記したものか。

(3) 「春」

須恵器の高台付环の体部外面に横位で墨書きされている。

「春」の可能性もあるが、字画を観察すると、「春」とみるのが妥当であろう。
「春」の墨書き土器は、秋田県横手市（旧雄物川町）の大見内遺跡から出土している例がある。「春米連」というウジ名の一字を記したものか。

(4) □

須恵器环の底部外面に墨書きされている。断片のため判読できないが、残画から「正」の可能性がある。

「正」を記した墨書き土器としては、酒田市（旧八幡町）佐野遺跡出土の須恵器蓋のつまみに書かれた例がある。

図版107-309

(5) □万

須恵器坪の底部外面に墨書きされている。「万」の上に墨痕が認められるが、断片であるため判読不明である。

(6) □万

国版82 - 29

須恵器坪の底部外面に墨書きされている。「万」の上に墨痕が認められるが、断片であるため判読不明である。

ほかにも墨痕が認められるものがみられるが、断片のため、判読不明である。

二 考察

墨書き土器とは、墨を使い、文字や記号を記した土器のことである。ヘラなどによる線刻で書いた刻書き土器というのもある。土師器や須恵器といった古代の食器に書かれたものが多く、おもに八世紀から一〇世紀ごろの遺跡から出土している。全国各地で出土しており、山形県だけでも、これまで五〇〇〇点以上の墨書き土器が確認されている。

内容は、地名や人名、内容物を記したものや、吉祥的な文字を記したものなどさまざまであり、どのような目的で書いたものかをはつきりさせることは、難しい作業である。遺跡の性格や、一緒に出土した他の遺物の検討を通じて明らかにしなければならない。

ただひとついえることは、日常で使用している場合にはわざわざ文字を記す

必要はないわけで、なにか非日常的な行為にともなって文字が記されたことは間違いない。それは、お折りであったり、お祭りであったり、集団の宴會であったり、といった場面だったのかもしれない。いずれにしても、墨書き土器は、古代社会に生きた人々の考え方を知ることのできる、貴重な資料といえる。

本遺跡出土の墨書き土器でまず注目されるのは、「寺」と記されたものである。しかも、「寺」の他に複数の文字が確認できることから、寺名が記されていた可能性がある。記載された文字が寺名であるとした場合、それが何を意味するのかについては、現段階では不明といわざるを得ない。いずれにせよ、山形県内では「寺」墨書き土器の出土例がきわめて少なく、その意味では貴重な資料といえる。

また、「正」と読める可能性のある墨書き土器が出土している点も注意される。仏教的な意味合いの強い墨書きがみられることは、本遺跡の特徴といえるのかもしれない。

これに関連して興味深いのは、平安時代前期の九世紀後半に属すると思われる伴出遺物の中に、両面が黒色処理され、口縁が強く外反し、取っ手の付け根が壊れた痕跡を持つ土器がみられることがある。これはいわゆる柄香炉（焼香に用いる金属製の道具）を模したものである可能性があり、この遺跡で、なんらかの仏教的な儀礼が行われていた可能性が想定できる。「寺」墨書き土器も、そうした儀礼の中とらえるべきものといえるだろう。

ただしここで注意しなければならないのは、「寺」墨書き土器の出土は、必ずしもこの場所に「寺」の施設が存在していたことを意味しない、ということである。

この点を確認する上で最もわかりやすい事例は、多賀城市山王遺跡出土「般音寺」墨書き土器（一〇世紀初め）である。墨書き土器にみえる「觀音寺」とは、

大宰府親世音寺と同様の伽藍配置をもつ多賀城廃寺のことを指すといわれている。

ただ、この墨書き土器の出土地点は、多賀城廃寺から直線距離では北真西約二キロ、多賀城外郭西南隅から約七五〇メートルにある。

出土した遺構付近からは、「觀音寺」墨書き土器とともに、油壺付着土器（灯明皿）が大量に出土しており、国府主催の仏教行事「万灯会」にかかわるものか、と考えられている。とすれば、城下における仏教儀式が、多賀城付属寺院である「觀音寺」（多賀城廢寺）のもので行われていていることを、この「觀音寺」墨書き土器は示していると考えられる。いずれにせよ、「觀音寺」墨書き土器の出土地が

觀音寺の施設そのものの場所を指していないことは明らかなわけで、むしろ「万灯会」という仏教行事と関わらせて理解すべきものであることがわかる。また別の事例として、福島県猪苗代町小山B遺跡出土の「報恩寺」墨書き土器をあげる。同遺跡からは、銅鏡を模倣したとみられる丸底の両面黒色土器や小型短頸壺が出土しており、仏教的遺物が伴出している点が興味深いが、ただし、「寺」墨書き土器は一点のみで、遺跡も堅穴建物跡が主体であり、寺院・堂と見られる遺構は検出されていない。これもやはり、何らかの仏教儀礼と関わる墨書きと考へるべきであろう。

本遺跡も、このような事例と同様に考へることができる。本遺跡の平安前期の遺構面では、堅穴建物跡が二八棟、掘立柱建物跡が四棟検出されており、これらが寺の施設に相当するかどうかは不明である。本遺跡を必ずしも「寺」施設と結びつけて考へる必要はない。むしろ何らかの仏教的行事が行われていたことを想定すべきである。むしろそう考へることで、本遺跡出土の墨書き土器が、非日常的行為にもなって記される墨書き土器の本質とも深く関わらせて考へえることができるのである。

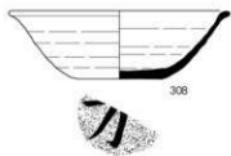
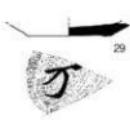
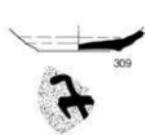
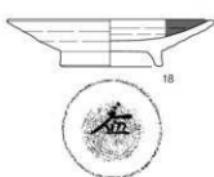
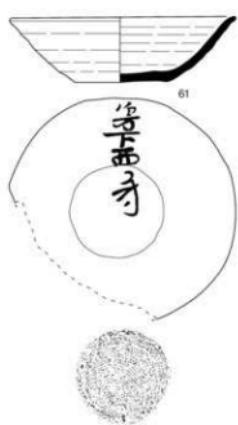
（参考文献）

平川 南「墨書き土器『觀音寺』・多賀城市山王遺跡」『墨書き土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年。

三上喜孝「古代東瀛社会における祭祀・儀礼と人名——墨書き土器の検討から——」

義江彰夫編「古代中世の社会変動と宗教」吉川弘文館、二〇〇六年。

村木志伸「寺の外から出土する「寺」の文字」『帝京大学山梨文化財研究所報』四七、一〇〇三年。



0 10cm
1 : 3

墨書土器集成図

上敷免遺跡 墨書き一覧

図版	写真 図版	種別	器種	出土遺構	墨書き位置	文字種	登録 番号	底部調整
81	18	32	土師器	高台付壺	S T 3	底部	「蓋」	46 回転糸切
82	29	-	須恵器	壺	S T 7	底部	「□万」	回転糸切
86	61	36	須恵器	壺	S T 26	体部～底部	〔浮き〕 「□万下西寺」	52 回転糸切
107	303	49	須恵器	高台壺	S T 662	体部	「春」	235 回転糸切
107	308	49	須恵器	壺	S T 662 E P 2	底部	「万」	回転糸切
107	309	-	須恵器	壺	S T 662 F	底部	「辻」 ^カ	回転糸切
111	342	51	須恵器	蓋	S B 597 E B 818	天井部上面	墨痕だけの為 判読不能	49 回転ヘラ切
114	384	54	須恵器	壺	S P 279	底部	「万」	回転糸切
117	415	56	須恵器	壺	グリッド	底部	「万」	回転糸切
117	416	56	須恵器	壺	16 - 18 G	底部	「□万」	回転糸切

墨書き位置はすべて外側